

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第160集

HIRATA
平田遺跡 D地点・E地点

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、一般国道10号都城道路建設工事に伴い、国土交通省九州整備局宮崎河川国道事務所長からの依頼を受け、平成15年度と平成16年度に平田遺跡の発掘調査を行いました。

平田遺跡D地点・E地点の位置する都城市南横市町は、近辺に大小様々な遺跡が存在し、多くの遺構や遺物が出土していることで知られています。本遺跡は白鹿岳の裾野より発する横市川右岸に発達した横市段丘上に立地しています。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構や土器・石器などの遺物が確認されたほか、古代から古墳時代にかけての土師器や15世紀末の桜島文明軽石により埋没した中世の水田跡や道路状遺構なども確認されました。中でも今回の調査で確認された弥生時代の遺構・遺物は、該期の遺跡周辺の地域的様相や都城盆地における弥生集落の展開を研究する上で貴重な情報を提供するものとなりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識や理解を深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心より厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 清 野 勉

例 言

1. 本書は、一般国道10号都城道路建設に伴い、宮崎県教育委員会が調査主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが行った平田遺跡D地点・E地点の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は「平田遺跡」として発掘調査および整理作業を行ってきたが、同時期に隣接地の調査を都城教育委員会も調査を行っており、今後名称等で混乱も予想されることから、同市教育委員会と協議し、都城市調査箇所を「平田遺跡A～C地点」、センター調査箇所を「平田遺跡D・E地点」に変更した。
3. 発掘調査は、国土交通省九州整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査の期間は、次のとおりである。

平田遺跡	第一次調査	平成15年5月22日から平成16年3月26日
	第二次調査	平成16年5月26日から平成17年1月24日
5. 現地調査に関する実測および写真撮影等の記録は、日高広人・森本征明（第一次調査）、久保春夫・堀口悟史（第二次調査）が担当し、一部を柳田宏一、玉利勇二、丹俊詞、柳田裕三の協力を得た。
6. 本書に使用した遺物写真は、久保、日高、今塩屋毅行が撮影した。
7. 遺物のおよび図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。そのうち図面の作成、実測、トレースは、主として久保、日高が整理作業員の補助を得て行った。鉄矛の実測は丹が行った。
8. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『都城』・『庄内』を、周辺地形図は都城市作成の2千5百分の1図『国土基本図』を基に作成した。
9. 遺物観察表の土器等の色調および土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色帖』に拠った。
10. 本書で使用した方位は、座標北（G. N.）および磁北（M. N.）である。なお、レベルの標示は海拔絶対高である。
11. 本書使用した遺構略記号は以下のとおりである。

S A …… 竪穴住居跡	S B …… 掘立柱建物跡	S C …… 土坑
S E …… 溝状遺構	S G …… 道路状遺構	S Z …… 不明遺構
12. 本書の執筆は、第I章第1節を飯田博之、第II章～第III章第1節1～2、3（2）、4、第V章第1節を久保、第III章第1節3（1）及び第2節、第V章第2節～第3節、編集は日高が担当した。
13. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1

第II章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境	3
第2節 調査の経過	7
第3節 基本層序	9

第III章 調査の記録

第1節 D地点の調査

1. 遺構・遺物の概要	12
2. 弥生時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 掘立柱建物跡	23
(3) 土坑	23
(4) 周溝状遺構	27
(5) 不明遺構	34
(6) 包含層出土の弥生土器	34
(7) 包含層出土の石器	40
3. 中世以降の遺構と遺物	40
(1) 水田跡	40
(2) 小溝状遺構群	42
(3) 包含層出土の遺物	45
4. その他の時期の遺物	47
(1) 縄文土器	47
(2) 土師器	48
(3) 陶器	48

第2節 E地点の調査

1. 遺構・遺物の概要	53
2. 弥生時代の遺構と遺物	53
(1) 竪穴住居跡	53
(2) 土坑	54
(3) 遺物集中箇所	59
(4) 炭化種子集中部	60
(5) 包含層の遺物	63
3. 古代～近世の遺構と遺物	64
(1) 土坑	64

(2) 溝状遺構	64
(3) 道路状遺構	71
(4) 小溝状遺構群	73
(5) 古代の遺構	74
(6) 中世の遺物	78
(7) 石製品	79
(8) 鉄製品	79
4. その他の時期の遺物	80
(1) 縄文土器	80

第IV章 自然科学分析

第1節 平田遺跡E地点における土層とテフラ	84
第2節 平田遺跡D地点における植物珪酸体分析	88
第3節 平田遺跡E地点における放射性炭素年代測定	96
第4節 平田遺跡D地点・E地点における種実同定	98
第5節 平田遺跡D地点・E地点における樹種同定	103

第V章 まとめ

第1節 D地点の弥生時代について	106
第2節 D地点の中世～近世の生産遺構について	108
第3節 E地点の弥生時代の炭化種子について	109

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3	第15図 D地点SA5実測図	24
第2図 平田遺跡及び周辺遺跡分布図	5	第16図 D地点SA5出土遺物実測図	25
第3図 平田遺跡周辺地形図	6	第17図 D地点SB1実測図及び出土遺物実測図	26
第4図 平田遺跡土層柱状図	10	第18図 D地点SC1実測図	27
第5図 D地点弥生時代遺構分布図	11	第19図 D地点SL1実測図及び出土遺物実測図1	28
第6図 D地点SA1実測図	13	第20図 D地点SL1出土遺物実測図2	29
第7図 D地点SA2実測図	14	第21図 D地点SL2実測図	30
第8図 D地点SA1・SA2出土遺物実測図	15	第22図 D地点SL2出土遺物実測図	31
第9図 D地点SA3実測図	17	第23図 D地点SL3実測図及び出土遺物実測図	31
第10図 D地点SA3出土遺物実測図1	18	第24図 D地点SL4実測図及び出土遺物実測図	32
第11図 D地点SA3出土遺物実測図2	19	第25図 D地点SL5実測図	33
第12図 D地点SA3出土遺物実測図3	20	第26図 D地点SZ1実測図及び出土遺物実測図	34
第13図 D地点SA3出土遺物実測図4	21	第27図 D地点弥生土器実測図1	36
第14図 D地点SA4実測図及び出土遺物実測図	22	第28図 D地点弥生土器実測図2	37

第29図	D地点弥生土器実測図3	38	第49図	E地点溝状遺構・道路状遺構実測図3	68
第30図	D地点弥生土器実測図4及び石器実測図	39	第50図	E地点溝状遺構・道路状遺構出土遺物実測図	69
第31図	D地点中世～近世遺構分布図	41	第51図	E地点小溝状遺構群実測図	70
第32図	D地点水田跡実測図1	43	第52図	E地点古代遺物実測図1	72
第33図	D地点水田跡実測図2	44	第53図	E地点古代遺物実測図2	73
第34図	D地点中世遺物実測図	46	第54図	E地点古代遺物実測図3	74
第35図	D地点縄文土器及び土師器・陶器実測図	47	第55図	E地点古代遺物実測図4	75
第36図	E地点弥生時代遺構分布図	52	第56図	E地点中世遺物実測図	76
第37図	E地点SA1実測図及び出土遺物実測図	55	第57図	E地点古代～中世石器実測図1	77
第38図	E地点SA2実測図及び出土遺物実測図	56	第58図	E地点古代～中世石器実測図2及び鉄器実測図	78
第39図	E地点土坑実測図及び出土遺物実測図	57	第59図	E地点縄文土器実測図	79
第40図	E地点遺物集中部実測図及び炭化種子集中部分 布図	58	第60図	D地点東壁土層断面の柱状図	87
第41図	E地点遺物集中部出土遺物実測図1	59	第61図	D地点東壁土層断面のテフラ組成ダイアグラム	87
第42図	E地点遺物集中部出土遺物実測図2	60	第62図	D地点東壁土層断面における植物珪酸体分析結 果	95
第43図	E地点弥生土器実測図	61	第63図	D地点4層水田検出面における植物珪酸体分析 結果	95
第44図	E地点石器実測図1	62	第64図	D地点西壁土層断面における植物珪酸体分析結 果	95
第45図	E地点石器実測図2	63			
第46図	E地点古代～近世遺構分布図	65			
第47図	E地点土坑・溝状遺構・道路状遺構実測図1	66			
第48図	E地点溝状遺構・道路状遺構実測図2	67			

表 目 次

第1表	D地点土器観察表1	48	第12表	D地点鉄器計測表	83
第2表	D地点土器観察表2	49	第13表	火山ガラス比分析結果	87
第3表	D地点土器観察表3	50	第14表	重鉍物組成分析結果	87
第4表	D地点土器観察表4	51	第15表	平田遺跡D地点における植物珪酸体分析結果	94
第5表	D地点石器計測表	51	第16表	平田遺跡D地点・E地点における炭化種実同定結果 1	100
第6表	D地点鉄器計測表	51	第17表	平田遺跡D地点・E地点における炭化種実同定結果 2	101
第7表	E地点土器観察表1	80	第18表	平田遺跡D地点・E地点における樹種同定結果	104
第8表	E地点土器観察表2	81			
第9表	E地点土器観察表3	82			
第10表	E地点土器観察表4	83			
第11表	E地点石器品及び土製品計測表	83			

図版目次

図版1	93	E地点S G群1 検出状況／E地点S G群1 完掘状況1／ E地点S G群1 完掘状況2／E地点S G群1 埋土状況／ E地点S G群1 内青磁出土状況		
平田遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)				
図版2	102	図版12	120	D地点S A 1・S A 3 出土遺物／D地点S A 4・S A 5・ S B 1 出土遺物
平田遺跡の炭化種実		図版13	121	D地点S A 2 出土遺物／D地点S A 3 出土遺物1／D地 点S A 3 出土遺物2／D地点S A 3 出土遺物3／D地点 S A 3 出土遺物4／D地点3 出土遺物5
図版3	105	図版14	122	D地点S A 3 出土遺物6／D地点S L 1 出土遺物
平田遺跡の炭化材		図版15	123	D地点S A 5 出土遺物／D地点S L 1～S L 3・S Z 1 出土遺物／D地点縄文土器／D地点弥生土器1／D地点 弥生土器2／D地点弥生土器3
図版4	112	図版16	124	D地点弥生土器4／D地点弥生土器5
平田遺跡遠景1／平田遺跡遠景2		図版17	125	D地点中世の遺物／D地点中世～近世の遺物／D地点石 器1／D地点石器2
図版5	113	図版18	126	E地点縄文土器／E地点S A 1 出土遺物／E地点S A 2 出土遺物／E地点遺物集中出土遺物1／E地点遺物集中 出土遺物2／E地点弥生土器／E地点弥生石器
D地点調査区全景1／D地点S A 1 検出状況／D地点S A 1 完掘状況		図版19	127	E地点S G群出土遺物1／E地点S G群出土遺物2／E 地点鉄製品
図版6	114	図版20	128	E地点古代の遺物1／E地点古代の遺物2
D地点S A 2 遺物出土状況／D地点S A 2 完掘状況／D 地点S A 3 遺物出土状況／D地点S A 3 完掘状況／D地 点S A 5 鉄矛出土状況／D地点S A 5 完掘状況／D地点 S B 1 完掘状況／D地点S B 1 柱穴内遺物出土状況		図版21	129	E地点古代の遺物3／E地点古代の遺物4
図版7	115	図版22	130	E地点中世～近世の遺物／E地点中世～近世の石製品1 ／E地点中世～近世の石製品2
D地点S L 1 検出状況／D地点S L 1 遺物出土状況／D 地点S L 2 検出状況／D地点S L 2 遺物出土状況／D地 点S L 4 検出状況／D地点S L 4 完掘状況／D地点S L 5 検出状況／D地点S L 5 完掘状況				
図版8	116			
D地点調査区全景2／D地点水田跡検出状況1／D地点 水田跡検出状況2／D地点水田跡完掘状況1／D地点水 田跡完掘状況2				
図版9	117			
D地点水田跡完掘状況3／D地点畦畔1／D地点畦畔2 ／E地点調査区全景				
図版10	118			
E地点S A 1 遺物出土状況／E地点S A 1 完掘状況／E 地点S A 2 遺物出土状況1／E地点S A 2 遺物出土状況 2／E地点S A 2 完掘状況／E地点炭化物集中2 出土状 況／E地点炭化物集中出土イチイガシ／E地点小溝状遺 構群完掘状況				
図版11	119			

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

平成 9 年 5 月 7 日付けで、県都市計画課長から文化課長あてに「都城道路の都市計画決定に係る関係課との調整について」の依頼があり、平成 9 年 6 月 13 日付けで回答を行った。

この中で、都市計画決定について問題はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地が路線内に 13 箇所確認されている旨の意見を回答している。

平成 11 年 6 月に都城道路乙房～五十町間の路線が決定し、文化財の取扱について県文化課と建設省九州地方整備局宮崎工事事務所との間で協議が始まり、さらに 11 月 29 日付けで県教育長あてに、建設省九州地方整備局宮崎工事事務所長から「一般国道 10 号都城道路の文化財の有無について」(協議)が依頼された。そして平成 11 年 12 月 10 日付けで、県教育長名で都市計画決定の時点より遺跡の数が増え、計 15 箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地があることを回答している。

その中の一つである平田遺跡を南北に貫く道路予定地(対象面積約 15,000㎡)は、両側を挟まれる形で県営のほ場整備事業が実施されることになっていた。道路の建設予定地と県営経営体育成基盤整備事業横市地区の隣接部の水路や道路等の件で、協議は建設省、県北諸県農林振興局、都城市、県文化課、県埋蔵文化財センターを交え、進められていった。

確認調査は、平成 13 年 2 月に実施され、遺跡の内容が把握された。確認調査の結果を受け、当初は平成 13 年度から本発掘調査を開始する方向で協議が進められたが、用地や水路等の課題が山積しており、ほ場整備と時期を併せて平成 15 年度に本発掘調査を行うことになった。

平成 15 年 3 月 24 日付けで国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所より、調査経費の見積り依頼があり、平成 15 年 3 月 26 日付けで回答を行い、平成 15 年 4 月 1 日付けで契約を交わした。本発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが 5 月 22 日に着手した。

第 2 節 調査の組織

平田遺跡 D 地点・E 地点の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

平成 15 年度 発掘調査(第一次調査)

所 長	米良 弘泰
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課第四係長	近藤 協
同 主任主事	日高 広人
同 調 査 員	森本 征明

平成16年度	発掘調査（第二次調査）および整理作業		
	所 長	宮園 淳一	
	副所長兼総務課長	大藪 和博	
	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫	
	総務課主幹兼総務係長	石川 恵史	
	調査第二課第四係長	近藤 協	
	同 主 査	久保 春夫（調査担当）	
	同 調 査 員	堀口 悟史（ 同 ）	
	同 主任主事	日高 広人（整理担当）	

平成17年度	整理作業および報告書作成		
	所 長	宮園 淳一	
	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫	
	総務課長	宮越 尊	
	総務課主幹兼総務係長	石川 恵史	
	調査第二課第四主幹兼係長	近藤 協	
	同 主 査	久保 春夫	
	同 主 査	日高 広人	

平成18年度	整理作業および報告書作成		
	所 長	清野 勉	
	副 所 長	加藤 悟郎	
	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫	
	総務課長	宮越 尊	
	総務課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信	
	調査第二課主幹兼第四リーダー	近藤 協	
	同 主 査	日高 広人	

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

平田遺跡は宮崎県都城市南横市町字平田に所在する。都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東の鰐塚山系や北西の霧島山系をはじめとする山々に囲まれた都城盆地の中央部に位置する。東側の山地は急峻で起伏に富み、山地から流下する河川によりその麓は開析され、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜している。また、盆地の中央部を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県財部町を経て蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流下し、大淀川に合流している。横市川流域には河岸段丘と氾濫原が形成されており、現況は水田が広がっている。



第1図 遺跡位置図

当遺跡は都城市街地から北西に約3 km、鹿児島県曾於郡財部町との県境近くであり、横市川右岸に発達した標高約141 m～148 mの横市段丘上に立地している。

当該地は大きく3段に分かれ、上段部（低位段丘面1）から中段部（低位段丘面2）、下段部（沖積段丘面）註にかけては水田として利用されている。なお、上段部の東側と西側および下段部東側では都城市教育委員会が県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査を実施しており、弥生時代中期末から後期の集落跡をはじめ古代・中世遺構が数多く確認されている。

当遺跡の周辺には、縄文時代から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。以下、歴史的観点から周辺の遺跡を概観してみる（第2図）。

縄文時代の遺跡については、蓑原台地北端の緩傾斜地に所在する田谷・尻枝遺跡では、散石状の礫群とともに縄文時代早期の円筒形土器や磨石が出土し、さらにその下部からは陥し穴が確認されている。また、中期頃の御池降下軽石が堆積した陥し穴も確認されている。加治屋B遺跡では、集石遺構も確認されている。後期に入ると横市川右岸の中位河岸段丘上に立地する正坂原遺跡で綾式土器や指宿式土器、貝殻文系の市来式土器が出土している。月野原台地南部の牧ノ原第2遺跡では当該期の竪穴住居跡も確認されている。晩期入ると、牧ノ原第2遺跡に隣接する横市中原遺跡で組織痕土器・孔列文土器や黒色磨研土器が出土し、蓑原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡では縄文時代晩期の土坑群が確認されており、それに伴う孔列文土器が出土している。

弥生時代の遺跡については、月野原台地の南端に所在する月野原第2遺跡や母智丘山頂部の母智丘原第

1 遺跡や牧ノ原第2遺跡で中期後半頃の土器が確認されている。後期以降では、加治屋B遺跡で後期末の竪穴住居跡や周溝状遺構、また、後期後半から終末期にかけての竪穴住居跡も確認され、同台地上の池原遺跡も当該期の遺物が出土している。横市川左岸低位段丘に所在する今房遺跡でも当該期の竪穴住居跡や周溝状遺構などの遺構や遺物が確認されている。横市川右岸の低位段丘に所在する坂本A・B遺跡では水田跡も確認され、それに伴う木製品も出土している。

古墳時代では、横市川左岸の低位段丘に所在する鶴喰遺跡があり、都城市域では初めてのカマドを伴う竪穴住居跡が確認された後期集落遺跡である。また、同時期とみられる竪穴住居跡は月野原台地南部の母智丘原第2遺跡でも確認されている。

古代では、葦原台地北端の舌状部に立地する中尾山・馬渡遺跡で平安時代の掘立柱建物跡とそれに伴う多量の遺物が出土している。特に墨書土器、越州窯青磁、緑釉陶器などの遺物が出土している。また、鶴喰遺跡や牧ノ原第2遺跡、母智丘第1遺跡などでも当該期の遺物が出土している。

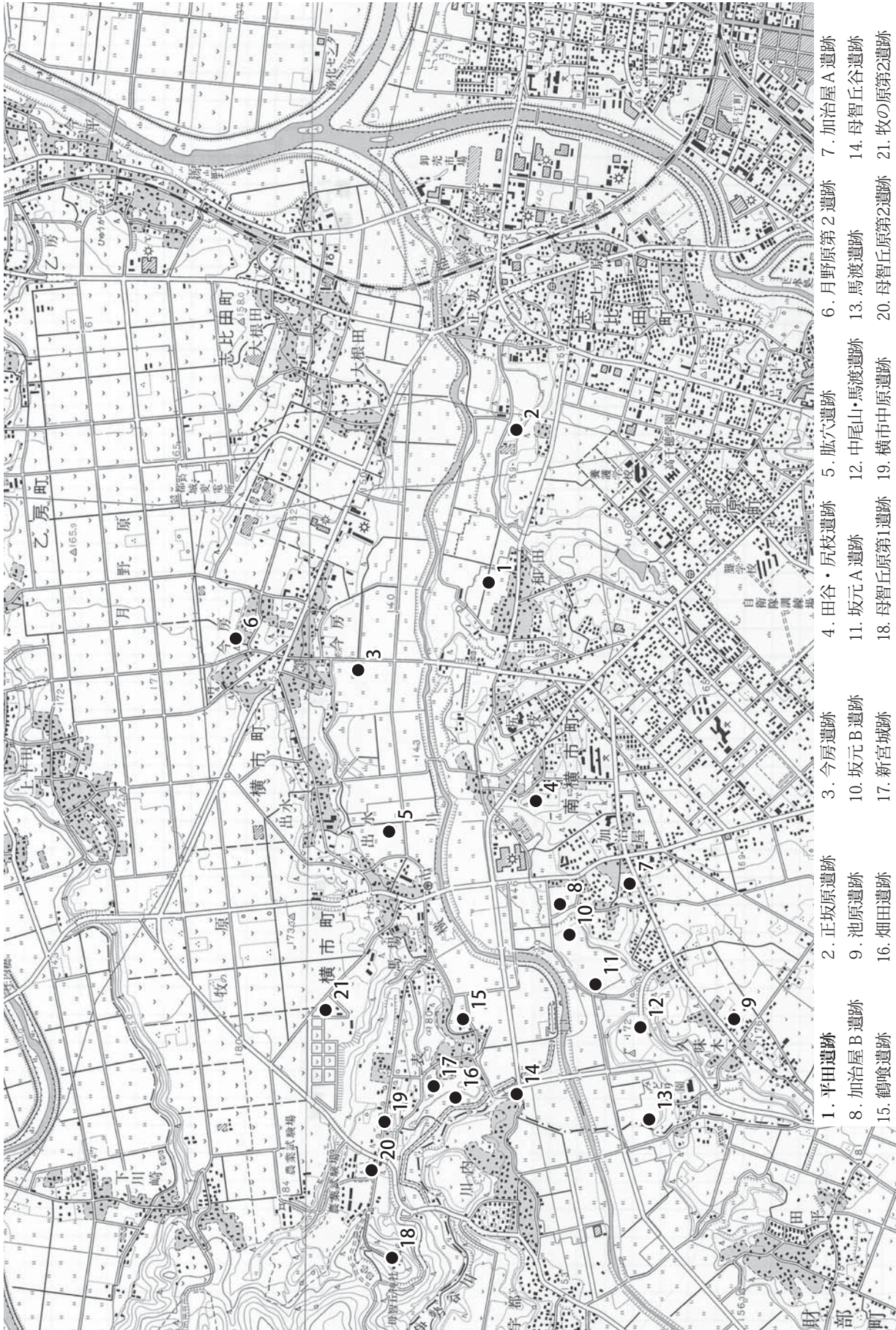
中世については、集落跡や水田跡・畑跡の生産遺跡、山城などが多く確認されている。横市川下流域の正坂原遺跡は、古代から中世にかけて永続的に営まれた集落跡が確認されている。横市川左岸の低位段丘から低地にかけては、畑田遺跡、母智丘谷遺跡、鶴喰遺跡、肘穴遺跡、今房遺跡などで水田跡が確認されており、その中でも鶴喰遺跡では、大型掘立柱建物跡や回廊状遺構なども確認されている。鶴喰遺跡の北西部には、中世城郭である新宮城跡があり、加治屋B遺跡でも館跡が確認されている。

【註】

都城市教育委員会ご教示による。宍戸章氏により横市川流域一帯の地形区分が行われ、成層シラス面より下位で、現河床の存在する沖積低地面を除く面を標高・テフラから区分し、桜島薩摩テフラ（P 14）かそれより古いテフラに覆われるものを低位段丘、鬼界アカホヤ火山灰やそれ以降の霧島御池軽石に覆われるものを沖積段丘とし、さらに標高の違いから低位段丘をさらに3面、沖積段丘を2面に分けられている。

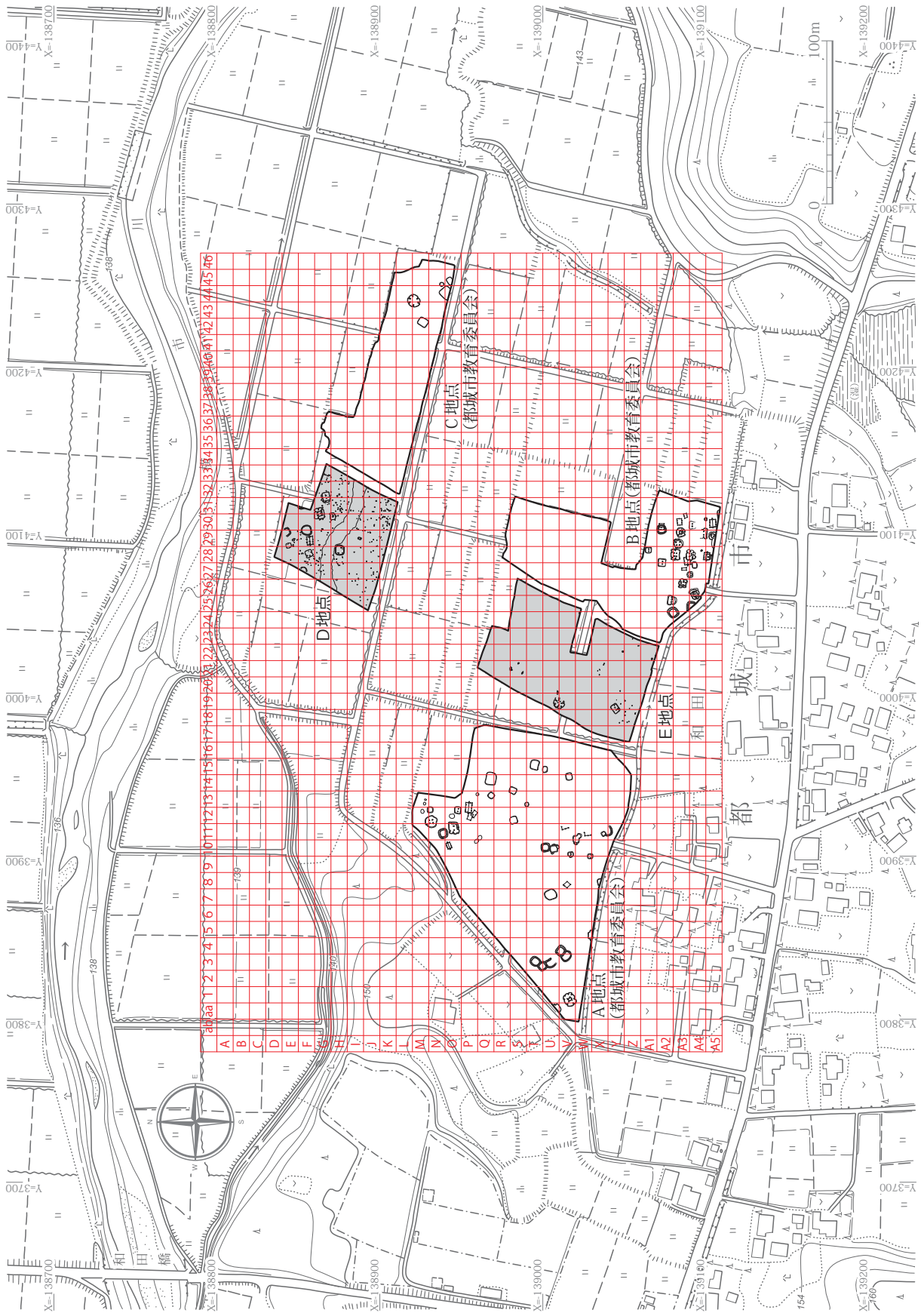
【参考・引用文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『牧ノ原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集
都城市教育委員会 2000『横市地区遺跡群 脇穴遺跡（1）・今房遺跡・馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第50集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・葦原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集
都城市教育委員会 2001『横市地区遺跡群 馬渡遺跡（第2次調査）・坂元A遺跡』都城市文化財調査報告書第55集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002『鶴尾遺跡・坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集
都城市教育委員会 2002『横市地区遺跡群 江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡（第1次調査）』都城市文化財調査報告書第58集
都城市教育委員会 2003『横市地区遺跡群 加治屋B遺跡（第2次調査）・星原遺跡』都城市文化財調査報告書第60集
都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『宇都第3遺跡・横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集
都城市教育委員会 2005『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第68集
都城市教育委員会 2006『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集



第2図 平田遺跡及び周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

- 1. 平田遺跡
- 2. 正坂原遺跡
- 3. 今房遺跡
- 4. 田谷・尻枝遺跡
- 5. 脇穴遺跡
- 6. 月野原第2遺跡
- 7. 加治屋A遺跡
- 8. 加治屋B遺跡
- 9. 池原遺跡
- 10. 坂元A遺跡
- 11. 坂元A遺跡
- 12. 中尾山・馬渡遺跡
- 13. 馬渡遺跡
- 14. 母智丘谷遺跡
- 15. 鶴喰遺跡
- 16. 畑田遺跡
- 17. 新宮城跡
- 18. 母智丘原第1遺跡
- 19. 横市中原遺跡
- 20. 母智丘原第2遺跡
- 21. 牧の原第2遺跡



第3図 平田遺跡周辺地形図 (S=1/3,500)

第2節 調査の経過

平田遺跡は横市川の右岸の河岸段丘上に位置する（第3図）。第1章第1節でも述べたように3つの段丘面に分かれ、現況はともに水田であり、特に下段部（沖積段丘）では、湧水により春から秋にかけて湿地となる。都城道路はこの段丘の東西を分断するように南北に走るため、建設予定地の上段部（E地点）および下段部（D地点）の2箇所について、平成15年度から平成16年度の2カ年にわたり調査を実施した。

調査地周辺では、すでに都城市教育委員会が県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査（A地点）を開始しており、次年度にはさらに東側（B・C地点）で調査を展開することから、世界測地系による国土座標（X=-138800、Y=3810）を起点に両調査対象範囲全域を覆うように10m×10mグリッドを設定し、東西方向に整数、南北方向にアルファベットを付したものの組み合わせでグリッド番号（例：A-1グリッド）として、都城市調査区と共通のものとした。

一次調査（平成15年度）

一次調査では、まずE地点から行うこととしたが、排土置き場やプレハブ・駐車場等の確保により便宜上、調査を3段階で行うこととし、平成15年5月22日より開始した。A地点では昭和40年代に行われた耕地整理によって古代～中世の包含層まで削平を受けていたことから、E地点でもかなりの部分が削平を受けているものと予想していたが、北側および北西部と南東側が御池軽石層（VI層）もしくはその上層近くまで削平を受けていた以外は、埋没谷が南から途中、東側へと蛇行しながら走り、部分的に文明軽石層（III層）もしくはその下層の黒色土が良好に堆積していた。重機による表土剥ぎを行った後、遺構検出作業を行い、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒や土坑1基、古代の溝状遺構4条、中世の小溝状遺構群、中世の溝状遺構1条、中世～近世の道路状遺構群、近世の溝状遺構1条等が確認された。6月には梅雨に入り、雨による中断等があったものの古代から近世の遺構の調査が8月後半には終了し、8月29日には1回目の空中写真撮影を実施した。

9月には埋没谷にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、北側では弥生土器が、南東側では炭化種子がまとまって出土する以外は散発的にしか遺物が認められないことから、重機を使用して調査区中央から南側にかけてVb層まで除去を行った。そのうち南側では新たに弥生後期の竪穴住居跡1軒や柱穴、炭化種子（イチイガシ）集中が1箇所認められた。また北側では弥生土器が集中する範囲に遺構が存在する可能性が考えられたが、遺構は認められず、その周辺で土坑4基が確認されたのみであった。

9月後半には調査区北側の調査が終了したことから、北東部を拡張し、調査が終了した部分を排土置き場に設定して調査を引き続き行った。拡張部からは古代の溝状遺構（SE1）の続きを検出した他、新たに弥生時代の土坑1基、中世の小溝状遺構群や古代～中世の道路状遺構3条の他、包含層からはおびただしい数の古代の土器等を確認した。11月14日には2回目の空中写真撮影を実施し、平成16年1月26日には終了した。なお、E地点の残りの範囲についてはプレハブや駐車場を設置しているため、次年度に調査を行うことになり、E地点と並行しながらD地点の調査を1月8日から開始した。

D地点では農道や排土置き場の関係上、2回に分けて調査を実施することになり、対象区の西側に調査区を設定し、重機による表土剥ぎを行った。北側は削平のため、表土の下が御池軽石層になる以外は、ほとんどの範囲で文明軽石層が残存していた。遺構は中世の水田跡や近世の小溝状遺構群、近現代の溝状遺

構が検出された他、北側では弥生時代の周溝状遺構 1 基が、さらに土層の堆積状況確認と排水溝を兼ねたトレンチを、調査区を巡るように設定した際に東側トレンチの北西部にて弥生時代の住居跡を 1 軒検出した。

冬には湧水の水位がかなり下がることから調査面での水の影響は受けなかったものの、霧島下ろしによる風の影響により砂塵が舞い、掘り下げを行った部分がすぐに埋まる等、調査はかなり難航した。

2月中旬には水田跡の掘り下げ作業が終了し、2月20日には3回目の空中写真撮影を実施した後、水田跡の実測作業と並行しながら調査区北側の包含層掘り下げ作業を進めた。3月後半には弥生時代の竪穴住居跡を新たに2軒、周溝状遺構1軒を確認したが、包含層掘り下げ作業が調査区の約1/2まで終了した時点の26日に一次調査を終了した。

二次調査（平成16年度）

二次調査は平成16年5月26日から実施した。まずE地点の残りの範囲の調査から入り、まず重機で北側と南側の2か所にトレンチを開け、土層の堆積状況を確認した。その結果、北側部分で一部造成土が堆積していたが、全体的に堆積状況は良好であった。調査では、重機により表土を除去し、その後、人力による除去そして精査作業を行い、御池軽石混黒褐色土層（Ⅲ層）を露出させた。その結果、調査区全体に陶磁器片や土師器片や弥生土器片がまばらに出土し、一次調査の際に確認していた古代の溝状遺構1条や中世～近世の道路状遺構群、弥生時代の土坑1基を検出した。検出された遺構の実測および写真撮影、その後、下層の掘り下げおよび遺構の確認等を行い、平成16年8月10日にE地点の調査を終了した。空中写真撮影はD地点の西側部分の7層上面の調査終了と同時に、平成16年10月1日に実施した。

D地点は、第一次調査で西側部分（D地点全体の約3分の2）の第4層面（水田跡）までの調査が終わっていたため、今回はその西側部分下層の調査から開始した。まず、調査区全体に細長いトレンチ3本設定し、遺物の出土状況および遺構を確認した。その結果、5層～6層にかけて遺物が出土し、また、7層上面では遺構と思われるものを確認することができた。その後、順次5層から6層の掘り下げを行いながら出土遺物を取り上げた。7層上面での遺構の検出を行った結果、竪穴住居跡、周溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑、ピット群などの遺構を確認することができた。検出された遺構の実測および写真撮影などを行い、平成16年10月1日に空中写真撮影を実施した。残りの東側部分については、まず、重機で第1層（表土）と2層（暗褐色土層）を除去し、3層の桜島文明軽石堆積層を検出した。この桜島文明軽石を人力で除去し、第4層の畠跡および水田跡の調査を行った。検出された遺構の実測および写真撮影などを行い、平成16年11月12日に2回目の空中写真撮影を実施した。その後、西側部分の調査と同様に順次5層から6層の掘り下げを行いながら出土遺物を取り上げた。7層上面での遺構の検出を行った結果、竪穴住居跡やピット群などの遺構を確認することができた。検出された遺構の実測および写真撮影などを行い、平成17年1月12日に空中写真撮影を実施した。その後、下層の掘り下げおよび遺構・遺物の確認を行ったが、遺物の出土もなく明確な遺構も検出できなかったため、D地点の調査を終了し、平成17年1月24日に現地調査のすべてを終了した。

第3節 基本層序

今回の調査範囲では低位段丘面（E地点）から沖積段丘面（D地点）に及び、基本的には土層の堆積状況に共通性が認められるものの一部に異なる部分も認められる。ここでは地点ごとに説明をしていきたい。

沖積段丘面（D地点）

- 1層：表土で、最近まで水田として利用されていた。層厚は20～30cmである。
- 2層：しまりの強く、粘性のある暗褐色土層～黒褐色土層で2層（a、b）に細分される。そのうちb層は桜島文明軽石を多量に含む。層厚はa層が約10cm、b層が約10～15cmを測る。
- 3層：桜島文明軽石層（桜島起源—15世紀後半噴出）である。層厚は約5～10cmを測る。
- 4層：しまりがあり、やや粘性のある黒褐色土層である。白色軽石（桜島文明軽石の可能性あり）を少量に含み、鉄分を含む。水田跡等の遺構検出面である。一部で2層（a、b）に細分でき、そのうちa層では鉄分が沈着する。層厚は30～40cm（a層では最大約15cm、b層は約20～15cm）である。上位では主に中世の遺物が下位から5層にかけて弥生時代の遺物が認められる。
- 5層：しまりがあり、粘性もある黒色土層である。灰白色粒を僅かに含む。層厚は約10～30cmである。
- 6層：しまりがあり、粘性もある黒褐色土層である。灰白色粒～にぶい黄橙色を僅かに含む（5層より多く、粒が大きい）。層厚は約10～30cmである。
- 7層：さらさらしているが、しまりのあるにぶい黄橙色土層であり、部分的に鉄分が沈着する箇所も見られる。弥生時代の遺構検出面である。古環境研究所の分析結果では下位の御池軽石の由来する軽石型ガラスよりも入戸火砕流堆積物やそれに関連する始良 Tn 火山灰、アカホヤ火山灰に由来する火山ガラスが多く含まれている。2層（a、b）に細分でき、b層は灰オリーブ色を呈する。それぞれの層厚はa層が約15～40cm、b層は約10～30cmを測る。
- 8層：御池軽石層（約4,600年前に霧島火山御池火口より噴出）で硬くしまっているが、くずれやすい。層厚は約1.0～1.3mである。

低位段丘面（E地点）

- I層：表土層である。水田として利用されていた。層厚は20～50cmを測るが、3層（a、b、c）に細分され、b層及びc層は耕地整備時の造成土であり、調査区の東側で認められる。
- II層：しまりの強く、粘性のある暗褐色～黒褐色土層で桜島文明軽石を多量に含む。2層（a、b）に細分され、a層とb層との境界には鉄分が沈着する。それぞれの層厚は約10cmで、そのうちa層は耕地整備以前の水田旧耕作土である。これらは調査区の東側で確認されている。
- III層：桜島文明軽石層である。層厚は約5～10cmを測る。
- IV層：やや粘性でしまりがある黒色土層で2層（a、b）に細分され、a層は白色軽石（桜島文明軽石の可能性あり）が僅かに含まれ、またb層は御池軽石が僅かに含まれる。a層では主に中世の遺物が、b層では主に古代の遺物が出土しているが、部分的に混在する部分も認められ、弥生の遺物等も含む場合も認められた。a層が約10cm、b層は約15～30cmを測る。
- V層：粘質でしまりがある黒褐色土層である。御池軽石の含有量により、さらに3層（a、b）に細分され、下位に行くほど同軽石の含有量が多い。b層はVI層との漸移層にあたり硬質である。またa層では

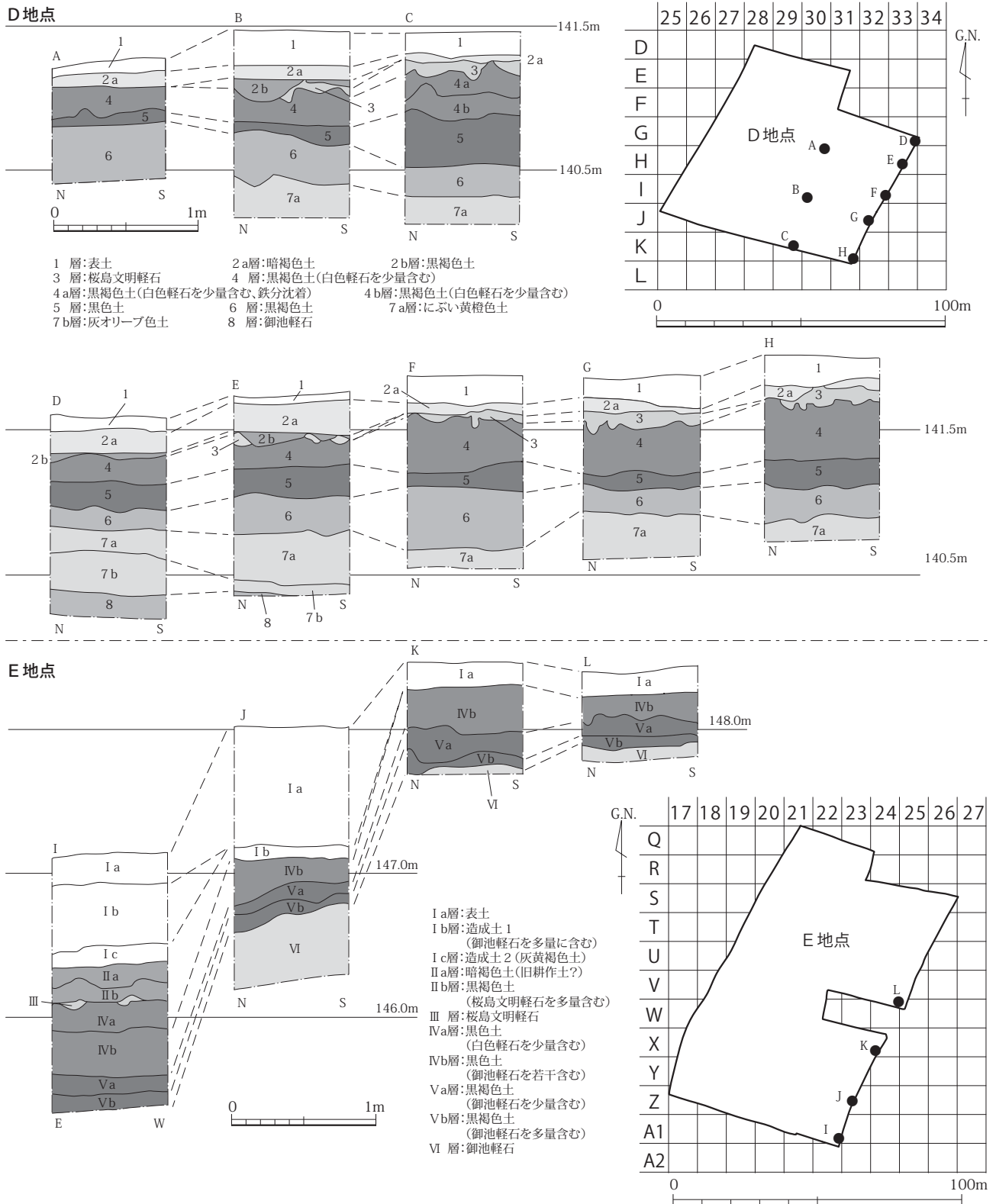
主に弥生時代の遺物が包含されている。a層が約15～20cm、b層は約10～15cmを測る。

VI層：御池軽石層である。層厚は約1.0～1.3mである。

VII層：細粒の黒色土である。しまりがあり軟らかい。暗灰黄色粒を多量に含む。層厚約20cmである。

VIII層：暗赤褐色土層でしまり、粘性ともやや強い。暗灰黄色粒を少量含む。

IX層：アカホヤ火山灰（約6,500年前に鬼界カルデラより噴出）層である。



第4図 平田遺跡 土層柱状図 (S=1/40、S=1/2,000)



第5図 D地点 弥生時代遺構分布図 (S=1/450)

第三章 調査の記録

第1節 D地点の調査

1. 遺構・遺物の概要（第5図）

D地点の調査対象面積は約3,900㎡である。D地点は調査対象区の北端に位置し、標高は約140.2m～141.6mを測り、周辺は水田として利用されている。

遺構は、4層の黒褐色土層上面で中世の水田跡10区面をはじめ、近世もしくは近世以降の小溝状遺構群3箇所跡や近・現代の溝状遺構等を検出し、7層のにぶい黄橙色土層では弥生時代後期と思われる竪穴住居跡（SA）5軒、掘立柱建物跡（SB）1棟、土坑（SC）1基、周溝状遺構（SL）5基、不明遺構（SZ）1基、自然流路1条等が確認されている。また遺物については縄文時代後期から近世まで認められるが、特に弥生時代後期の遺物では甕・壺・高坏・鉢等の土器や磨石・台石等の石器、鉄矛などの鉄製品が出土している。

そのうち自然流路については、調査区を2つに分断するように中央を東方向から西方向へ向かって蛇行しながら走る。流路の全長は約69m、幅約6m～8.6m、検出面からの深さ約20cmを測り、底面は東側に向かって緩やかに傾斜している。また埋土には6層が入り込むことから同層形成時の所産と考えられるが、明確な立ち上がりが認められないことや遺物等の出土もないことから、細かな時期については不明である。

ただし、竪穴住居跡や周溝状遺構等の遺構を避けて走っているため、集落形成時にはすでに存在した可能性も考えられる。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

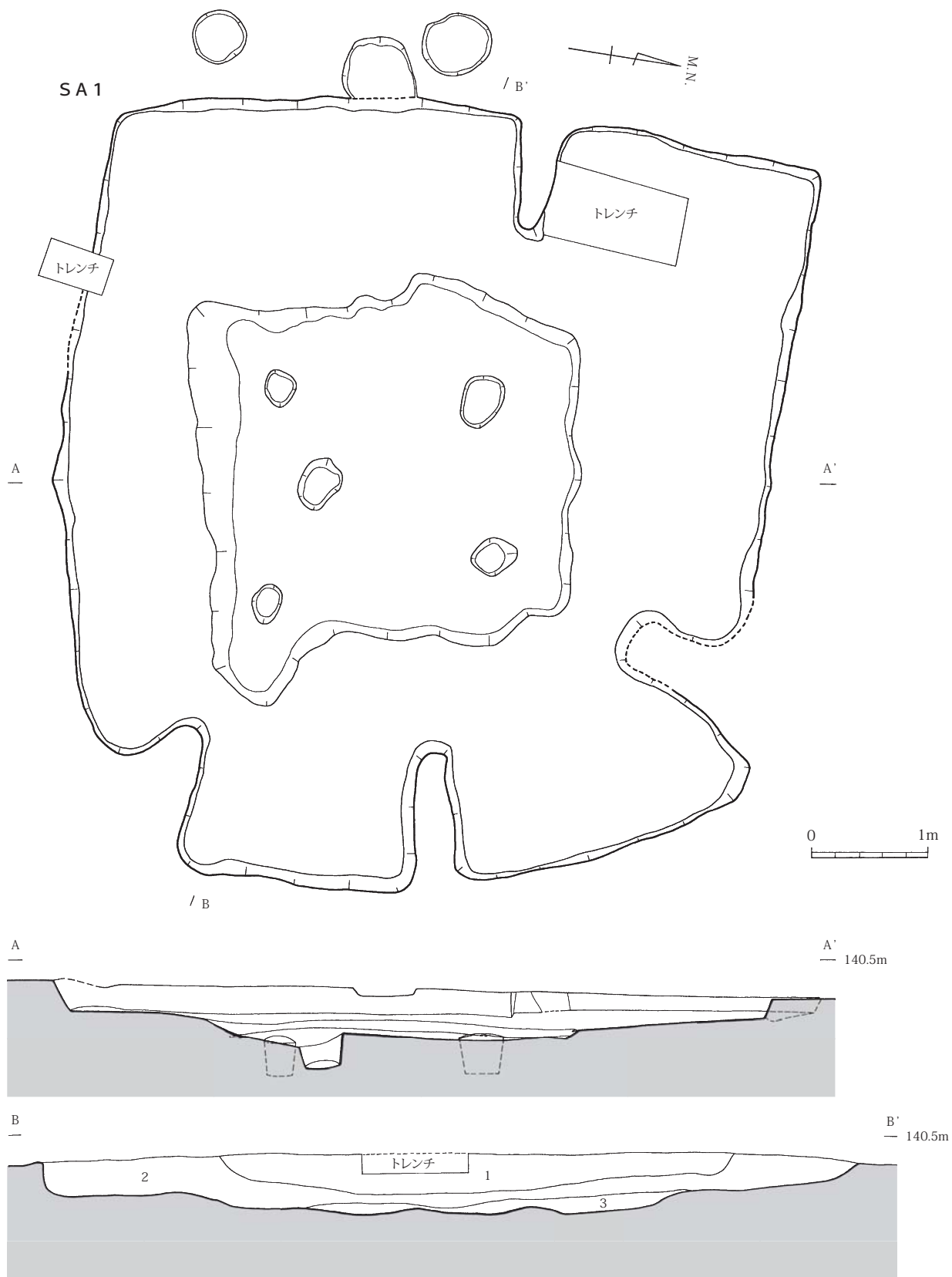
1号竪穴住居跡（SA1、第6図・第8図）

SA1は調査区北側、G-30・G-31グリッドの7層上面で検出した。平面プランは小さな間仕切りを4個持ち、長軸方向で約6.65m、短軸方向で約6.05mの方形を呈し、推定床面積は約40.2㎡と大型の住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.50mを測る。中央部の床面は方形に段落ちし、硬化している。床面からの深さが約0.35m～0.40mの主柱穴を4基検出した。住居の埋土は、御池軽石を混入する黒褐色土が自然堆積したものと考えられる。住居床面および底面近くの埋土を分別したところ、炭化物を得ることができた。遺物は甕や壺などが床面もしくは床面よりやや浮いた状態で出土している。

出土遺物は第8図に示している。1～3は甕の口縁部である。1・2とも口縁部が短く、外反している。1は内外面ともナデ調整であるが、2の外面はナデ、内面はミガキを施している。3は頸部に突帯を持ち、口縁部は緩く外反している。内外面とも横方向のナデを施している。4は台石である。砂岩製で両面および両端とも敲打痕が見られる。5は軽石製品である。浮子として利用されたと思われる。

2号竪穴住居跡（SA2、第7図・第8図）

SA2はSA1の南側、G-30～H-31グリッドの7層上面で検出した。東西方向に長い隅丸長方形プランを呈し、規模は長軸方向で約4.05m、短軸方向で約3.25mを測り、推定床面積は約13.1㎡と小型の住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.25mを測る。また、中央部には長軸方向約0.76m、

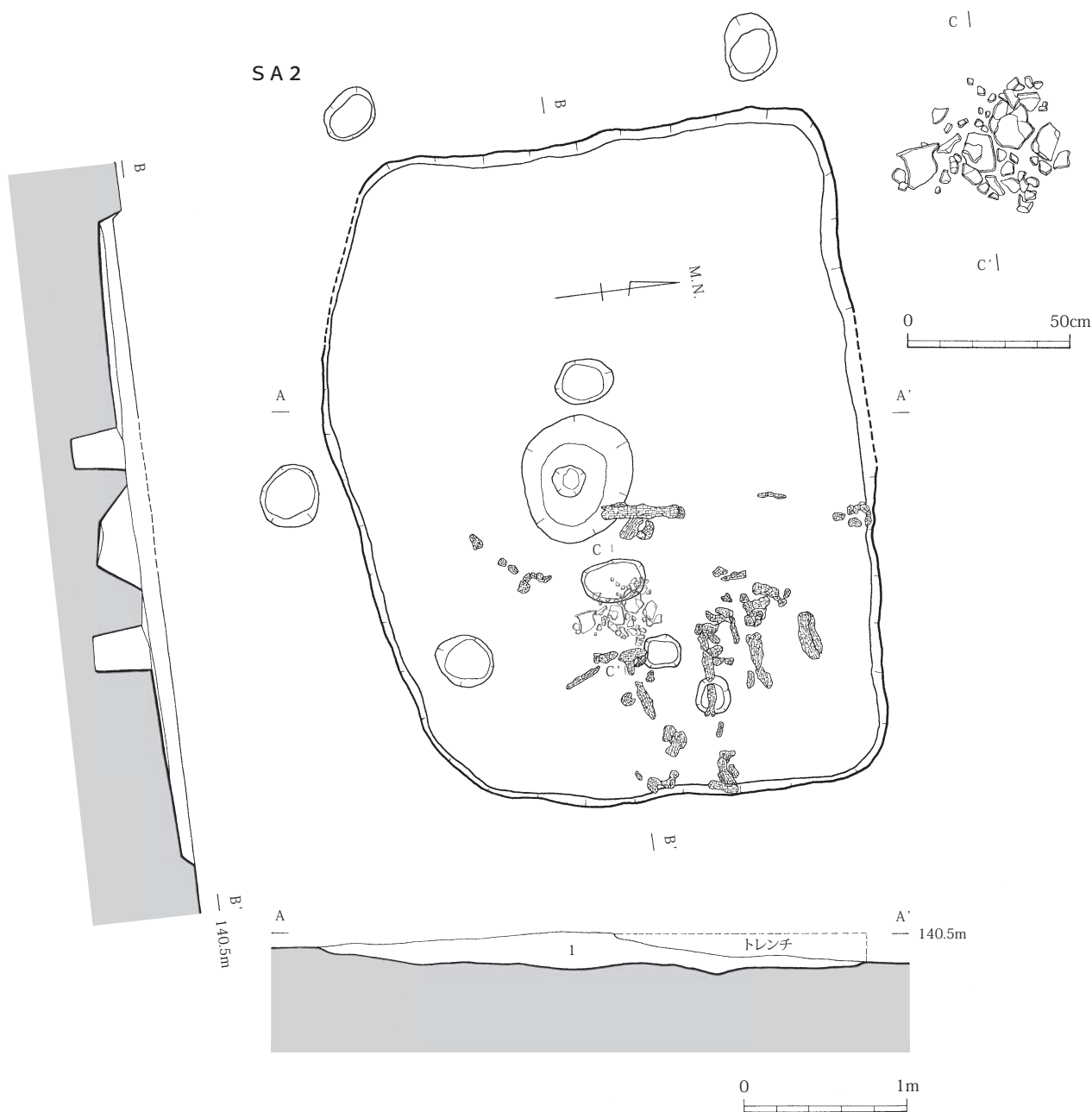


- 1：黒褐色土 (Hue10YR2/2) ややしまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含む。炭化物がまばらに検出できる。
- 2：黒褐色土 (Hue10YR3/1) ややしまりあり。粘性あり。1より明るい色調である。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含み、1より多量である。
- 3：黒褐色土 (Hue10YR3/2) ざらざらし、固くしまっている。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含み、2より多量である。

第6図 D地点 SA1実測図 (S=1/50)

短軸方向約 0.64 m の楕円形を呈する土坑を持つ。床面からの最深部までは約 0.29 m を測る。中央土坑の左右に支柱穴を 2 基検出した。住居の埋土は御池軽石を少量混入する黒褐色土であり、全体的に炭化物を多量に含む。中央部から東側にかけて、住居床面および床面近くから多量の炭化材が良好に残存しており、焼失住居の可能性も考えられる。遺物は甕が床面よりやや浮いた状態で出土している。

出土遺物は第 8 図に示している。6 は口縁部が短く、「く」の字に外反しており、口縁端部が最大径になる中溝式の甕である。口唇部は凹線状にくぼみ、口縁部下位に刻目のない貼付突帯を持つ。外面は縦方向のハケ目が見られ、また、ススが附着している。内面はナデが施されている。



1 : 黒褐色土 (Hue10YR2/2)

ややしまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を少量含む。炭化物が散在している。

第 7 図 D 地点 SA 2 実測図 (S=1/40、1/20)

SA 1



1

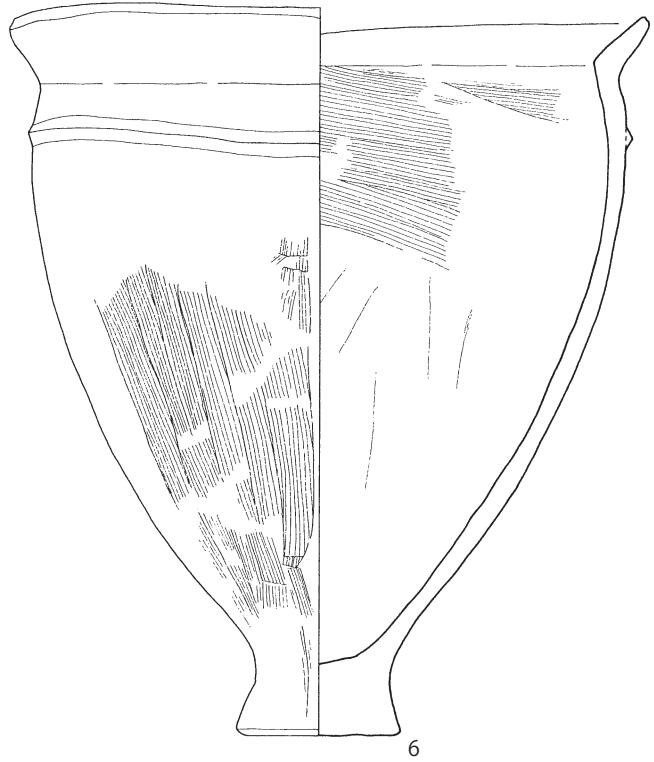


2

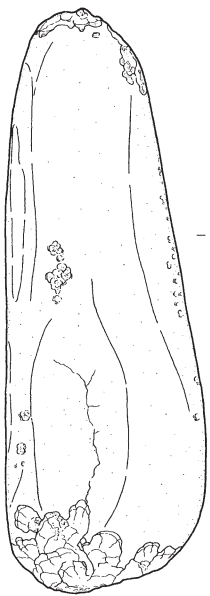


3

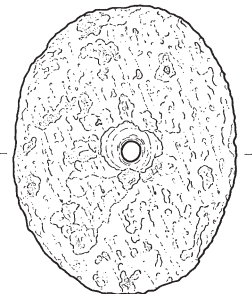
SA 2



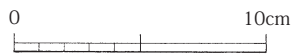
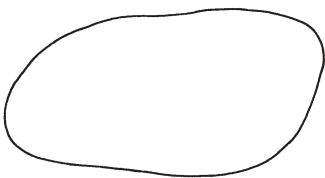
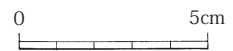
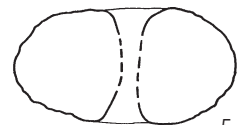
6



4



5



第8図 D地点 SA 1・SA 2出土遺物実測図 (S=1/3、5 : S=1/2)

3号竪穴住居跡（S A 3、第9図～第13図）

S A 3は調査区西側、F 28 グリッドに位置し、6層下位で検出した。平面プランは小さな間仕切りを3箇所有し、長軸方向で約4.35 m、短軸方向で約4.20 mの隅丸方形を呈すると思われる。推定床面積は約18.2㎡である。検出面から床面までの深さは約0.55 mを測る。また、床面から最深部までは約0.29 m～0.34 mを測る柱穴を2基確認した。床面は全体的にやや平坦で、硬化している。埋土は御池軽石粒を含む黒褐色土であり、住居床面および底面近くの埋土を分別したところ、炭化物を得ることができた。また、遺物は上面の埋土中から床面にかけて全体的に土器の小片が多量に出土した。特に床面近くでは、大型の甕や壺の土器片や磨石も出土した。

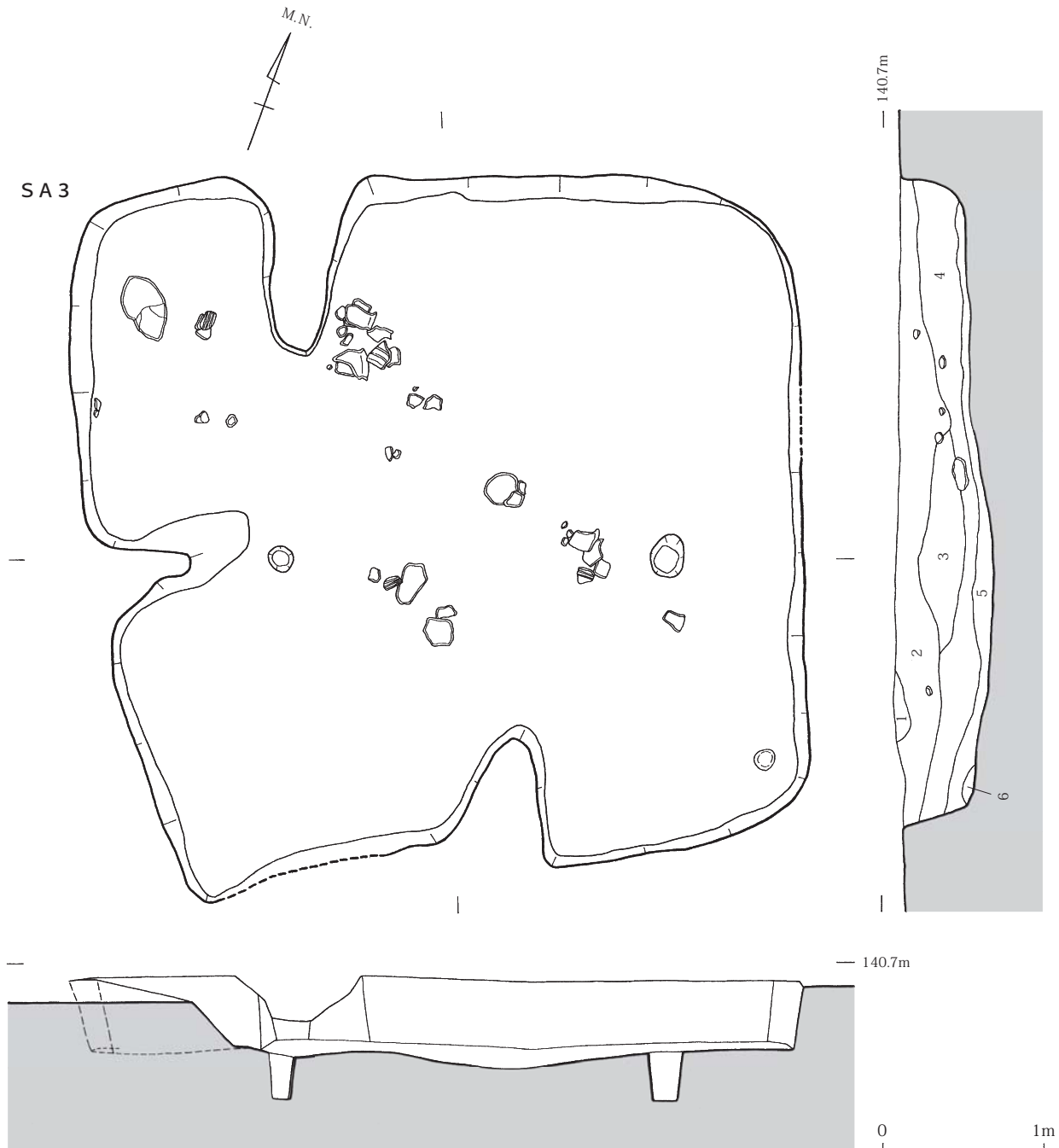
出土遺物は第10図～第13図に示している。7～20は甕である。7～12は口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部は凹線状にくぼむ。また、口縁部下位に貼付突帯を持つ甕である。7・8は同一個体である。内外面ともハケ目を施している。外面は全体的にススが付着している。9は内外面ともハケ目を施し、外面は全体的にススが付着している。10は内外面ともハケ目を施している。11は外面がハケ目を施し、全体的にススが付着している。内面はナデを施している。12は外面がナデを施し、刻目貼付突帯を持つ。また、指頭痕も見られる。内面は工具痕が見られる。13～15も同様に口縁部が「く」の字状に外反しているが、口縁部下位に貼付突帯を持たない甕である。13は外面が底部付近に斜め方向のハケ目を施し、内面はナデを施し、ススが付着している。14は外面がハケ目を施し、底部付近は横方向の工具ナデである。全体的にススが付着している。内面はナデ、一部ハケ目を施し、部分的に黒変している。15は外面が横方向のナデを施し、また、多数の工具痕も見られる。内面はハケ目を施し、一部黒変している。16は口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部は凹線状にくぼむ。内外面ともナデを施し内面は指頭痕が見られる。17・18ともは口縁部が短く、「く」の字状に外反し、口唇部は凹線状にくぼむ。外面はハケ目を施し、内面はナデを施している。19・20は口縁部が「く」の字状に外反し、内面はナデ、外面はハケ目や工具痕が見られる。特に7～12は中溝式系甕と思われる。13～15は中溝式系に伴う貼付突帯を持たない土器、16～20は残存部位が少なく貼付突帯の有無が判断できないものの口縁部である。しかし、土器の特徴から中溝式系の土器と思われる。

21～25は壺である。21・22は広口壺の口縁部である。21は口縁部が短く、「く」の字状に外反し、口縁直下に貼付突帯を持つ。内外面ともナデを施し、指頭痕も見られる。22は口縁部が短く、外反し、口唇部に沈線を巡らしている。外面はハケ目を施し、内面は横方向のナデが施されている。23・27は大型の壺である。23は口縁部が複合口縁を呈しており、口縁の内傾した拡張部には櫛描波状文が描かれている。外面は不定方向の工具痕が施され、頸部には指頭痕も見られる。内面は全体的に風化が著しいが、ナデが施されていると思われる。27は胴部上部と中央部に3条の断面三角形の貼付突帯を有する。胴部形態は偏球形胴で底部は平底を呈する。外面は横・斜め方向のヘラミガキを施し、貼付突帯付近は指ナデが見られる。また、部分的にススが付着し、底面全体が黒変している。内面は全体的に風化気味であるが、ナデが施されていると思われる。24は口縁部が外反し、頸部に貼付突帯を持つ。内外面ともナデを施している。

25・26は高坏である。そのうち25は坏部である。浅い体部に口縁部が大きく開いている。外面はハケ目を施し、内面は剝離部分が多いため、調整は不明であるが、残存部分の口縁部付近はナデを施している。26は全体的に丸みをもち稜が不明瞭である。坏身が深く、壜状をなす。脚部は短くラッパ状に開く。坏部の口縁部が僅かに外反し、口唇部は凹線状にくぼむ。外面は坏部が工具による縦方向のナデ、脚部は工具

による不定向のナデで粗い仕上げである。部分的に黒変している。内面は全体的に風化が著しいが横方向のナデが施されていると思われる。脚部内面には指押さえが見られ、丁寧に仕上げている。

28は磨石である。平面形態は楕円形を呈し、表裏両面に磨面を持つ。また、周縁部分には敲打痕も見られる。利用石材は砂岩である。

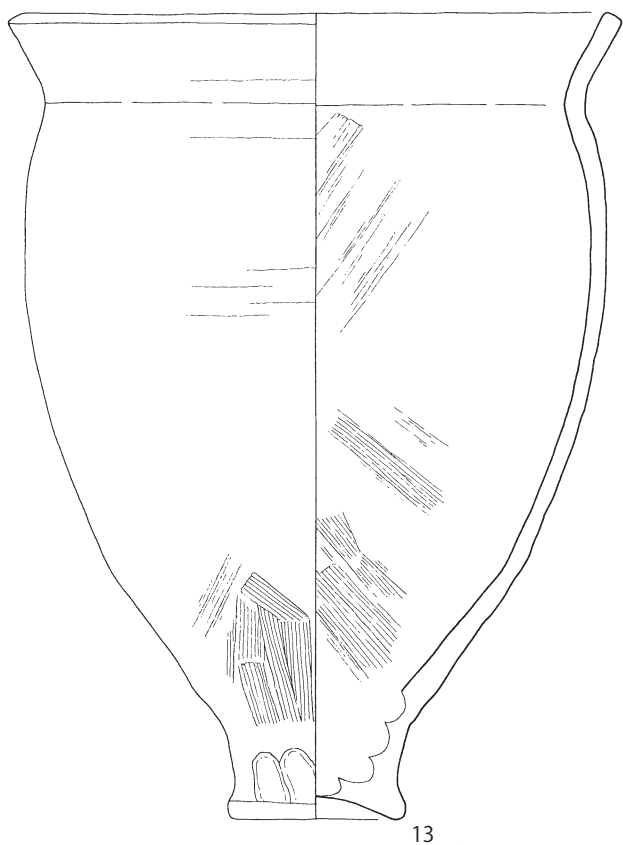


- | | |
|------------------------|--|
| 1：黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) | しまりあり。さらさらしている。灰白色粒 (φ 2mm～8mm 程度) を多量含む。暗赤褐色土を部分的に含む。鉄分か。 |
| 2：黒褐色土 (Hue10YR2/2) | しまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm～10mm 程度) を全体的に含む。 |
| 3：黒色土 (Hue7.5YR2/1) | しまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm～4mm 程度) を全体的に含む。 |
| 4：黒褐色土 (Hue10YR2/3) | しまりあり。粘性あり。2より明るい色調である。御池軽石粒 (φ 2mm～10mm 程度) を全体的に2より多量に含む。炭化物をわずかに含む。 |
| 5：黒褐色土 (Hue10YR3/1) | しまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm～4mm 程度) をわずかに含む。 |
| 6：にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) | しまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm～4mm 程度) 及び灰白色粒 (φ 2mm～5mm 程度) を全体的に含む。 |

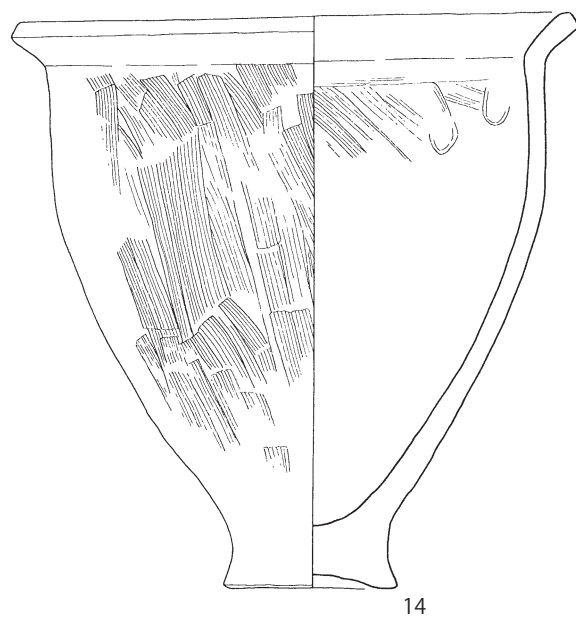
第9図 D地点 SA3実測図 (S=1/40)



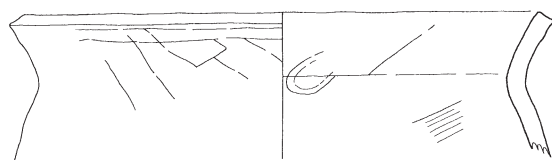
第10图 D地点 SA 3 出土遺物実測図1 (S=1/3)



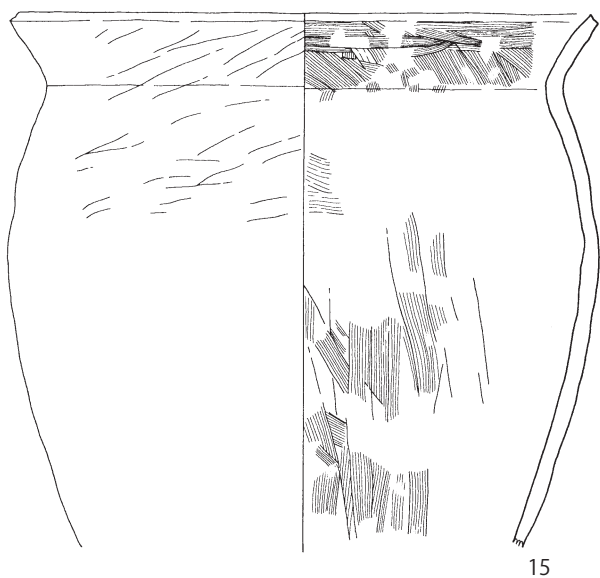
13



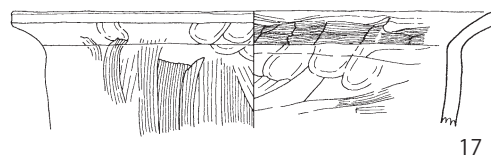
14



16



15



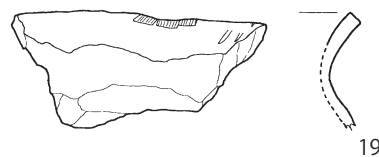
17



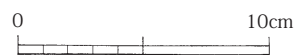
18



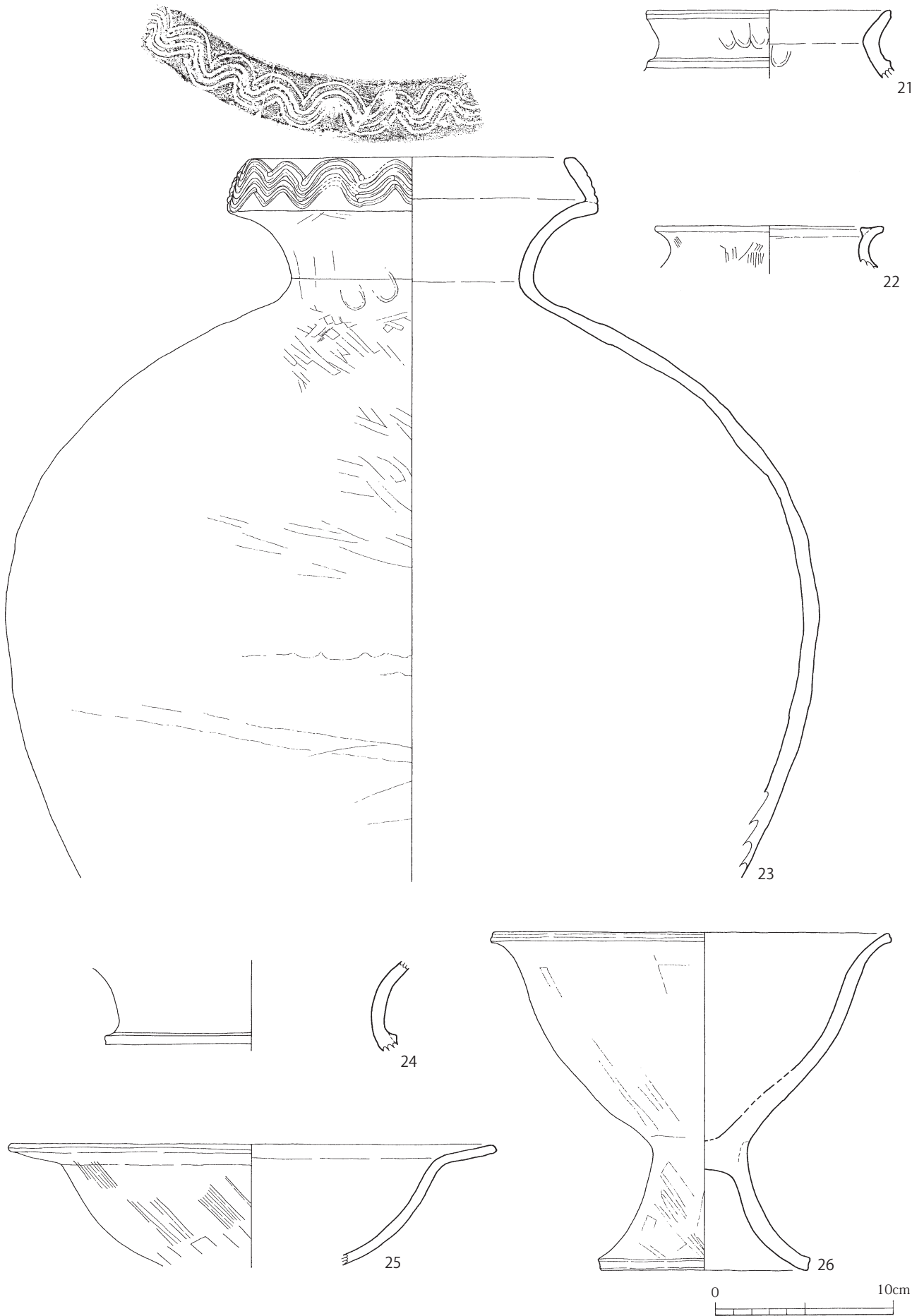
20



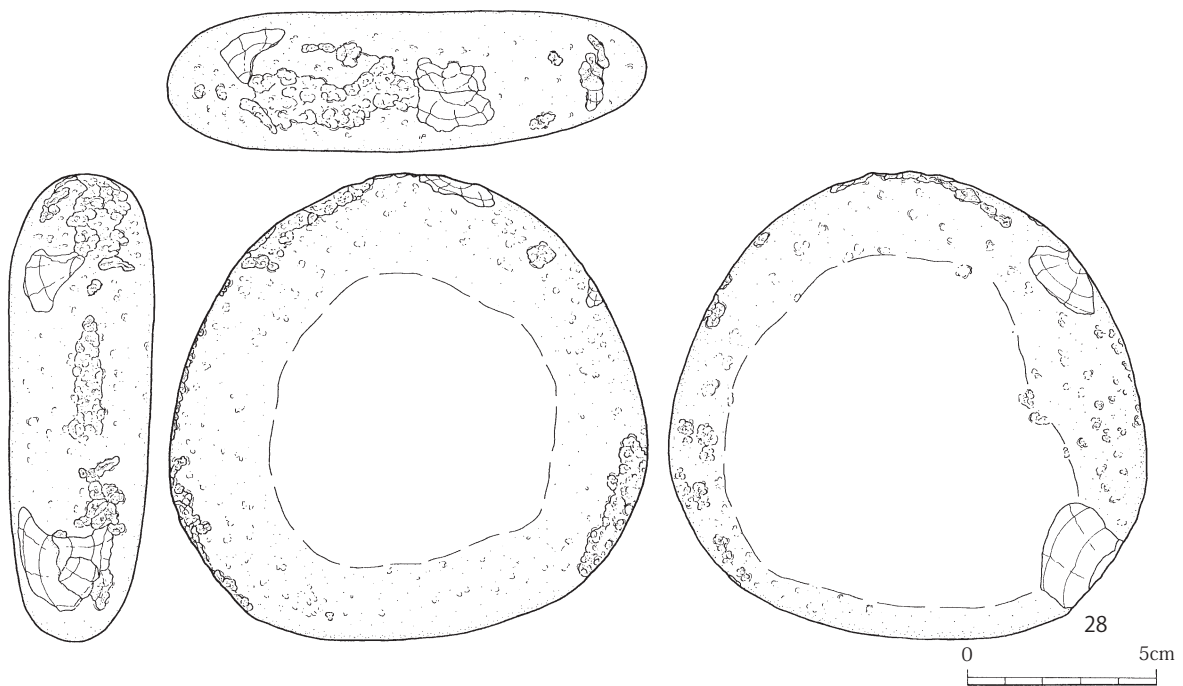
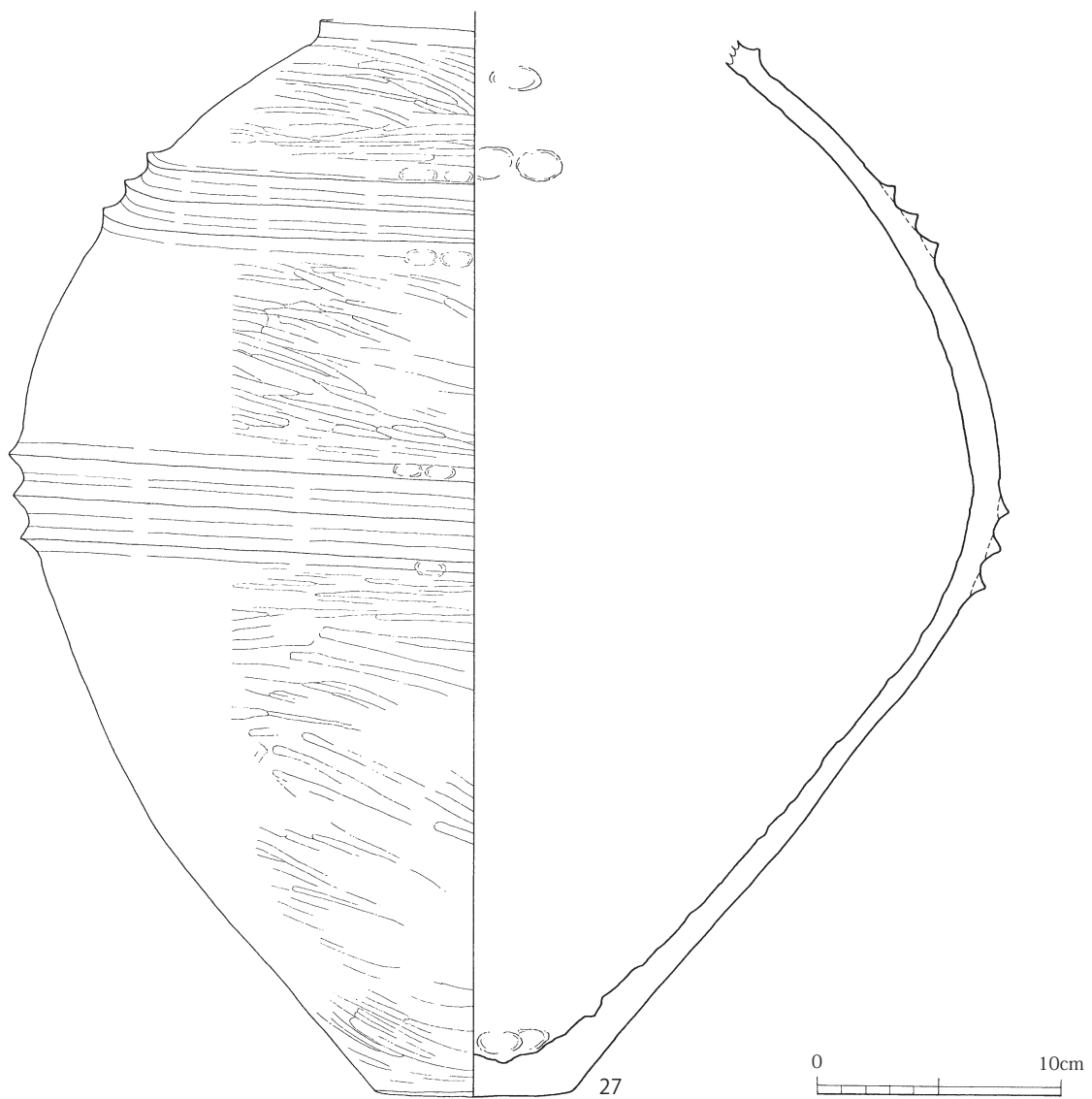
19



第11図 D地点 SA3出土遺物実測図2 (S=1/3)



第12图 D地点 SA3出土遺物実測図3 (S=1/3)

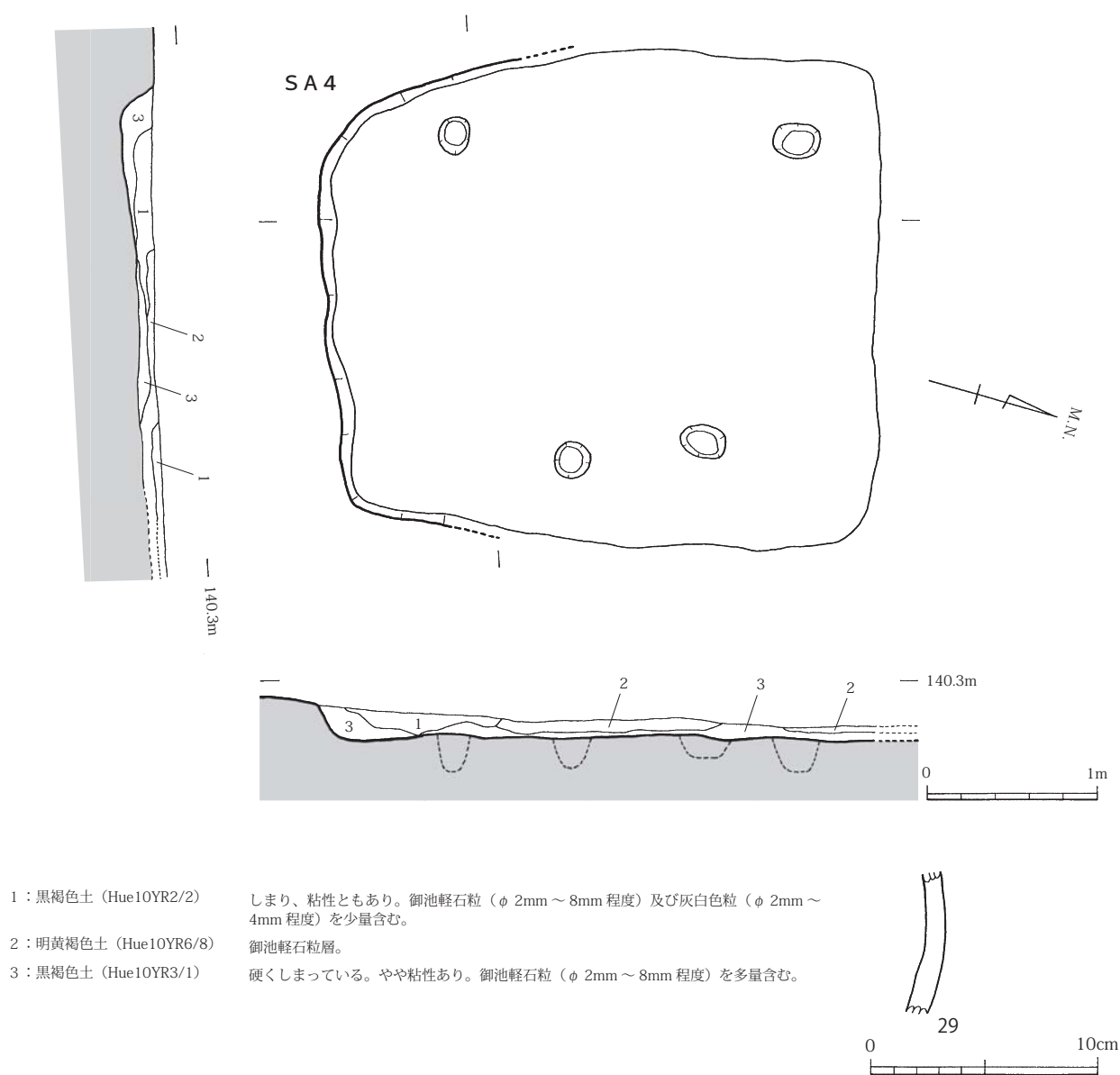


第13图 D地点 SA 3 出土遺物実測図4 (27 : S=1/3、28 : S=1/2)

4号竪穴住居跡（S A 4、第14図）

S A 4は調査区の北側、E-28・E-29グリッドの7層上面で検出した。遺構検出は住居全体が削平を受けていたため、住居南側の約3分の1のみ上場が残り、北側は床面だけの検出であった。平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われ、長軸方向で約3.25m、短軸方向で約2.90mを測り、推定床面積は約9.42㎡と小型の住居跡である。検出面から床面までの深さは約0.10mを測る。床面はほぼ平坦で硬化している。床面に4基の柱穴を確認したが、配置状況から東側に見られる柱穴は不確定要素を残すと思われる。遺物は土器の小片が床面近くか若干浮いた状態で数点出土した。

出土遺物は第14図に示している。29は甕の胴部である。内外面ともナデを施しているが、内面は部分的に工具による斜め方向のナデも見られる。



第14図 D地点 S A 4実測図及び出土遺物実測図 (S=1/40、S=1/3)

5号竪穴住居跡（S A 5、第15図・第16図）

S A 5は調査区北側、G-31・G-32グリッドに位置する。東西方向に長い隅丸方形プランを呈し、規模は長軸方向で約6.05 m、短軸方向で約5.10 mを測る。検出面から床面までの深さは約0.35 mを測る。遺構西側に1個の突出壁を持ち、北側に2個と西側に1個のベット状遺構を有する。柱穴は4基確認できたが、支柱穴と思われるのは2基だけである。床面から最深部までは約0.30 mを測る。埋土は御池軽石粒を含んだ黒褐色土である。住居床面および底面近くの埋土を分別したところ、炭化物を得ることができた。遺物は上面の埋土中から床面にかけて全体的に土器の小片が多量に出土した。南西部の床面近くでは、磨石が出土し、また、北東部には床面から約10cm程度浮いた状態で鉄矛が出土した。住居跡出土の鉄矛は、本県で初例であり、しかも、弥生時代の事例として貴重である。

出土遺物は第16図に示している。30は甕の胴部である。外面は横方向の工具によるナデを施し、刻目貼付突帯を持つ。内面は横・斜め方向のハケ目を施している。31・32は壺である。31は口縁部が緩やかに外反する。32は外面に横方向の6条の浅い沈線を巡らせ、内面は横・斜め方向のハケ目を施している。33は短頸壺である。内外面ともナデが施されている。色調が明るく、鉄分のある粘土を使って赤く発色させた可能性も考えられる。34は長頸壺である。円筒形の長い口縁部が立ち上がると思われる。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキが施されている。35は磨石である。平面形態は円形を呈し、断面形は扁平である。周縁に一部敲打痕も見られる。36は台石である。表裏両面に砥面を持つ。また、両面とも敲打痕や鉄鏃などを磨いた痕跡が残る。また、端部にも敲打痕も見られる。35・36とも利用石材は砂岩である。37は長鋒型の鉄矛である。先端は欠損しているが、長さは約31.7cmである。身部長約15.9cm、身幅約3cm、厚さ5mmで断面はレンズ状を呈する。袋部関下断面はほぼ正方形で幅約1.8cm、厚さ約1.9cm、袋口断面は不正円形で径約2.1cm～約2.4cmである。中空の袋は端部が欠損気味ではあるが、端部から約3分の2までのところまでと思われる。

(2) 掘立柱建物跡（S B 1、第17図）

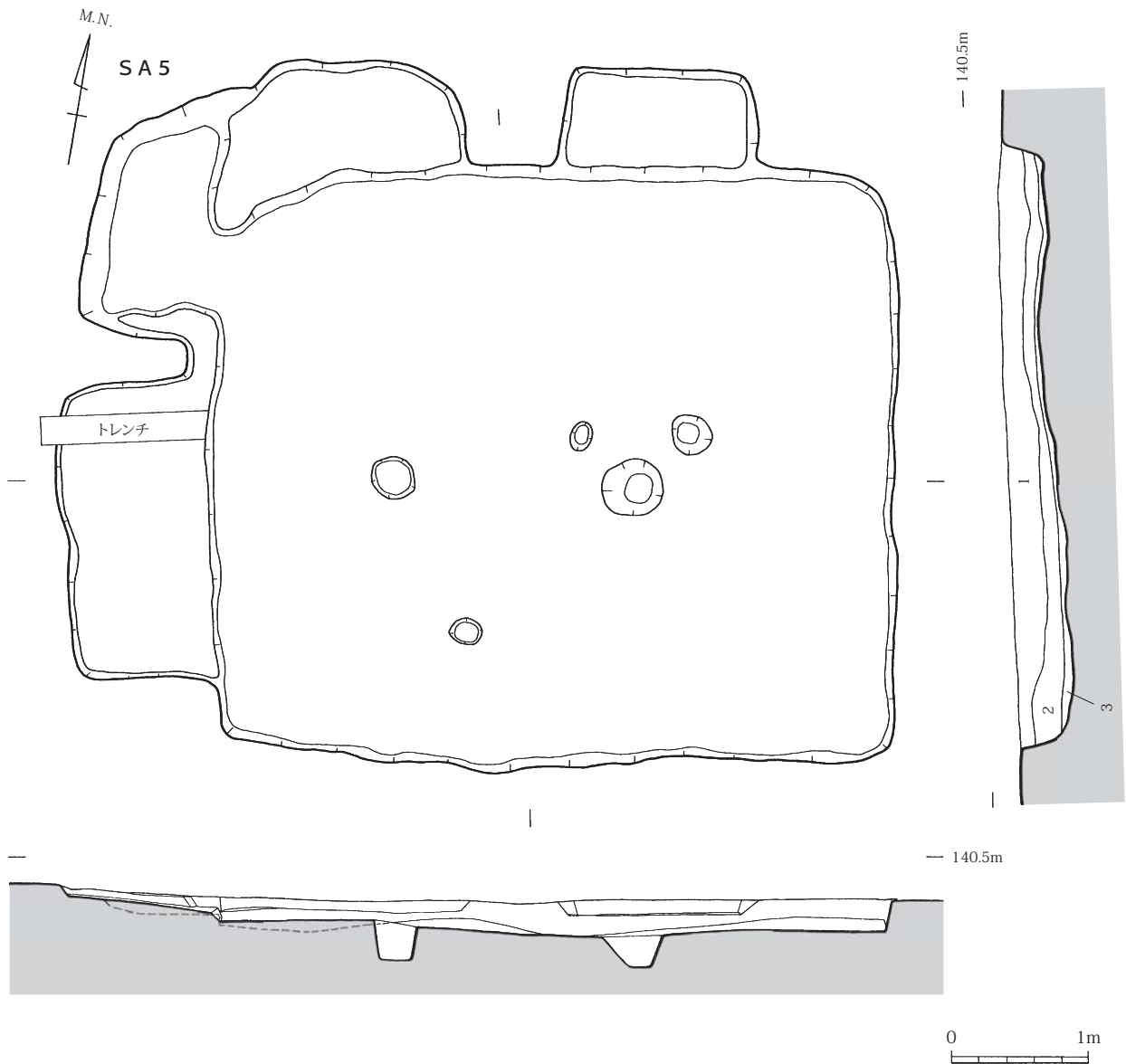
S B 1は、調査区北側F-28～F-29グリッドに位置し、S A 3とS L 2のほぼ中間地点で検出した。東西方向に主軸を有し、両妻側の中央にもう一本の柱を持つ棟持ち柱掘立柱建物跡である。規模は3間×3間であり、桁行約4.96 m～約5.12 m、梁行約3.44 m～3.68 m、桁行柱間は約1.44 m～1.92 m、梁行柱間は約1.04 m～1.28 mを測る。柱穴の深さは検出面から約0.24 m～0.40 mであり、掘形は円形もしくは楕円形である。柱掘形の埋土は、御池軽石が少量混入する黒褐色土である。柱穴の底部近くで弥生土器の小片が数点出土している。

出土遺物は第17図に示している。38は甕である。口縁部が「く」の字に外反し、口縁下位に刻目貼付突帯を持つ。外面はナデ後にハケ目を施し、内面は横方向の工具痕が見られる。全体的にススが付着している。

(3) 土坑（S C 1、第18図）

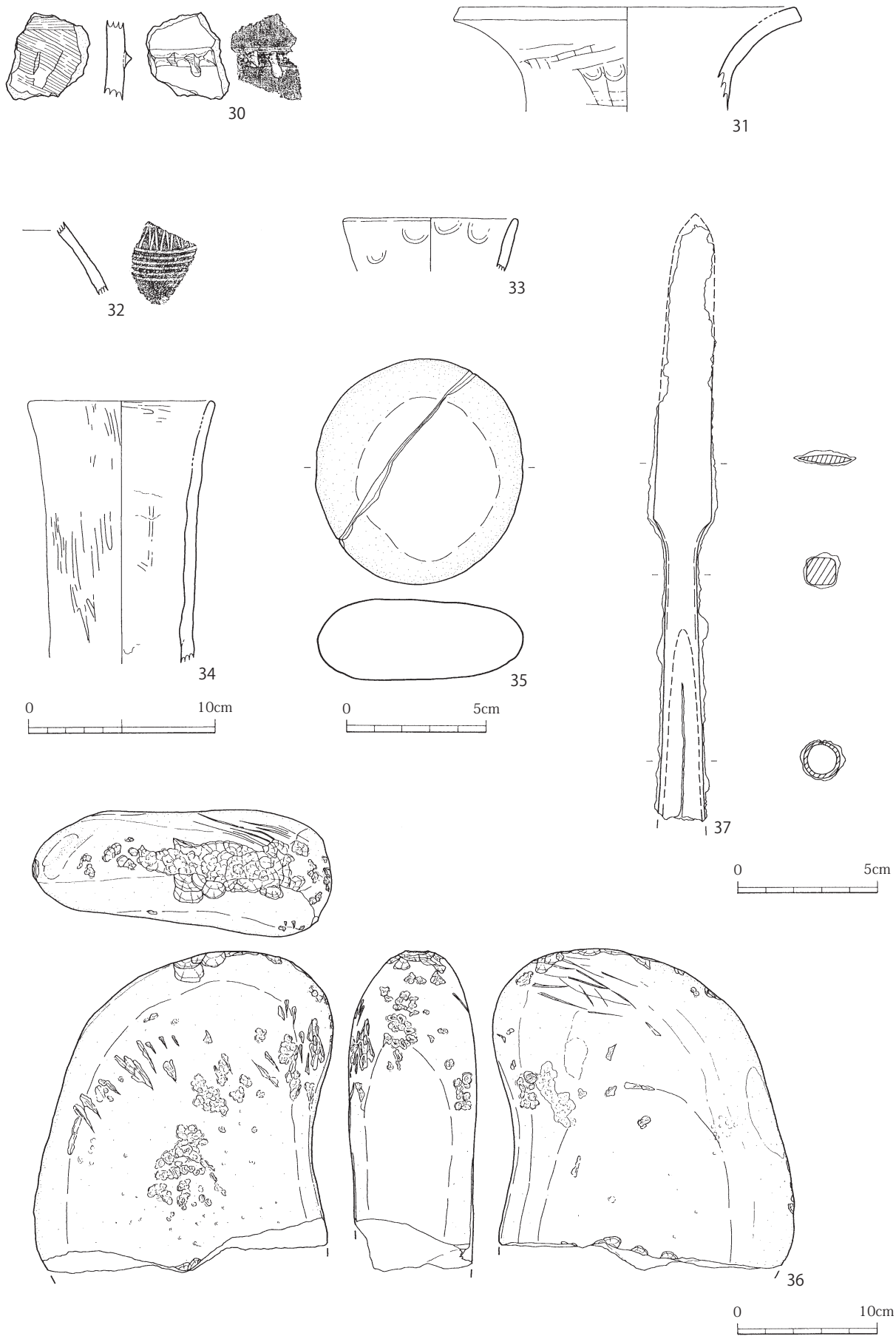
S C 1は、調査区北側E-29グリッドに位置し、S A 4の南東部で検出した。平面プランは長軸方向で約1.45 m、短軸方向で約1.40 mの楕円形を呈し、断面形態はU字状検出面から床面までは約0.65 mを測る。検出面から底面に向かって、南西部に一段のテラスをつくり、北東部の最深部に至る。埋土は御池軽石粒および灰白色粒を少量混入する黒色土・黒褐色土が堆積している。用途については不明である。土坑

内から時代を断定できる遺物は出土していないが、S C 1の周辺で確認された竪穴住居跡や周溝状遺構の埋土と類似しているため、弥生時代の土坑に帰属すると思われる。

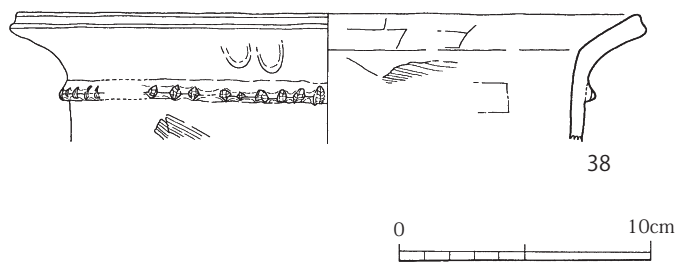
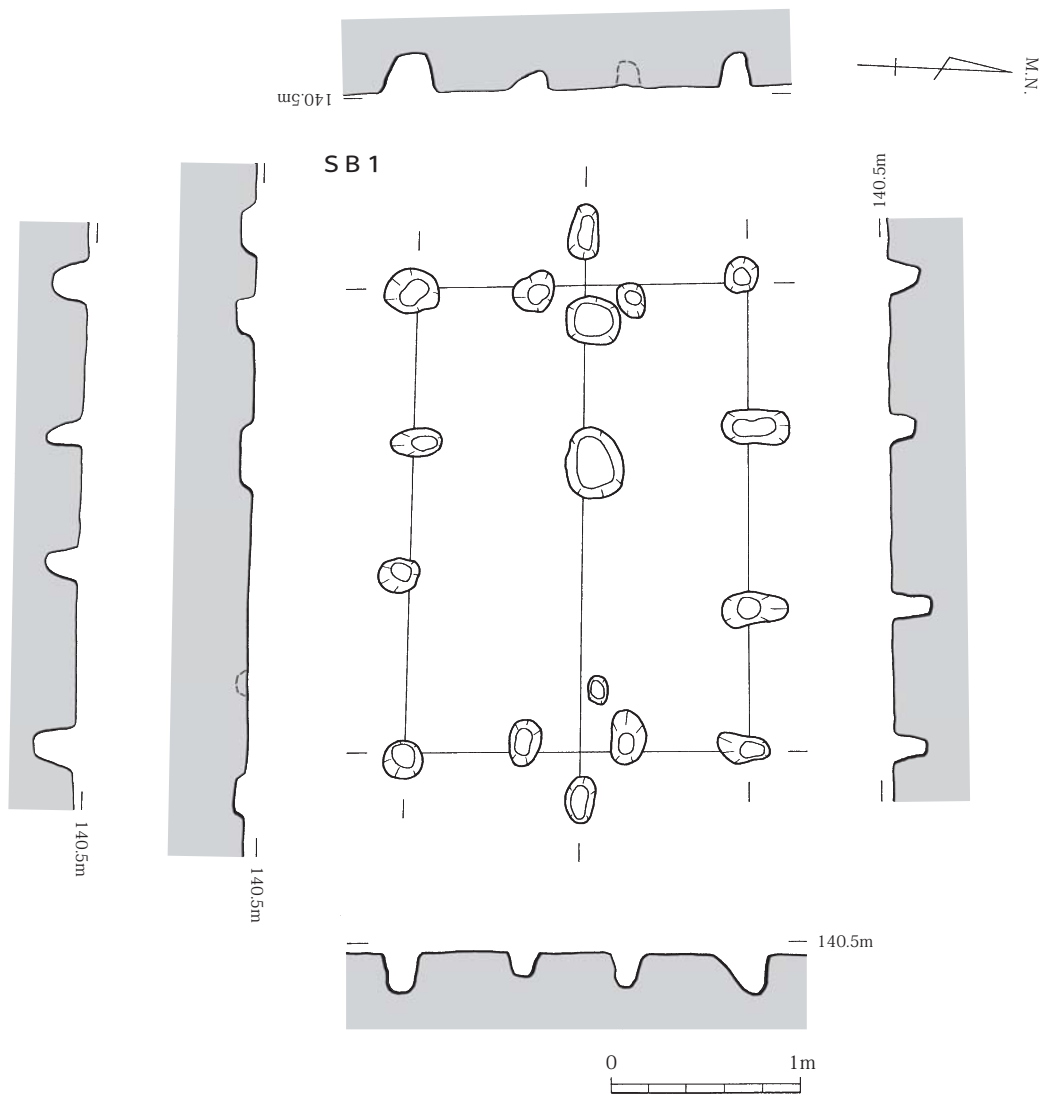


- 1：黒褐色土 (Hue10YR2/2) ややしまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含む。また炭化物をまばらに含む。
- 2：黒褐色土 (Hue10YR3/1) ややしまりあり。粘性あり。2より明るい色調である。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含み、1より多量である。
- 3：黒褐色土 (Hue10YR3/2) ざらざらし、硬くしまっている。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 8mm 程度) を全体的に含み、2より多量である。

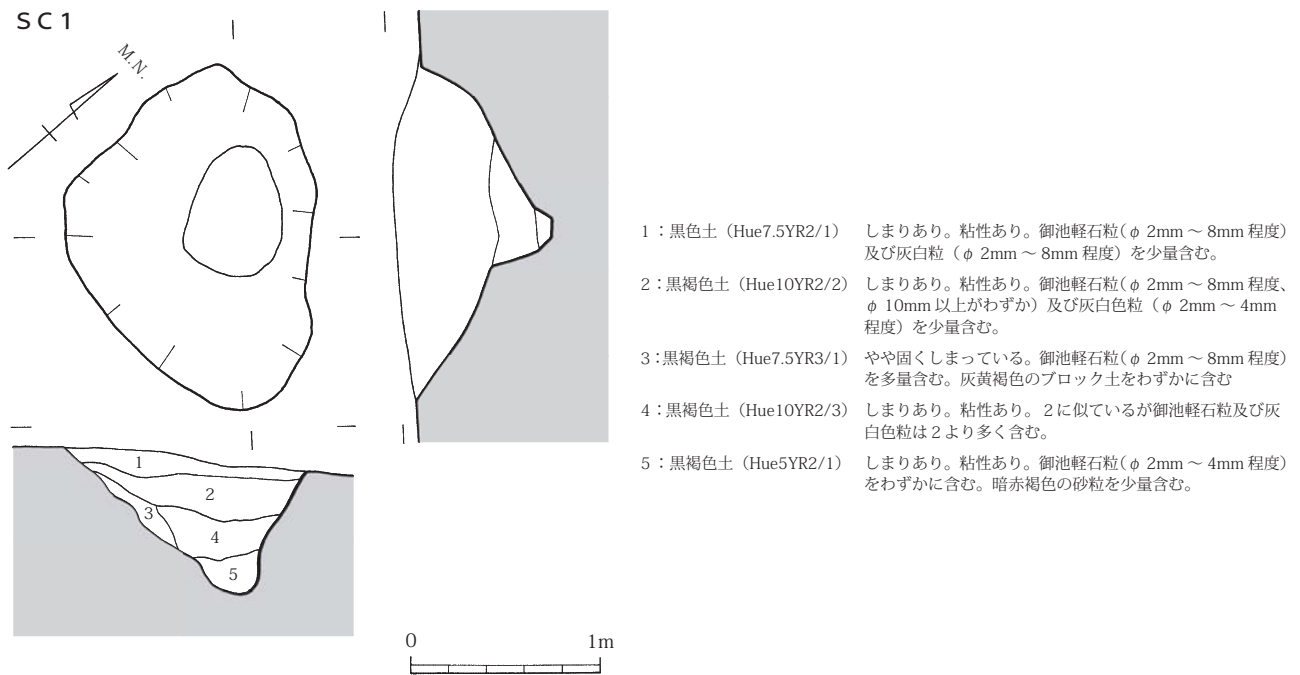
第15図 D地点 SA5実測図 (S=1/50)



第16图 D地点 SA 5 出土遺物実測図 (S=1/3、36 : S=1/4、35・37 : S=1/2)



第17図 D地点 SB 1実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第18図 D地点 SC 1 実測図 (S=1/40)

(4) 周溝状遺構

1号周溝状遺構 (S L 1、第 19 図)

S L 1 は、調査区北側 E - 29 グリッドに位置する。北部は攪乱の影響で削平されており、遺構の約半分の検出である。全貌は明確でないが遺存部により、平面プランは、片軸約 4.90 m の隅丸方形プランを呈する。周溝は幅約 0.70 m で、検出面からの深さは約 0.10 m ~ 0.20 m を測る。これは遺構上面が削平されているため、周溝の深さが浅くなっていると思われる。埋土は御池軽石粒を少量含む黒褐色土である。遺物は南東隅に検出面から底面にかけて集中的に出土した。

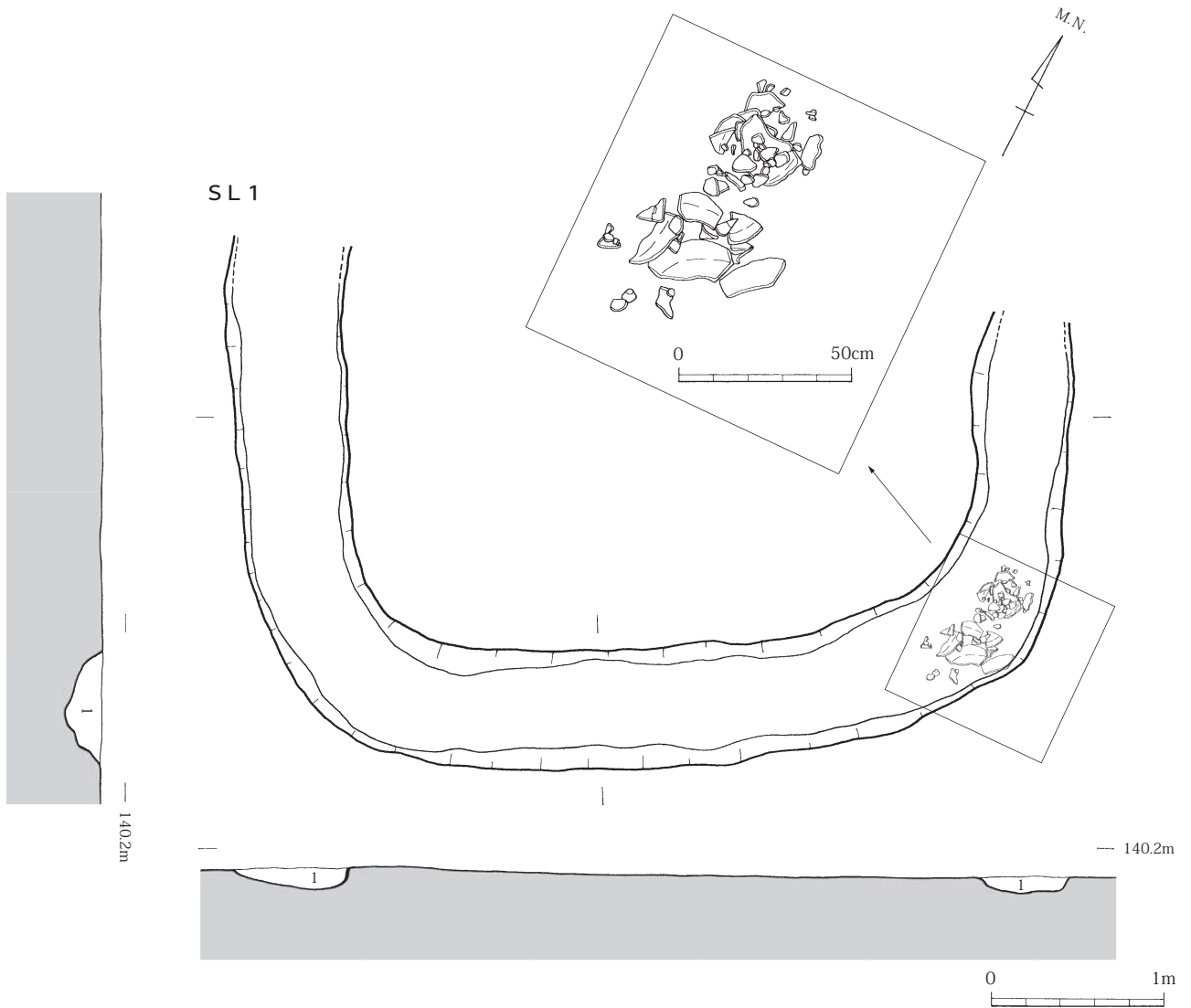
出土遺物は第 19 図に示している。39 ~ 42 は甕である。39 ~ 41 は口縁部が「く」の字に外反し、41・42 は内外面ともハケ目を施している。41 の底部付近は指頭痕も見られる。39 は外面がハケ目を施し、内面は斜め方向の工具痕が見られる。40 は平底の甕である。内外面とも工具によるナデが施されている。外面が一部黒変し、底部付近は指頭痕も見られる。43 は比較的小型の無頸壺で頸部に 2 個対になる穿孔を持つ。内外面ともナデおよびミガキが施され、さらに内面には指頭痕も見られる。44 は高坏の坏部である。坏部が一度明瞭に屈曲し、外反しながら立ち上がっている。外面はミガキを施し、一部黒変している。45 は鉢である。口縁下位に穿孔を持ち、胴部から口縁部にかけて内湾しながら延びている。内外面とも工具ナデを施している。

2号周溝状遺構 (S L 2、第 21 図・第 22 図)

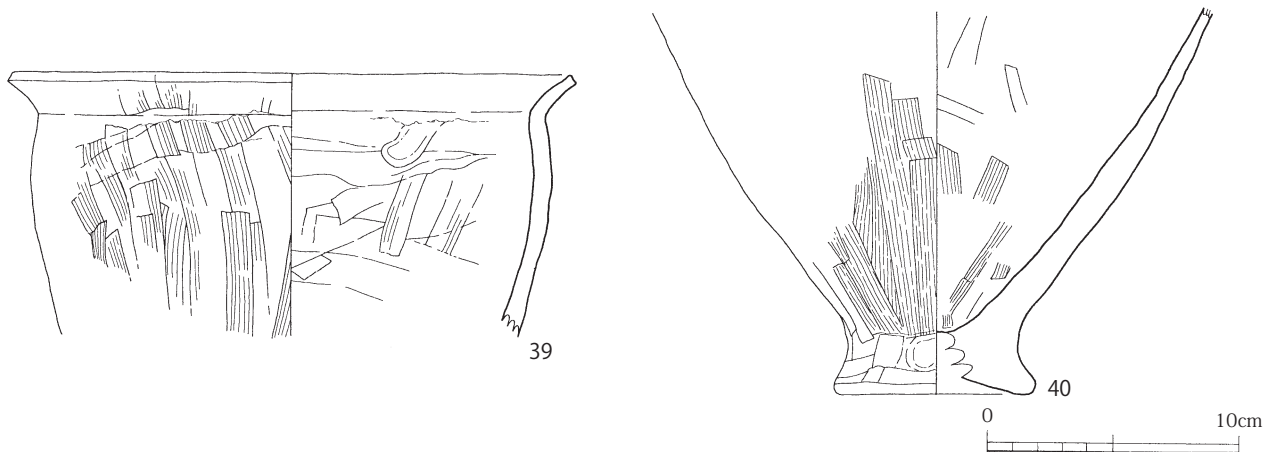
S L 2 は、調査区北側 F - 29・F - 30 グリッドに位置する。平面プランは、長軸方向で約 6.40 m、短軸方向で約 6.20 m の楕円形プランを呈する。周溝は幅約 0.65 m、検出面から底面までの深さは約 0.20 m ~ 0.30 m を測る。埋土は御池軽石粒を少量含む黒褐色土である。周溝底面および底面近くの埋土を分別したところ、炭化物を得ることができた。遺物は土器の小片が底面近くか若干浮いた状態で数点出土し、磨製石鏃も底面よりやや浮いた状態で 1 点出土した。

出土遺物は第 22 図に示している。46 ~ 49 は口縁部がやや外反する甕である。内外面とも横方向のナ

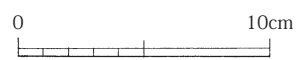
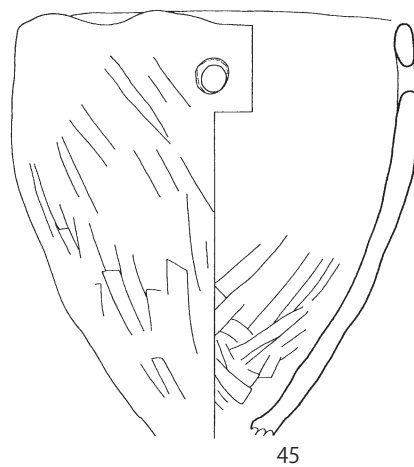
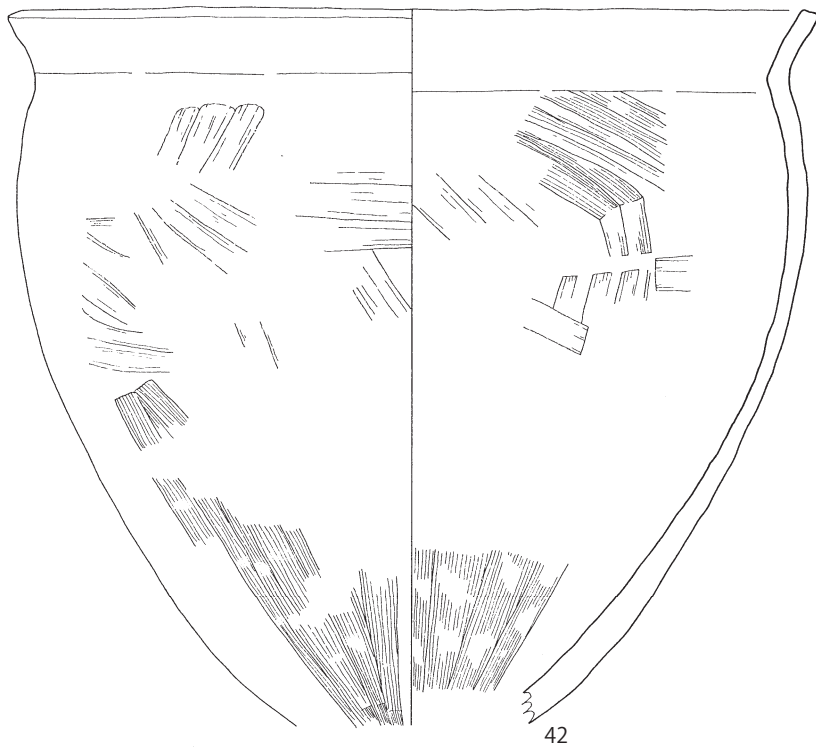
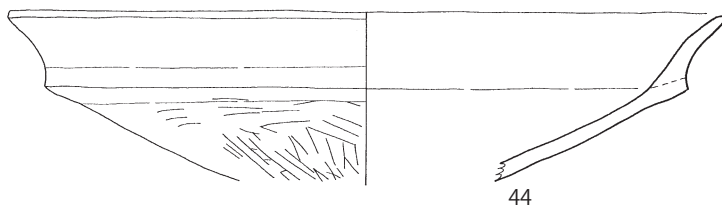
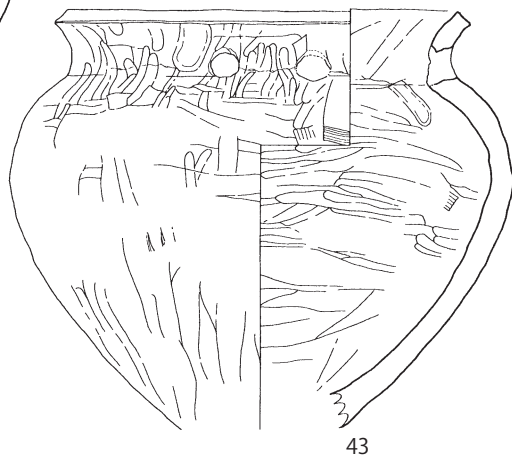
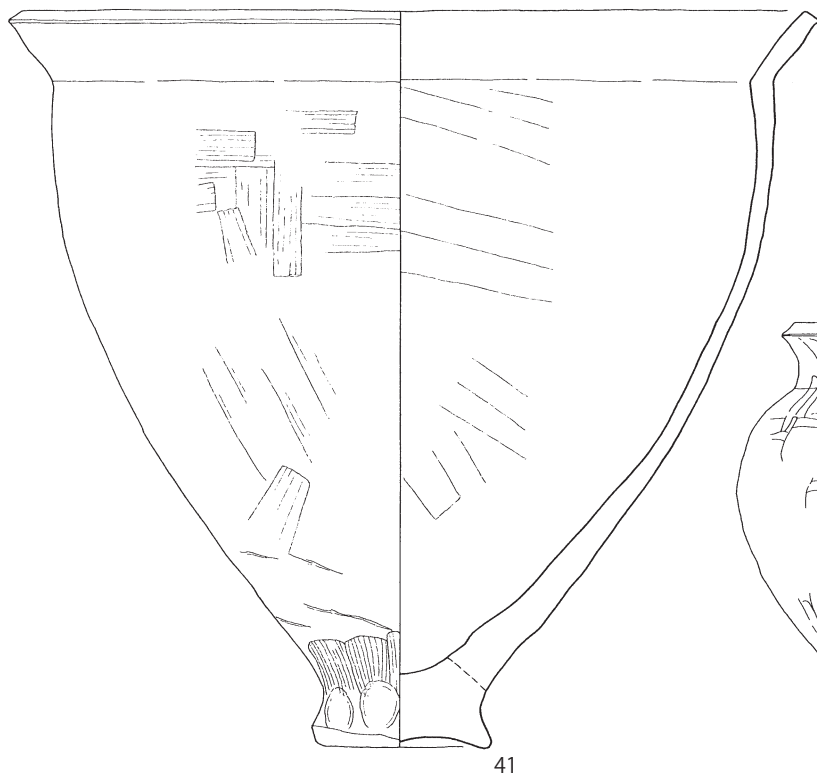
デを施している。46は貼付突帯を持つ。50は甕の底部で、やや上げ底気味である。51は口唇部に凹線文を巡らせ、口縁部がやや外反する壺である。52は平面形態が正三角形をしている凹基式の磨製石鏃である。先端部が欠損している。利用石材は頁岩である。



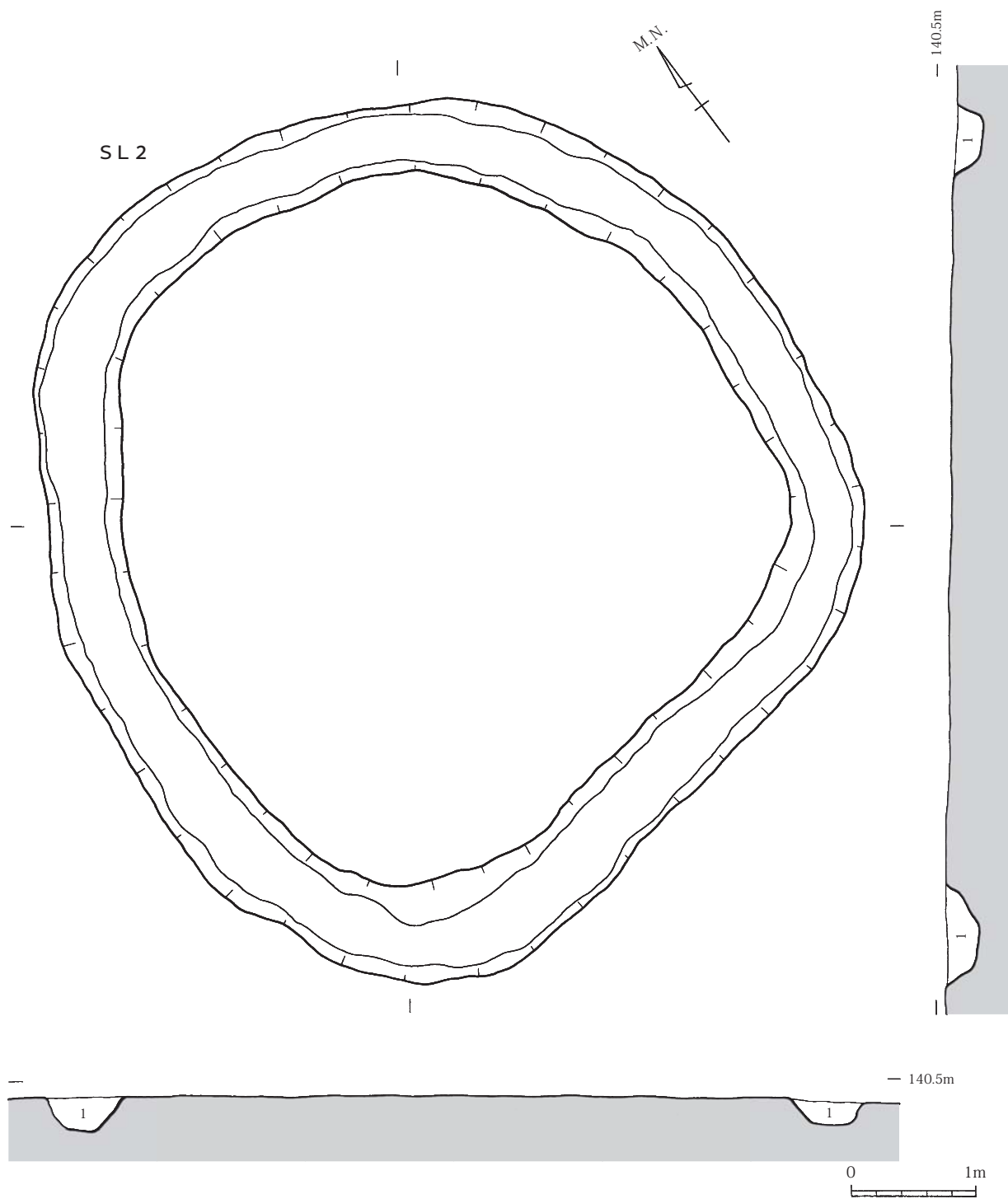
1：黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 5mm 程度) を少量含む。



第19図 D地点 SL 1実測図 (S=1/40、S=1/20) 及び出土遺物実測図1 (S=1/3)

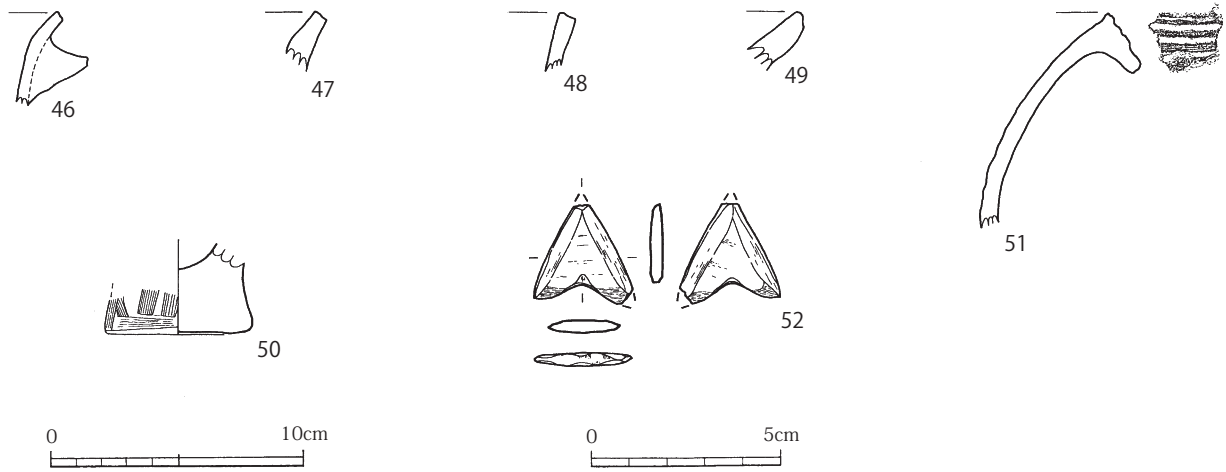


第20图 D地点 SL 1 出土遺物実測図2 (S=1/3)

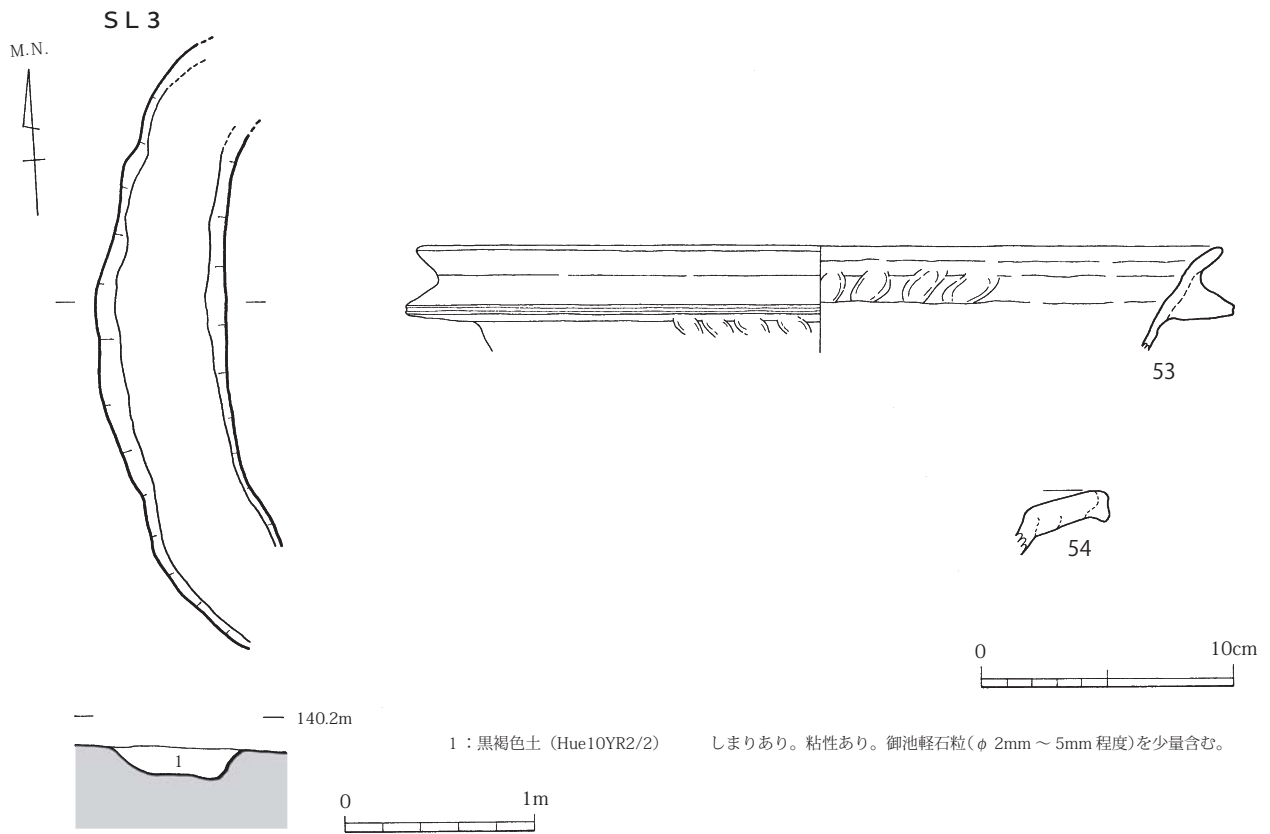


1 : 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。御池軽石粒と灰白色粒 (φ 1 ~ 2mm 程度) を少量含む。

第21図 D地点 SL 2 実測図 (S=1/50)



第22図 D地点 S L 2 出土遺物実測図 (S=1/3、52 : S=1/2)

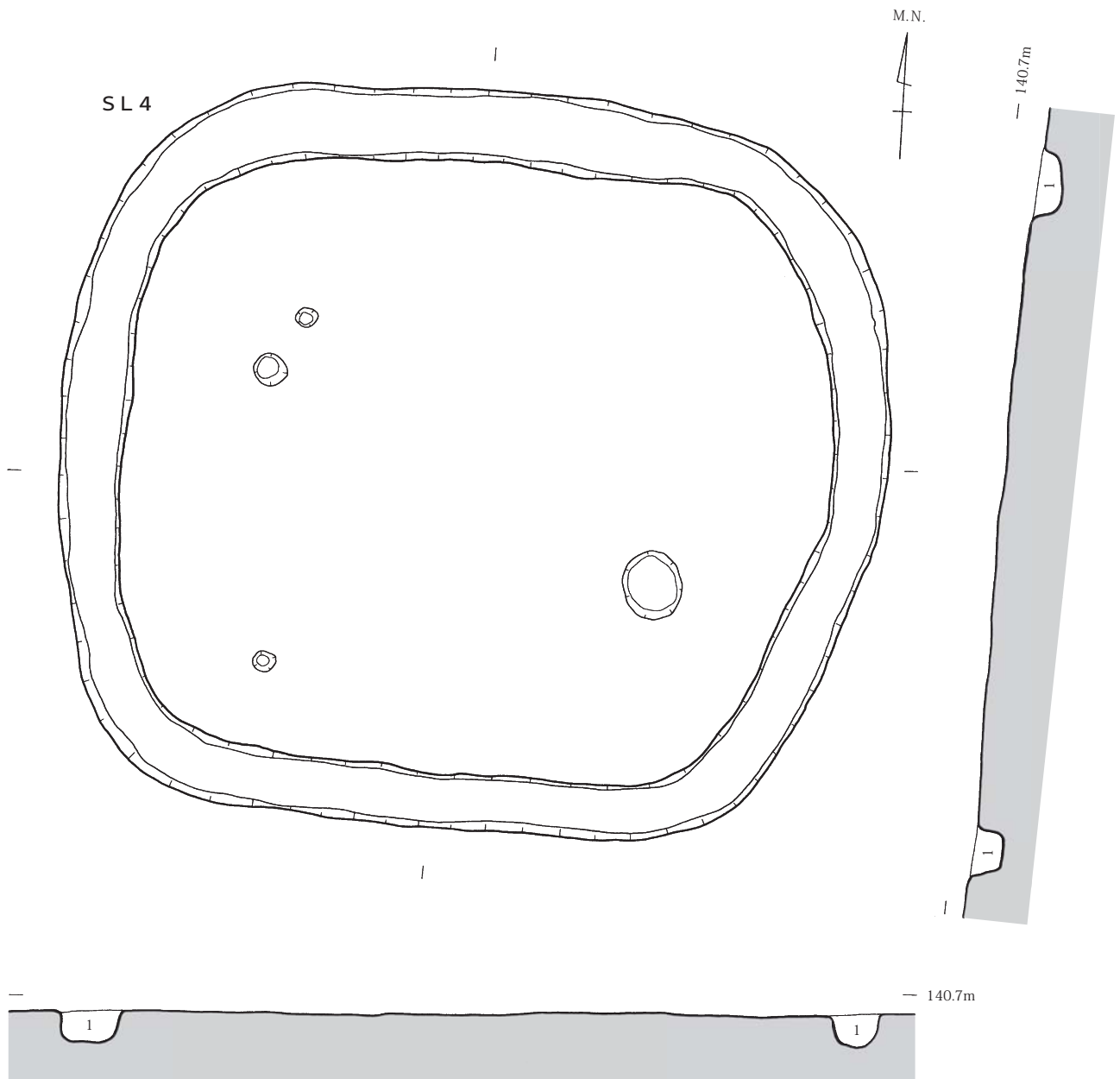


第23図 D地点 S L 3 実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

3号周溝状遺構 (S L 3、第 23 図)

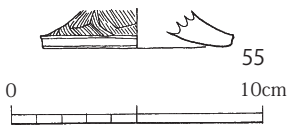
S L 3 は、調査区北側 E - 31・F - 31 グリッドに位置する。北西約 14.5 m 先には S L 1、南西約 10.1 m 先には S L 2 が認められる。

遺構の北側は攪乱のため削平され、東側は調査区外へと延びる。全貌は明確でないが、遺存部より平面プランは、円形もしくは楕円形プランを呈するものと考えられる。周溝は幅約 0.60 m、検出面から底面までの深さは約 0.15 m を測り、断面形は台形状を呈する。埋土は御池軽石粒を少量含む黒褐色土である。遺

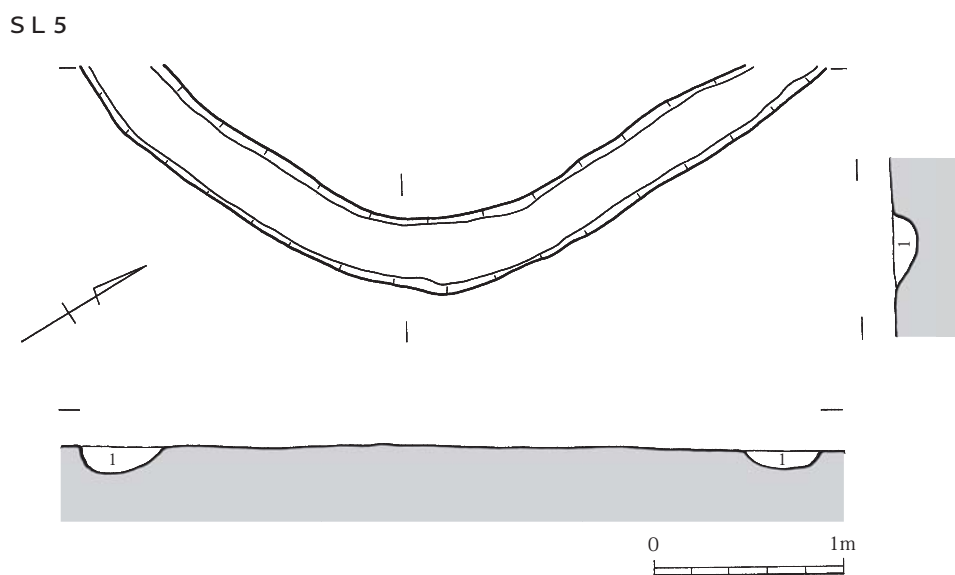


1 : 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 5mm 程度) を少量含む。

0 1m



第24図 D地点 SL 4実測図 (S=1/50) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



1 : 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまりあり。粘性あり。御池軽石粒 (φ 2mm ~ 5mm 程度) を少量含む。

第25図 D地点 SL 5実測図 (S=1/40)

物は小片が床面近くから若干浮いた状態で数点出土した。

出土遺物は第 23 図に示している。53 は口縁部が外反し、貼付突帯を持つ甕で二分状口縁様に成形している。外面は横方向のナデ調整、内面はナデ調整を施し、内外面とも指頭痕が見られる。54 は口縁部が大きく開くと思われる直口縁の壺である。内外面とも横方向のナデを施している。

4号周溝状遺構 (SL 4、第 24 図)

SL 4 は、調査区中央やや西側 H-28・H-29 グリッドに位置し、自然流路に隣接する。平面プランは長軸方向で約 6.35 m、短軸方向で約 5.60 m の隅丸方形プランを呈する。周溝は幅約 0.55 m、検出面から底面までの深さは約 0.20 m ~ 0.25 m を測り、断面形は台形状もしくは U 字状を呈する。周溝に囲まれた範囲に柱穴を 4 基検出したが、遺構外にも柱穴が認められることから、遺構に伴うかどうかは不明である。

埋土は御池軽石粒を少量含む黒褐色土である。周溝底面および底面近くの埋土を分別したところ、炭化物を得ることができたが種子等は確認されていない。遺物は床面近くから小片が、若干浮いた状態で数点出土した。

出土遺物は第 24 図に示している。55 は平底の鉢である。外面はハケ目調整を施し、内面は横方向のナデ調整を施している。

5号周溝状遺構 (SL 5、第 25 図)

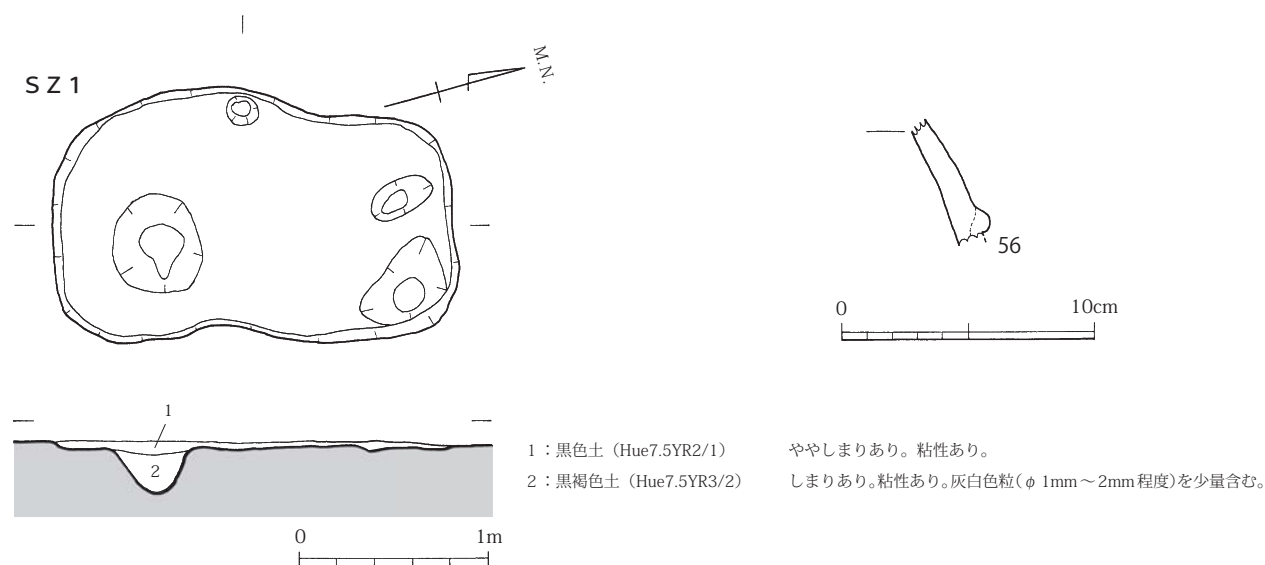
SL 5 は、調査区西側 F-27 グリッドに位置し、東に約 5.7 m 先には SA 3 が認められる。西側部分は調査区外に延びるため、全貌は明確でないが、遺存部より平面プランは、隅丸方形もしくは楕円形プランを呈すると思われる。

周溝は幅約 0.40 m、検出面から底面までの深さは約 0.15 m を測り、断面形は U 字状を呈する。埋土は御池軽石粒を少量含む黒褐色土である。周溝内からは遺物の出土は認められなかった。

(5) 不明遺構 (S Z 1、第 26 図)

S Z 1 は、調査区中央南側 I 29 グリッドに位置する。平面プランは、隅丸長方形プランをし、長軸方向で約 2.10 m、短軸方向で約 1.25 m を測り、検出面から底面までの深さは約 0.05 m ～ 0.30 m を測り、底面は全体的に凹凸が見られる。底面に 4 基のピットを確認した。その中で南側にあるピットは最大であり、直径約 0.50 m の円形を呈し、弥生土器の小片が床面近くか若干浮いた状態で数点出土した。埋土は灰白色粒を少量含む黒褐色土である。用途については不明である。遺構内から弥生土器の小片が数点出土していることや不明遺構の周辺で確認された竪穴住居跡や周溝状遺構・土坑の埋土と似ているため、弥生時代の遺構に帰属すると思われる。

出土遺物は第 26 図に示している。56 は貼付突帯を持つ壺の胴部上部である。内外面ともナデを施し、外面は黒変している。



第26図 D地点 SZ 1 実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

(6) 包含層出土の弥生土器 (第 27 図～第 30 図)

包含層では、5層から6層(一部4層でも出土)にかけて弥生時代後期の甕・壺・鉢、や磨石・石庖丁などが出土している。ここでは器種別に、さらに分類を加えていきたい。

甕 (第 27 図～第 29 図 57～80)

甕については多数出土したため、部位や形態・文様によって9類に分類した。

I類 (第 27 図 57・58)

口縁部が極端に短く直行し、その直下に刻目貼付突帯をもつもの。

57・58 は口縁部直下および下位に 2 条の刻目貼付突帯を持つ。外面は横方向のナデ、内面はナデを施している。

II類 (第 27 図 59・60)

断面台形の厚い突帯をつけ、逆「L」字状口縁をなすもの。

59は口縁部下位に貼付突帯を持つ。風化気味であるが、外面は横方向のナデが施されている。60は口唇部が凹線状にくぼむ。外面が横方向のナデを施している。内面はナデを施し、口縁部の一部に3条以上単位の沈線が認められる。

Ⅲ類（第27図 61・62）

断面台形の厚い突帯を有するが、Ⅱ類よりも緩く逆「L」字状口縁をなすもの。

61は口縁部下位に3条の貼付突帯を持ち、口唇部は凹線状にくぼむ。内面に斜め方向のハケ目が施されている。62は残存部位が少なく貼付突帯の有無が判断できないものである。口唇部は凹線状にくぼむ。また、内外面とも横方向のナデを施している。

Ⅳ類（第28図 63・64）

口縁部の断面が鋤先状となり、緩く「く」の字状に外反するもの。

63は口縁部下位に2条の貼付突帯を持ち、口唇部は凹線状にくぼむ。外面にススが付着し、内面は指頭痕が見られる。64は残存部位が少なく貼付突帯の有無が判断できないものである。口唇部は凹線状にくぼむ。また、内外面とも横方向のナデを施している。

Ⅴ類（第28図 65）

立ち気味の口縁部となり、口辺部付近で急に外反するもの。

65は口縁部下位に3条の貼付突帯を持ち、内外面とも風化気味である。

Ⅵ類（第28図 66～70）

口縁部が「く」の字状に外反するものを一括した。

66・67は口縁部下位に貼付突帯を持つ。66は口唇部が凹線状にくぼむ。内外面とも横方向のナデを施している。67は口唇部が丸く仕上げている。内外面とも指頭痕が見られる。68は口縁部下位に刻目貼付突帯を持ち、内外面とも横方向のナデを施している。69は内外面とも横方向のナデを施している。70は口縁部が折れて直下の刻目貼付突帯が残ったものと推定してⅥ類に含めた。布目圧痕のある刻目貼付突帯を持つ。外面は縦方向のハケ目後、横方向のナデを施し、全体的にススが付着している。内面は横方向のナデを施している。

Ⅶ類（第28図 71～74）

「く」の字状に曲線的に外反するもので、直下に貼付突帯をもたないもの。

71は内外面とも斜め方向のハケ目が施され、指頭痕も見られる。底部外面は指押さえおよび粘土の寄りが見られる。72は内外面とも斜め方向のハケ目が施されている。73は内外面とも斜め方向のナデを施し、ススが付着している。74は口唇部が凹線状にくぼみ、外面は横方向のナデまたは工具による斜め方向のナデ、内面はナデを施している。

Ⅷ類（第28図 75）

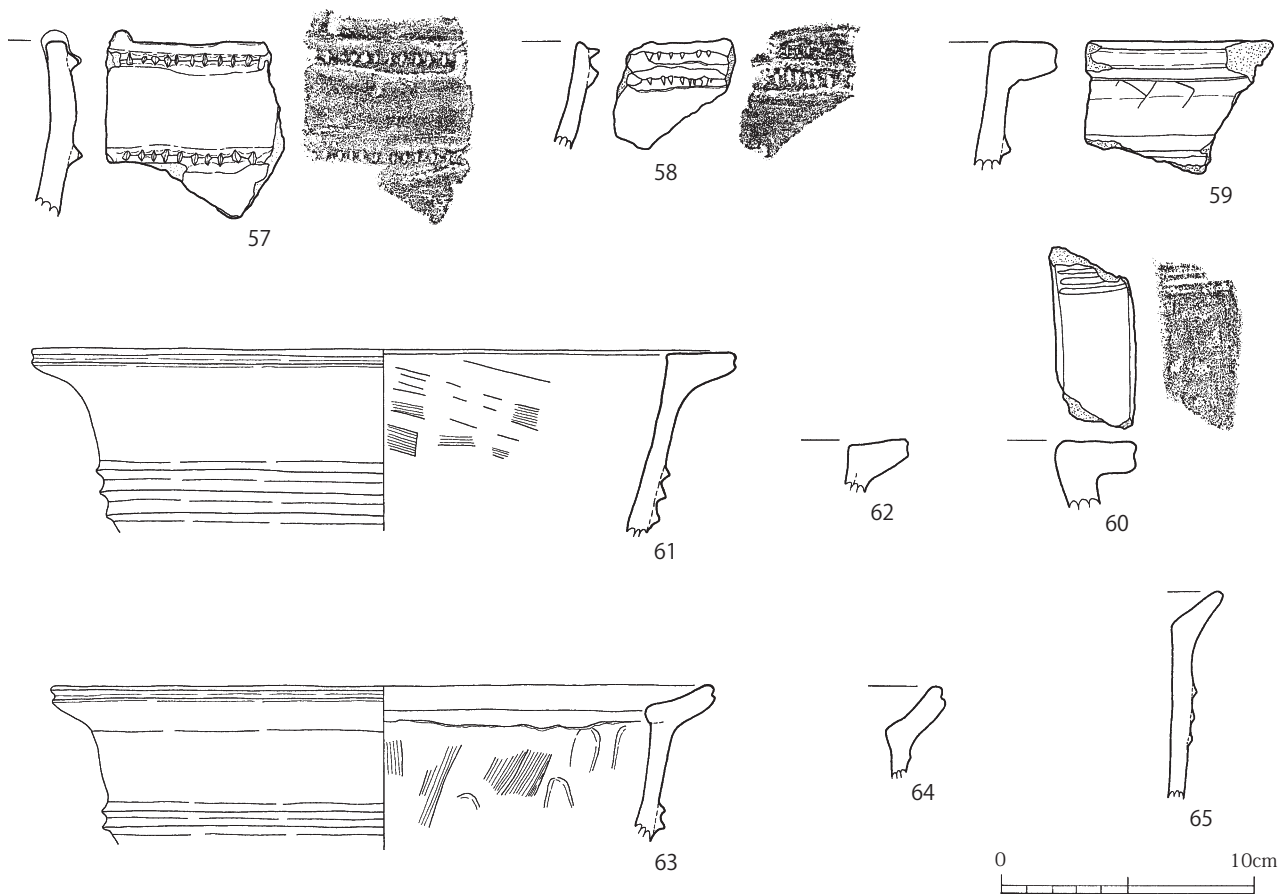
直口縁に近い形状で、外反が緩いもの。

75は外面が不定向のハケ目を施し、部分的にススが付着している。内面は工具による不定向のナデを施し、指頭痕も見られる。

Ⅸ類（第28図～第29図 76～86）

底部を一括した。

76～79はすべて平底を呈するもので、80だけ脚台状の上げ底を呈するものである。76・77は裾部の

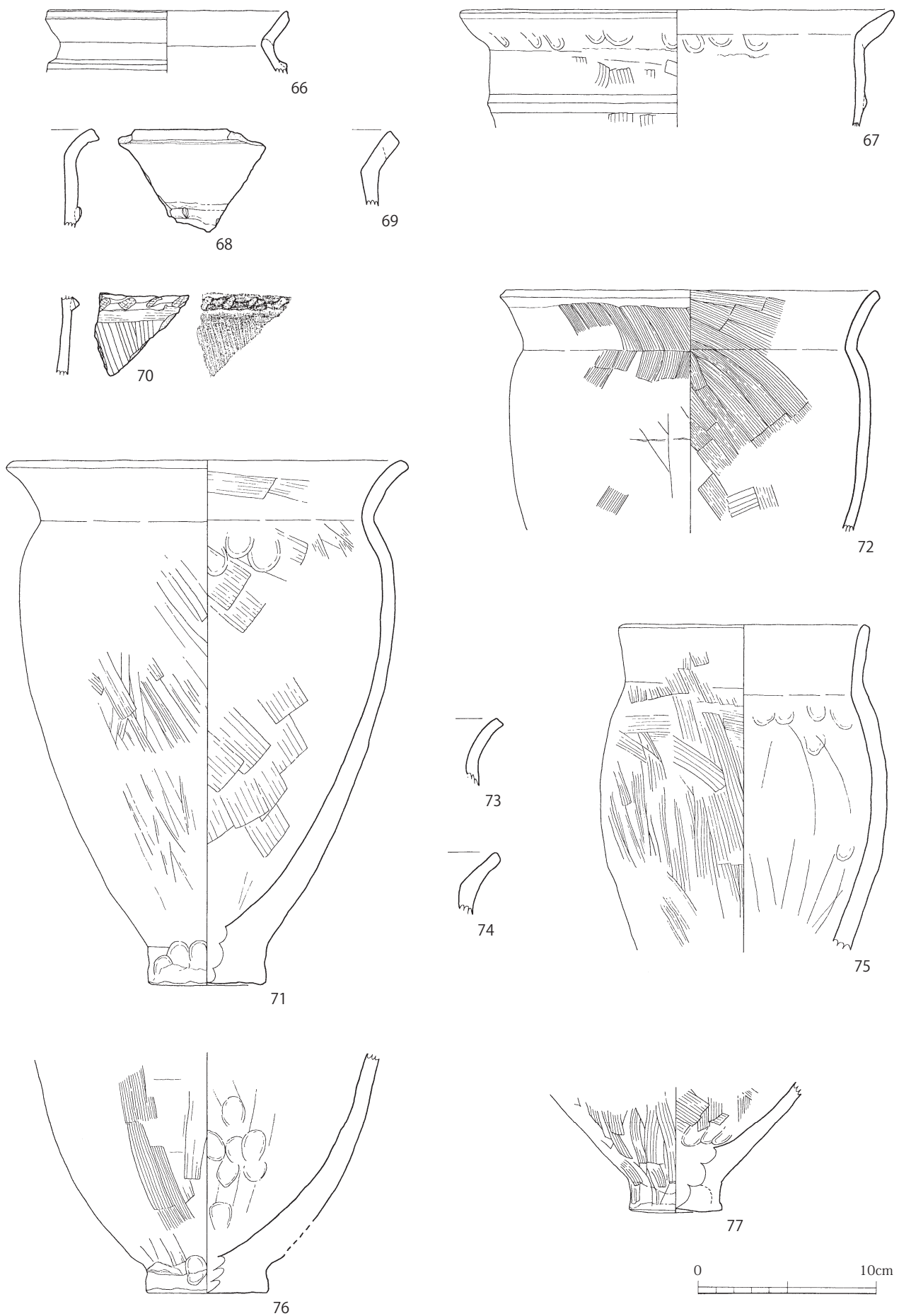


第27図 D地点 弥生土器実測図1 (S=1/3)

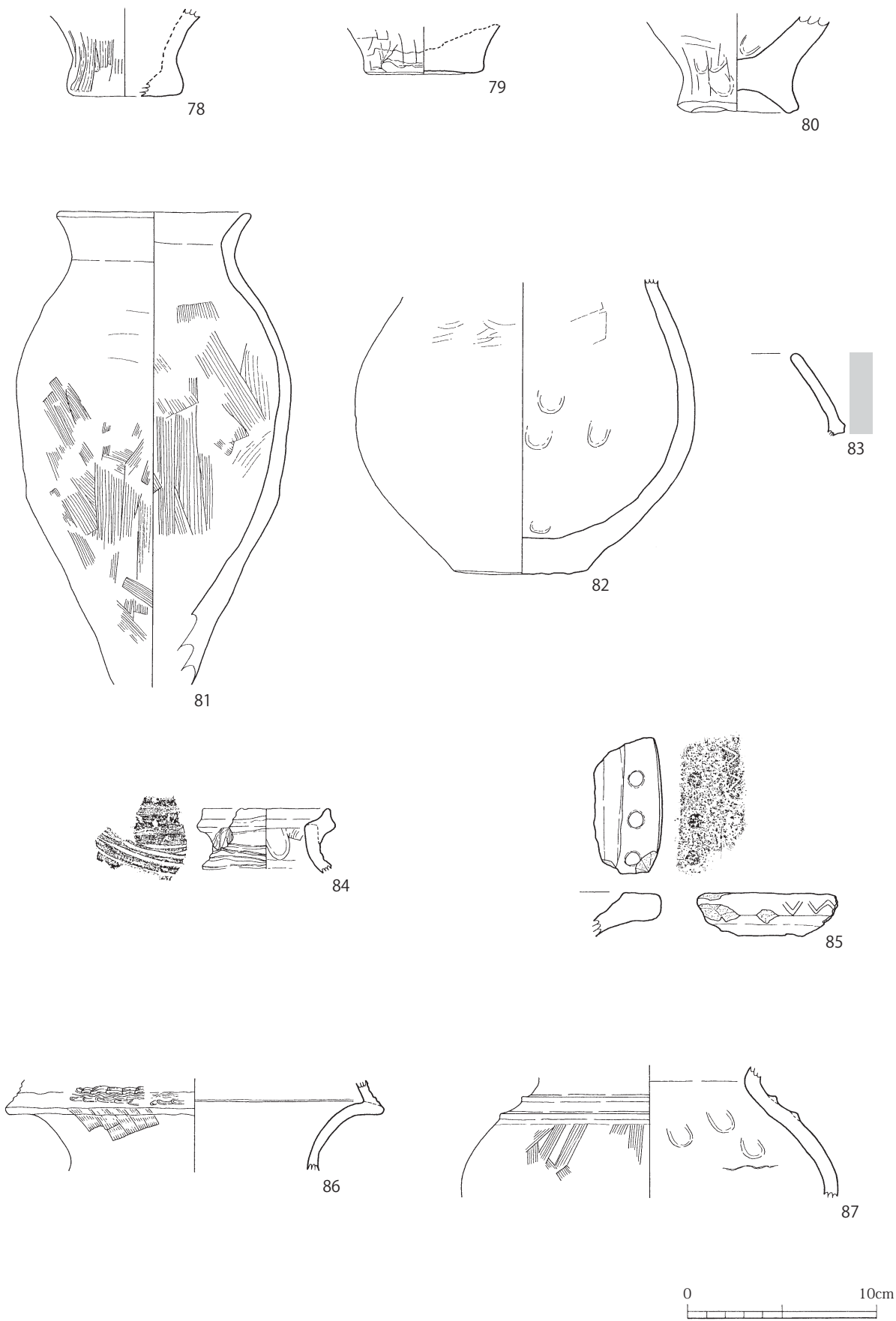
くびれが著しく、胴部に向かって大きく開き気味に延びる器形と思われる。78～80は裾部に若干のくびれを持ち、胴部に向かって開き気味に延びる器形と思われる。76は外面に縦方向のハケ目及び削り状の粗いナデが施され、内外面とも指頭痕が見られる。77の外面は削り状の粗いナデで一部縦方向のハケ目を施している。内面は工具による斜め方向のナデを施し、指頭痕も見られる。84は外面を縦方向のハケ目が施されている。79は外面が削り状の粗いナデが施されている。80は外面を工具による縦方向のナデ、内面はナデを施し、内外面とも指頭痕が見られる。

壺 (第29図 81～87)

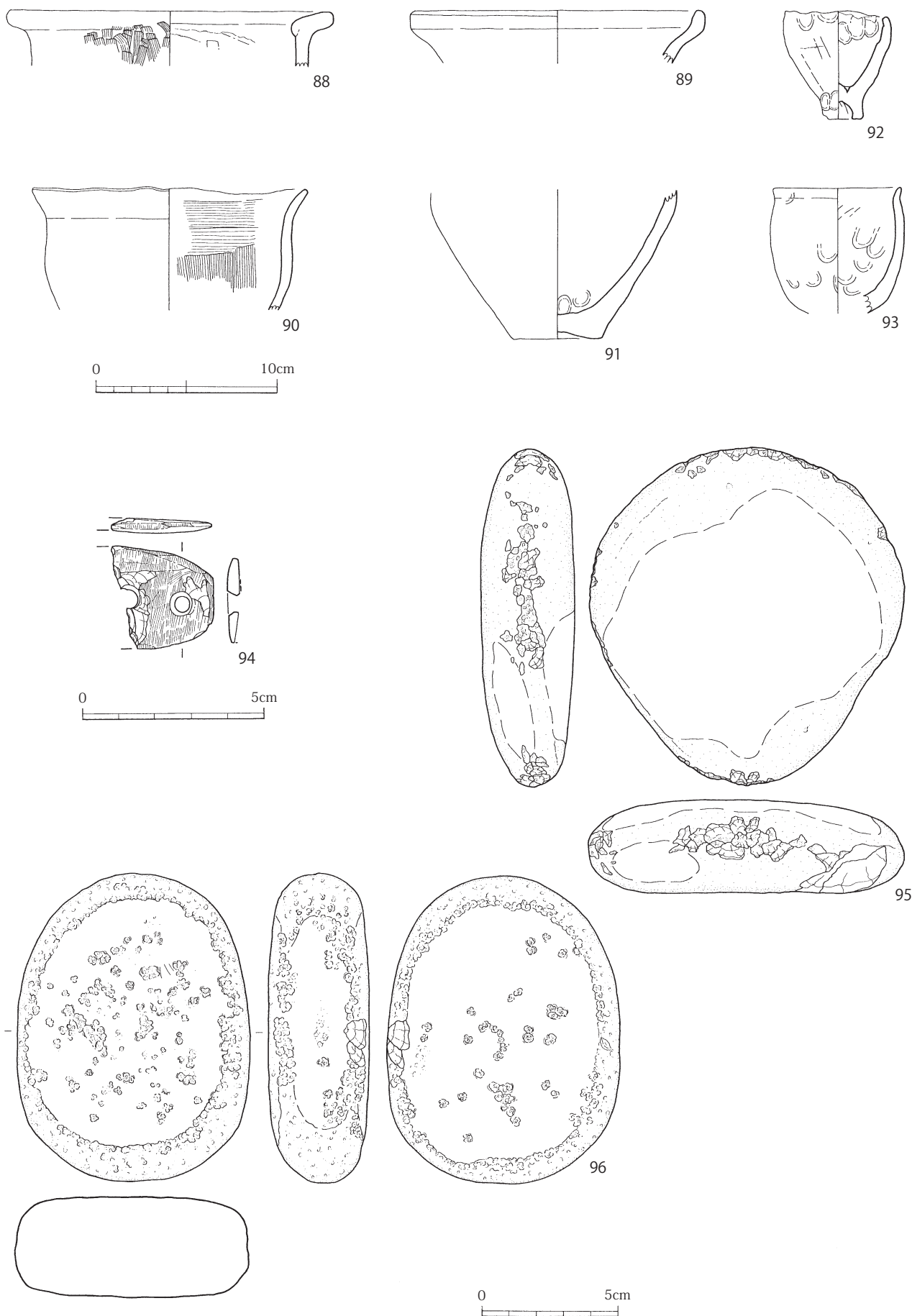
81は口縁部が短く、緩やかに外反する。胴部形態は、長形胴である。内外面とも縦・斜め方向のハケ目が施されている。82は胴部形態が偏球形胴で、胴部中央に最大径を持つ。底部は明瞭な稜をもち、平底を呈する。外面はナデを施し、全体的にススが付着し、内面は斜め方向の工具痕が施され指頭痕が見られる。83は顔料(ベンガラ)を塗布した袋状口縁壺である。胴部上部には貼付突帯を持つ。84は複合口縁を呈しており、頸部には数条の凹線文を巡らせている。内面は横・縦方向のナデであるが、口縁部付近は工具による横方向のナデである。85は口縁部が短く、強く屈曲し、口唇部に鋸歯状沈線と口縁上面に直径7mm程度の円形浮文を持つ。全体的に風化している。86は複合口縁を呈しており、口縁の内傾した拡張部に櫛描波状文が描かれている。頸部上部には斜め方向のハケ目が施されている。87は頸部下位から胴部上位にかけて2条の貼付突帯を持つ。外面は突帯の付近は横方向のナデ、胴部にはハケ目を施している。内面



第 28 图 D 地点 弥生土器实测图 2 (S=1/3)



第29图 D地点 弥生土器実測图3 (S=1/3)



第30図 D地点 弥生土器実測図4 (S=1/3) 及び石器実測図 (94 : S=1/2、95・96 : S=1/3)

は横方向のナデを施し、指頭痕も見られる。

鉢（第30図 88～91）

88は口縁部が短く、強く屈曲し、口唇部が丸く仕上げている。外面は横方向のナデ後、縦方向のハケ目を施し、部分的にススが付着している。内面はナデを施している。89は口縁部が僅かに内湾し、口唇部に丸みを持たせている。全体的に風化が著しいが、ナデが施されていると思われる。90は口縁部がやや開きながら伸び、口縁端部が外反する。内外面とも横方向のナデを施しているが、内面胴部は縦方向のナデを施している。91は平底を呈する鉢である。内外面とも風化が著しいが、ナデが施されている。外面にススが付着し、内面の底部は指頭痕が見られる。

ミニチュア土器（第30図 92・93）

92・93は手捏ねの甕形のミニチュア土器である。92はひとかたまりの粘土で製作しており、粗雑なため粘土の隙間が部分的に認められ、焼きのむらも見られる。内外面とも指頭痕で調整し、底部内面は工具によるナデが施されている。93は口縁部が短く、僅かに外反する。口唇部は先細りに調整してある。外面はナデを施し、部分的に指頭痕が見られ、黒変している。内面は工具による斜め方向のナデを施し、指頭痕も見られる。

（7）包含層出土の石器（第30図）

石庖丁（94）

94は第4層から出土したものである。途中で割れているため、原形はわからない。両面、側面、背部を丁寧に研磨している。利用石材は頁岩である。

磨石（95・96）

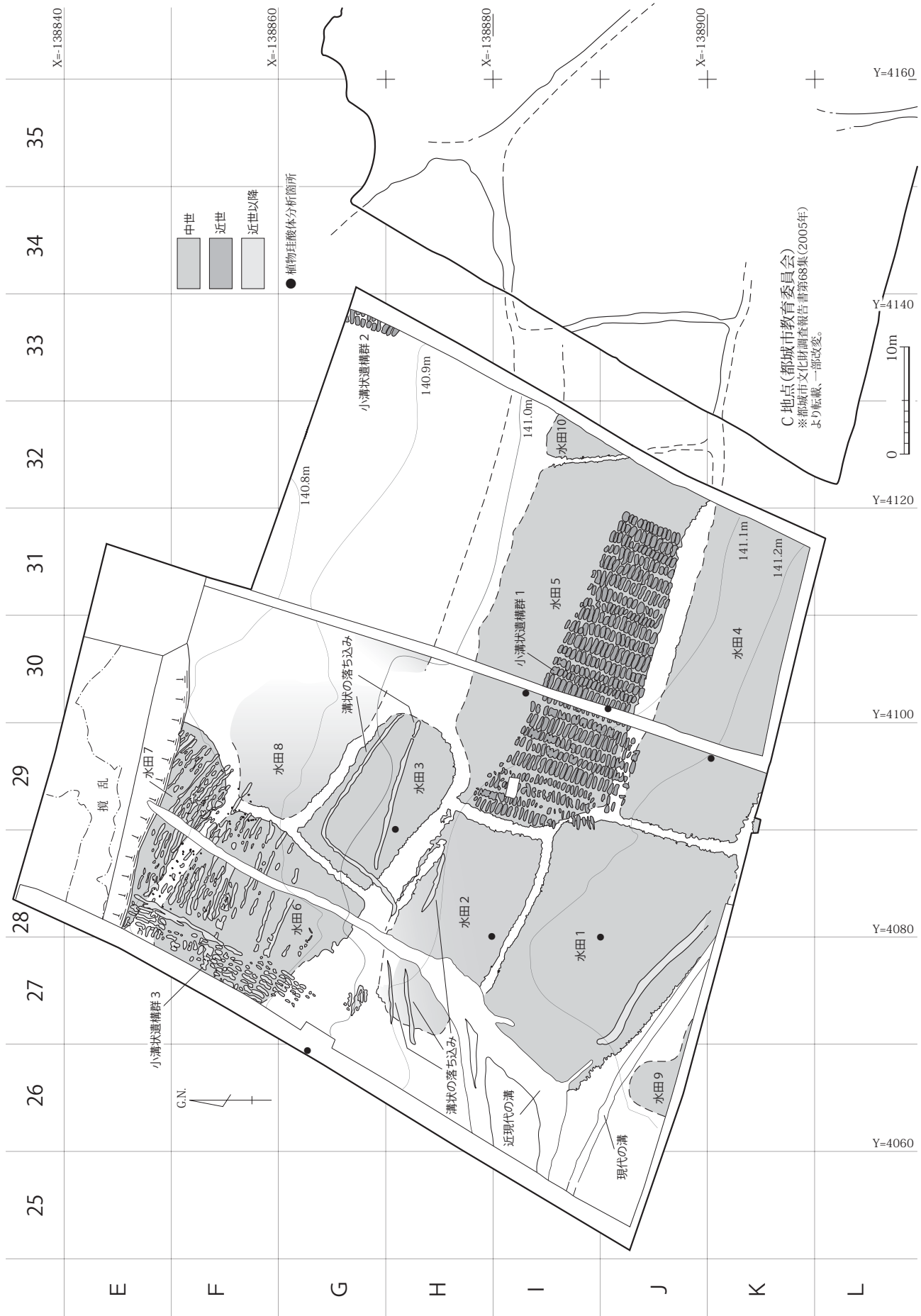
95は5層から出土したものである。平面形態は楕円形を呈し、断面形は扁平である。周縁に敲打痕が見られる。96は6層から出土したものである。平面形態は楕円形を呈し、断面形は扁平である。両面に敲打痕が見られ、片面の一部に擦痕が見られる。利用石材はどちらも砂岩である。

3. 中世以降の遺構と遺物

D地点では生産遺構として中世の水田跡や近世もしくは近世以降の小溝状遺構（畠）が確認されている。

（1）水田跡（第31図～第33図）

中世の水田跡は10区画確認されている。いずれの遺構も桜島文明軽石に覆われ、同軽石中には4層（黒褐色土）をブロック状に含む部分も認められている。桜島文明軽石は厚いところで約10cm堆積し、水田7や水田9、水田2・水田6の西側、水田8の東側、水田4・水田5の北側では削平のため5cm未満である。この軽石層の下位には円形の小ピットや方形もしくは半月形等を呈する凸凹痕が認められ、そのうち凸凹痕については桜島文明軽石降下後に水田を復旧した際（天地返し）に生じたものと考えられる。



C地点(都城市教育委員会)
 ※都城市文化財調査報告書第68集(2005年)
 より転載、一部改変。

第31図 D地点 中世～近世遺構分布図 (S=1/500)

水田跡の大半が、近世もしくは近世以降の小溝状遺構群、近現代の溝状遺構等に切られるものや調査区外に延びるものであり、区画全体を検出できたものは水田3のみある。また水田1や水田2、水田5、水田10については一部削平を受けたものや調査区東側に隣接するC地点（都城市教育委員会）で対応する区画が確認されていることからおよその規模が推定できる。当地点で確認された区画の多くが不整形な長方形もしくは台形状を呈し、水田3の約129㎡（約16.1m×約9m）の小規模なものから水田5の約506㎡（約35m×約16m）の大規模のものが認められる。

なお水田10は本地点ではコーナー部分のみの検出だが、C地点に対応する範囲が確認されており、おそらく約15m×約12mの不整形な長方形を呈するものと考えられ、面積は推定で約180㎡を測る。

また水田8については一部のみの検出で、北側および東側は削平や攪乱のため規模は不明である。ただし水田5の北側には畦畔（幅約3.9m）が東西方向に延び、C地点北西側で区画の一部が確認されていることから、水田8の範囲がそこまで広がる可能性が考えられる。

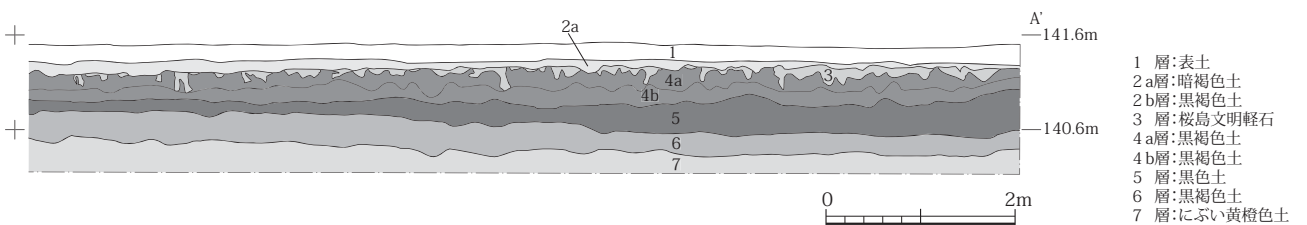
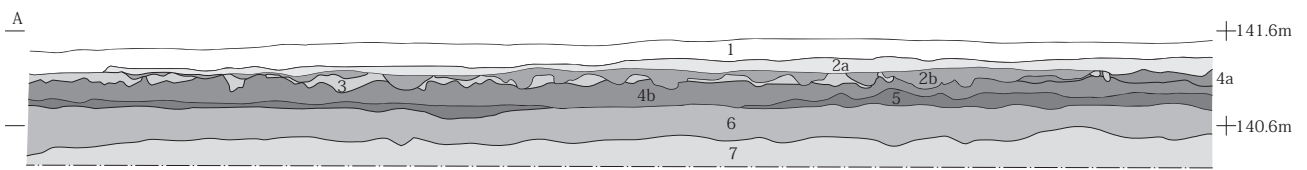
検出された畦畔は水田2と水田3、水田4と水田5、水田5の北側が幅約2mを超える大畦畔であるのに対し、その他では約0.8m～1.1mと幅が狭い。また水田1の北側や水田2の北側、水田3の南側では畦畔に沿って凸凹痕が深く入り込み、一部は溝状を呈している。他の部分の凸凹痕については部分的ながら直線、もしくは扇状に連続的に掘り込まれている。

なお、C地点では桜島文明軽石層下の水田跡の他に、IV層（D地点4層相当層）中でも水田跡2区画が検出されており、2時期が確認されている。D地点でも水田4・水田5下のIV層中からイネやオオムギ（水田5はオオムギのみ）といった炭化種子が出土していることから複数時期にわたり、水田が営まれていた他、畠としてもが利用していた可能性が考えられる。

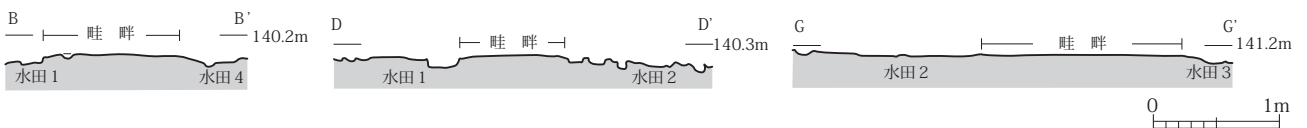
（2）小溝状遺構群（第31図～第33図）

小溝状遺構群は調査区中央～東側（小溝状遺構群1：H-29グリッドからJ-31グリッド）や北東部（小溝状遺構群2：G-33グリッドからH-33グリッド）、北西部（小溝状遺構群3：G-27グリッドからH-30グリッド）での3箇所を確認されている。そのうち小溝状遺構群1は約0.7～1.6m×約0.3～0.4m、深さ約0.1mの長楕円形プランの小溝状遺構が水田5の西側から南側に重なるように約30m×約11.6mの範囲で25列、約400基が確認されている。遺構の主軸はN-20.9°-Eで平行に掘り込まれており、規模も揃うことから南北列軸に沿って掘り込まれたものと考えられる。遺構間の南北距離は約0.06m～0.2mを測る。断面形はU字形を呈するが、凸凹が著しい部分も認められる。遺構内には桜島文明軽石を多量に含む黒褐色土（2b層）が混入する。2b層からは内野山窯の播鉢（122）等が出土していることから、近世の所産と考えられる。また小溝状遺構群2でも同様の形態及び埋土を有することから同時代のものと考えられる。復旧的な耕作痕とは考えられず、どちらかと言えば天地反し的なものであろうか。

また小溝状遺構群3は南北約23m、東西17.6mの範囲で確認されている。遺構は深さが10cm未満のものが多く、残りが良いもので長さ約9m、幅約0.6mを測る。遺構主軸は西側でN-28.6°-Eと東側ではS-49.2°～66°-Eとが認められ、断面はU字形を呈する。その形状から栽培に伴う畝間的なものと考えられる。遺構群は近現代の溝状遺構に切られていることや、埋土に2a層に起因する暗褐色土が入り込むことから、小溝状遺構群1・2よりは新しく、近世以降の所産と考えられる。



- 1 層:表土
- 2a層:暗褐色土
- 2b層:黒褐色土
- 3 層:桜島文明軽石
- 4a層:黒褐色土
- 4b層:黒褐色土
- 5 層:黒色土
- 6 層:黒褐色土
- 7 層:にぶい黄橙色土



第32図 D地点 水田跡実測図1 (S=1/400、S=1/80、S=1/60)



第33図 D地点 水田跡実測図 2 (S=1/60)

(3) 包含層の遺物

中世の遺物は4層を中心に出土しており、土師器の坏や皿、青磁、白磁、陶器、滑石製品等が出土している。

土師器 (97～106)

97～99は体部が外方に向かい、直線的に開く器形を有すると思われる坏の底部である。97・98は外面がナデ、内面は回転ナデである。底部がヘラ切り底であり、切り離しの後にその痕跡をナデ消したものである。99は内外面とも回転ナデで、底部は糸切り底である。

100～106は体部が内湾気味である皿である。100～102は内外面とも回転ナデであり、底部がすべて糸切り底である。100の内面は油痕のようなシミが見られる。燈明皿の可能性も考えられる。103・104は内外面ともナデ調整である。底部はヘラ切り底であり、切り離しの後にその痕跡をナデ消したものである。104は底部に工具による圧痕も見られる。105・106は内外面とも回転ナデであるが、底部は風化が著しく、切り離しの手法は不明である。

青磁 (107～109)

107～109は青磁である。そのうち107・108は碗、109は皿である。107は片切彫の鎬蓮弁文を有する。森田分類のB類に相当し、13世紀後半～14世紀前半の所産である。また108は緑灰色の釉を施し、口縁部が外反する。森田分類のD類に相当し、14世紀後半～15世紀前半の所産である。

109は輪花皿である。内面にはヘラ描きによる文様が認められる。また内外面とも貫入が見られる。

白磁 (110～112)

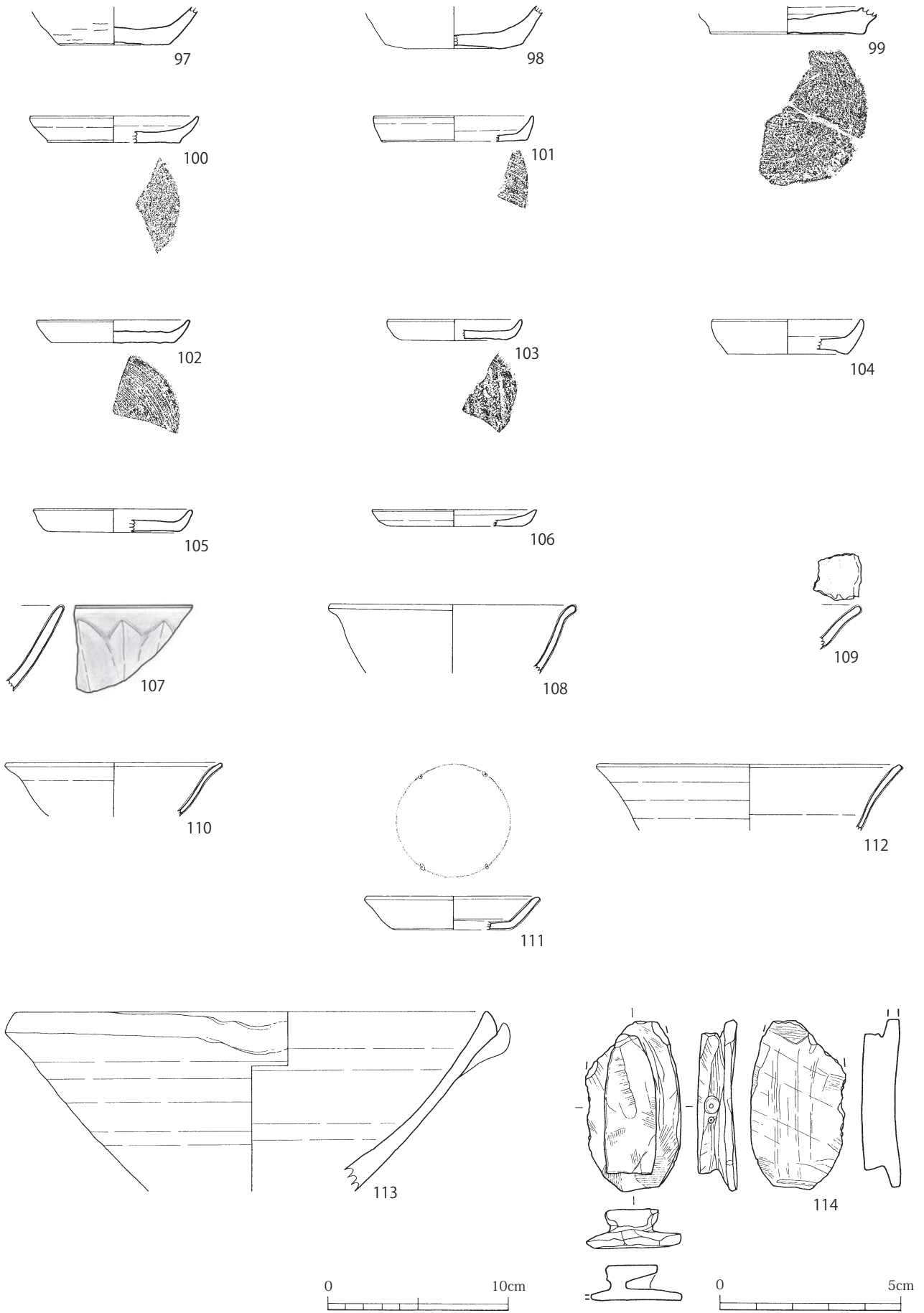
110～112は白磁で、灰白色の釉を施し、口縁端部はいずれも口禿げを呈している。110・112は碗、111は皿である。110・112とも口縁部が僅かに外反する。111は体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち上がり、見込みにハリ支え跡が認められる。大宰府分類のIX類に相当し、13世紀中頃～14世紀初頭の所産である。

陶器 (113)

113は東播系の捏鉢である。口縁部が三角形に肥厚し、自然釉がかかる。外面は横方向のナデ、内面はナデを施している。12世紀後半の所産である。

滑石製品 (114)

滑石製品は1点のみの出土である。114は石鍋の穴を補修するために使用されたと思われる。側面には未貫通の穿孔が認められる。



第34图 D地点 中世遺物実測図 (S=1/3、114 : S=2/3)

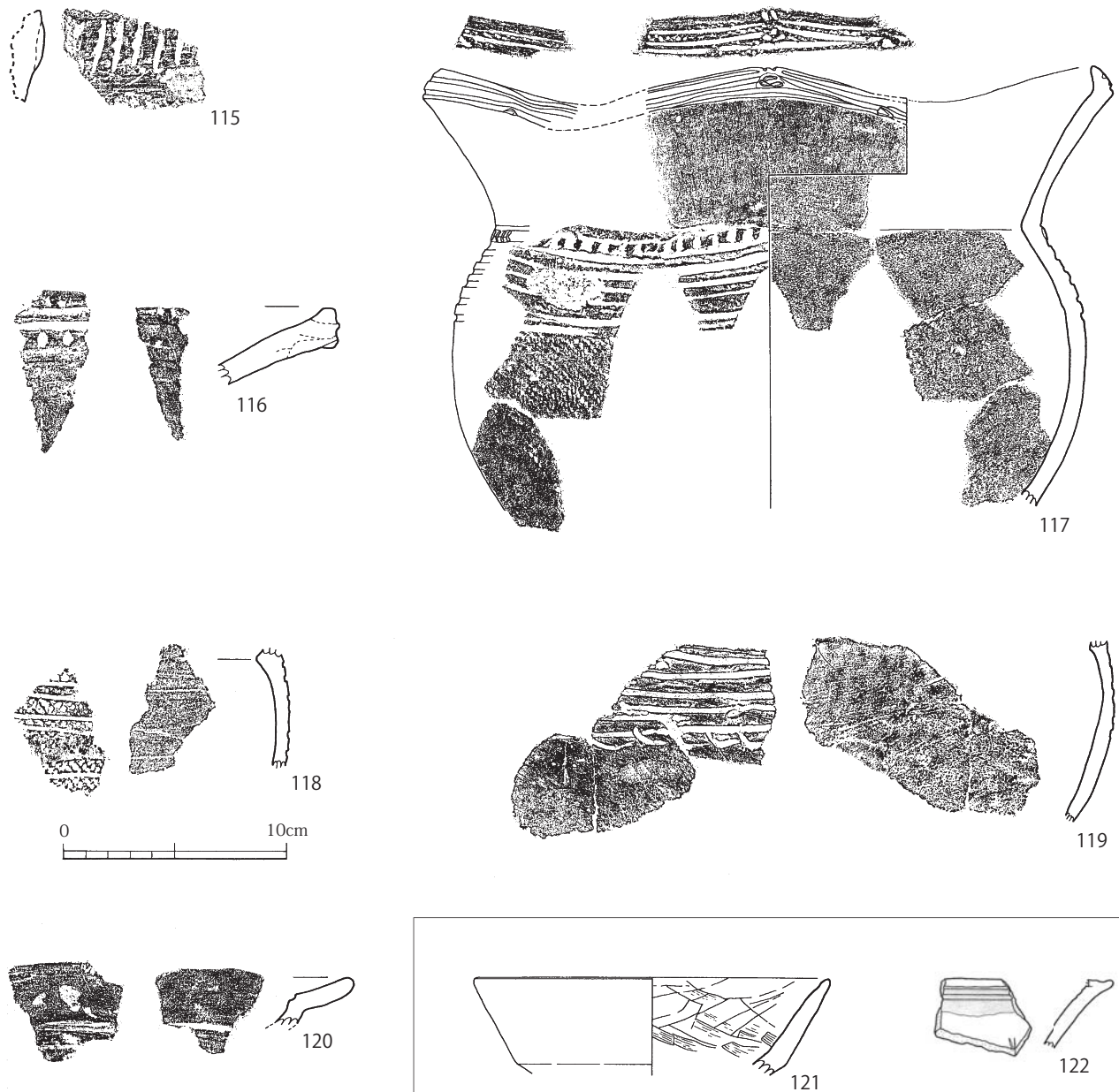
4. その他の時期の遺物

D地点では、少数ながら縄文時代後期および古墳時代、近世の遺物が出土している。ここでは時代別に簡単に説明していきたい。なお、個々の詳細については、後出の観察表（p 48～p 51）に記しているため、参照していただきたい。

(1) 縄文土器（第35図 115～117）

縄文土器は後期～晩期の土器群が確認されている。

115は深鉢の口縁部付近と考えられる。口縁部はやや肥厚し、斜め方向に沈線文が連続的に巡る。116は台付皿型土器である。口縁部には2条の沈線を施し、口縁部下端には連続刺突が施されている。内面は工具によるナデが認められる。117・118は、磨消縄文土器である。口縁部が逆「く」の字状に屈折した後、頸部で屈曲し、球状に膨らむ胴部へと至る器形を呈する。また口縁部は波状口縁を有し、波頂部に押圧刻みを施されている。文様は口縁部及び頸部から胴部上半にかけては沈線文を巡らし、沈線文間には連



第35図 D地点 縄文土器及び土師器・陶器実測図 (S=1/3)

続刺突文や縄文が認められる。また縄文は沈線下から胴部中程にかけても施されている。これらの特徴から西平式土器に相当する。119は胴部で外面にミガキを施し、沈線文が見られる。内面はナデを施している。117・118と同様の器形を呈することから、同型式の可能性が考えられる。120は晩期前半の土器の口縁部である。口縁部内面には沈線文が巡らされている。内外面ともナデを施している。

(2) 土師器 (第35図 121)

121は高坏の坏部で「く」の字状に屈曲し、斜め外方に開く。外面はナデを施し、内面は斜め方向のハケ目・工具による斜め方向のナデが施されている。部分的に黒変している。

(3) 陶器 (第35図 122)

122は内野山窯系(肥前焼)の擂鉢である。口縁端部が内側に突出している。内外面とも口縁部上部に鉄釉が施されている。内面には一部擂目が認められる。

遺物番号	種別	器種部位	地点層位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕口縁部	D地点SA1				ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	黒褐色	1mm以下のにぶい灰褐色・白色・透明光沢粒	
2	弥生土器	甕口縁部	D地点SA1				ナデ	ミガキ	良好	灰褐色	黒褐色	1mm以下のにぶい灰褐色・白色粒	
3	弥生土器	甕口縁部	D地点SA1				貼付突帯 横方向のナデ	横方向のナデ	良好	橙色	にぶい黄褐色	1mm以下のにぶい灰褐色・白色・透明光沢粒	
6	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点SA2	25.3	6.45	29.1	ナデ 縦方向のハケ目 貼付突帯	横方向のナデ ナデ	良好	浅黄褐色	にぶい黄褐色	微細～3mm以下の赤褐色・茶色粒	スス付着 炭化物付着
7	弥生土器	甕口縁部～胴部	D地点SA3	推定33.1			横方向のナデ、縦方向のハケ目、斜め・縦方向のハケ目・ナデ、貼付突帯、指頭痕	工具による横方向のナデ 横方向のナデ 斜め方向のハケ目	良好	にぶい黄褐色 黒褐色	灰黄褐色	微細な透明光沢粒 2mm以下の黒色・黒色光沢粒 3mm以下の茶褐色・白色粒	8と同一個体 スス付着 黒変
8	弥生土器	甕底部	D地点SA3		6.95		ナデ 縦方向のハケ目 横方向のナデ	ナデ 斜め・縦方向のハケ目	良好	にぶい黄褐色 黒褐色	灰黄褐色	微細な透明光沢粒 2mm以下の黒色・黒色光沢粒 3mm以下の茶褐色・白色粒	7と同一個体
9	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点SA3	22.75	5.4	26.5	横方向のナデ縦・斜め方向のハケ目縦方向のハケ目貼付突帯指頭痕	横方向のナデ 横・斜め方向のハケ目 斜め方向のハケ目	良好	にぶい赤褐色 褐褐色	にぶい褐色	2mm以下の黒色・白色・柱状黒色光沢粒 3mm以下の赤褐色粒	スス付着 一部黒斑
10	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点SA3	推定28.9	推定7.2	推定31.0	横方向のナデ 縦・斜め方向のハケ目 貼付突帯	ナデ 横・斜め方向のハケ目	良好	にぶい黄褐色 黒褐色	にぶい黄褐色 黒褐色	1mm以下のにぶい褐色・黒褐色粒 3mm以下のにぶい黄褐色粒 5mm以下の明赤褐色粒	
11	弥生土器	甕口縁部～底部付近	D地点SA3	25.6			横方向のナデ 斜め方向のハケ目 貼付突帯	ナデ	良好	黄褐色	黄褐色 褐色	3mm以下の灰色・赤褐色・茶色・乳白色・半透明粒 4mm次の灰色・赤褐色粒 5mm次の灰色粒	スス付着 風化気味
12	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3				ナデ、横ナデ 刻目貼付突帯 指頭痕	ナデ 工具痕	良好	にぶい黄褐色	黄灰色	2mm以下の乳白色・褐色粒、半透明粒、黒色光沢粒	
13	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点SA3	推定24.4	推定6.6	推定32.0	横方向のナデ ナデ 斜め方向のハケ目	ナデ 斜め方向のハケ目	良好	明褐色	浅黄褐色	2mm以下のにぶい褐色・黒褐色粒 3mm以下の赤褐色・黄褐色粒 5mm以下の褐色粒	黒変
14	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点SA3	推定21.7	推定6.9	推定23.1	工具による横方向のナデ 斜め方向のハケ目 ナデ、指頭痕	工具による横方向のナデ 斜め方向のハケ目 ナデ、指頭痕	良好	にぶい褐色黒褐色	にぶい黄褐色 灰黄褐色	2mm以下の灰色・赤褐色・黒色光沢・透明粒	スス付着 黒変
15	弥生土器	甕口縁部～胴部	D地点SA3	23.3			横方向のナデ 多数の工具痕	横・斜め方向のハケ目 斜め方向のハケ目	良好	褐色	黄褐色	3mm以下の灰色・半透明・黒色光沢粒 4mm以下の茶褐色・赤褐色粒	風化気味 黒変
16	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3	推定20.2			ナデ横方向のナデ 斜め方向のナデ	ナデ 工具による斜め方向のナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の茶褐色・黒色粒・白色光沢粒	
17	弥生土器	小型甕口縁部～頸部	D地点SA3	推定19.0			横方向のナデ 縦・斜め方向のハケ目 指頭痕	横方向のナデ 縦・斜め方向のナデ 指頭痕	良好	灰黄褐色	黒褐色	微細な透明光沢粒 1mm以下の白色・黒色光沢粒 2mm以下の灰色粒	スス付着
18	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3				横方向のナデ、ナデ 縦方向のハケ目 指頭痕	横方向のナデ ナデ	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	微細な透明光沢粒 1mm以下の白色 1.5mm以下の黒褐色粒	
19	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3				横方向のナデ ナデ	横方向のナデ 斜め方向のハケ目・工具痕	良好	褐色	褐色	2mm以下の茶褐色・灰色・半透明・黒色光沢粒	
20	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3	推定13.7			横方向のナデ	縦・斜め方向のハケ目 縦方向の工具痕	良好	明褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色・灰色・半透明粒 3mm以下の黒褐色・褐色粒	黒斑
21	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3	推定13.4			横方向のナデ 指頭痕 突帯	ナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色 浅黄褐色	にぶい褐色 浅黄褐色	2mm以下の黒褐色・透明粒 3mm以下のにぶい赤褐色粒	
22	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点SA3	推定12.8			横方向のナデ 縦・斜め方向のハケ目	横方向のナデ	良好	にぶい橙	にぶい黄褐色 浅黄褐色	1.5mm以下の黒色・灰色・にぶい褐色粒、白色半透明粒	

第1表 D地点 土器観察表1

遺物番号	種別	器種部位	地点層位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
23	弥生土器	壺口縁部～胴部	D地点 S A 3	推定 16.2			口縁部に櫛描波状文横・斜め方向のナデ 不定方向の工具痕 指頭痕	斜め・横方向のナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2mm以下の透明光沢粒 3mm以下の黒色・灰白色粒 5mm以下の灰褐色・褐色・赤褐色	二重口縁部 風化気味 黒変
24	弥生土器	壺頸部	D地点 S A 3				ナデ 貼付突帯	ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の灰色・白色・黒色・透明粒	
25	弥生土器	高坏部	D地点 S A 3	推定 27.4			横方向のナデ 斜め方向のハケ目	ナデ	良好	明褐色	明赤褐色	2mm以下の透明光沢粒 3mm以下の黒褐色・にぶい黄褐色粒 5mm以下の褐灰色・褐色粒	風化気味
26	弥生土器	高坏部～脚部	D地点 S A 3	推定 21.9	11.55	18.9	横方向のナデ 工具による縦方向のナデ 工具による不定方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい褐色 浅黄褐色	褐色	2mm以下の黒色・灰白色・黒色光沢・半透明光沢粒 3mm以下の黒褐色・灰褐色・赤褐色粒	風化気味 黒変
27	弥生土器	壺頸部～底部	D地点 S A 3			8.15	横方向のナデ後、指ナデ 横方向のヘラミガキ 横・斜め方向のヘラミガキ 貼付突帯、指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 灰色	1mm以下の透明・半透明・黒色光沢粒 3mm以下の黒色・褐色・灰色粒	スス付着
29	弥生土器	甕胴部	D地点 S A 4				ナデ	ナデ 工具による斜め方向のナデ 横方向の指ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下のにぶい黄褐色粒 3mm以下の白色粒 4mm以下の灰色粒	
30	弥生土器	甕胴部	D地点 S A 5				工具による横方向のナデ 刻目突帯	横・斜め方向のハケ目	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白色・黒色・透明光沢粒 4mm以下の茶色粒	
31	弥生土器	壺口縁部～胴部	D地点 S A 5	推定 17.7			横方向のナデ 横・縦・斜め方向のナデ 指頭痕	横方向のナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の褐灰色・黒色・白色半透明・褐色光沢粒	
32	弥生土器	甕胴部	D地点 S A 5				縦・斜め方向の浅い沈線 横方向の6条の浅い沈線	横・斜め方向のハケ目	良好	灰褐色	にぶい黄褐色	微細な黒色光沢粒 1mm以下の茶色・黒色粒	
33	弥生土器	短頸壺口縁部	D地点 S A 5	推定 9.1			ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	褐色	褐色	2mm以下の赤褐色・黒褐色粒 3mm以下の褐色・白色半透明粒	風化気味
34	弥生土器	長頸壺口縁部～頸部	D地点 S A 5	推定 9.6			縦方向のミガキ	横方向のミガキ 縦方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色・白色・褐色・透明粒 3mm以下の赤褐色粒	風化気味
38	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点 S B 1	推定 24.5			横方向のナデ ナデ後、ハケ目 刻目貼付突帯、指頭痕	横方向の工具痕 一部ハケ目 斜め方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の褐色・褐灰色・灰白・黒褐色粒 2mm以下の赤褐色粒	中溝式土器 スス付着
39	弥生土器	甕口縁部～胴部	D地点 S L 1	推定 22.4			縦方向のハケ目 横方向のナデ	ナデ、横方向のナデ 斜め方向の工具痕 指頭痕	良好	にぶい黄褐色	褐色	3mm以下の灰白色・褐色・透明光沢粒 4mm以下の茶褐色・黒色光沢粒 5mm以下の灰色粒	風化気味
40	弥生土器	甕胴部～底部	D地点 S L 1		7.9		工具による横方向のナデ 工具による縦方向のナデ 横方向のナデ 指頭痕	工具による縦・斜め方向のナデ	良好	にぶい褐色 褐灰色	にぶい褐色 褐色	1mm以下の透明光沢粒 3mm以下の白色粒 4mm以下の灰褐色・黒色粒	黒変
41	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点 S L 1	推定 32.0	6.9	29.2	横方向のナデ 縦・横・斜め方向のハケ目 指頭痕	横方向のナデ 横・斜め方向のハケ目	良好	明赤褐色	黄褐色	1mm以下の黒褐色・褐灰色・黒色光沢粒 2mm以下の茶褐色・褐色粒 4mm以下の灰黄褐色粒	黒変 スス付着
42	弥生土器	甕口縁部～底部付近	D地点 S L 1	推定 32.0			横方向のナデ 横・斜め方向のハケ目	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	良好	明赤褐色	褐色	1mm以下の黒褐色・茶褐色・褐灰色・黒色光沢粒 3mm以下のにぶい黄褐色粒	黒変
43	弥生土器	壺口縁部～底部付近	D地点 S L 1	推定 15.5			横方向のナデ 縦・横方向のミガキ 縦方向のナデ 頸部に穿孔	横・斜め方向のナデ 横方向のミガキ 工具による縦・斜め方向のナデ、指頭痕	良好	にぶい褐色 にぶい褐色	褐色	4mm以下の乳白色・黒色・黒褐色粒 5mm以下の灰褐色粒	風化気味
44	弥生土器	高坏部	D地点 S L 1	推定 28.1			横・斜め方向のミガキ	横方向のナデ	良好	褐色	浅黄褐色	3mm以下の灰色・黒褐色・赤褐色・乳白色・半透明・黒色光沢粒	風化気味 黒変
45	弥生土器	鉢口縁部～底部付近	D地点 S L 1	推定 15.0			工具による縦・斜め方向のナデ	工具による縦・斜め方向のナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の白色透明光沢・黒色光沢粒 3mm以下の灰白色・赤褐色・褐色粒 5mm以下の黒色・黒褐色粒	穿孔あり 風化気味
46	弥生土器	甕口縁部	D地点 S L 2				横方向のナデ	横方向のナデ 指頭痕	良好	にぶい黄褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色・半透明・柱状黒色光沢粒 2mm大の灰色粒	
47	弥生土器	甕口縁部	D地点 S L 2				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細～1mm以下の褐色・浅黄色・黒色・半透明・黒色光沢粒	スス付着
48	弥生土器	甕口縁部	D地点 S L 2				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	明黄褐色	1mm以下の褐色・灰色・乳白色粒	
49	弥生土器	甕口縁部	D地点 S L 2				横方向のナデ	ナデ 横方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	褐色褐灰色	1mm以下の灰色・黒褐色・茶色・黒色光沢粒 3mm以下の褐灰色粒	
50	弥生土器	甕底部	D地点 S L 2		5.8		縦・横・斜め方向のハケ目 横方向のナデ	ナデ	良好	明赤褐色	黒褐色	1mm以下の灰白色粒 5mm大の暗赤褐色粒	
51	弥生土器	壺口縁部	D地点 S L 2				口唇部に凹線 横方向のナデ	横方向のナデ	良好	暗褐色	褐色	1mm以下の灰色粒 3mm以下の褐灰色・にぶい褐色粒	凹線土器
53	弥生土器	甕口縁部	D地点 S L 3	推定 32.0			横方向のナデ 指頭痕	横方向のナデ 指頭痕	良好	黒色 にぶい黄褐色	黒色	1mm以下の褐灰色・灰褐色・黒色光沢粒	
54	弥生土器	壺口縁部	D地点 S L 3				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の白色・茶色・黒褐色・黒色光沢粒 3mm以下のにぶい褐色粒	
55	弥生土器	鉢脚部	D地点 S L 4		7.6		斜め方向のハケ目	横方向のナデ	良好	褐色	褐色	1mm以下の灰白色・白色・金色光沢粒 4mm大の金色光沢粒	
56	弥生土器	甕胴部	D地点 S Z 1				ナデ 貼付突帯	ナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白色・透明光沢・黒色光沢粒 5mm以下の明褐色粒	風化気味
57	弥生土器	甕口縁部	D地点 5層				横方向のナデ 刻目貼付突帯 口唇部に貼付突帯	ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色光沢・透明・不透明光沢粒 2mm以下の灰白色・黄灰色・黒色粒	
58	弥生土器	甕口縁部	D地点 4層				横方向のナデ 刻目貼付突帯	ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の褐色粒	
59	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点 4層				横方向のナデ 工具による斜め方向のナデ 貼付突帯	ナデ	良好	灰黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の白色粒 3mm以下のにぶい褐色・金色光沢粒 5mm以下の白色半透明粒	
60	弥生土器	甕口縁部	D地点 4層				横方向のナデ 口唇部に沈線	ナデ	良好	にぶい褐色 灰黄色	にぶい褐色 灰黄褐色	2mm以下の白色・黒色粒 3mm以下の白色半透明粒、金色光沢粒	
61	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点 4層	推定 28.7			横方向のナデ 貼付突帯	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	良好	明褐色	明赤褐色	1mm以下の黄褐色・褐色・灰色・半透明粒 2mm以下の金色光沢粒	
62	弥生土器	甕口縁部	D地点 4層				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色	1mm以下の黒色光沢粒 1～2mm以下の灰白・黒褐・灰・赤褐色・金色光沢・不透明光沢粒	スス付着
63	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点 4層	推定 26.2			横方向のナデ 口唇部に沈線 貼付突帯	横方向のナデ 斜め方向のハケ目 指頭痕	良好	明褐色	褐色	1mm以下の黄褐色・褐色・柱状黒色光沢粒 2mm以下の金色光沢・半透明粒	スス付着
64	弥生土器	甕口縁部	D地点 4層				横方向のナデ ナデ 口唇部に沈線	ナデ 横方向のナデ	良好	にぶい赤褐色	暗赤褐色	1mm以下の白色・透明光沢粒 2mm以下の灰白色・黒褐色・灰色・赤褐色・金茶色光沢・不透明光沢粒	

第2表 D地点 土器観察表2

遺物番号	種別	器種部位	地点層位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
65	弥生土器	甕口縁部～胴部	D地点6層				ナデ貼付突帯	ナデ	良好	明褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の黒褐色粒 2mm以下の白色・灰色・柱状黒色光沢粒	風化気味
66	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点5層	推定13.5			横方向のナデ	横方向のナデ	良好	明褐色 明黄褐色	明黄褐色	1mm以下の褐灰色・透明光沢粒 2mm以下の灰黄褐色・褐色粒	
67	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点5層	推定23.9			横方向のナデ 工具による横方向のナデ 縦方向のハケ目 指頭痕、貼付突帯	横方向のナデ ナデ 指頭痕	良好	にぶい黄褐色 灰黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色粒 3mm以下の黒褐色・白色半透明粒 4mm以下のにぶい褐色粒	スス付着
68	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点5層				横方向のナデ 刻目貼付突帯	横方向のナデ	良好	黄褐色	灰黄色	1mm以下の茶褐色・黒色光沢粒 2mm以下の黄褐色粒	
69	弥生土器	甕口縁部	D地点5層				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	明赤褐色	淡赤褐色	1mm以下の白色・褐色・黒色・褐灰色・黒色光沢粒	
70	弥生土器	甕胴部	D地点5層				縦方向にハケ目後、横方向のナデ斜め方向のハケ目 刻目貼付突帯	横方向のナデ	良好	褐灰色	暗灰黄色	1mm以下の灰白色・黒色粒 3mm以下の半透明光沢粒	スス付着
71	弥生土器	甕口縁部～底部	D地点6層	推定21.2	推定6.6	29.4	斜め方向のナデ 指頭痕斜め方向のハケ目 縦・斜め方向の工具痕	横・斜め方向の工具痕 斜め方向のハケ目	良好	浅黄褐色	褐色	3mm以下の灰白色・灰白色・黒色光沢粒 4mm以下の黒褐色粒 6mm以下の灰褐色・赤褐色粒	風化気味 スス付着
72	弥生土器	甕口縁部～胴部	D地点4層	推定21.2			横方向のナデ 斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	良好	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色 暗褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の褐色粒 5mm以下の褐色・灰褐色・黒色光沢粒	
73	弥生土器	甕口縁部	D地点4層				横方向のナデ ナデ 斜め方向のナデ	横方向のナデ 斜め方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の灰白色粒 2mm以下の黒色光沢粒 3mm以下の褐灰色・不透明光沢粒 4mm以下の褐色粒	スス付着
74	弥生土器	甕口縁部	D地点4層				横方向のナデ	ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の白色・茶色・にぶい褐色・黒色光沢粒	風化気味
75	弥生土器	甕口縁部～底部付近	D地点6層	推定13.3			横方向のナデ 縦・横・斜め方向のハケ目	横方向のナデ 工具による縦・横・斜め方向のナデ指頭痕	良好	にぶい黄褐色 灰黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の透明光沢粒 4mm以下の褐色・赤褐色・白色粒 7mm以下の褐灰色粒	スス付着
76	弥生土器	甕胴部～底部	D地点6層	推定6.6			削り状の粗いナデ 縦方向のハケ目 指頭痕	工具によるナデ後、指押さえ	良好	黄褐色	褐色	1mm以下の白色・黒色光沢粒 3mm以下の褐色・灰色粒 5mm以下の灰褐色・黒褐色粒	
77	弥生土器	甕胴部～底部	D地点6層	推定5.2			工具によるケズリ仕上げ 風の粗いナデ 縦方向のハケ目	工具による斜め方向のハケ目 指頭痕	良好	にぶい褐色	灰黄褐色	2mm以下の灰白色・赤褐色粒 3mm以下の透明光沢粒 4mm以下の褐灰色・黒褐色粒	
78	弥生土器	甕底部	D地点5層	推定6.0			縦・斜め方向のハケ目 ナデ	風化が著しく調整不明	良好	暗灰黄色 黄灰色	黄灰色	2mm以下の白色・褐色粒 4mm以下の灰褐色粒	平底 風化気味
79	弥生土器	甕底部	D地点6層	推定6.0			ケズリ仕上げ 横方向のナデ	剥離のため、調整不明	良好	にぶい黄褐色		2mm以下の灰白色粒 3mm以下の透明光沢粒 5mm以下の黒色・灰褐色・黒褐色粒	
80	弥生土器	甕底部	D地点4層			6.4	工具による縦・斜め方向のナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	浅黄色	灰黄褐色	2mm以下の灰白色・透明光沢粒 5mm以下の茶褐色・赤褐色・黒色粒	上げ底
81	弥生土器	甕口縁部～底部付近	D地点5層	推定10.0			ナデ 横方向のハケ目・ナデ 縦・斜め方向のハケ目	ナデ 縦・斜め方向のハケ目	良好	褐色	黄褐色	2mm以下の褐色・灰色粒、半透明粒、黒色光沢粒	
82	弥生土器	甕頸部～底部	D地点5層		7.1		ナデ	横方向のナデ 斜め方向の工具痕 指頭痕	良好	にぶい黄色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色・褐色・灰白・灰褐色・透明光沢粒 6mm以下のにぶい褐色粒	平底 風化気味 スス付着
83	弥生土器	無頸甕口縁部～胴部	D地点4層				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2mm以下の灰白色粒	丹塗り
84	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点4層	推定6.7			ナデ 横方向のナデ 凹線文	横・縦方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒褐色・黒色光沢粒 3mm以下のにぶい赤褐色粒、透明光沢粒	
85	弥生土器	甕口縁部	D地点4層				ナデ 口唇部に山形刻目	ナデ 口唇部に丸い突起	良好	褐色	褐色	1mm以下の黒色・褐灰色・黒褐色・黒色光沢粒 2mm以下の灰褐色粒	風化気味
86	弥生土器	甕口縁部～頸部	D地点6層				口唇部に櫛目状の文様 斜め方向のハケ目 ナデ指頭痕	横方向のナデ	良好	明褐色	明黄褐色褐色	2mm以下の黒褐色・灰黄褐色・透明光沢粒	風化気味
87	弥生土器	甕頸部～胴部	D地点5層				横方向のナデ 縦・不定方向のハケ目 貼付突帯	横方向のナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	微細な黒色光沢粒 2mm以下の黒褐色・灰白色・灰褐色粒	
88	弥生土器	鉢口縁部～頸部	D地点5層	推定17.4			ナデ 横方向のナデ後、縦方向にハケ目	ナデ	良好	にぶい褐色	灰黄色	1mm以下の褐色・褐灰色・灰色・灰白色粒 2mm以下の半透明光沢粒	スス付着
89	弥生土器	鉢口縁部	D地点5層	推定16.2			ナデ	ナデ	良好	にぶい黄褐色 明赤褐色	灰黄褐色褐色	微細な灰色・褐色粒	風化気味
90	弥生土器	鉢口縁部～胴部	D地点6層	推定15.2			横方向のナデ ナデ	横方向のナデ 縦方向のナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の褐色・黒色・灰色・透明・半透明粒 3mm大の褐色粒	
91	弥生土器	鉢胴部～底部	D地点6層		4.9		縦・斜め方向のナデ	ナデ 指頭痕	良好	にぶい黄褐色	暗褐色	2mm以下の黄灰色・金茶色光沢粒	風化気味 スス付着
92	弥生土器	ミニチュア土器口縁部～底部	D地点5層	5.6	1.8	5.9	縦方向のナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の褐灰色・灰褐色・黒色光沢粒 2mm以下のにぶい褐色粒	
93	弥生土器	ミニチュア土器口縁部～底部	D地点5層	推定7.0			ナデ 指頭痕	工具による斜め方向のナデ 指頭痕	良好	にぶい黄褐色 灰黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰色・にぶい褐色・透明光沢粒 4mm以下の白色粒	黒変
97	土師器	坏底部	D地点4層		6.3		ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な透明光沢粒 4mm以下の灰褐色粒	
98	土師器	坏底部	D地点5層		推定7.6		ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の赤茶色粒	
99	土師器	坏底部	D地点4層	推定8.3			回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色 灰白色	1mm以下の褐色・黒色光沢粒	
100	土師器	皿口縁部～底部	D地点トレンチ	推定6.3	推定8.4	1.45	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ 油痕のようなシミ	良好	明黄褐色	暗オリーブ褐色 明黄褐色	1mm以下の黒色粒	風化気味
101	土師器	皿口縁部～底部	D地点4層	推定8.3	推定8.0	1.4	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	淡褐色	灰白色	1mm以下の茶色粒	
102	土師器	皿口縁部～底部	D地点トレンチ	推定8.3	推定6.6	1.28	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	浅黄褐色 にぶい黄褐色	灰白色	1mm以下の黒色・褐色粒 3mm以下の褐色粒	

第3表 D地点 土器観察表3

遺物番号	種別	器種部位	地点層位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
103	土師器	皿口縁部～底部	D地点4層	推定7.3	推定6.0	1.2	ナデヘラ切り後ナデ	仕上げナデ	良好	浅黄褐色	灰白色	微細な黒色・透明光沢粒	
104	土師器	皿口縁部～底部	D地点4層	推定8.2	推定6.6	1.9	ナデヘラ切り後ナデ 底部に工具による圧痕	ナデ	良好	灰白色	灰白色	微細な黒色・黒褐色・灰白色・透明光沢・黒色光沢粒	風化気味
105	土師器	皿口縁部～底部	D地点4層	推定8.6	推定7.5	1.3	回転ナデ 底部は風化が著しく調整不明	回転ナデ	良好	灰白色	灰白色	1mm以下の褐色粒 2mm以下の灰褐色粒	風化気味
106	土師器	皿口縁部～底部	D地点4層	推定9.1	推定7.5	0.9	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	微細な黒褐色粒	風化気味
107	青磁	碗口縁部～底部	D地点4層				施釉 蓮弁文	施釉	堅緻	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精良	龍泉窯系 鎚蓮弁文青磁碗 13C後半～14C前半
108	青磁	碗口縁部～底部	D地点4層	推定13.4			施釉	施釉	堅緻	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精良	龍泉窯系 14C後半～15C前半
109	青磁	皿口縁部～底部	D地点4層				施釉貫入	施釉貫入	堅緻	緑灰白色	緑灰白色	精良	龍泉窯系 青磁椀花皿 15C～16C
110	白磁	碗口縁部～底部	D地点4層	推定15.8			施釉	施釉 口唇部が無釉	堅緻	灰白色	灰白色	精良	口禿げの白磁碗 13C中～14C初頭
111	白磁	皿口縁部～底部	D地点5層	推定9.4	推定6.6	1.8	施釉	施釉 口唇部が無釉 ハリ支え跡	堅緻	灰白色	灰白色	精良	口禿げの白磁皿 13C中～14C初頭
112	白磁	皿口縁部～底部	D地点5層	推定16.6			施釉	施釉 口唇部の一部が無釉	堅緻	灰白色	灰白色	精良	口禿げの白磁碗 13C中～14C初頭
113	陶器	捏鉢口縁部～胴部	D地点4層	推定25.8			横方向のナデ	ナデ	良好	灰白色	灰黄色	1mm以下の黒褐色・褐色粒	東播系 12C後半
115	縄文土器	深鉢胴部	D地点4層				斜め方向の刻目 横方向のナデ	剥離のため、調整不明	良好	黒褐色	にぶい褐色	2mm以下の白色・黒色光沢粒 3mm以下の黒色粒	
116	縄文土器	深鉢口縁部	D地点6層				口唇部に沈線 刻目 ナデ	工具による横ナデ	良好	黒褐色	明赤褐色	微細な透明光沢粒 3mm以下の白色・黄褐色粒	
117	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	D地点6層				波頂部に押圧刻み、刺突文、沈線文、縦方向のナデ、ミガキ、工具による連続刺突文、磨消縄文	横方向のナデ、ミガキ	良好	黒褐色	黒褐色 灰黄褐色	2mm以下の白色粒、柱状の黒色光沢粒 微細な透明光沢粒	波状口縁部
118	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	D地点6層				磨消縄文 沈線	横ナデ	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	微細な透明光沢粒 1mm以下の白色・黄褐色粒	
119	縄文土器	深鉢胴部	D地点6層				ミガキ沈線	ナデ	良好	赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の黄褐色・赤褐色粒 2mm大の透明粒 4mm大の赤褐色粒	
120	縄文土器	深鉢口縁部	D地点5層				横ナデ 風化気味	ナデ沈線	良好	浅黄色	浅黄色	微細な柱状黒色光沢粒 黒色光沢粒 半透明粒	
121	土師器	高坏部	D地点4層	推定15.9			ナデ	斜め方向のハケ目 工具による斜め方向のナデ	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色・黒色光沢粒 2mm以下の赤茶色・透明光沢粒	黒変
122	陶器	播鉢口縁部	D地点2層				鉄釉 ナデ 柳描き	鉄釉 ナデ	堅緻	にぶい褐色	褐色	微細な灰白色・黒褐色・灰褐色粒	肥前焼 (内野山北窯跡) 17C

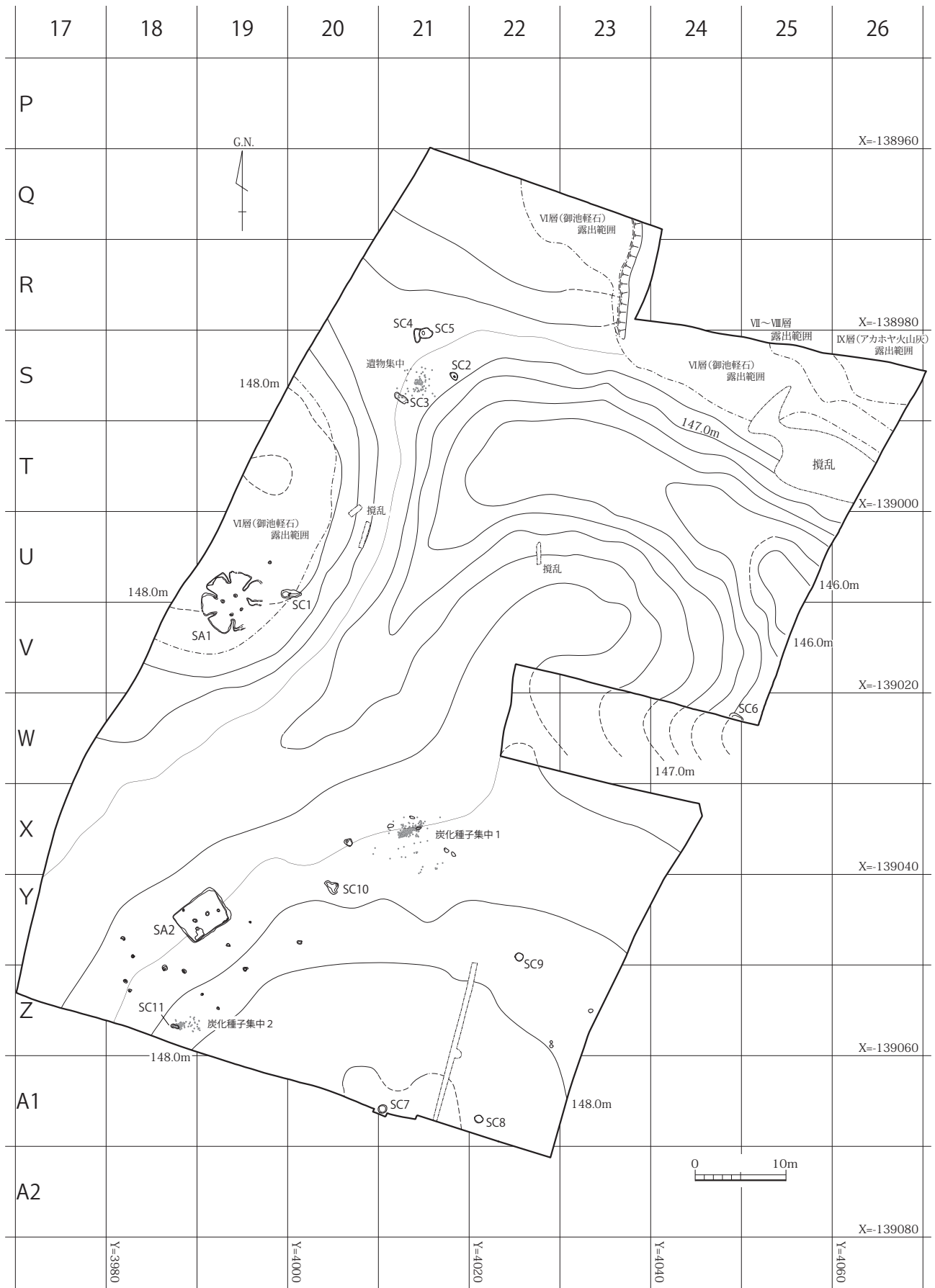
第4表 D地点 土器観察表4

図面番号	器種	出土地点	出土層位	計測値				石材	備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
4	台石	D地点 SA1	—	23.35	13.5	7.95	2980	砂岩	
5	軽石製品	D地点 SA1	—	7.6	5.9	3.1	48.7	軽石	中央に穿孔
28	磨石	D地点 SA3	—	12.35	12.6	3.8	858.7	砂岩	
35	磨石	D地点 SA5	—	8.1	7.3	2.9	253.2	砂岩	
36	台石	D地点 SA5	—	21.1	16.05	6.9	2760	砂岩	
52	磨製石鏃	D地点 SL2	—	2.65	2.6	0.35	2.5	頁岩	
94	石庖丁	D地点	6	2.85	2.85	0.45	3.6	頁岩	
95	磨石	D地点	5	12.45	11.55	3.45	655.2	砂岩	
96	磨石	D地点	6	11.3	8.5	3.7	615.8	砂岩	
114	滑石製品	D地点	5	4.7	2.6	1.05	15.6	滑石	石鍋補修

第5表 D地点 石器計測表

図面番号	器種	出土地点	計測値				備考
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
37	鉄矛	D地点 SA5	31.7	3.0	0.5	155.8	最大幅・最大厚は刃部計測

第6表 D地点 鉄器計測表



第36図 E地点 弥生時代遺構分布図 (S=1/600)

第2節 E地点の調査

1. 遺構・遺物の概要

E地点は標高約148mの低位段丘面1に位置する。現況では西から東に向かって緩やかに傾斜する一方、北側は急激に傾斜し、D地点のある沖積段丘面へと至る。D地点とE地点の比高差は約7mである。

また本地点の西側にはA地点、東側にはB地点（ともに都城市教育委員会調査）が隣接する。

調査区には南西端から、北東端にかけて埋没谷が走り、最高所が認められる調査区北西中央部と埋没谷が深く入る調査区北西側との比高差は約2.2mを測る。

調査では、弥生時代の竪穴住居跡2軒と土坑11基、古代の溝状遺構4条、中世から近世にかけて道路状遺構が8条、中世の溝状遺構1条と小溝状遺構群、近世の溝状遺構1条を確認し、遺物では縄文時代晩期の土器をはじめ弥生中期～後期の土器や石器、炭化種子（イチイガシ等）、古代の土師器や須恵器、緑釉陶器の碗、中世の土師器や白磁・青磁等が出土している。なおE地点の調査面積は約5,900㎡である（第36図）。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（SA1、第37図）

SA1は調査区中央西端（U・V-19グリッド）に位置し、Vb層～VI層にかけて検出した。住居の南側および東側はSG1・SE5に切られる。円形を基調とする間仕切り住居（花卉状住居）で直径が約6.8m、検出面の深さは最深で約20cmを測る。間仕切りは他遺構に切られているため、不明な部分もあるが6箇所になるものと思われるが、南東側の間仕切りの空間が他のものと比べ1.5倍以上の広さを有するため、1箇所増える可能性も考えられる。支柱穴は4本（深さ40～44cm）で柱間距離は東西方向に1.1～1.5m、南北方向に1.7～1.8mを測り、ほぼ対角線上に配置されている。床面積は $29\text{m}^2 + \alpha$ である。

遺物は甕の胴部片（123）が1点と石庖丁（124）、有孔軽石製品（125）が出土した他、多量の炭化材、炭化種子が確認されている。炭化材および炭化種子は、古環境研究所の分析によれば、炭化材の一部はイヌガヤとクスノキ科、炭化種子はイネおよびイチイガシ、コナラ属、サクラ属の核片（1点）と同定されている。

そのうちイチイガシ（コナラ属と同定されたものも含む）は南西側突出部にて7,707点（破片も含む）出土している。そのうち有殻を有するものが11点（平均最大長1.2cm、最大幅0.81cm、重量0.33g）、完形に近い子葉が501点（平均最大長1.05cm、最大幅0.76cm、重量0.31g）確認されている。SA1での総重量が825.5gであることから子葉の場合、約2,663個体の計算になる。また殻のみの出土も僅かながら認められることから、多くは有殻だった可能性が考えられる。またイネについては、炭化材が出土している部分の埋土のみフローテーションを行い、31点が確認されている。

なお、イネの ^{14}C 年代は 2190 ± 40 年BP（暦年代cal BC 340、320、210）、イチイガシの ^{14}C 年代は 2010 ± 40 年BP（暦年代cal AD 40）の測定値を得ているが、両者の時期に開きが認められる。

2号竪穴住居跡（SA2、第38図）

SA2は調査区南西部（Y-18・19グリッド）の谷部へ下る緩斜面に位置し、Vb層で検出した。長軸約5.5m×短軸約4.2mの長方形プランを呈し、検出面の深さは最深で32cm、床面積は 18.8m^2 を測る。

支柱穴は2本（深さ40～44cm）で柱間距離は約1.6mを測り、竪穴の軸よりやや南へぶれる。

遺物は中央より南側で壺（126）が、北西部端で鉢（127）が出土した他、砥石（128）や軽石製品（129）が確認されている。また中央付近から南側にかけて炭化材や炭化種子が出土している。炭化材はクマシデ属イヌシデ節、炭化種子はコメ10点とヒョウタン類2点、不明種子2点等が確認されている。

図に示した遺物のうち、126は長胴の壺である。口縁部は外反し、胴部最大径が中位になる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。127は小型の鉢で、口縁部が内湾しながら立ち上がる。内外面とも指オサエが認められる。なお底部付近には圧痕が認められる。128は砥石である。頁岩製で両面に研磨面が認められる。129は軽石製品で、表面の剥落が著しいものの、中央に縦の溝が走る。

（2）土坑（S C、第39図・第40図）

土坑は11基確認されている。そのうち遺物が出土しているものはS C 3～5のみだが、周辺で弥生時代の遺物が認められることや埋土が弥生の住居と類似すること等から、同時代のものに含めた。埋土はすべて御池軽石を含む黒褐色土で、1～2層に細分される。

S C 1はU-19～U-20グリッドにかけて、VI層で検出した。約2.3m×約0.9mの楕円形プランを呈し、西側にはテラスが認められる。検出面からの深さは最深で約0.9mを測る。

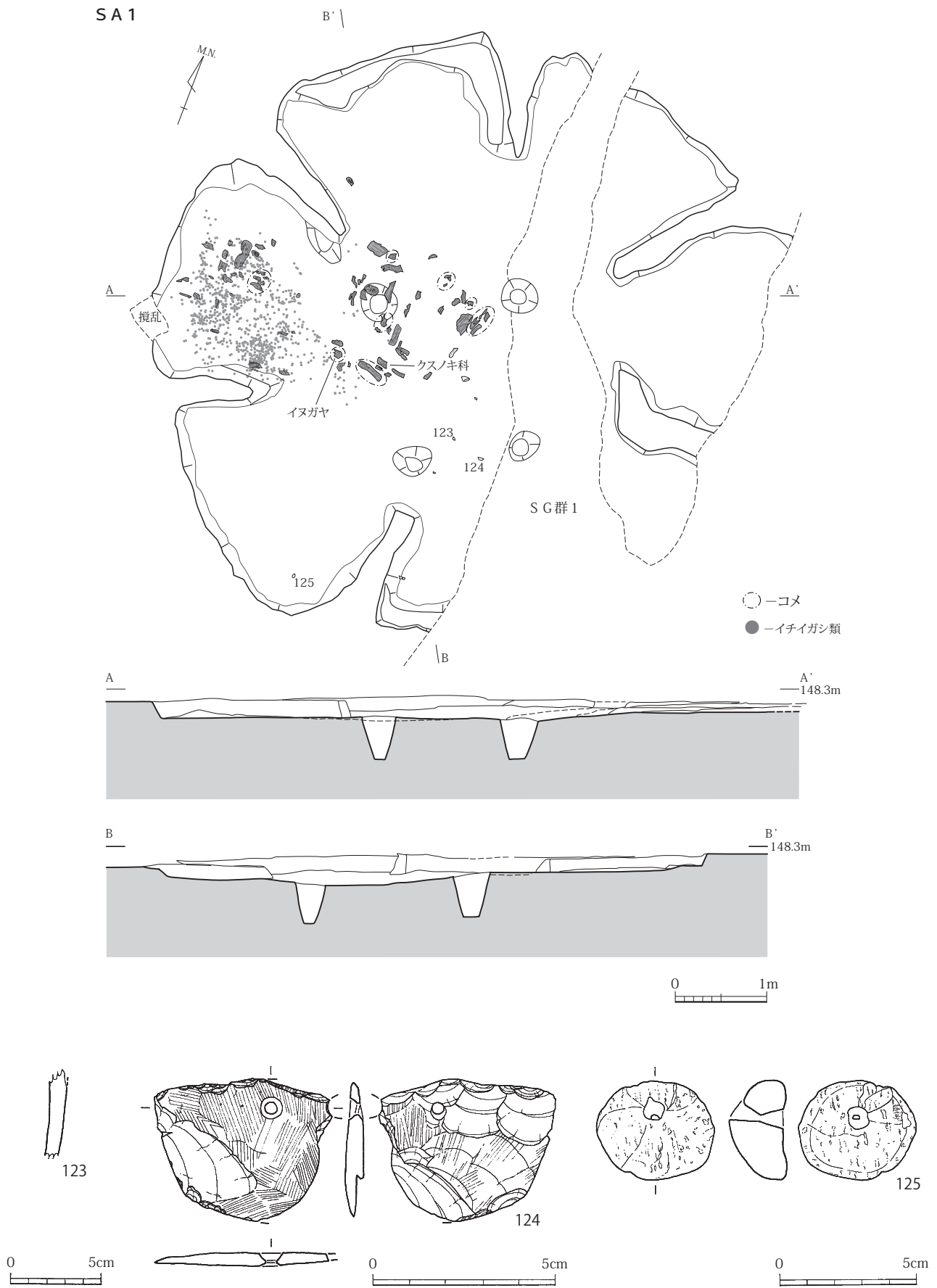
S C 2～5はすべてS-28グリッドで確認し、V b層で検出した。これらの土坑は遺物集中箇所周辺で確認されている。そのうちS C 2は約1m×約0.7mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最深で約13cmを測る。土坑中央はピットに切られる。またS C 3は約1.8m×約0.7mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最深で約15cmを測る。S C 4・S C 5はいずれも楕円形プランを呈し、S C 4はS C 5に切られ、S C 5はピットに切られる。S C 4は約1.6m×約0.7m、深さは約7cm、S C 5は約1.6m×約1.2m、深さは約28cmを測る。130・131はS C 5出土のもので、そのうち130は外反する壺の口縁部で、端部には凹みが認められる。焼成は良好である。また131は高坏の脚部で、大型の高坏と考えられる。屈曲部より上部には、円形の透かしが認められる。また内面には横方向のヘラミガキが認められる。

S C 6はW-24～W-25グリッドにかけて確認し、南側は調査区外へと延びる。約1.6m×約0.5m + α の楕円形プランと考えられ、深さ約0.8mを測る。底面は西側に向かって緩やかに傾斜する。V b層で検出。

S C 7～S C 9は調査区南東部（Y-22、A1-20～21、A1-22グリッド）で確認し、V b層で検出した。いずれも円形に近いプランを呈し、S C 7は約0.9m×約0.94m、深さ約40cm、S C 8は約1m×約0.9m、深さ約16cm、S C 9は長軸・短軸とも約1m、深さ約16cmを測る。

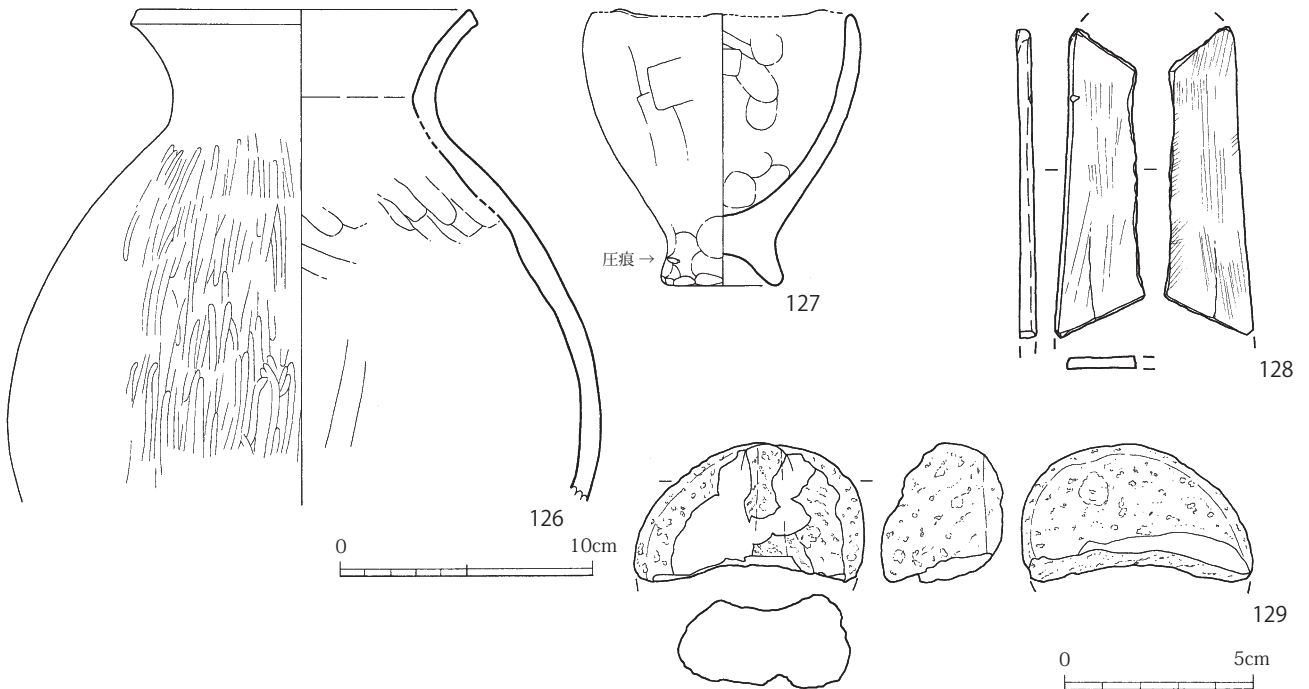
S C 10はY-20グリッドに位置し、V b層で検出した。約1.7m×約1.2mの不整な楕円形プランを呈し、深さ0.8mを測る。上面はS G群1に切られる。

S C 11はZ-18グリッドに位置し、V b層で検出した。約1m×約0.4mの楕円形プランを呈し、一端にピットを有する。深さは最深で0.3mを測る。なお、炭化種子集中部2の範囲の一部と重なるが、埋土中には炭化種子が入り込まないため、時期差があると考えられる。



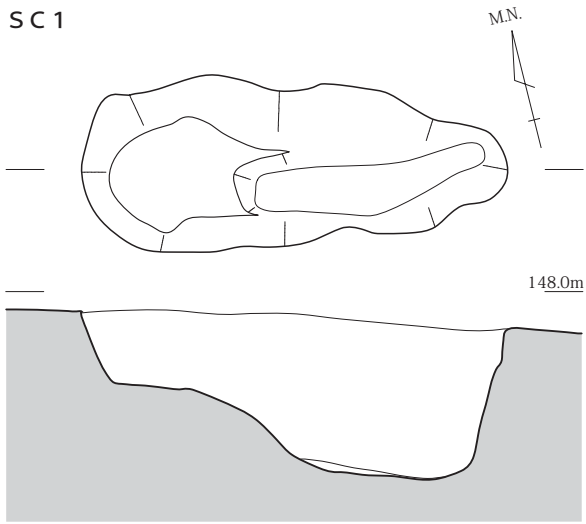
第37図 E地点 SA 1 実測図 (S=1/60) 及び出土遺物実測図 (123 : S=1/3、124 : S=2/3、125 : S=1/2)

SA 2

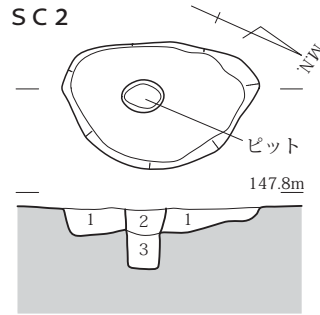


第38図 E地点 SA 2実測図 (S=1/50) 及び出土遺物実測図 (S=1/3、128・129 : S=1/2)

SC 1



SC 2



SC 2埋土

1: 黒褐色土 (7.5YR3/1)

粘性があり、やや縮まりがある。

御池軽石 (φ 2 ~ 5 mm) を 40% 含む。

ピット埋土

2: 黒褐色土 (7.5YR3/1)

御池軽石 (φ 1 ~ 3 mm) を 10% 含む。

3: 黒褐色土 (7.5YR3/1)

やや粘性があり、御池軽石 (φ 1 ~ 5 mm) を 30% 含む。

SC 5埋土

1: 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性があり、縮まりがある。御池軽石 (φ 2 ~ 8 mm) を 50% 含む。

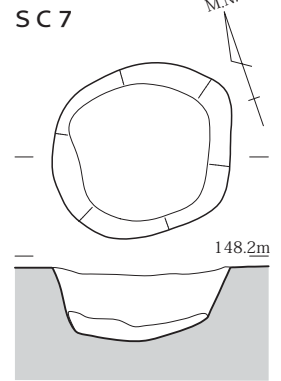
SC 4埋土

2: 黒褐色土 (10YR3/1) 御池軽石 (φ 2 ~ 5 mm) を 40% 含む。

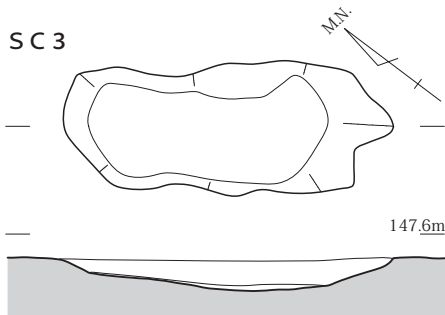
樹痕埋土

3: 黒褐色土 (10YR3/1) やや縮まりがあり、御池軽石 (φ 2 ~ 6 mm) を 30% 含む。

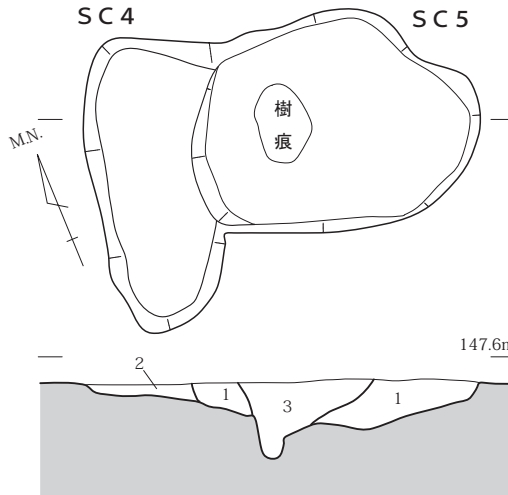
SC 7



SC 3

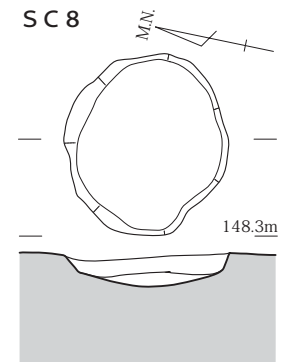


SC 4



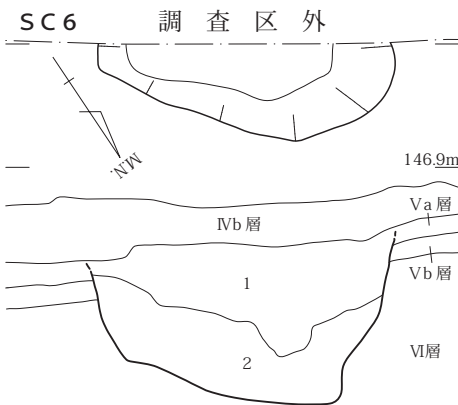
SC 5

SC 8



SC 6

調査区外

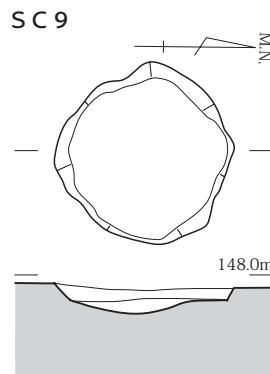


SC 6埋土

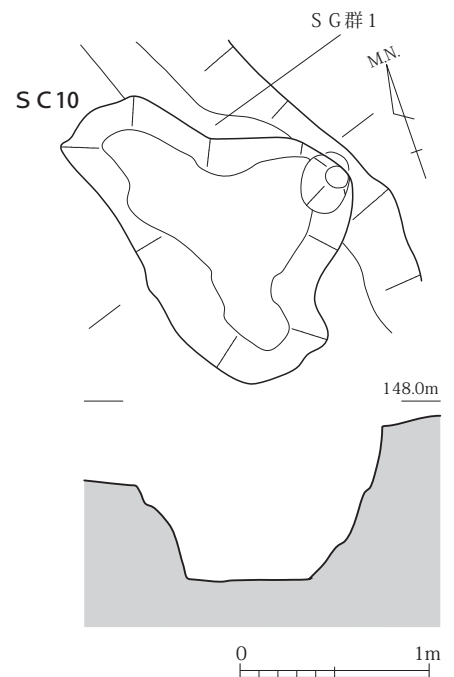
1: 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性があり、やや縮まりがない。御池軽石 (φ 2 ~ 5 mm) を 50% 含む。

2: 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性があり、やや縮まりがない。御池軽石 (φ 2 ~ 5 mm) を 80% 含む。

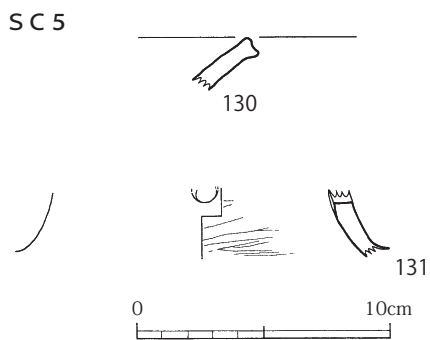
SC 9



SC 10

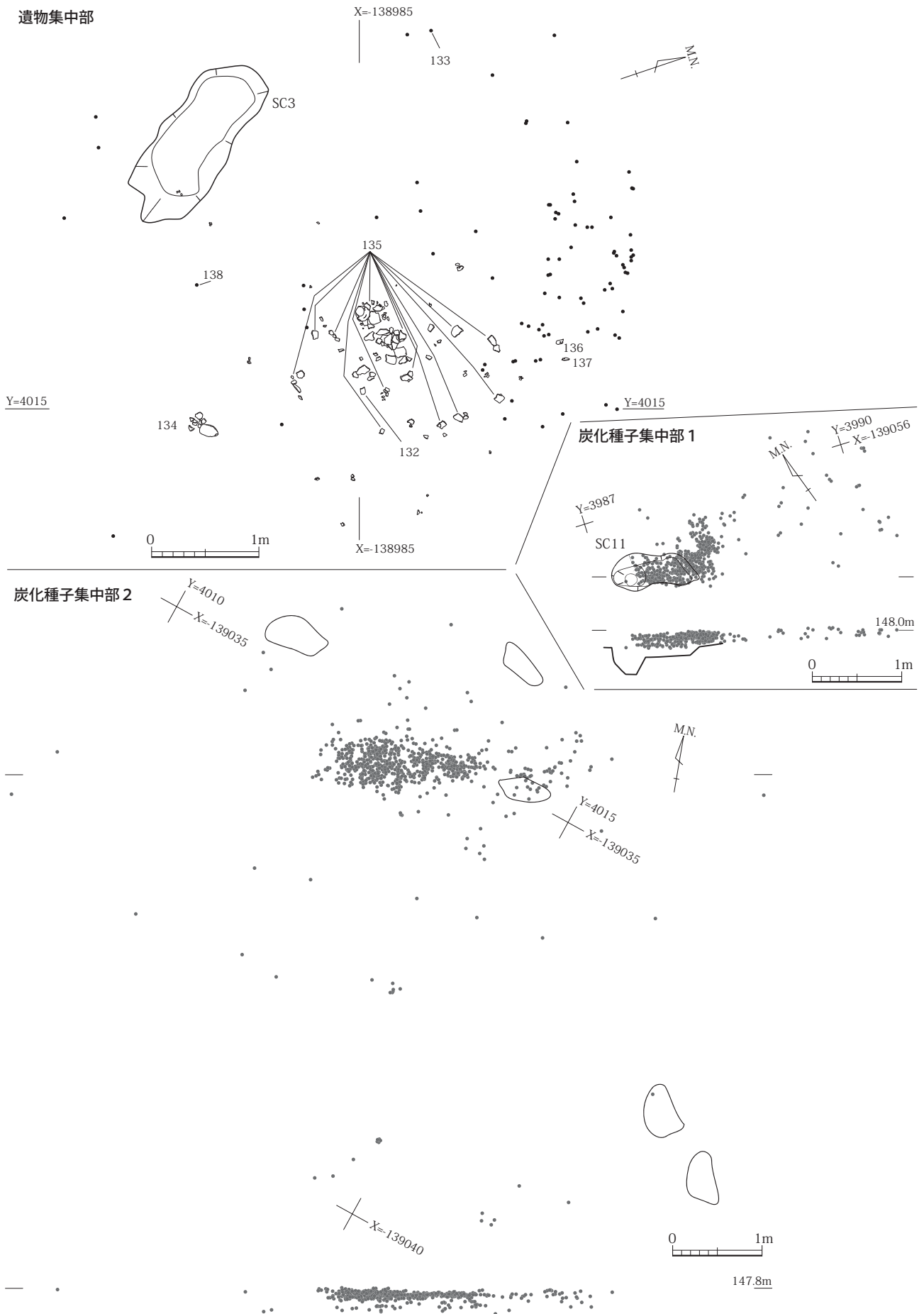


SC 5



第39図 E地点 土坑実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

遺物集中部



第40図 遺物集中部実測図 (S=1/50) 及び炭化種子集中部分布図 (S=1/60)

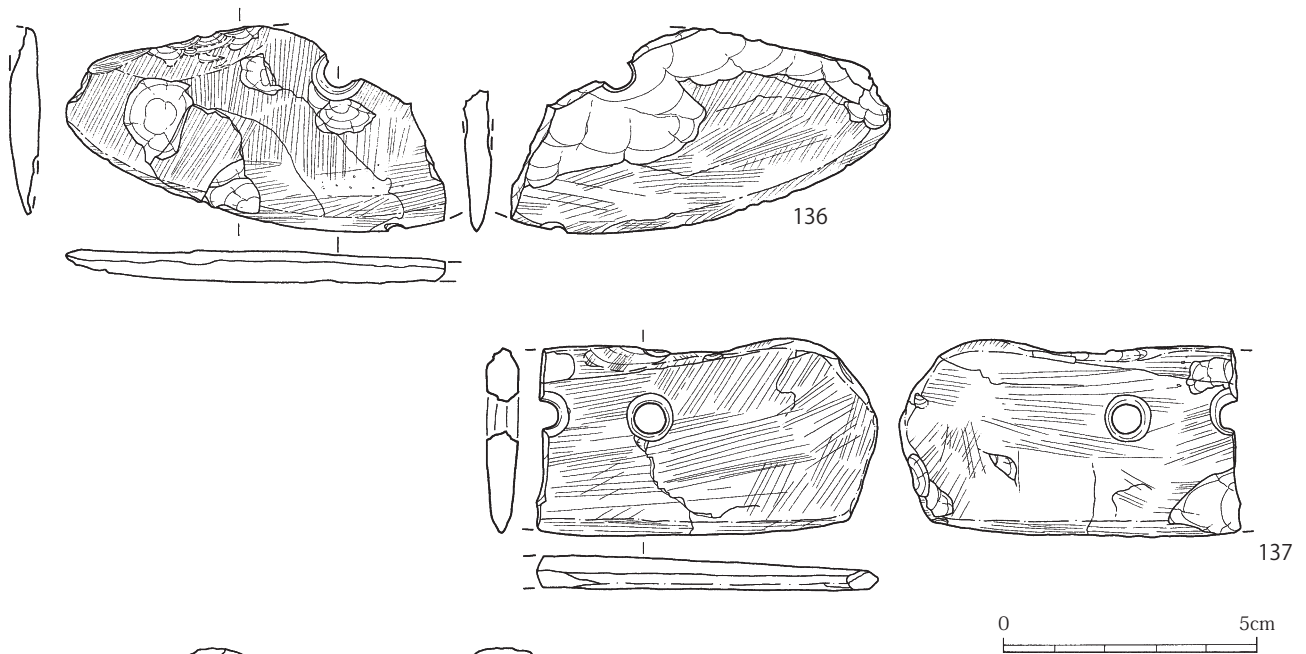


第41図 E地点 遺物集中部出土遺物実測図1 (S=1/3)

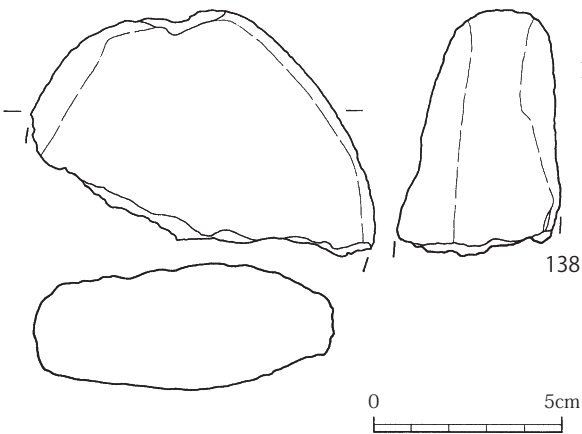
(3) 遺物集中部 (第40図～第42図)

遺物集中部はS-21グリッド中央部、Va層中で確認し、約3mの範囲で弥生時代後期後半の土器や石器が確認されている。遺構に伴う可能性も考えられ、トレンチによる土層確認を行ったが立ち上がり等は認められなかった。

132・133は甕の口縁部である。そのうち132は「く」の字に屈曲する。また133は口縁部の外反が弱く、内外面には指オサエが顕著に認められる。なお、内面には植物圧痕がみられる。134は長胴の壺である。肩が張り、最大径が胴部上方にくる。外面には縦もしくは斜め方向のハケ目調整が認められる。135は大型の壺で器高は推定で55.5cmを測る。胴部が大きく張り、底部は厚手の平底を呈す。口縁端部に櫛描波状文みられ、頸部下には幾何学文の線刻が施される。シカあるいは龍等をモチーフにしている可能性も考えられる。



第42図 E地点 遺物集中部出土遺物実測図2 (S=2/3、138:S=1/2)



136・137は石庖丁で、いずれも頁岩製である。136は穿孔部分から斜めに折れており、約1/2を欠損する。背部は直線的で外湾状の刃部を有する。全体的に研磨が認められる。137は背部・刃部とも直線的で、全体形は長方形を呈する。2つの穿孔のうち、1箇所縦に折れ、1/2近くを欠損する。128は両輝石安山岩製の磨石である。風化が著しく、脆弱である。約1/2を欠損している。

(4) 炭化種子集中部 (第40図)

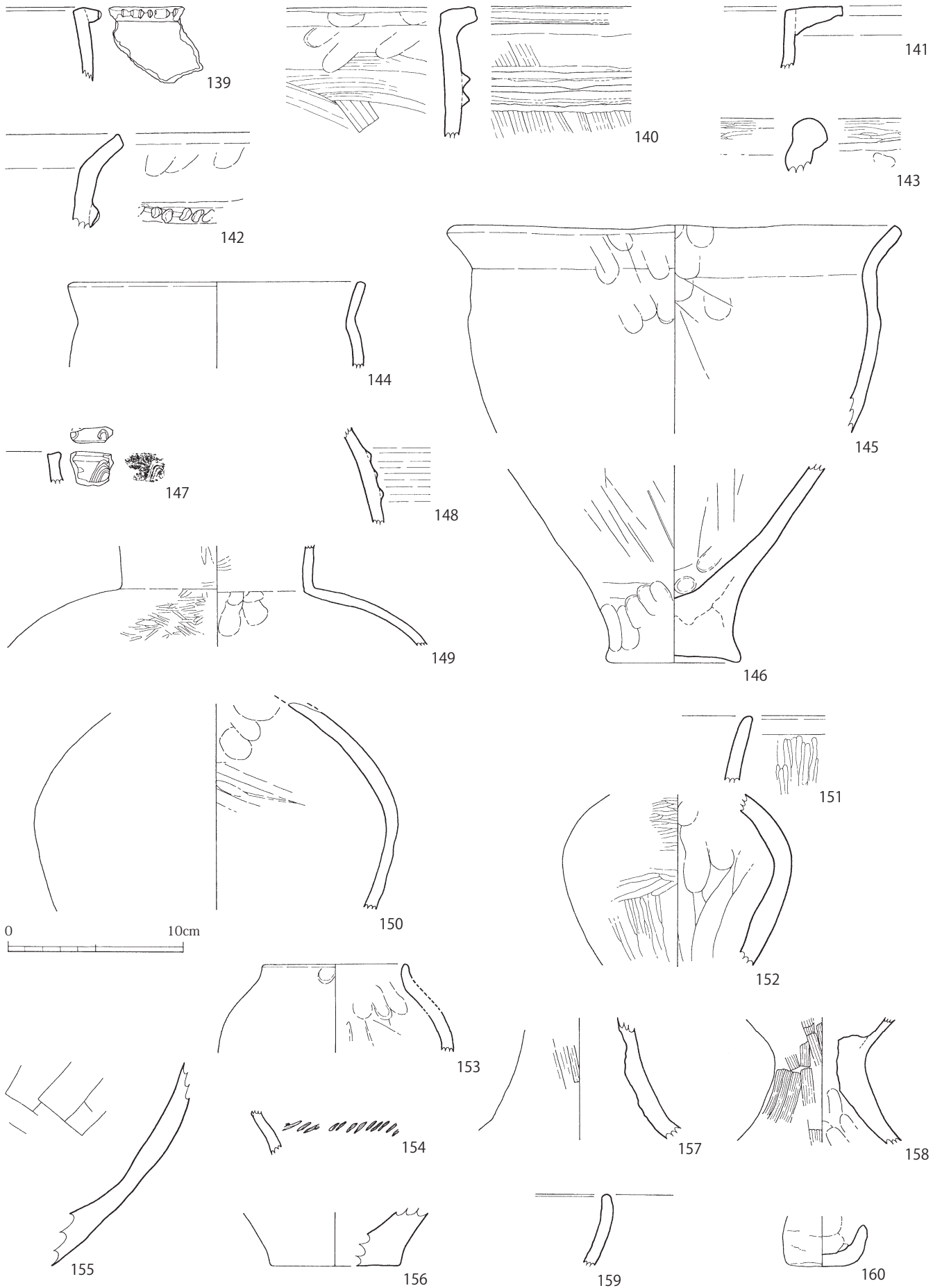
炭化種子集中部が2箇所確認されている。いずれもV a層中で確認されている。

炭化種子集中部1はX-21グリッド南半の約8.4m×約6.7mの範囲で出土し、なかでも中央約3.2m×約1.7mの範囲が特に集中する。出土した炭化種子は3,361点(破片も含む)確認し、すべてイチイガシの可能性はある。

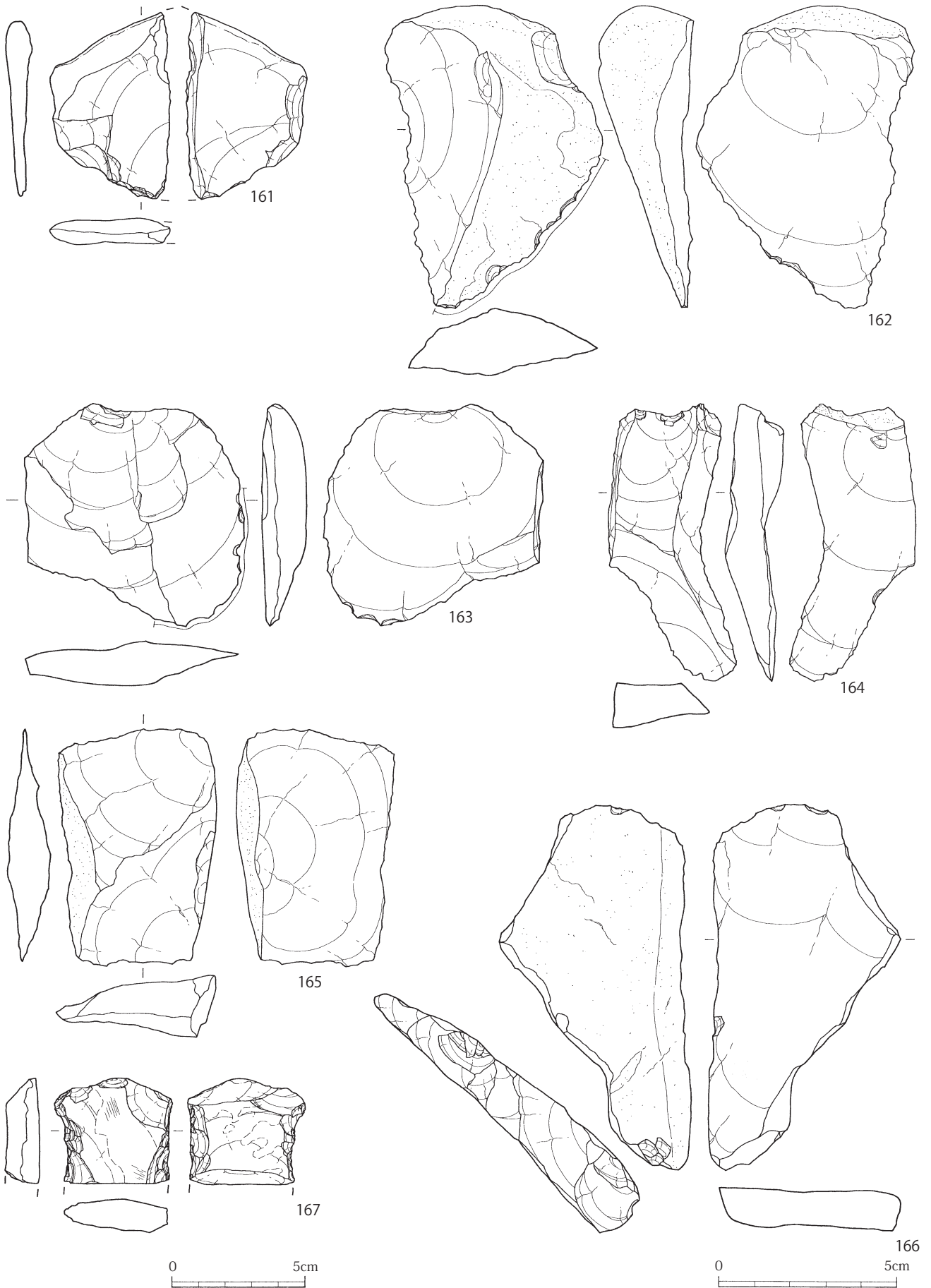
確認されたものは全て子葉部分で、完形に近い子葉が295点(平均最大長1.06cm、最大幅0.75cm、重量0.36g)確認されている。集中箇所1での総重量が613.8gであることから子葉の場合、推定で約1,705個体分になる。なお種子の¹⁴C年代は1910±40年BP(暦年代cal AD 70)の測定値を得ており、S A 1、炭化種子集中部2とも暦年代では近い時期にある。

炭化種子集中部2はZ-18～19グリッドにかけて約3.2mの範囲で出土し、なかでも西側約1.5mの範囲に集中する。出土した炭化種子は783点(破片も含む)確認し、すべてイチイガシの可能性はある。

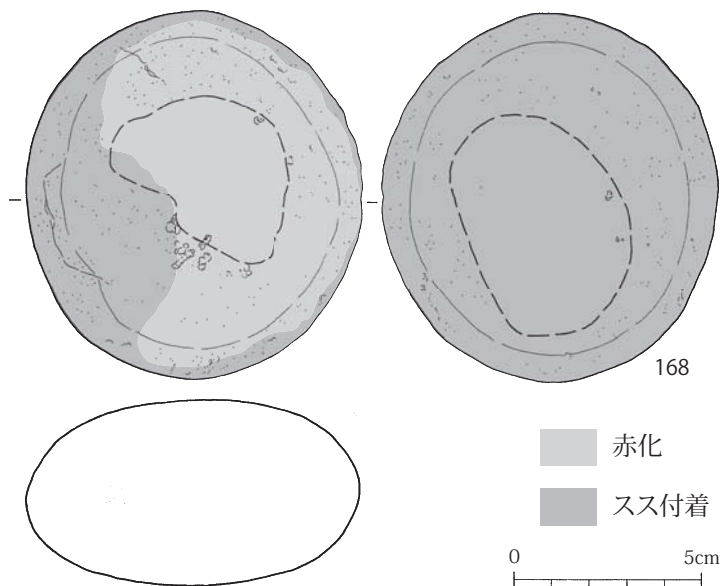
すべて子葉部分で、完形に近い子葉が45点(平均最大長1.09cm、最大幅0.77cm、重量0.34g)確認されている。集中箇所2での総重量が79gであることから子葉の場合、推定で約232個体分になる。なお、V b層上面でピットを確認したが、遺構中に入り込んだものはなく、時期が違うものと考えられる。



第43图 E地点 弥生土器实测图 (S=1/30)



第44图 E地点 石器实测图1 (S=2/3)



第45図 E地点 石器実測図2 (S=1/2)

による刻目が施されている。内外面ともナデ調整が認められる。140・141は台形状の突帯を口縁部にもつ甕で、胎土に金雲母（黒）を含む。そのうち140は頸部下に二条の三角突帯が貼り付けられている。口縁端部は凹む。141は140に比べ、口縁部突帯は長い。

142は、いわゆる中溝タイプの甕で、頸部下に刻み目突帯を有する。143は口縁部が肥厚するタイプの厚手の甕と考えられる。144・145は口縁部が「く」の字を呈する甕で口縁端部は丸く仕上げられている。内外面ともナデ調整が認められる。145は甕の胴部で146と同一個体の可能性が高い。146は甕の底部でやや上げ底をなし端部が外方に張る。内面には炭化物が付着している。

147～156は壺である。そのうち147は複合口縁壺の拡張部で外面に櫛描波状文、口唇部に竹管文が施されている。148は壺の胴部で外面に三条の三角突帯が貼り付けられている。149は口縁部が直立気味に立ち上がる大型の壺で、外面はヘラミガキが認められる。150は短頸壺の胴部で肩が張り、最大径が上方にくる。151・152は同一個体で、直立気味に立ち上がり、胴部上方に最大径がくる。他の壺に比べ、厚手である。外面にはヘラミガキが顕著に認められる。153は無頸壺でナデ調整が認められる。154は壺の肩部で、外面には刺突による右上がりの線刻文が施されている。156は壺の底部で平底を呈する。

157・158は高坏の脚部で、外面にはハケ目調整が認められる。158は裾部があまり広がらず、逆に157は大型で、大きく広がる裾部を有すると考えられる。159は内湾する口縁部をもつ鉢である。160は手づくね土器である。

石器 (第44図・第45図)

161～168は石器である。そのうち162～166は縄文時代後晩期所産の可能性も考えられるが、E地点で出土している縄文の資料とは分布域が異なり、むしろ弥生のもものと分布域が重なることから本項に含めた。

161はホルンフェルス製の石庖丁である。背部には風化のため不明瞭ながら、研磨痕がわずかに認められる。また刃部には研磨が施されていないものの、微細な剥離痕が認められる。

162・163は微細剥離を有する剥片で、いずれも砂岩製である。そのうち162は礫面を有する縦長剥片で、

なお種子の¹⁴C年代は1920±20年BP (暦年代cal AD 70)の測定値を得ており、SA1、炭化種子集中部1とも暦年代では近い時期にある。

(5) 包含層の遺物

E地点では弥生中期～後期後半の遺物が出土している。特に調査区北西部の緩斜面に比較的まとまって出土している。

土器 (第43図)

139～147は甕である。そのうち139は口縁部に断面三角形の小さな突帯が貼り付けられている。突帯にはヘラ状工具

礫面が打面になる。右側縁中程～末端にかけて微細な剥離痕が認められる。163は幅広い剥片で打面は単剥離面で構成されている。162同様、右側縁中程～末端にかけて微細な剥離痕が認められる。

164～166は剥片である。石材はいずれも砂岩である。そのうち164・165はともに礫面を打面に設定している。164は石核から剥出される際に垂直割れを起こし、左上半を欠損する。165は横長の剥片で表面には同一方向から剥離痕が認められる。166は左側面の剥離の状況から打面再生剥片と考えられる。

167は石斧の基部付近か。両面とも部分的に研磨痕が認められる。砂岩製。168は磨石である。砂岩製で、全体的に赤化し、表面にはススが付着している。磨面は表裏2面に認められる。

3. 古代～近世の遺構と遺物

(1) 土坑 (S C、第47図)

S C 13 S C 12はT-24グリッド北西部に位置し、S E 1を切っている。約1.8m×約0.9mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最深で約0.7mを測る。遺物の出土は認められないものの、時期は切り合い関係よりS E 5よりは新しく、桜島文明軽石降下以前の所産と考えられる。

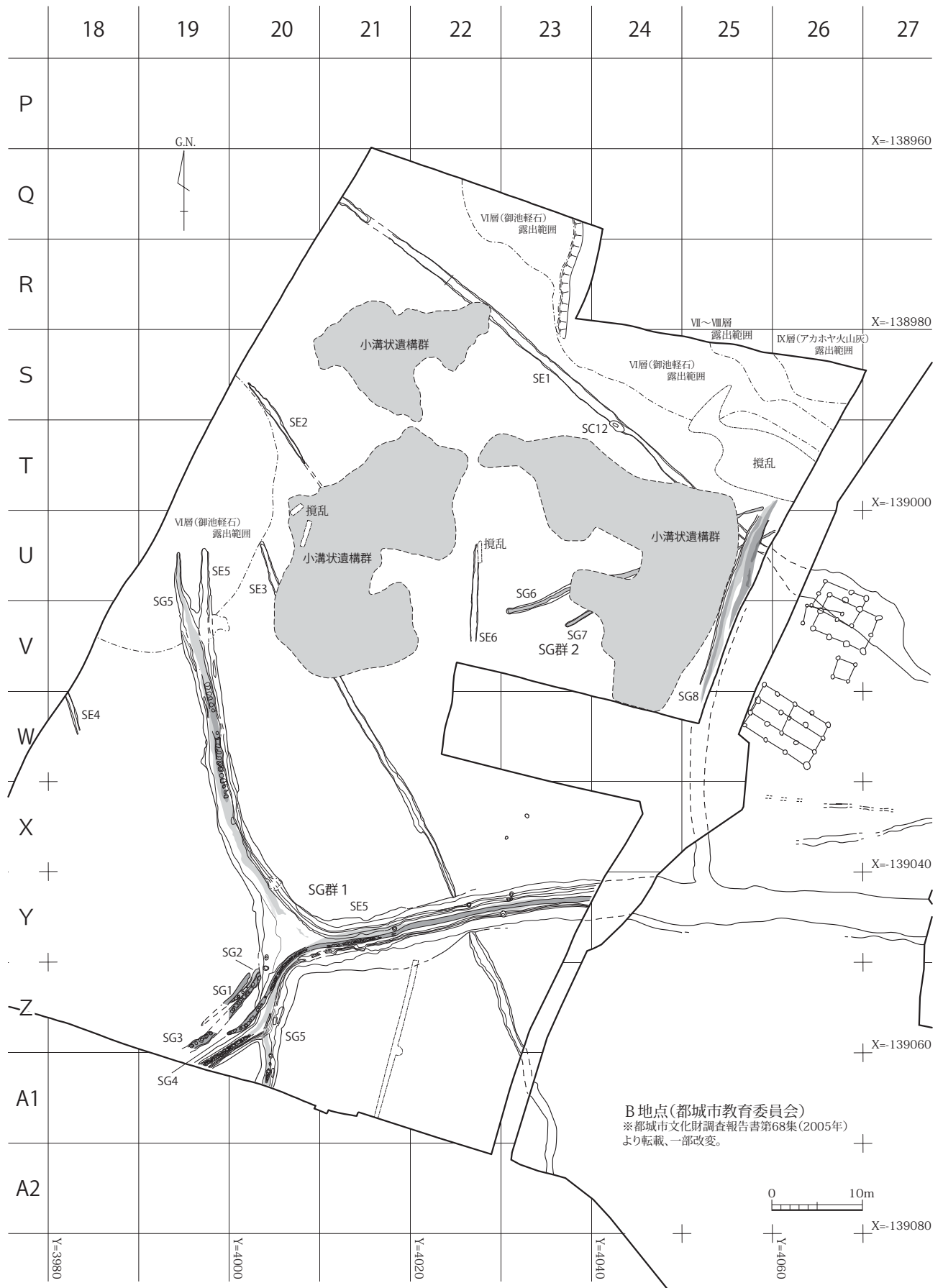
(2) 溝状遺構 (S E、第47図・第48図・第50図)

E地点では、溝状遺構が6条(古代4条、中世1条、近世1条)確認されている。古代の溝状遺構はS E 1～S E 3、S E 5が該当し、いずれも断面が逆台形状を呈し、IV b層に由来する黒色土を埋土にもつ。出土遺物は古代に帰属するもので、S E 1で高台付?と考えられる体部片(169)やS E 3で甕の胴部片、S E 5で坏(170)などが確認されている。

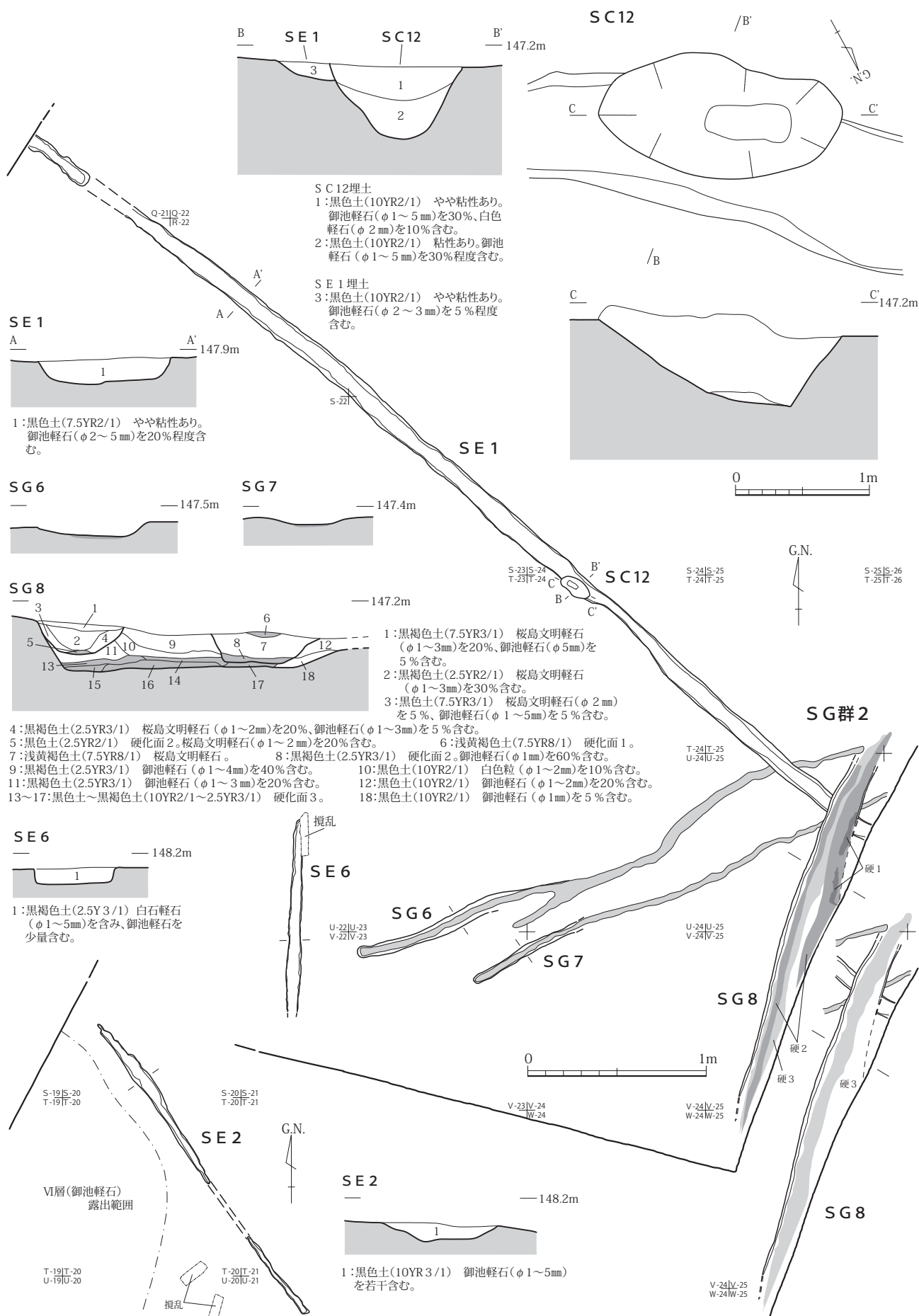
S E 1は調査区北側でV a層～V b層にかけて検出した。削平により、部分的に消失していたが、軸方位をN-50.5°-W方向に保ちながら、都城市教育委員会調査のB地点へと続く。確認された範囲では全長約61m、溝幅約0.5～1.1m、深さは最深で約0.2mを測る。またS E 2はS-20グリッド～U-21グリッドにかけて確認し、部分的に消失していたが、軸方位をN-35.8°-W方向に保ち、北北西方向から南南東方向へと走る。確認された範囲では全長約20m、溝幅約0.2～0.9m、深さは最深約0.15mを測る。S E 3は調査区中央西側から南東部にかけて確認し、V a層～V b層上面で検出した。軸方位はおおむねN-27.2°-W方向に保ちながら、途中、S G 4・5に切られるものの、都城市教育委員会調査のB地点へと続く。確認された範囲では全長約63m、溝幅約0.5～1.45m、最深約0.3mを測る。S E 5は調査区中央西側から東部にかけて確認し、V a層～VI層で検出した。北方向から南南東方向に向かって走り、Y-20・21グリッド付近で北東方向に大きく向きを変えて走行し、都城市教育委員会調査のB地点へと続く。確認された範囲では全長約77m、溝幅約0.7～1.2m、最深約0.85mを測り、西側から南側にかけてS G 5に切られている。なおS E 5はS G 5の側溝の可能性も考えられるが、S G 5南側に形成されている側溝と比して、規模がしっかりしていること、同遺構が埋没中にS G 5が作られているため、ここでは溝状遺構として扱った。

S E 6は中世に帰属する溝状遺構である。U・V-22グリッドで確認し、検出した範囲では全長約10.8m、溝幅約0.5～0.85m、深さ約0.1mを測り、断面形は逆台形状を呈する。軸方位はN-2.1°-E方向に保ち、南側は削平のため、消失している。埋土はIV a層に由来する白石軽石を含む黒色土が堆積する。

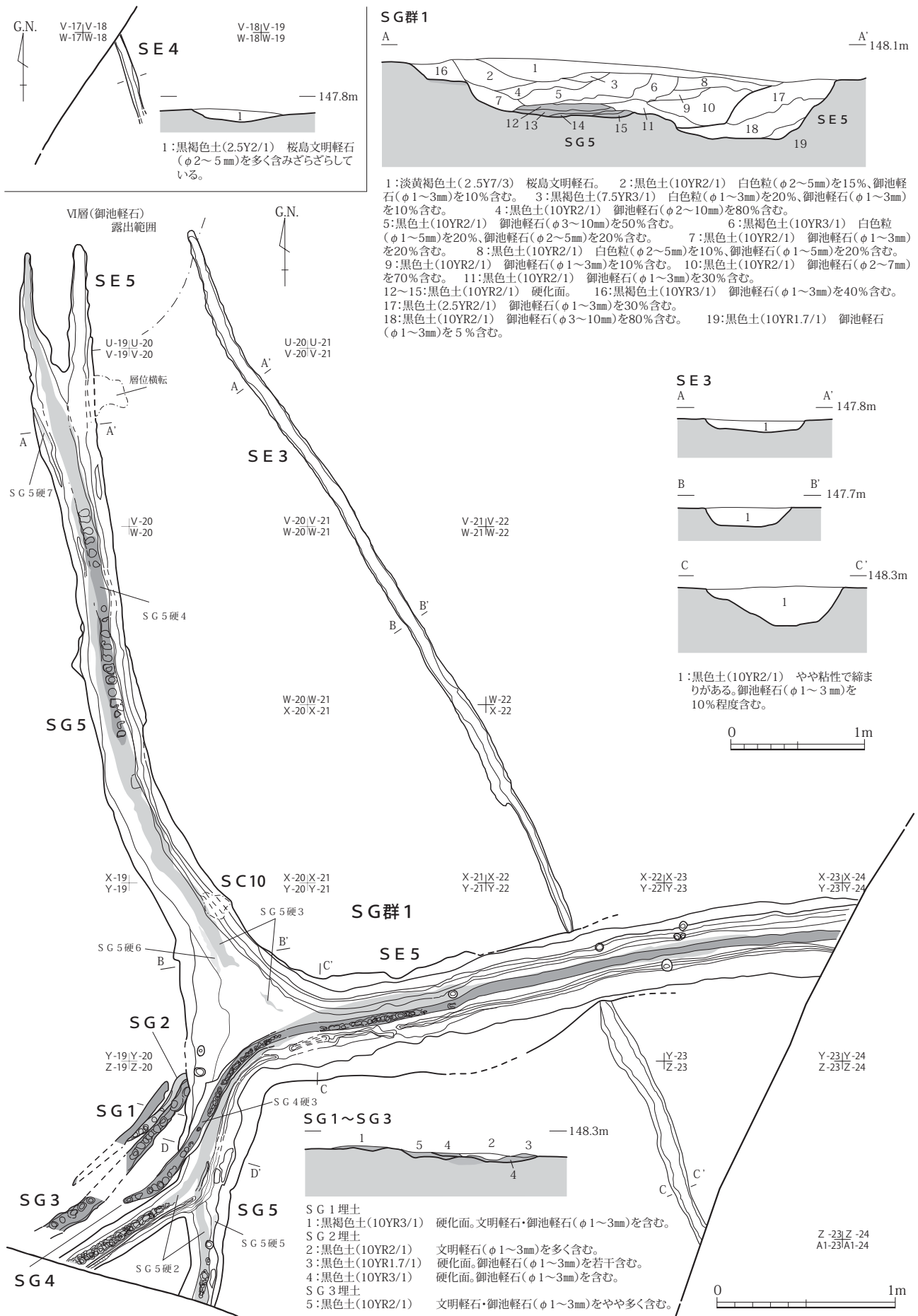
S E 4は近世に帰属する溝状遺構である。W-18グリッドで確認し、南東側は削平のため消失している。



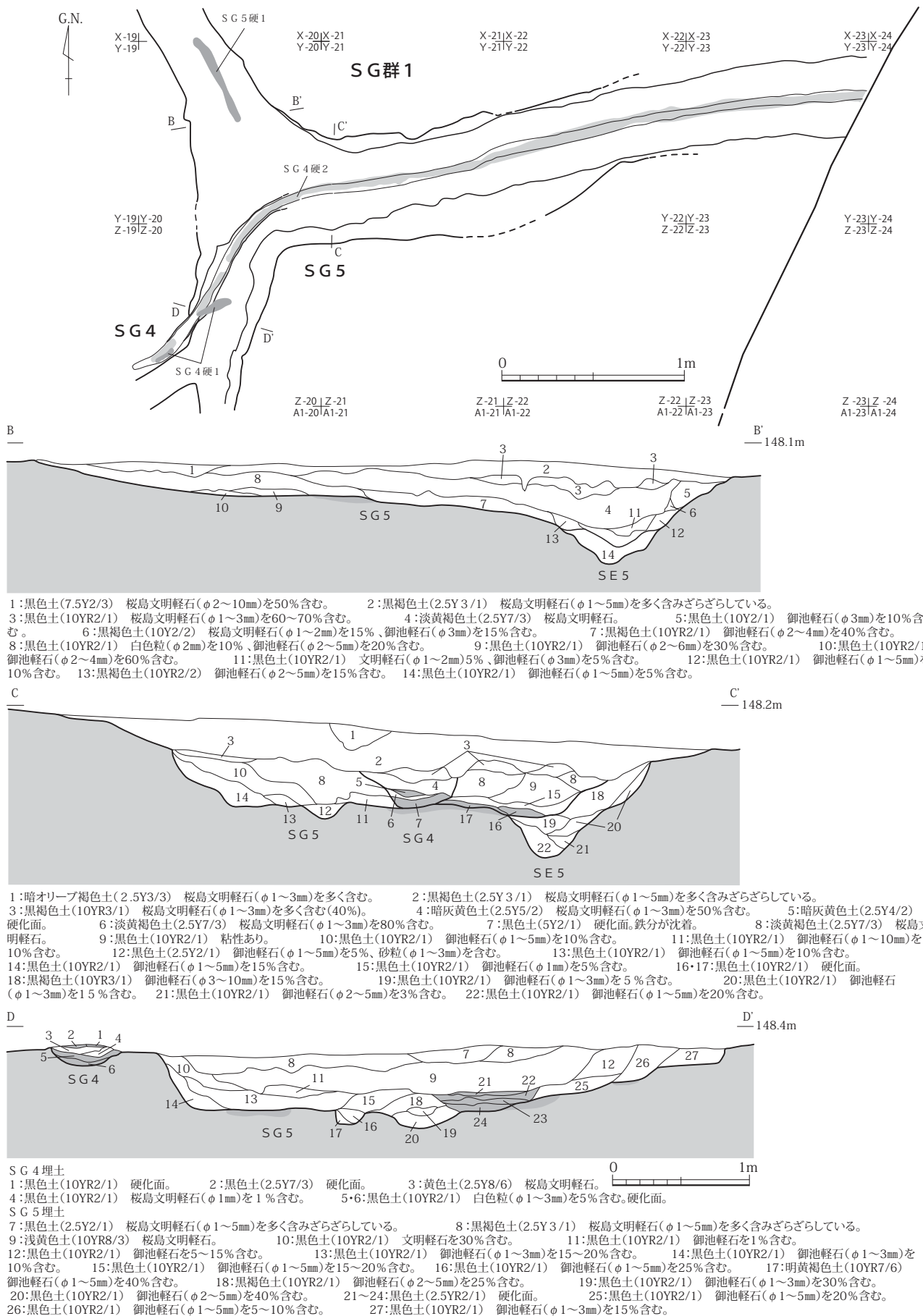
第46図 E地点 古代～近世遺構分布図 (S=1/600)



第47図 E地点 土坑・溝状遺構・道路状遺構実測図1 (S=1/40、S=1/300)

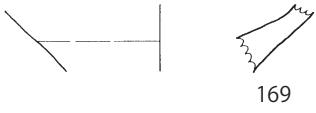


第48図 E地点 溝状遺構・道路状遺構実測図2 (S=1/40、S=1/300)



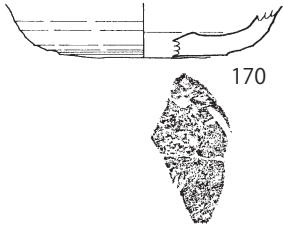
第49図 E地点 溝状遺構・道路状遺構実測図3 (S=1/40, S=1/300)

SE 1



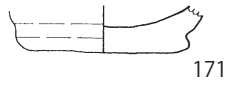
169

SE 5

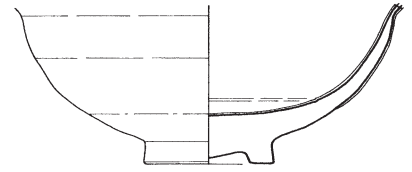


170

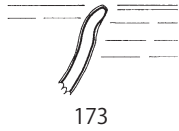
SG群 1



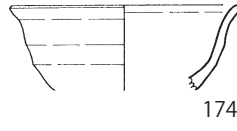
171



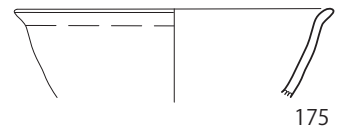
172



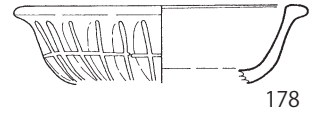
173



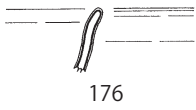
174



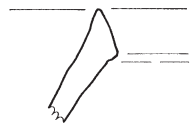
175



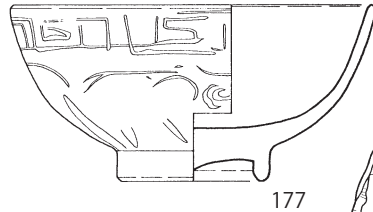
178



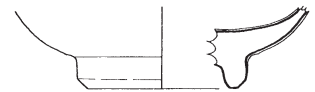
176



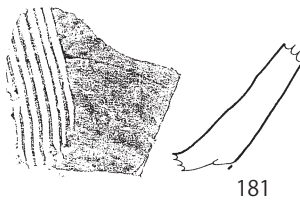
180



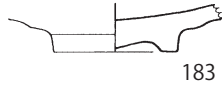
177



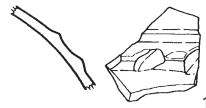
179



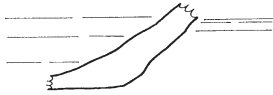
181



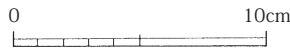
183



184

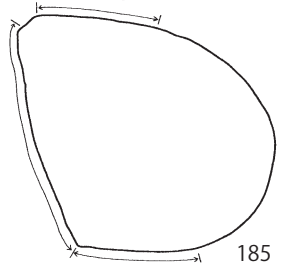
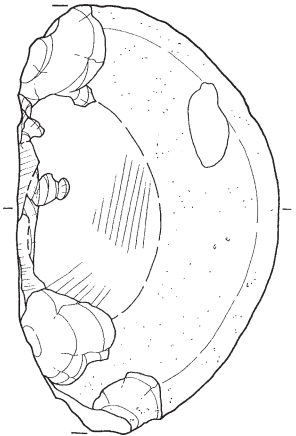


182

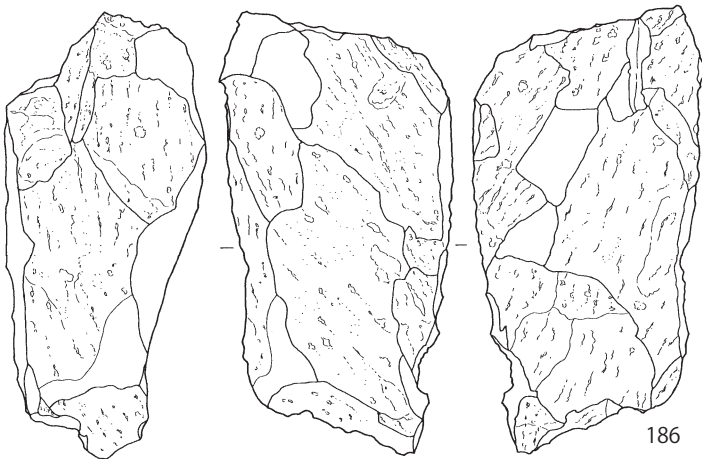


0

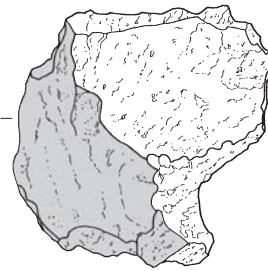
10cm



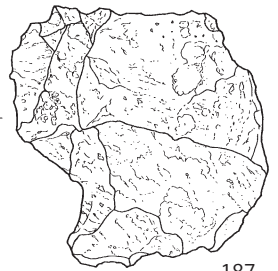
185



186



187



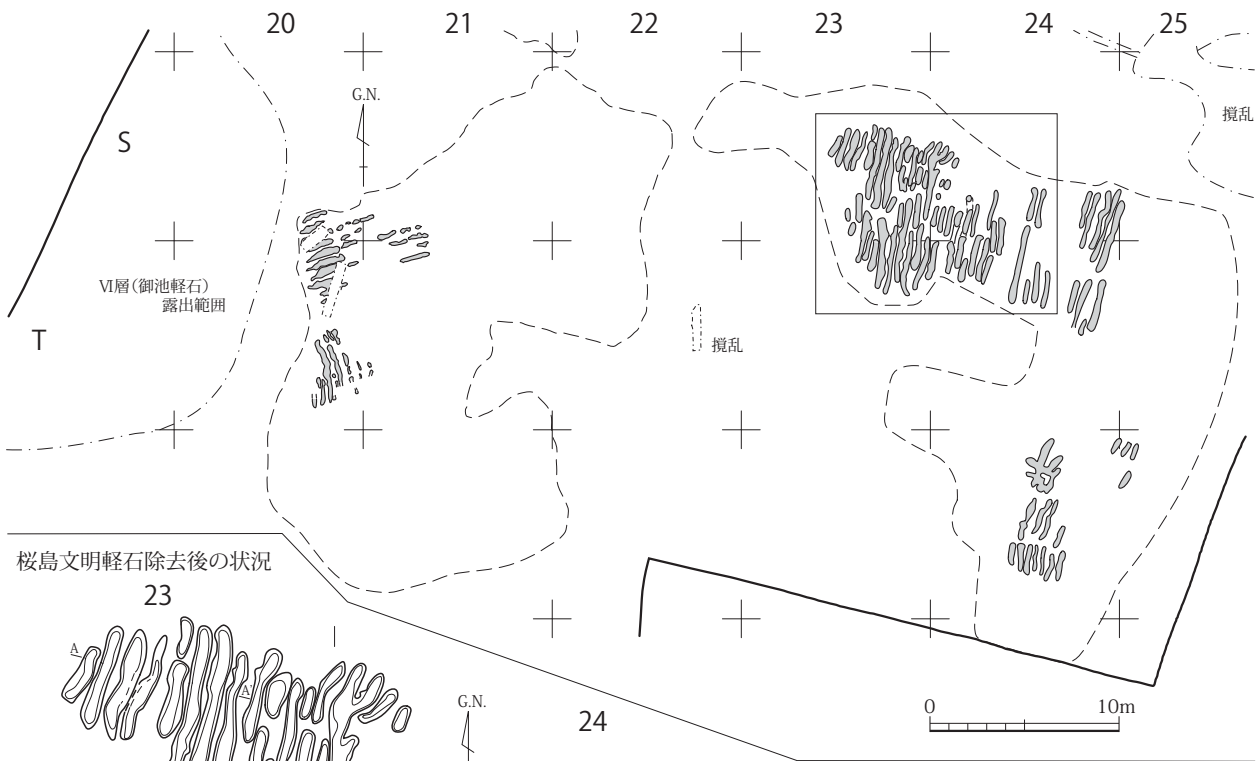
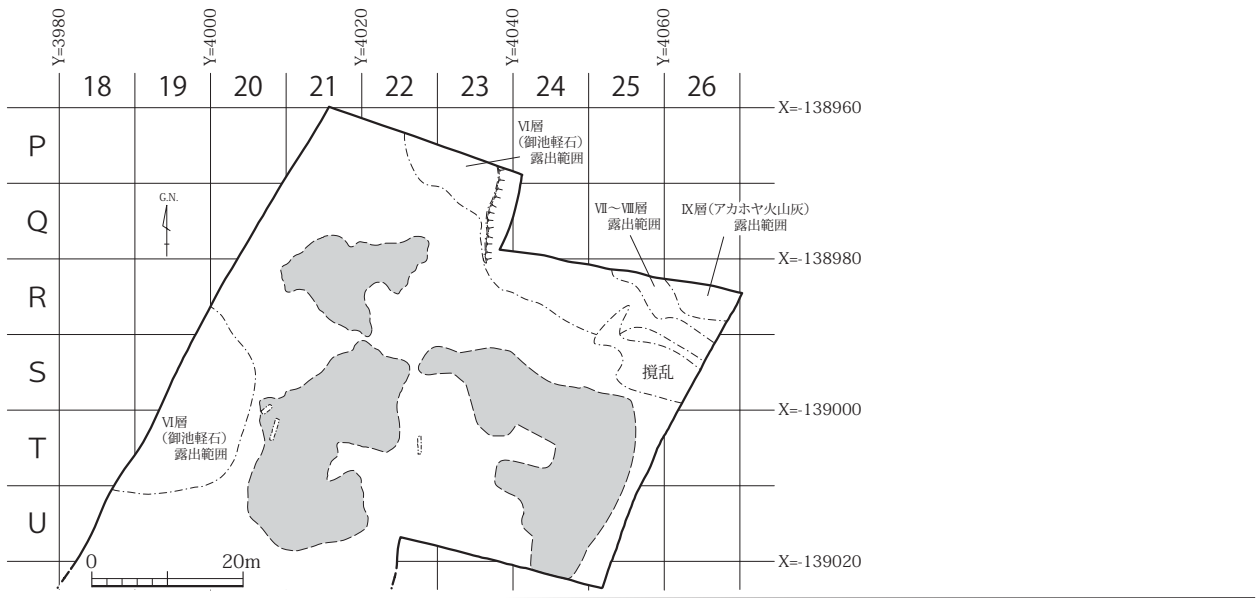
赤化



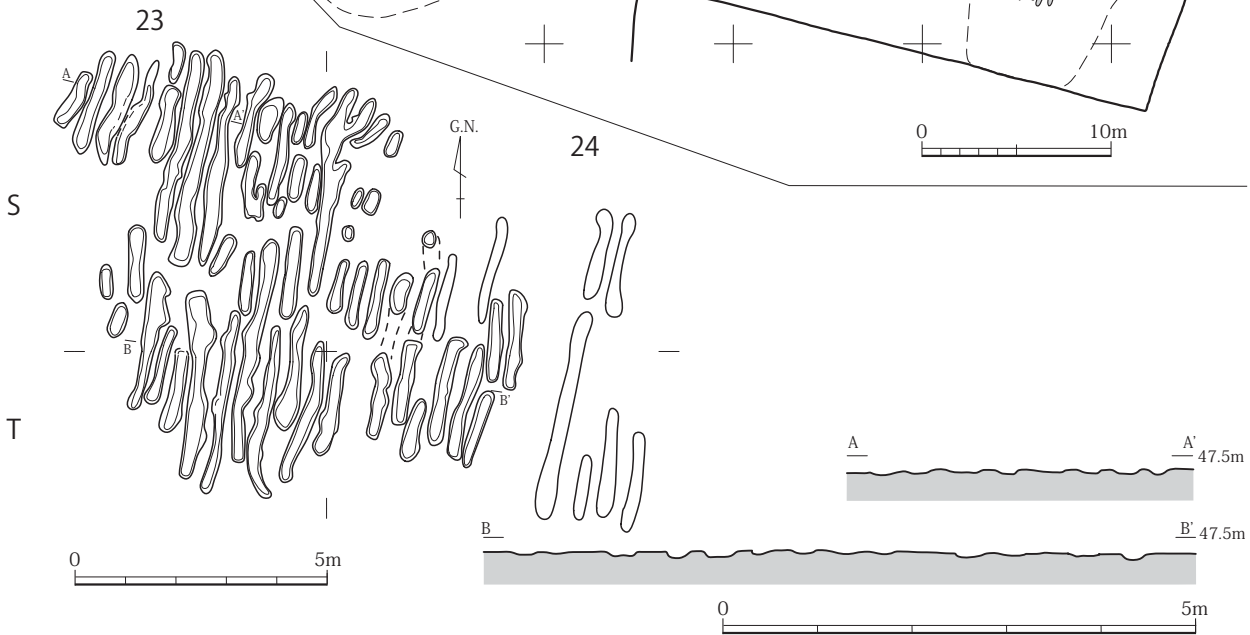
0

5cm

第50図 E地点 溝状遺構・道路状遺構出土遺物実測図 (169~184: S=1/3、186~187: S=1/2)



桜島文明軽石除去後の状況



第51図 E地点 小溝状遺構群実測図 (S=1/1,000、S=1/400、S=1/150、S=1/80)

軸方位をN-17.7°-W方向に保ち、検出した範囲では全長が約4.2m、溝幅0.4～0.6m、深さ約0.1mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は文明軽石を含む黒褐色土で、遺物の出土が認められないものの、後述するSG群1より近世の遺物が出土していることから、該期の所産と考えられる。

(3) 道路状遺構 (SG、第47図～第50図)

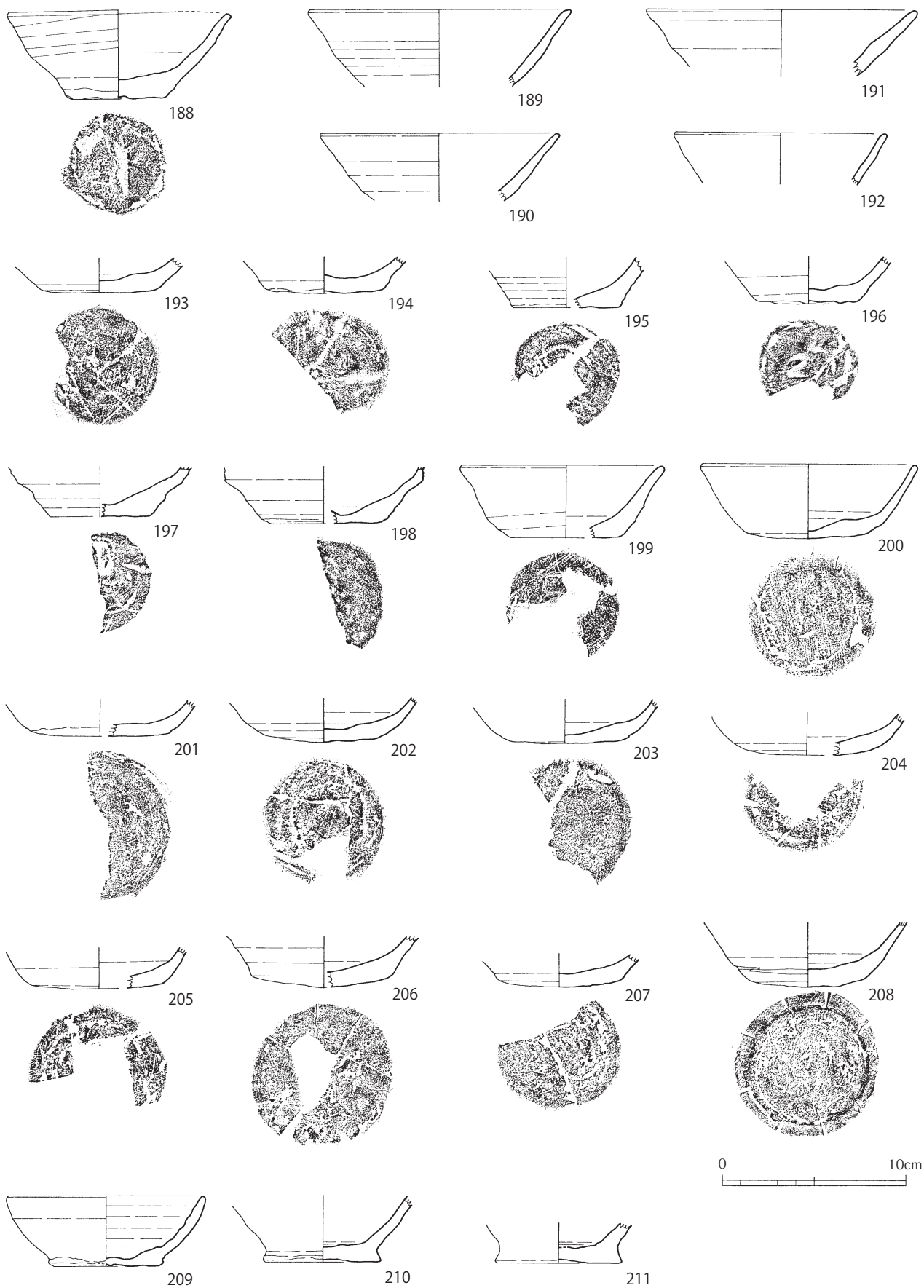
道路状遺構はE地点の中央西側から南部と北東部にかけて、2群8条が確認されている。

SG群1は調査区中央西側から南部にかけて検出し、SG1～SG5、SE5で構成される。そのうちSG1～SG3は調査区南端で確認した。削平により、深さが3条とも0.1cm未満と全体的に残りが悪い。北東部ではSG4・5と切り合うが、切り合い関係は不明である。SG1～SG3の切り合い関係については、埋土状況よりSG1、SG3がSG2を切っている。またSG2・SG3の底面には楕円形の凸凹痕が認められる。時期は埋土に桜島文明軽石を含むことから同軽石降下後の所産と考えられる。SG4は調査区南端で確認した。途中でSG5を切り、同遺構内を北北東方向へ向かって走り、Y・Z-20グリッド付近で北東方向へ向きを変えながら走行し、都城市教育委員会調査のB地点へと続く。確認された範囲は全長約45m、幅約0.4～0.85m、最深約0.3mを測り、西側の底面には円形もしくは楕円形を呈する凸凹痕が認められる。硬化面は3面認められ、そのうちの硬化面2・3は同方向・同範囲に形成されているのに対し、硬化面1は南側で部分的に認められ、一部は硬化面2・3の軸方向より、さらに35°東方向に振れる。SG5は調査区中央西側から南部にかけて確認した。東側からY・Z-20グリッド付近で北方向と南方向の2条に分岐し、さらに南側でも南西方向と南方向の2条に分岐する。確認された範囲は南北方向の長さが約60m、東西方向の長さが約38m、溝幅約0.4～5.8m、最深約0.5mを測る。そのうち東側から北側にかけて延びる部分についてはSE5と切り合い、並走しながら走行し北側端で分岐する。また南西に延びる部分から東側にかけて片側に側溝が付設し、その南西部分では側溝が埋没後、作り直しが行われている。その南西方向と南方向の2条に分岐する部分については南西側に付設する側溝の上に南部分の硬化面が形成されていることから、後続するものと考えられる。

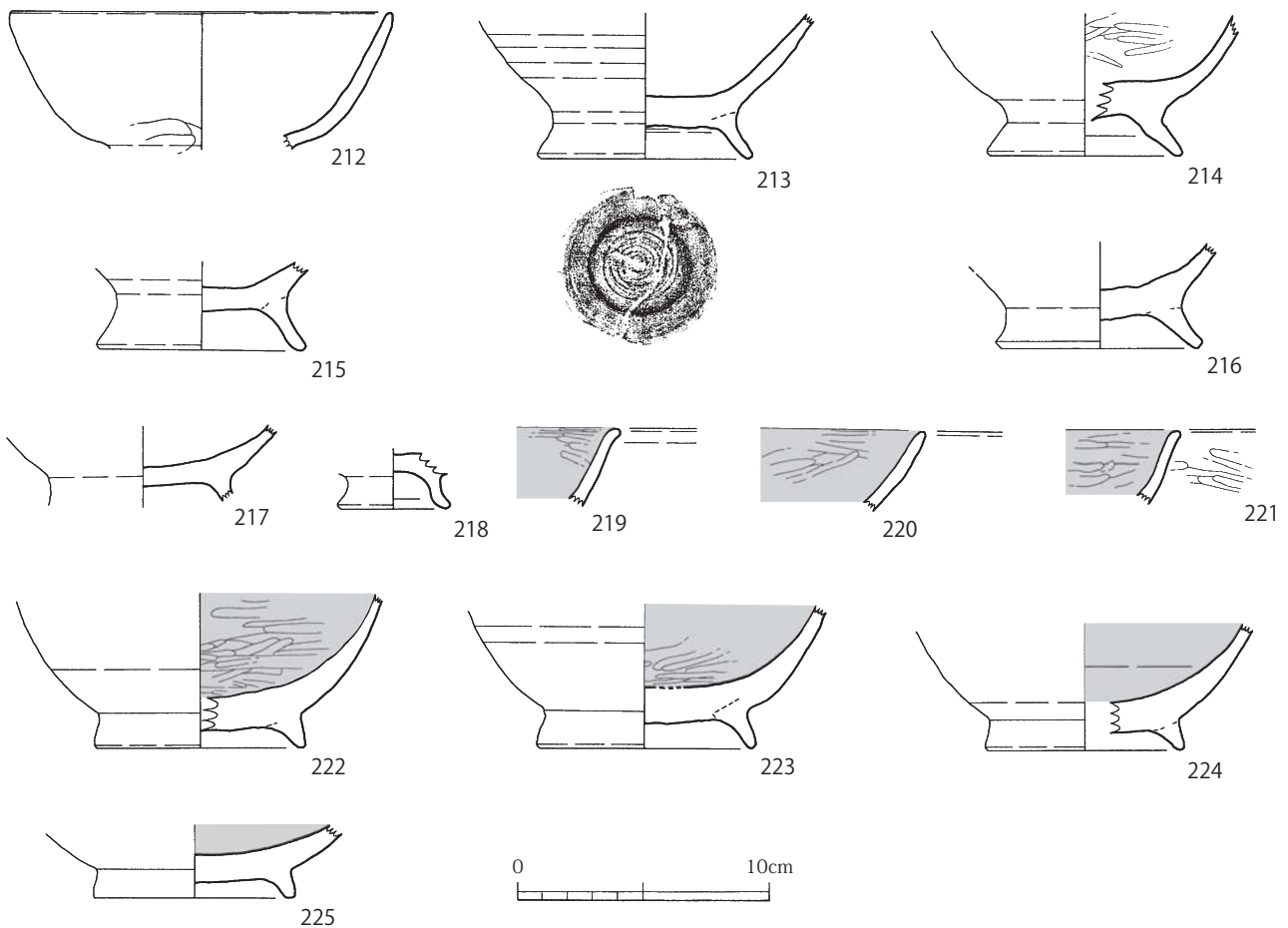
また北側と南側底面には円形もしくは楕円形を呈する凸凹痕が認められ、特に南南西に延びる部分の凸凹痕は著しい。硬化面は桜島文明軽石降下後に1面(硬化面1)、桜島文明軽石降下以前に6面の計7面認められ、そのうち桜島文明軽石降下以前のものについては硬化面6や硬化面7・8のように、段差がつくことから何度か作り替えが行われていた可能性が考えられる。また硬化面2と硬化面3の関係では、硬化面3が合流付近直前で途切れるため、同時に共用されていたかは不明である。

遺物は、円盤状高台をもつ? (171) や白磁の端反り碗 (172～174、森田分類のC類に相当し、15世紀前後の所産)、青磁では上田分類のC-II類 (14世紀後半～15世紀前半の所産) に相当する片切彫の雷文帯を施す青磁碗 (177) や端反り碗 (上田分類のD類、14世紀中葉～15世紀前半)、体部には退化したへら描き蓮弁文が施されている口折の坏 (178、15世紀の所産)、その他備前系の播鉢 (180・181) や甕の底部 (182)、磨石 (185)、軽石製品 (186・187) 等が桜島文明軽石層より下位で出土し、同層上位では唐津系の可能性が考えられる皿 (183、16世紀末～17世紀前半の所産) や陶器製の甕の胴部 (184、17世紀前半の所産) が確認されている。

SG群2は調査区北東部で検出し、SG6～SG8の3条で構成されている。そのうち、SG6・7については北東方向から南西方向に向かって並走する。両遺構とも南西部については立ち上がり認められ



第52図 E地点 古代遺物実測図1 (S=1/3)

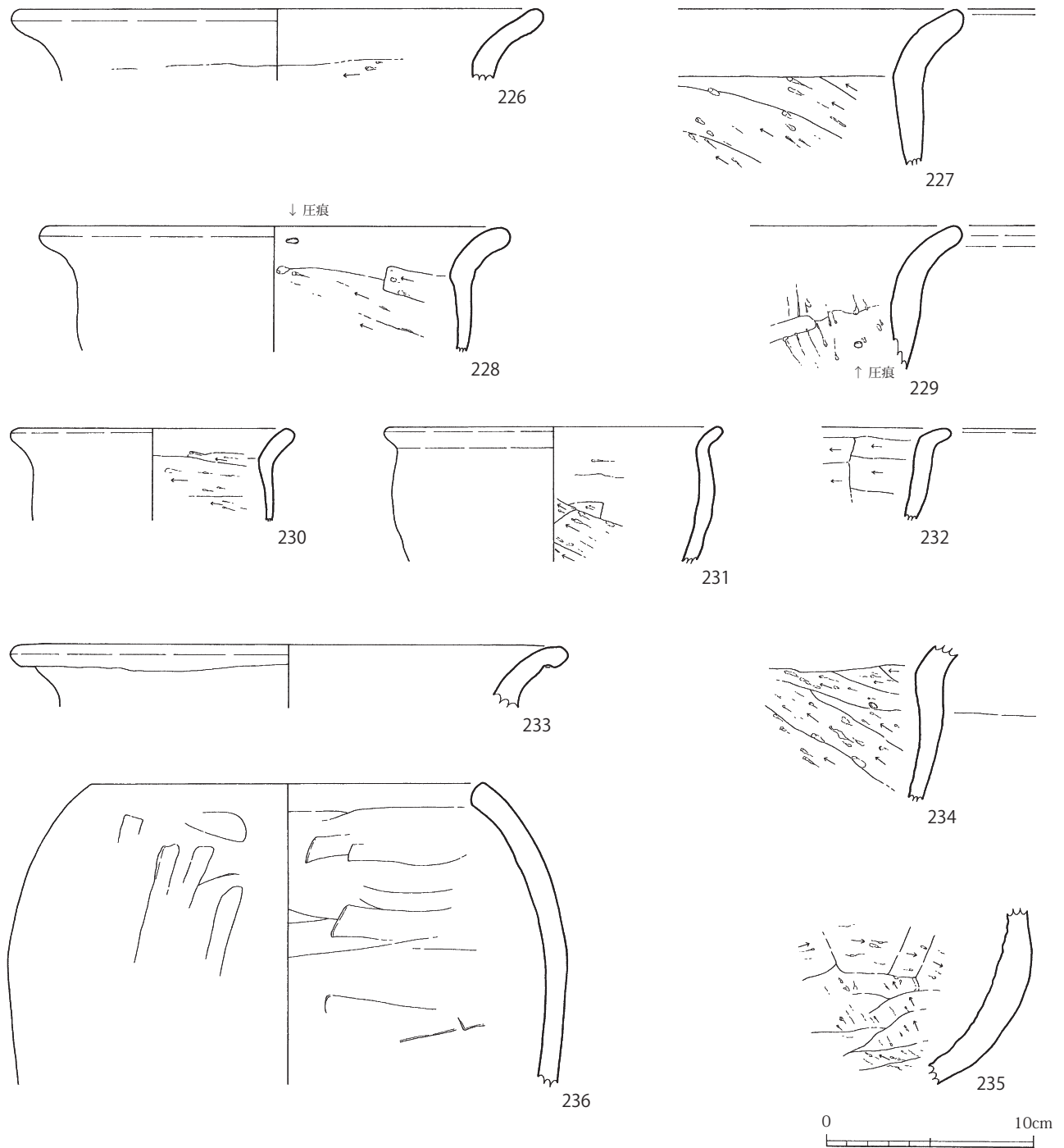


第53図 E地点 古代遺物実測図2 (S=1/3)

たが、北東部については土色の違い等が不明瞭なため、硬化面のみの検出に止まった。埋土はいずれもIV a層を由来する黒色土で遺物は確認されていないが、SE 1との切り合い関係等から古代の所産と考えられる。そのうちSG 6は蛇行しながら南西方向に向かって走り、U-24グリッド南西部付近で2つに分岐する。全長約31 m、道幅は約0.54～0.8 m、深さは最深で約0.1 mを測り、またSG 7についてはほぼ直線的に走り、全長約25.5 m、道幅は約0.45～0.58 m、深さは最深で約0.04 mを測る。遺構の北東側はSG 8の下で確認している。SG 8は調査区北東部端で確認し、北北東方向から南方向に向かって直線的に走り、B地点へと続きSG群1 (SG 4・5、SE 5)と合流する。確認された範囲での全長は約22.5 m、道幅は約1.3～1.8 m、深さは約0.36～0.45 mを測る。埋土からは、さらに2条の作り替えが確認でき、東側の埋土には桜島文明軽石が混入するのに対して、西側のものは同軽石を含む黒色土もしくは黒褐色土を含むことから、時期差があるものと考えられる。

(4) 小溝状遺構群

生産遺構(畝跡)として、小溝状遺構群がE地点北側の埋没谷上を中心に3箇所(北西・南西・南東ブロック)で確認されている。削平のため全体的に残りが悪く、深さが0.05 m未満のものがほとんどである。全体的に等高線に直交するものが多いが、南西ブロックでは等高線と並行するものや、南東ブロックでは等高線に平行するものと直交するものも認められる。遺構はU字形もしくは逆台形状の断面形を呈し、遺構間は約0.05～0.25 mと比較的狭く、埋土には桜島文明軽石が混入し、黒色土をブロック状に含むものも



第54図 E地点 古代遺物実測図3 (S=1/3)

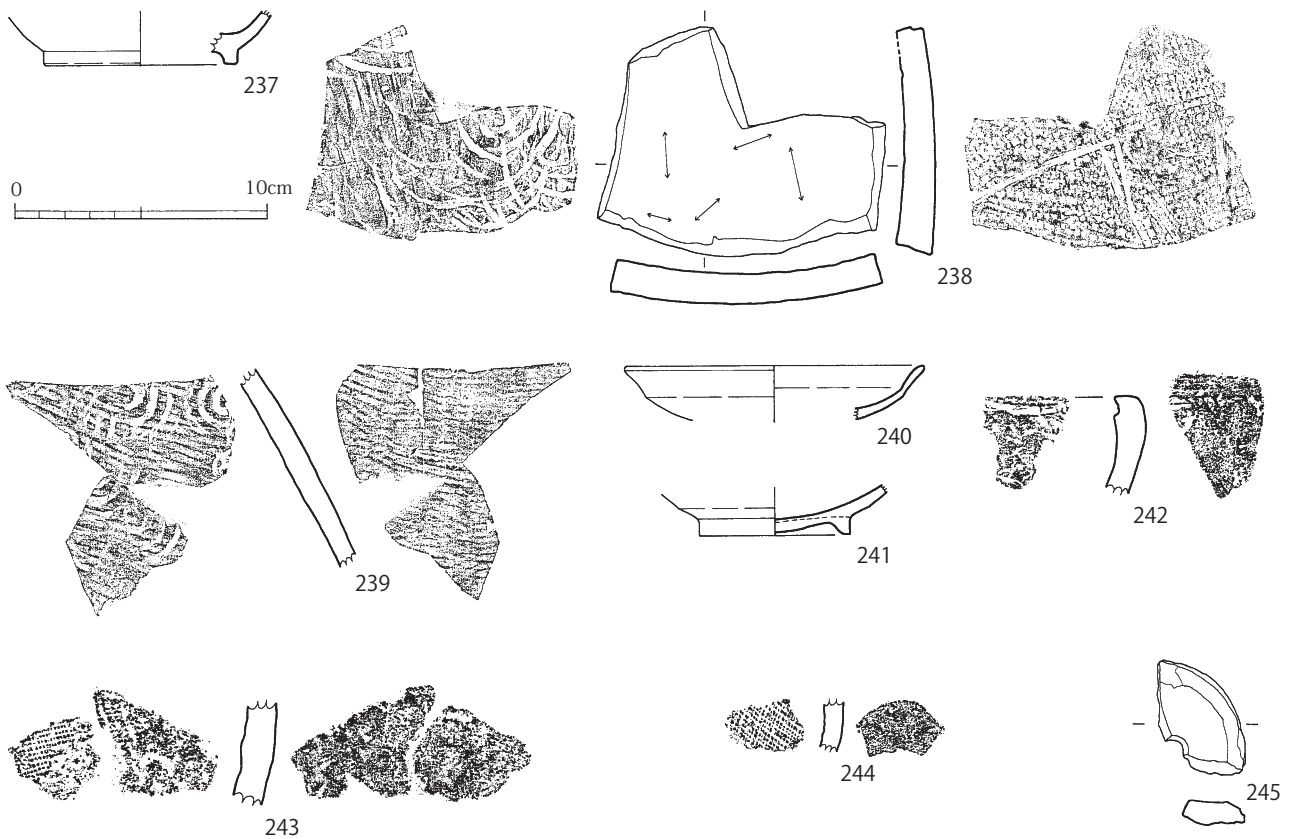
認められることから、復旧痕の可能性が考えられる。

(5) 古代の遺物

古代の遺物については、E地点埋没谷北西部（T・U 23～T・U 24 グリッド）、IV b層上部をピークに土師器や須恵器等が数多く確認されている。ここでは個々の特徴について概述する。

土師器（第52図～第54図）

土師器では坏や円盤高台？、黒色土器、甕、鉢などが出土している。そのうち188～208は坏である。



第55図 E地点 古代遺物実測図4 (S=1/3)

完形もしくは完形に復元できるものが少なく、188や199、200のわずか3点にすぎない。底部は全てヘラ切りにより切り離されており、一部は切り離し後、ナデ調整が行われているものも認められる。器形により大きく2つに大別でき、前者は底部と体部の境界が比較的明瞭で、外方に向かって直線的に開くもの(188・193～199)と後者は底部に丸味を持ち、外方に向かって緩やかに開き、体部の境界が不明瞭なもの(200～208)とに分かれる。

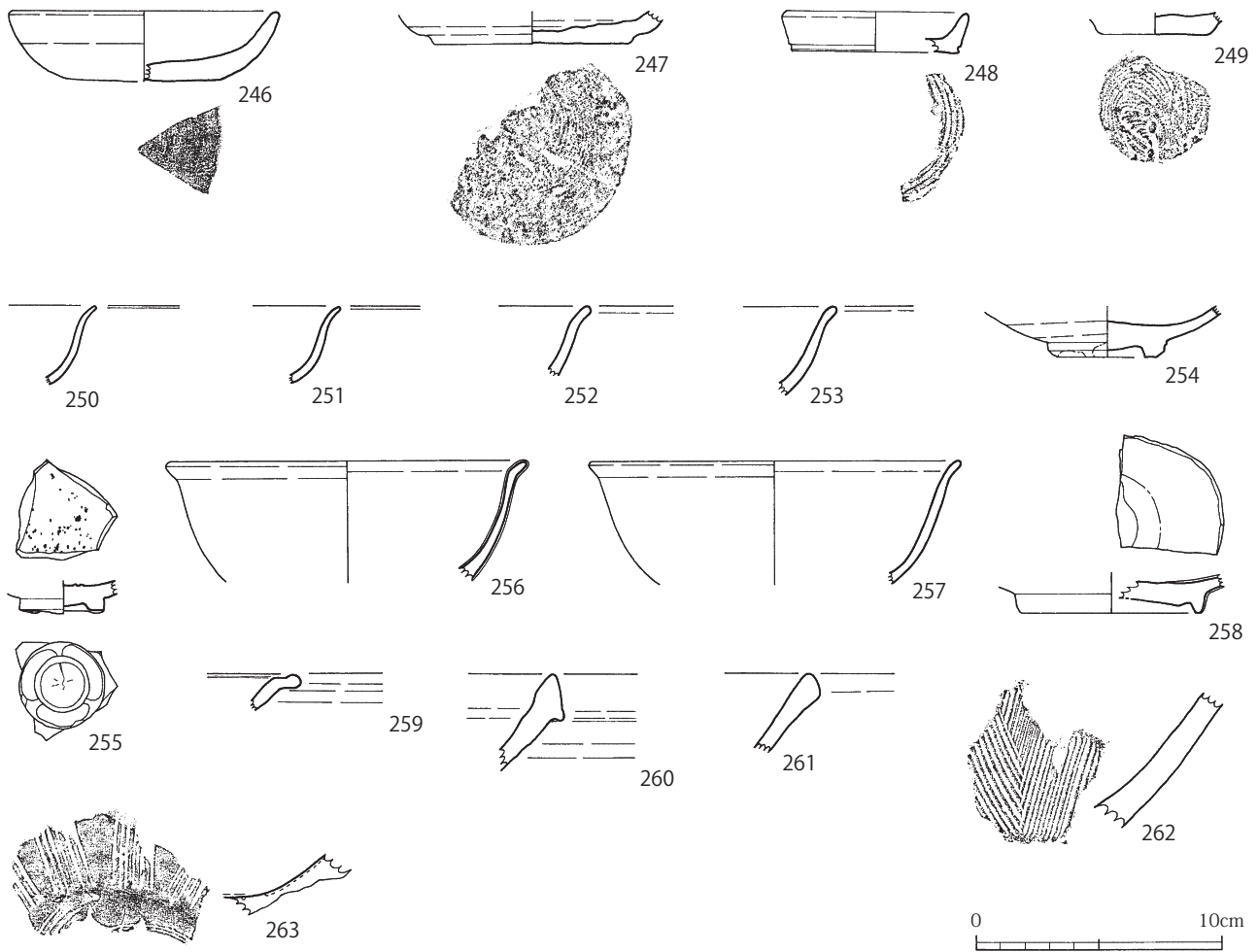
そのうち前者では、198のように体部の器壁が厚く、体部が外方に向かって延びながら、口縁部付近で上方に向かって屈曲し、幅のある直口する口縁部を有するものが認められる。また197は口縁部を失う資料であるが、ほぼ同様の特徴を有する。

底径は5.2～5.7cm(188・195～197)、6.0～6.3cm(193・194・198・199)、6.6～6.9cm(200・203・204)、7.35～7.7cm(201・205～207)の4つのグループに分かれ、前者のものは5.2～6.3cmと小型から中型のグループに入り、後者は中型から大型のグループに含まれる。

209～211は円盤高台?で、209と比して210・211の底部周縁の張り出しが強い。

212～218は高台付の?である。高台はわずかにふくらみながら外方に開き、端部が丸味を帯びるもの(213・214)と高台側面が外反しながら、端部が角張るもの(216)と端部が丸味を帯びるもの(218)とが認められる。また底径では7.5～8.2cmと4.2cm(218)と2つのグループが認められる。そのうち213・215には高台上部には、高台を貼り付け整形する際に生じた凹線状の窪みが巡り、214は高台と体部の境界が段により顕著である。また213は高台内面に高台貼付時の調整痕が明瞭に残る。

219～225は黒色土器である。図化したものは、いずれも内面にのみ黒化処理を行っているが、両面黒色のもの(小片のため未図化)も僅かに出土している。そのうち219～221は口縁部で、わずかに外反す



第56図 E地点 中世遺物実測図 (S=1/3)

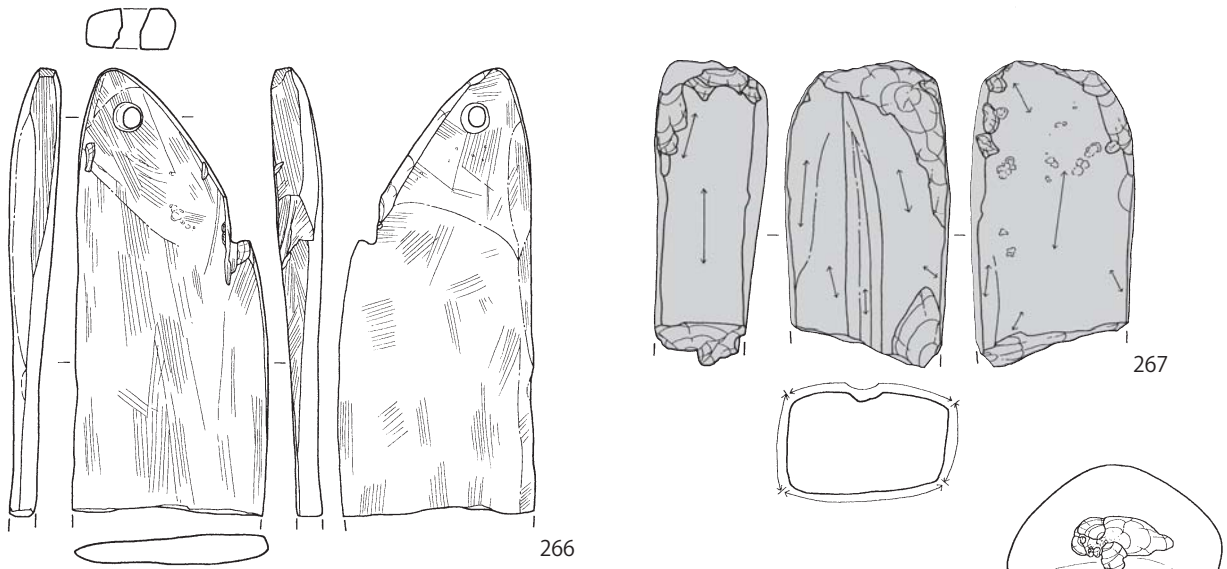
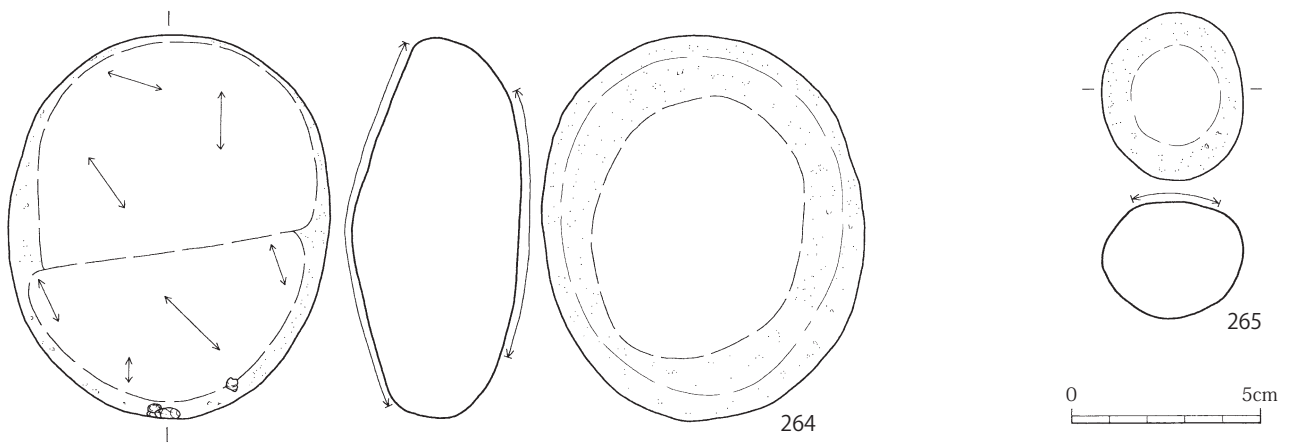
るもの(219・221)と緩やかに外方に向かい立ち上がるもの(220)が認められる。219・220は内面にミガキ調整、外面にはナデ調整が認められるが、221には両面にミガキ調整が施されている。

222～225は高台付?の体部～底部である。高台は低く、わずかにふくらみながら外方に開き、端部が丸味を帯びるもの(222～224)や端部が角張るもの(225)が認められる。調整は224と225については風化のため不明だが、他は横方向を中心としたミガキが認められる。なお、224は内面の黒化処理が甘い。

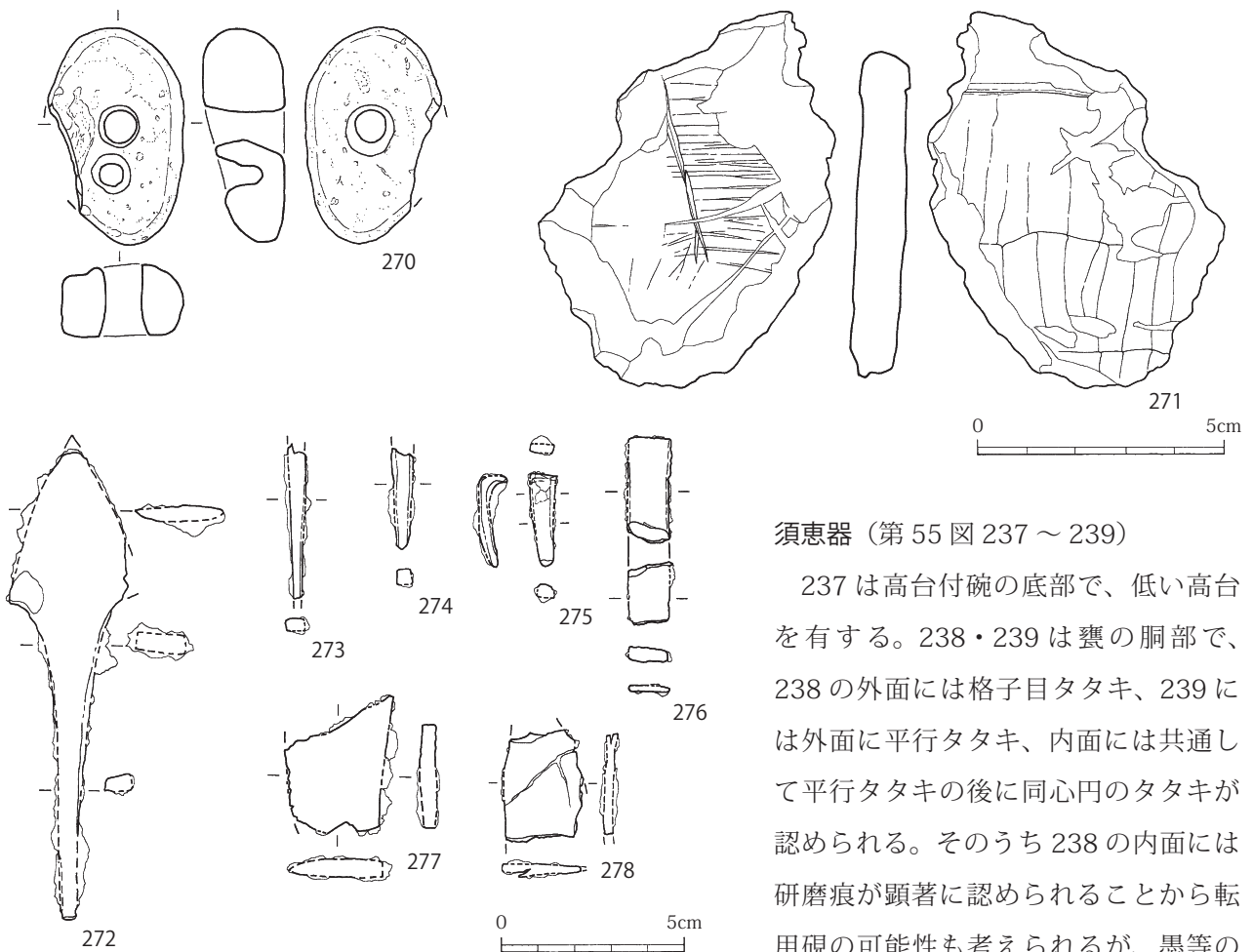
226～235は甕である。その多くに黒変もしくはスス付着が認められる。そのうち226～233は口縁部が外反し、胴部が張らず、そのまま底部に至ると考えられるもの(226～230・232)と口縁部が外反し、胴部が張るもの(231)、口縁部が外反し、端部が玉縁状を呈するもの(233)が認められ、口径は20cm以上のもの(226・228・233)と15cm前後のもの(230・231)に2つに分けられる。

いずれも口縁部に最大径を有し、外面には共通してナデ調整を施している。また胴部内面にはケズリ調整が施され、横方向のケズリ(226・230・232)や斜め方向のケズリ(227・228・231・234)、縦方向のケズリ(229)が施されている。なお228・229の口縁部内面には種子圧痕(うち228は粃圧痕、229は不明)が認められる。235は胴部下半のものである。

236は鉢で、口縁部が内湾し、胴部に最大径を有する。外面には縦方向及び横方向、内面には横方向や斜方向の工具ナデが施されている。



第57图 E地点 古代~中世石器実測图1 (264~268:S=1/2、269:S=1/4)



第58図 E地点 古代～中世石器実測図2及び鉄器実測図
(270・272～278：S=1/2、271：S=2/3)

須恵器（第55図237～239）

237は高台付碗の底部で、低い高台を有する。238・239は甕の胴部で、238の外面には格子目タタキ、239には外面に平行タタキ、内面には共通して平行タタキの後に同心円のタタキが認められる。そのうち238の内面には研磨痕が顕著に認められることから転用硯の可能性も考えられるが、墨等の付着物がないため検討を要する。

緑釉陶器（第55図240～241）

240～241は緑釉陶器の碗で、どちらも洛北産の可能性がある。そのうち、240は口縁部～体部の資料で、体部中位で屈曲し、口縁部はやや外反する。241は底部で削り出し高台を有する。釉は畳付までかかるが、釉のかけむらがあり、一部は露胎となる。

布痕土器・土製品（第55図242～245）

242～244は布痕土器である。242は口縁部で外面には粗いナデ調整が認められる。また内面には型押しの際に認められる布目の圧痕が認められない。243・244は胴部で、内面には細かい布目が認められ、244の外面には指オサエが顕著である。

245は紡錘車で、全体形の約3/4と片面を欠損する。穿孔は片側より施されている。また周縁部分に打ち欠いた跡が認められることから、おそらく坏もしくは高台付碗の底部を再利用したものと考えられる。

(6) 中世の遺物

246～248は土師器で、そのうち246・247は坏、248・249は皿である。底部は246のみヘラ切りで、その他は全て糸切りにより切り離されている。また246は他のものと比べ焼成が良好で、硬質である。

250～255は白磁である。そのうち250～253は端反り碗で、体部が丸みを帯びながら緩やかに立ち

上がり、口縁部が外反する。森田分類のC類に相当し、15世紀前後の所産である。254は体部下位から高台の一部にかけては露胎である。255は切り高台を有する碗の底部で体部下位から高台にかけて露胎とし、見込みに砂目が認められる。

256～258は青磁である。そのうち256・257は端反り碗の口縁部～体部で、丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。上田分類のD類（14世紀中葉～15世紀前半）に相当する。258は碗の底部で、全体的に釉が厚く、貫入が認められる。また高台内の釉を拭き取っているが、一部釉が残る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。

259は美濃焼の溝縁皿の口縁部である。内外面とも貫入が認められる。260・261は東播系須恵器の鉢である。いずれも口縁部の断面形が三角形を呈し、そのうち260は口縁外端部が垂れ下がる。

262は土師器の鉢もしくは鍋であろうか。外面には斜め方向のケズリ調整が施され、内面には斜めにハケ目調整が認められる。焼成が良好で、硬質である。263は在地系の瓦質の播鉢である。6条1単位とする播目が認められる。

(7) 石製品 (第57図・第58図 264～271)

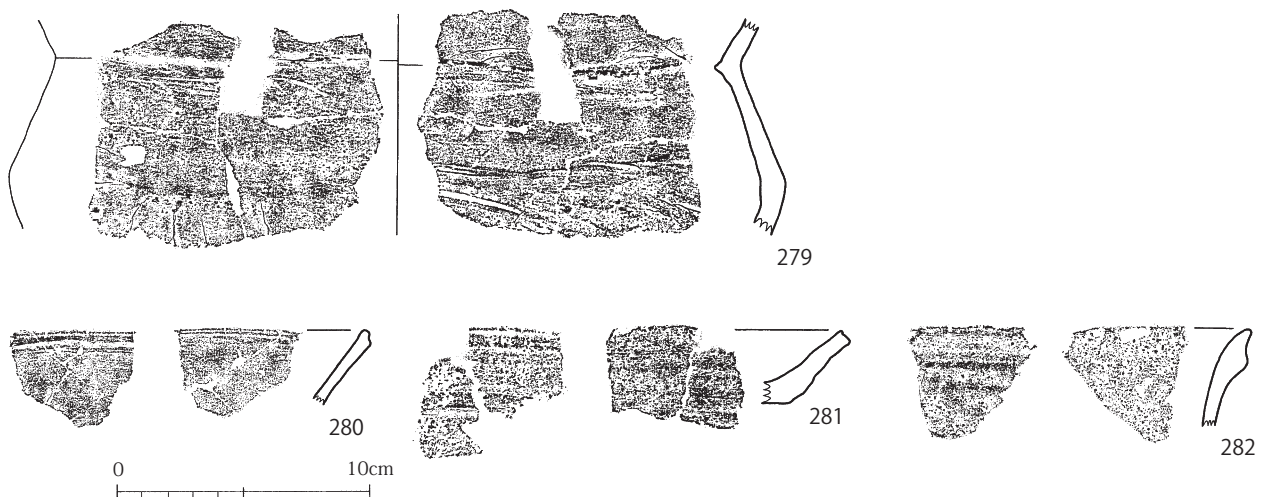
264・265は磨石である。264は砂岩製で、両面に磨面が認められる。特に片面には使用により、中央に稜が入る。265は安山岩製で、片面にのみ磨面が認められる。

266～269は砥石で全て砂岩製である。266は下半を欠損するが、上端部には両面から穿孔が施されている。267～269には全面もしくは一部に赤化がみられ、そのうち267には有溝が、268の両端には敲打痕が認められる。

270は軽石製品である。穿孔が2箇所認められ、そのうちの1箇所は両面から加工を行い、貫通している。271は滑石製石鍋の胴部片を利用し、縁辺に加工を施している。

(8) 鉄製品 (第58図 272～278)

272～274は鉄鍬である。そのうち272は鍬身が三角形を呈する。273・274は茎部で、断面形は方形を呈する。275は小型の鉄釘である。頭部が折れ曲がることから、折釘と考えられる。276～278は用途



第59図 E地点 縄文土器実測図 (S=1/3)

不明で、板状を呈する。

4. その他の時期の遺物

(1) 縄文土器 (第 59 図 279 ~ 282)

E 地点では、少量ながら縄文時代晩期の土器が出土している。そのうち 279 は深鉢で頸部及び胴部で「く」字状に屈曲し、特に頸部内面には明瞭な稜が認められる。内外面ともナデ調整が施されている。晩期中葉の入佐式土器に相当する。280 は磨研土器の浅鉢で、口縁部外面には沈線文が巡る。282 は無刻目突帯文土器である。

図面 番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
123	弥生土器	甕 胴部	E 地点 S A 1				斜方向にナデ	ナデ	良好	灰褐色	灰褐色	1.5mm以下の褐色粒、2.5mm以下の黒褐色・ 不透明光沢粒、3mm以下の灰白粒を含む	外面：スス付着 内面：全体的に風化
127	弥生土器	小型鉢 口縁部 ～底部	E 地点 S A 2	推定 10.2	4.4	推定 10.95	全体的に不定方向のナデ 指オサエ	全体的に不定方向のナデ 指オサエ	良好	灰黄色	灰黄色	2mm以下の半透明光沢粒、4mm以下の褐灰・ 灰白・褐色・黒褐色粒を含む	外面：圧痕、黒変
126	弥生土器	壺 口縁部 ～胴部	E 地点 S A 2	推定 13.05			横方向のナデ 縦方向のミガキ	横方向のナデ、縦・斜方向 の工具ナデ、指オサエ	良好	明黄褐色 褐色	にぶい黄褐色 黄褐色	2mm以下の金色粒、3mm以下の白・橙褐色 粒、6mm以下の暗赤褐・黒色粒を含む	外面：部分的に黒変 内面：風化著しい
130	弥生土器	壺 口縁部	E 地点 S C 5				横方向のナデ	横方向のナデ	良好	橙 色	橙 色	微細な透明光沢粒、1mm以下の褐色粒、2.5 mm以下の不透明光沢粒及び灰褐色粒を含む	
131	弥生土器	高坏 脚部	E 地点 S C 5				円形の透かし 横方向のナデ、一部工具痕	横方向のミガキ、一部工具痕	良好	淡黄色	黒 色	1.5mm以下の灰白・赤褐色粒、3mm以下の 黒褐色粒、4mm以下の褐色・褐灰色の砂粒 を含む	
132	弥生土器	甕 口縁部	E 地点 遺物集1				横方向のナデ 指オサエ	ナデ? 指オサエ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色及び透明光沢粒、2.5mm以 下の黒褐色粒、3mm以下の褐灰色粒、4.5 mm以下の灰褐色粒を含む	内面：全体的に風化
133	弥生土器	甕 口縁部	E 地点 遺物集1				横方向のナデ、ナデ 指オサエ	横方向のナデ 指オサエ	良好	橙色	にぶい褐色	2mm以下の灰白色・黒色・透明光沢・黒色 柱状光沢粒、4mm以下の赤褐色粒を含む	外面：スス付着 内面：植物圧痕
134	弥生土器	壺 頸部 ～底部付近	E 地点 遺物集1				ナデの後にハケ目	縦方向にナデ	良好	浅黄褐色	黄灰色	2mm以下の赤褐・灰褐色・褐灰・灰褐色粒 及び透明光沢粒、2.5mm以下の黒色光沢粒 を含む	外面：スス付着 内面：風化著しい
135	弥生土器	壺 口縁部 ～底部	E 地点 遺物集1	推定 25.6	推定 10.7	推定 55.5	櫛波状、線刻、横方向に ナデ、指おさえ、斜方向 (一 部不定方向)・縦方向に工 具ナデ、ミガキ	横方向のナデ、縦方向及び 斜方向のハケ目	良好	灰黄褐色	黄灰色	2mm以下の黒色粒、3mm以下の褐・黒褐色 粒、5mm以下の灰褐色・褐灰・灰白粒を含 む	外面：スス付着内面： 全体的に風化・剥落が 著しい
139	弥生土器	甕 口縁部	E 地点 V a 層				貼付刻目突帯 横方向のナデ、ナデ	ナデ 全体的に風化	良好	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の褐色粒及び黒色光沢粒、1.5mm 以下の灰白粒、2mm以下の褐灰・にぶい 褐色粒を含む	外面：スス付着
140	弥生土器	甕 口縁部	E 地点 IV b 層				口縁部に台形状の貼付突帯 その下に2条の貼付突帯 横方向のナデ、斜方向のハ ケ目	横・斜方向のナデ、ナデ 指オサエ	良好	暗褐色	褐 色	1mm以下の黒褐色粒、2mm以下の光沢金色粒、 3mm以下の乳白粒、4mm以下の赤褐色粒を 含む	
141	弥生土器	甕 口縁部	E 地点 V a 層				口縁部に台形状の貼付突帯 横ナデ	横ナデ斜方向にナデ	良好	灰褐色 明赤褐色	にぶい褐色	2mm以下の不透明光沢粒、3mm以下の褐灰 色・褐色粒及び金色光沢粒、4mm以下の橙 色粒を含む	外面：スス付着
142	弥生土器	甕 口縁部	E 地点				貼付刻目突帯 横方向のナデ、指オサエ	横方向のナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の赤褐色・黒色光沢粒、2mm以下 の赤褐色・透明光沢粒を含む	
143	土師器	甕 口縁部	E 地点 IV b 層				横方向のミガキ 横方向のナデ指オサエ	横方向のミガキ	良好	にぶい赤褐色	灰褐色	2mm以下の透明光沢粒・赤褐色粒・褐色粒 を含む	
144	弥生土器	甕 口縁部 ～胴部	E 地点 底層7a層 V a 層	推定 16.4			横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、ナデ	良好	にぶい褐色	橙 色	2mm以下の赤褐色粒、3mm以下の白色・黒 色・透明光沢粒、4mm以下の灰褐色粒を含む	外面：スス付着
145	弥生土器	甕 口縁部 ～胴部	E 地点 V a 層	推定 25.2			縦及び斜方向の粗いナデ 指オサエ	横ナデの後に指オサエ 全体的に粗いナデ	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色粒及び黒色光沢粒、3mm以 下の灰白・黄灰色粒、4mm以下の灰褐色・ にぶい褐色粒及び不透明・透明光沢粒、7 mm以下の赤褐色粒を含む	146 と同一個体か 外面：黒変 内面：全体的に風化
146	弥生土器	甕 胴部 ～底部	E 地点 V a 層	推定 7.3			縦・斜方向の工具痕、横方 向のナデ、指オサエ	縦方向の工具痕、指オサエ	良好	にぶい黄褐色	灰黄色 褐色	2mm以下の透明光沢粒及び灰白・黒色粒、 3mm以下の不透明光沢粒、4mm以下のにぶ い褐色・灰褐色・褐灰色粒を含む	145 と同一個体か 外面：一部スス付着 内面：灰化物付着
147	弥生土器	壺 口縁部	E 地点 IV b 層				口唇部に竹管文櫛波状文	ナデ	良好	にぶい褐色	橙 色	1mm以下の赤褐色・半透明光沢粒、2mm以 下の黒褐色粒を含む	
148	弥生土器	壺 胴部	E 地点 V a 層				三条の貼付突帯 指オサエ	横方向にナデ 指オサエ	良好	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の金色光沢粒、3mm以下の灰白・ 赤褐色粒を含む	外面：スス付着
149	弥生土器	壺 頸部 ～胴部	E 地点 V a 層				縦及び横・斜方向のミガキ	ミガキ、横及び斜方向のナデ	良好	橙 色	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐・褐灰色粒、4mm以下のに ぶい黄褐色粒を含む	内面：一部黒変
150	弥生土器	壺 頸部 ～胴部	E 地点 V a 層				不定方向にナデ	指オサエ、斜方向の工具痕 横・縦方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	灰黄色	1mm以下の透明光沢粒及び灰白粒、3mm以 下の赤褐・褐灰・黒褐色粒を含む	外面：全体的に風化、 スス付着 内面：一部黒変
151	弥生土器	壺 口縁部	E 地点 V a 層				横方向のナデ、縦方向の工 具ミガキ	横方向のナデ、横方向及び 斜方向のナデ	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の不透明光沢粒、2mm以下の黒色 光沢粒、5mm以下の灰褐色粒を含む	152 と同一個体
152	弥生土器	壺 肩部 ～胴部	E 地点 IV b 層				横方向・縦方向のミガキ	縦方向のナデ、縦方向の工 具ナデ 指オサエ	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	2mm以下の透明光沢粒及び黒色・灰白色粒、 3mm以下のにぶい黄褐色粒及び不透明光沢 粒、4mm以下のにぶい赤褐色・褐灰色・灰 褐色粒を含む	151 と同一個体 外面：スス付着
153	弥生土器	小型壺 口縁部 ～胴部	E 地点 V a 層	推定 8			口唇部に指オサエ	ナデ、指オサエ縦・斜方向 の工具ナデ	良好	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	浅黄色 にぶい褐色	1mm以下の黒色粒、2mm以下の灰白色光沢・ 褐灰色粒、3mm以下の赤褐・黄褐色粒を含 む	外面：風化著しく調整 不明
154	弥生土器	小型壺 頸部	E 地点 IV a・V a 層				横ナデ 刺突による線刻文	ナデ 粘土のつぎ目	良好	にぶい黄褐色 橙 色	橙 色	1mm以下の灰白・金色粒、2mm以下の黒色・ 赤褐・褐色粒を含む	内面：風化気味
155	弥生土器	壺 胴部 ～底部付近	E 地点 V a 層				不定方向のナデ 部分的に粗いナデがみられ る (底部付近)	斜方向の工具痕	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色粒、2mm以下の不透明・透 明光沢粒、3mm以下の灰褐色粒、4mm以下 の赤褐色・灰白粒、5mm以下の褐灰・にぶ い褐色粒を含む	内面：全体的に風化
156	弥生土器	壺 底 部	E 地点 IV b 層	推定 7.3			ナデ	ナデ	良好	にぶい黄褐色	灰 色	1mm以下の黒色・褐・灰白粒、8.5mm以下 の灰褐色粒を含む	外面：黒変 内面：全体的に風化
157	弥生土器	高坏 脚部	E 地点 IV b 層				縦方向のハケ目	ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰白・黒色・半透明光沢粒、3 mm以下の暗褐色粒を含む	外面：風化が著しい
158	弥生土器	高坏 脚部	E 地点 IV b 層				縦・斜方向のハケ目	ナデ 指オサエ	良好	橙 色	明黄褐色	1mm以下の黒色粒、2mm以下の灰白色・半 透明光沢粒、3mm以下の暗褐色粒を含む	外面：風化気味

第 7 表 E 地点 土器観察表 1

図面番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面			
159	弥生土器	鉢口縁部	E地点 V a層				ナデ、斜方向のナデ	工具による横方向のナデ	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	2mm以下の白色・黒色・半透明光沢粒、3mm以下の赤褐色粒を含む		
160	弥生土器	手捏ね土器口縁部～底部	E地点 V a層		3.35	2.37	指オサエ	指オサエ	良好	にぶい黄色	灰黄色	1mm以下の赤褐・灰白色粒を含む	スス付着	
169	土師器	高台付碗体部	E地点 S E 1				回転ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5mm以下の微細粒を含む		
170	土師器	杯体部～底部	E地点 S E 5		6.6		回転ナデ糸切り底	ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の赤褐色粒を含む		
171	土師器	円盤高台碗底部	E地点 S G群 1		6.7		回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐色粒を含む		
172	白磁	端反碗体部～底部	E地点 S G群 1		推定 5.2		施釉露胎	施釉露胎	堅緻	明オリブ灰色	明オリブ灰色	精良	15世紀	
173	白磁	端反碗口縁部	E地点 S G群 1				施釉	施釉	堅緻	オリブ灰色	オリブ灰色	精良	15世紀	
174	白磁	端反碗口縁部～底部付近	E地点 S G群 1		推定 9.2		施釉	施釉	堅緻	灰白色	灰白色	精良	15世紀	
175	青磁	端反碗口縁部	E地点 S G群 1		推定 12.6		施釉	施釉	堅緻	オリブ灰色	オリブ灰色	精良	龍泉窯系 14世紀中葉～15世紀前半	
176	青磁	端反碗口縁部	E地点 S G群 1				施釉	施釉	堅緻	灰色	灰色	精良	龍泉窯系 14世紀中葉～15世紀前半	
177	青磁	碗口縁部～底部	E地点 S G群 1		推定 14.1	推定 7	雷文帯、施釉露胎、砂目	見込みに印花文、施釉	堅緻	灰オリブ色	灰色	精良	龍泉窯系 14世紀中葉～15世紀前半	
178	青磁	杯口縁部～体部	E地点 S G群 1		推定 11		ヘラ描き蓮弁文 施釉	施釉	堅緻	オリブ灰色	オリブ灰色	精良	龍泉窯系 15世紀	
179	青磁	碗底部	E地点 S G群 1		推定 6.0		施釉	施釉	堅緻	灰オリブ色	灰オリブ色	精良		
180	陶器	楕円口縁部	E地点 S G群 1				自然釉横ナデ	横ナデ	堅緻	灰褐色にぶい赤褐色	灰褐色	1.5mm以下の灰白色粒、3.5mm以下のにぶい赤褐色・にぶい橙色粒を含む	備前系	
181	陶器	楕円底部付近	E地点 S G群 1				横方向のナデ指オサエ	楕目 (7条 1単位)	堅緻	浅黄色	にぶい黄色	3mm以下の褐灰色粒、4mm以下の灰白色粒を含む	備前系スス付着	
182	陶器	裏底部	E地点 S G群 1				回転ナデナデ	回転ナデ	堅緻	暗褐色	暗褐色	微細な透明光沢粒、2mm以下の黒褐色粒、3mm以下の灰白色粒を含む	備前系	
183	陶器	皿底部	E地点 S G群 1		推定 4.95		回転ナデ露胎、削り出し高台	施釉、貫入	堅緻	にぶい黄褐色	にぶい橙色	1mm以下の赤褐・褐灰・灰褐色・灰白色粒を含む	唐津系か 16世紀末～17世紀前半	
184	陶器	裏胴部	E地点 S G群 1				施釉突帯 (断面三角形)、縄状突帯	施釉	堅緻	灰色	褐色	精良	肥前系か 17世紀前半	
188	土師器	杯口縁部～底部	E地点 V a層		12	5.2	4.8	回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1mm以下の黒色粒を含む	外面：部分的に黒変
189	土師器	杯口縁部～体部	E地点 IV b層		推定 14			回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	灰褐色	微細な透明光沢粒、0.5mm以下の黒色粒を含む	外面：部分的に黒変
190	土師器	杯口縁部～体部	E地点 IV b層		推定 12.9			回転ナデ	回転ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm以下の白色粒、2.5mm以下の黒色粒を含む	
191	土師器	杯口縁部～体部	E地点 IV b層		推定 14.5			回転ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色粒を含む	体部に大きな歪み有り
192	土師器	杯口縁部～体部	E地点 IV b層		推定 11.3			回転ナデ	回転ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐色・黒色光沢粒を含む	
193	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		推定 6			回転ナデヘラ切り底 板状? 工具痕	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	褐色	1mm以下の灰白色粒、1.5mm以下の赤褐色粒を含む	
194	土師器	杯底部	E地点 IV b層		推定 6.1			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい橙色	微細な白色光沢粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	
195	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		推定 5.7			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の灰白色粒を含む	
196	土師器	杯底部	E地点 IV b層		推定 5.45			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	浅黄色	浅黄色	1.5mm以下の灰白色粒を含む	外面：風化気味、スス付着
197	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		推定 5.3			回転ナデヘラ切り底 工具痕	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な灰白・黒褐色粒、1mm以下の黒色・灰色光沢粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	
198	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		推定 6			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な透明及び黒色光沢・灰白色粒を含む	内外面：全体的に風化
199	土師器	杯口縁部～底部	E地点 IV b層		推定 11	6	推定 3.95	回転ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な黒色粒、1mm以下の褐色粒を含む	一部スス付着?
200	土師器	杯口縁部～底部	E地点 IV b層		推定 11.5	6.6	推定 4.05	回転ナデ、ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ	回転ナデナデ	良好	褐色にぶい黄褐色	褐色にぶい黄褐色	1mm以下の褐灰色粒、2.5mm以下の赤褐色粒を含む	
201	土師器	杯底部	E地点 IV a層		推定 7.7			回転ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐・灰白色粒を含む	
202	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		6.14			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	褐色	1mm以下の黄灰色粒、2mm以下の赤褐色・黒色粒を含む	
203	土師器	杯底部	E地点 IV b層		推定 6.95			回転ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色褐灰色	褐色褐灰色	1mm以下の黒色・灰色光沢粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	外面：スス付着?
204	土師器	杯底部	E地点 IV a層		6.65			回転ナデ、指オサエヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい橙色	褐色	微細な透明光沢粒、2mm以下の白色・茶褐色粒を含む	
205	土師器	杯底部	E地点 IV b層		7.35			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ粘土のつなぎ目	良好	にぶい橙色	褐色	微細な透明光沢粒、1mm以下の黒色粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	
206	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		推定 7.6			回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色粒、3mm以下の灰白色粒を含む	
207	土師器	杯底部	E地点 IV b層		7.65			回転ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ?	回転ナデ	良好	にぶい橙色灰褐色	褐色	1mm以下の赤褐色・透明光沢・黒色柱状光沢粒、2mm以下の黒色粒、4mm以下の白色粒を含む	外面：黒変
208	土師器	杯体部～底部	E地点 IV b層		6.3			回転ナデヘラ切り底ヘラ切り後ナデ?	回転ナデ	良好	褐色にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の灰色光沢・黒色粒、4mm以下の赤褐色粒を含む	外面：部分的に黒変
209	土師器	円盤高台碗口縁部～底部	E地点 IV b層		推定 10.6	推定 5.6	推定 3.8	回転ナデの後に斜方向のナデ 工具痕有りヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm以下の透明の光沢粒及び灰白・黒色粒、2mm以下の黒褐色粒、3mm以下の不透明光沢粒及び褐色粒を含む	外面：一部スス付着?、黒変

第8表 E地点 土器観察表2

図面番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面			
210	土師器	甕高台碗体部～底部	E地点IV b層		推定6.2		回転ナデヘラ切り底ヘラ切りの後にナデ?	回転ナデ	良好	にぶい黄色	にぶい黄色	微細な光沢粒、3.5mm以下の灰黄色粒を含む	外面：一部スス付着?、黒変	
211	土師器	甕高台碗体部～底部	E地点IV b層		推定6.7		回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	微細な光沢粒、1mm以下の灰白色粒を含む		
212	土師器	高台付碗口縁部～体部	E地点IV b層		推定15		回転ナデ、工具痕 (横方向)	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	灰黄色褐色	微細な黒色及び透明光沢粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	外面：スス付着	
213	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV b層		推定8.2		回転ナデ一部斜方向のナデ、丁寧なナデ	丁寧なナデ	良好	橙 色	橙 色	微細な透明光沢粒、2mm以下の黒色粒、3mm以下の赤褐色粒を含む	外面：黒変	
214	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV ab層		推定7.5		丁寧なナデ回転ナデ	ミガキ	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色	微細な灰色光沢粒、1mm以下の黒色粒、2mm以下の灰色粒を含む		
215	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV b層		推定8		回転ナデナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	橙 色	1mm以下の黒褐色粒、5mm以下の赤褐色粒を含む	外面：風化気味	
216	土師器	高台付碗底部	E地点IV b層		推定7.8		回転ナデ粘土のつぎ目、ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒色光沢・灰色光沢粒、2mm以下の褐灰色粒、3mm以下の褐色・赤褐色粒を含む	内外面：風化著しい	
217	土師器	高台付碗底部	E地点IV b層				ナデ、一部工具痕による凹有り指オサエ	ナデ	良好	橙 色	橙 色	微細な光沢粒、1.5mm以下の黒褐色粒、3mm以下の赤褐色粒を含む	内面：全体的に風化	
218	土師器	高台付碗底部	E地点IV b層		推定4.2		ナデ回転ナデ	ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	微細な黒褐色粒、1mm以下の灰白色粒を含む		
219	土師器	高台付碗口縁部～体部	E地点Va層				丁寧なナデ横方向にナデ	横方向にミガキ (黒化処理)	良好	にぶい黄褐色	黒 色	微細な透明光沢粒及び黒色光沢粒・灰白色粒を含む	黒色土器 (内黒) 外面：風化気味	
220	土師器	高台付碗口縁部～体部	E地点IV b層				横方向のナデ	横・斜方向のミガキ (黒化処理)	良好	にぶい黄褐色	黒 色	微細な黒色粒、1mm以下のにぶい赤褐色粒を含む	黒色土器 (内黒) 外面：風化気味	
221	土師器	高台付碗口縁部～体部	E地点IV b層				横方向のミガキ	横方向のミガキ (黒化処理)	良好	にぶい黄褐色	暗灰黄色	1mm以下の不透明光沢粒及び黒褐色・暗褐色粒を含む	黒色土器 (内黒)	
222	土師器	高台付碗体部～底部	E地点Va層		推定8.2		回転ナデ縦・斜方向に工具によるナデ	斜・横方向のミガキ (黒化処理) 一部ハケ目?	良好	橙 色	黒 色	1.5mm以下の黒色粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	黒色土器 (内黒) 外面：風化気味	
223	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV b層		推定8.4		回転ナデ斜方向に工具によるナデ	斜・横方向のミガキ (黒化処理)	良好	橙 色	黒 色	1mm以下の黒色粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	黒色土器 (内黒) 外面：風化気味	
224	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV b層		推定7.6		回転ナデ、ナデ	ミガキ (黒化処理)	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色粒を含む	黒色土器 (内黒) 内外面：風化気味	
225	土師器	高台付碗体部～底部	E地点IV b層		推定8		回転ナデ	ミガキ (黒化処理)	良好	暗灰黄色	明黄褐色	2mm以下の赤褐色粒を含む	黒色土器 (内黒) 内面：風化気味	
226	土師器	甕口縁部～頸部	E地点IVb-Va層		推定25		横方向のナデ	横方向のナデ、一部縦方向のナデ横方向のケズリ	良好	にぶい褐色	明褐色	1mm以下の黒色・透明・不透明光沢粒及び灰白色、4mm以下の褐色・褐灰色粒、8mm以下の灰黄色・褐色粒を含む	外面：一部スス付着	
227	土師器	甕口縁部	E地点Va層				横方向のナデ縦方向のナデ	横方向のナデケズリ	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	微細な透明光沢粒、3mm以下の褐色粒・乳白色粒を含む	外面：部分的にスス付着 内面：黒変	
228	土師器	甕口縁部	E地点IVa-Va層		推定21.8		横方向のナデナデ	横方向のナデ、斜方向のケズリ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の黒色・透明光沢粒、3mm以下の褐色粒を含む	外面：スス付着 内面：刷圧痕	
229	土師器	甕口縁部～頸部	E地点IV b層				工具痕? 横方向のナデ	横方向のナデ縦方向のケズリ縦方向の後に横方向のケズリ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰白色・にぶい褐色粒、5mm以下の褐灰色粒、8mm以下の灰褐色岩片を含む	外面：一部スス付着 内面：種子圧痕	
230	土師器	甕口縁部～頸部	E地点Va層		推定13.8		ナデ	ナデ横方向のケズリ	良好	明赤褐色	明褐色	2mm以下の黒色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む		
231	土師器	甕口縁部～胸部	E地点IV b層		推定16.4		ナデ	ナデケズリ、斜め方向のケズリ	良好	赤褐色	明赤褐色	1mm以下の褐色粒、2mm以下の黒色粒を含む		
232	土師器	甕口縁部～胸部	E地点IV b層				ナデ	ナデ横方向のケズリ	良好	黄褐色	褐 色	1mm以下の乳白色粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	外面：スス付着	
233	土師器	甕口縁部	E地点IV b層		推定26.2		横方向のナデナデ	横方向のナデ	良好	灰褐色	黒褐色	微細な透明光沢粒、1mm以下の赤褐色粒を含む	外面：スス付着 内面：黒変	
234	土師器	甕頸部～胸部	E地点IV b層				横方向のナデ縦・横方向の工具によるナデ	横方向のナデ斜方向のケズリ	良好	にぶい赤褐色	暗赤褐色	2mm以下の白色・透明光沢粒、6mm以下の赤色粒を含む	外面：黒変	
235	土師器	甕胴部	E地点IV b層				横方向のナデナデ	横・斜方向のケズリ	良好	にぶい黄褐色	灰黄色褐色	1mm以下の透明光沢粒、2mm以下の灰色粒、4mm以下の赤褐色粒を含む	外面：部分的にスス付着	
236	土師器	鉢口縁部～胸部	E地点IVb-Va層		推定19		横方向のナデ縦・斜方向の工具ナデか?	横・斜方向の工具ナデ	良好	にぶい褐色にぶい黄褐色	にぶい褐色にぶい黄褐色	1mm以下の灰白色光沢粒、2mm以下の黒色光沢・黒色・無色透明粒、4mm以下の赤褐色・灰白色・灰褐色粒を含む	内外面：部分的に黒変	
237	須恵器	高台付碗底部	E地点IV a層		推定7.6		回転ナデ	回転ナデ	良好	灰 色	灰 色	1mm以下の無色透明粒を含む		
238	須恵器	甕胴部	E地点IV b層				格子目タタキ、部分的に不定方向の調整痕、断面に鉄分付着	同心円の後平行タタキ	良好	灰 色	灰 色	微細な無色透明粒を少量含む	転用礫の可能性あり 外面：炭化物?付着	
239	須恵器	甕胴部	E地点IV a層				平行タタキ鉄分付着	ナデの後?同心円の後平行タタキ	良好	灰褐色	灰 色	1mm以下の白色粒を少量含む		
240	緑釉陶器	高台付碗口縁部～体部	E地点IV b層		推定12		施釉	施釉	堅緻	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精良	241と同一個体か 洛北産	
241	緑釉陶器	高台付碗底部	E地点IV b層		推定6		施釉露胎	施釉	堅緻	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精良	240と同一個体か 洛北産	
242	土師器	布痕土器口縁部	E地点IV b層				ヘラ切りナデ	ナデ	良好	橙 色	橙 色	1mm以下の乳白色粒を含む		
243	土師器	布痕土器胴部	E地点IV b層				ナデ	布目圧痕	良好	橙 色	黄褐色	1mm以下の黒色粒、4mm以下の赤褐色・乳白色粒を含む	内面：風化気味	
244	土師器	布痕土器胴部	E地点IV b層				ナデ	布目圧痕	良好	橙 色	明赤褐色	2mm以下の赤褐色・乳白色粒を含む		
246	土師器	杯口縁部～底部	E地点II層		推定17.2	推定6.2	推定2.85	回転ナデヘラ切り底	回転ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の白色・赤褐色・透明光沢粒を含む	外面：部分的に黒変
247	土師器	杯底部	E地点IV b層		推定8.1			回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の灰白色粒、2mm以下のにぶい赤褐色粒、3mm以下の黄灰色粒を含む	
248	土師器	皿口縁部～底部	E地点IV a層		推定7.2	推定6.6		ナデ糸切り底	ナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細粒を含む	
249	土師器	皿底部	E地点II層		推定4.4			回転ナデ糸切り底	回転ナデ	良好	橙 色 浅黄色	浅黄褐色	1mm以下の赤褐色・黒褐色粒、3.5mm以下のにぶい黄褐色粒を含む	外面：風化気味

第9表 E地点 土器観察表3

図面番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底部	器高	外面	内面		外面	内面		
250	白磁	端反碗口縁部	E地点 IV b層				施釉貫入	施釉貫入	堅緻	灰白色	灰白色	精良	15世紀
251	白磁	端反碗口縁部～体部	E地点 IV a層				施釉貫入露胎	施釉貫入	堅緻	灰白色	灰白色	精良	15世紀
252	白磁	端反碗口縁部	E地点 IV a層				施釉貫入	施釉貫入	堅緻	灰白色	灰白色	精良	15世紀
253	白磁	端反碗口縁部	E地点 IV a層				施釉	施釉	堅緻	灰白色	灰白色	精良	15世紀
254	白磁	碗底部	E地点 IV a層		4.05		施釉露胎	施釉貫入	堅緻	灰白色	灰白色	精良	
255	白磁	碗底部	E地点 IV b層		3.45		無釉・露胎切り高台	施釉貫入	堅緻	灰白色	灰白色	精良	
256	青磁	端反碗口縁部～体部	E地点 IV b層	推定 14.8			施釉	施釉	堅緻	緑灰色	緑灰色	精良	龍泉窯系 14世紀中葉～15C前半
257	青磁	端反碗口縁部～体部	E地点 IV a層	推定 15.2			施釉	施釉	堅緻	緑灰色	緑灰色	精良	龍泉窯系 14世紀中葉～15C前半
258	青磁	碗底部	E地点 IV b層	推定 7.2			施釉露胎	施釉乾ノ目釉剥ぎ	堅緻	明褐色 オリーブ灰色 にふい褐色	オリーブ灰色 明褐色 にふい褐色	精良	
259	磁器	清縁皿口縁部	E地点				施釉貫入	施釉貫入	堅緻	暗オリーブ色	黄灰色	微細な灰白粒を含む	美濃焼
260	須恵器	鉢口縁部	E地点 IV b層				ナデ、横ナデ自然釉	横ナデ	堅緻	黄灰色 黒色	黄灰色	精良	東播系
261	須恵器	鉢口縁部	E地点 Tr 3				横ナデ自然釉	横ナデ	堅緻	黄灰色 黒色	黄灰色	精良	東播系
262	土師器	鉢または銅胴部	E地点 IV a層				ナデ後ケズリ	斜め方向のハケ目	良好	黒褐色	にふい黄色	1mm以下の乳白色粒、2mm以下の黒色粒を含む	
263	瓦器	掃鉢底部	E地点 IV b層				剥離のため不明	横ナデ掃目 (6条1単位)	良好	にふい黄褐色	褐灰色	1mm以下の褐灰色・黒色粒・透明光沢粒、3.5mm以下の赤褐色粒を含む	
279	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	E地点 V a層				横方向にナデ一部斜方向のナデ	横方向にナデ指オサエ	良好	にふい黄褐色	にふい黄褐色	1mm以下の褐灰色・黒色粒・半透明光沢粒、2mm以下の褐色・灰褐色粒及び黒色光沢粒、3.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む	外面：スス付着
280	縄文土器	浅鉢口縁部	E地点 IV b層				沈線文ミガキ、丁寧な横方向のナデ	丁寧な横方向のナデ	良好	にふい黄褐色	にふい黄褐色	微細な黒色粒・透明光沢粒、1mm以下の灰白粒を含む	
282	縄文土器	深鉢口縁部	E地点 IV a層				貼付突帯ナデ?	ナデ?	良好	灰黄色 褐色	灰黄色 褐色	2mm以下の灰白・黒褐色・黒色光沢粒・透明光沢粒、4mm以下の褐色の砂粒を含む	内外面：全体的に風化
281	縄文土器	浅鉢口縁部	E地点 IV b層				口唇部に沈線文?横方向のナデ	横方向のナデ	良好	橙 色	橙 色	微細な黒色光沢粒、1mm以下の褐色・灰褐色粒、2mm以下の不透明光沢・灰白粒を含む	

第10表 E地点 土器観察表4

図面番号	器種	出土地点	計測値				石材	備考
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
124	石庖丁	E SA1	3.85	4.80	0.45	10.00	頁岩	穿孔2、約1/2残存
125	軽石製品	E SA1	3.60	4.30	2.80	9.90	軽石	中央に穿孔
126	砥石	E SA2	8.25	2.35	0.45	12.70	頁岩	上・下・右側縁欠損
127	軽石製品	E SA2	3.70	6.10	3.20	17.30	軽石	有溝、約1/2残存
136	石庖丁	E 遺物集中1	4.05	7.15	0.60	21.40	頁岩	穿孔1、約1/2残存
137	石庖丁	E 遺物集中1	3.90	6.75	0.65	26.80	頁岩	穿孔2、約1/2残存
138	磨石	E 遺物集中1	6.55	9.10	4.35	149.60	両輝石安山岩	約1/2残存
161	石庖丁	E V a層	5.20	3.40	0.70	14.00	ホルンフェルス	
162	使用痕剥片	E V a層	8.50	6.12	2.60	99.00	砂岩	
163	使用痕剥片	E V a層	6.20	6.12	1.30	47.90	砂岩	
164	剥片	E II層	7.80	3.60	1.70	28.50	砂岩	
165	剥片	E V a層	6.65	4.45	1.70	37.50	砂岩	打面再生
166	剥片	E V a層	10.25	5.35	1.85	85.10	砂岩	
167	石斧	E IV b層	2.95	4.45	1.30	30.00	砂岩	磨製
168	磨石	E IV b層	9.75	8.90	4.95	544.60	砂岩	全体的に赤化、煤付着
185	磨石	E SG群1	11.35	7.00	6.30	641.20	砂岩	
186	軽石製品	E SG群1	11.85	6.15	5.30	98.90	軽石	
187	軽石製品	E SG群1	6.95	6.90	3.50	48.50	軽石	一部赤化
245	紡錘車	E Tr 3	4.55	3.50	1.00	12.00	—	中央に穿孔、坯もしくは高台付境の転用
264	磨石	E V a層	10.10	8.50	4.45	518.80	砂岩	古代の遺物とともに出土
265	磨石	E IV b層	4.45	3.75	3.10	68.20	安山岩	
266	砥石	E IV b層	11.90	5.20	1.40	89.50	砂岩	穿孔1、提砥
267	砥石	E V a層	8.05	4.35	3.00	170.10	砂岩	有溝、全体的に赤化、古代の遺物とともに出土
268	砥石	E IV b層	15.10	5.90	3.40	382.90	砂岩	両端に敲打痕、一部赤化
269	砥石	E IV b層	19.50	10.25	7.90	1544.60	砂岩	全体的に赤化
270	軽石製品	E II層	5.80	3.70	2.20	9.60	軽石	穿孔2、うち1箇所貫通
271	滑石製品	E IV a層	7.60	6.20	1.30	67.10	滑石	石鍋を再加工

第11表 E地点 石製品及び土製品計測表

図面番号	器種	出土地点	計測値				備考
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
272	鉄鏃	E IV a層	12.7	3.25	1.0	29.1	
273	鉄鏃	E V a層	4.2	0.8	0.45	2.2	茎部のみ
274	鉄鏃	E IV b層	2.7	0.7	0.55	1.5	茎部のみ
275	鉄釘	E IV a層	2.55	0.85	0.65	1.7	
276-1	鉄器	E IV a層	2.9	1.35	0.43	3	上部
276-2	鉄器	E IV a層	1.7	1.33	0.31	1.2	下部
277	鉄器	E IV a層	3.8	3.1	0.95	9.3	
278	鉄器	E IV a層	2.93	2.2	0.52	5	

第12表 E地点 鉄器計測表

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 平田遺跡E地点における土層とテフラ

1. はじめに

宮崎県域南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、霧島、始良、鬼界、桜島、池田湖などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物（さいせつぶつ）、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで牧遺跡第二次調査区においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取した試料を対象としてテフラ組成分析を行い、指標テフラの検出同定を試みることになった。調査分析が行われた地点は、D地点東側壁土層断面である。

2. 土層の層序

D地点東側壁土層断面では、下位より黄色軽石層（層厚5cm以上、軽石の最大径8mm、8層）、粒径が良く揃った黄灰色砂層（層厚10cm、7層）、暗灰褐色砂質土（層厚4cm）、黒灰色土（層厚19cm、以上6層）、黒色土（層厚21cm、5層）、灰色がかった黄白色の軽石を多く含む黒灰色土（層厚17cm、軽石の最大径11mm）、灰色がかった黄白色の軽石を多く含む黒灰色土（層厚11cm、軽石の最大径12mm、以上4層）、灰色がかった黄白色の軽石層（最大層厚7cm、軽石の最大径7mm、3層）、灰色がかった黄白色の軽石に富む灰色土（層厚8cm、軽石の最大径7mm、2層）、灰色がかった黄白色の軽石を含む暗灰色土（層厚14cm、1層）が認められる（第60図）。

3. テフラ組成分析

（1）分析試料と分析方法

基本的に5cmごとに設定採取された試料のうち、8層、7層、4層、3層に各々相当する、試料18、試料17、試料5、試料1の4点を対象に、方法として指定された火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める。

（2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイアグラムにして第61図に示す。また火山ガラス比分析と重鉍物分析の結果の内訳を、第13表と第14表に示す。火山ガラス比分析の結果、試料12では、量が多い順に無色透明の

バブル型ガラス (31.2%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス (5.6%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス (4.4%)、分厚い中間型ガラス (3.6%)、淡褐色のバブル型ガラス (0.8%) が認められる。試料 10 には、量が多い順に無色透明のバブル型ガラス (55.6%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス (7.6%)、中間型ガラス (2.0%)、淡褐色のバブル型ガラス (1.2%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス (0.8%)、褐色のバブル型ガラス (0.4%) が含まれている。

試料 5 には、量が多い順に無色透明のバブル型ガラス (14.8%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス (4.0%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス (1.6%)、淡褐色のバブル型ガラス (0.8%)、中間型ガラス (0.4%) が含まれている。試料 1 には、量が多い順にスポンジ状に発泡した軽石型ガラス (31.6%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス (6.4%)、中間型ガラス (0.4%)、無色透明のバブル型ガラス (0.4%) および淡褐色のバブル型ガラス (0.4%) が含まれている。

重鉱物組成分析の結果、試料 12 では、量が多い順に斜方輝石 (68.8%)、磁鉄鉱 (15.2%)、単斜輝石 (12.8%)、角閃石 (2.0%) が認められる。試料 10 にも、量が多い順に斜方輝石 (73.6%)、磁鉄鉱 (17.2%)、単斜輝石 (5.6%)、角閃石 (1.6%) が認められる。試料 5 には、量が多い順に斜方輝石 (50.8%)、磁鉄鉱 (30.0%)、単斜輝石 (17.6%) が含まれている。試料 1 には、量が多い順に磁鉄鉱 (47.6%)、斜方輝石 (40.8%)、単斜輝石 (10.4%) が含まれている。

4. 考察

試料 18 が採取された 8 層については、黄色軽石が多く含まれる層相、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスを含むこと、さらに斜方輝石や単斜輝石のほか、わずかながら角閃石を含む特徴などから、約 4,200 年前^{*1} (暦年較正年代: 約 4,600 年前) に霧島火山御池火口から噴出したと考えられる霧島御池テフラ (Kr-M, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野, 1996) と考えられる。また、試料 18 には無色透明や淡褐色のバブル型ガラスが比較的多く含まれていることから、約 2.4 ~ 2.5 万年前^{*1} (暦年較正年代: 約 2.6 ~ 2.9 万年前) に始良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物 (A-Ito, 荒牧, 1969) やそれに関係する始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)、さらに約 6,300 年前^{*1} (暦年較正年代: 約 7,300 年前) に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978) に由来する粒子が混在しているものと考えられる。もちろん、試料 18 が Kr-M の再堆積層あるいは何らかの攪乱をうけた Kr-M から採取された可能性も否定できないが、おそらく粗粒の Kr-M の一次堆積層上部の粗粒の粒子の隙間に、A-Ito や AT さらに K-Ah などの粒子を含む火山灰土など細粒物質が混入しているためと推定される。

7 層 (試料 17) には、試料 18 と比較すると、A-Ito や AT さらに K-Ah に由来する火山ガラスがより多く含まれており、Kr-M に由来すると考えられるスポンジ状に発泡した軽石型ガラスの量が少ない。重鉱物に、わずかながら角閃石が含まれていることを合わせて考慮すると、7 層には Kr-M に由来するテフラ粒子も含まれているものの、他のテフラに由来するテフラ粒子の比率が高いという特徴が認められる。

4 層 (試料 5) では、試料 18 や試料 17 と比較して、A-Ito や AT さらに K-Ah に由来する火山ガラスが含まれる比率が低い。その一方で、角閃石は検出されず、斜方輝石や単斜輝石がとくに多い両輝石型の重鉱物組成を示す。本層には、野外における土層観察で 3 層の軽石層に含まれる軽石と同じ岩相をもつ軽石の混在が認められる。これらのことから、本土層中には何らかの作用により 3 層の軽石層に由来するテフ

ラ粒子が混在していると推定される。そして、本土層の形成に関する A-Ito、AT、K-Ah、Kr-M の影響は、下位の土層と比較するとより小さいと考えられよう。

3層の軽石層は、層相、軽石の岩相、火山ガラスの特徴（スポンジ状の軽石型ガラスに富むことや、繊維束状に発泡した軽石型ガラスを比較的多く含むこと）、両輝石型の重鉱物組成をもつことなどから、1471（文明3）年に桜島火山から噴出した桜島文明軽石（Sz-3、小林、1986、町田・新井、1992、2003）と考えられる。したがって、4層中に混在する軽石についても、Sz-3に由来すると思われる。ただし、4層全体にSz-3が混在しているとすると、かなり深い層準にまで何らかの攪乱が及んでいるように思われる。これらのテフラ粒子について、さらに火山ガラスや鉱物（斜方輝石・角閃石）の屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度を向上させると良い。

5. 小結

平田遺跡D地点において地質調査およびテフラ組成分析を行った。その結果、下位より霧島御池テフラ（Kr-M、約4,200年前^{*1}）および桜島文明軽石（Sz-3、1471年）を確認することができた。また、Kr-Mの上位の7層中にKr-M、Sz-3の下位の4層中にSz-3に由来すると推定されるテフラ粒子の混在が認められた。

*1 放射性炭素（¹⁴C）年代。

文献

- 荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物。地質雑、75、p.425-442。
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究、34、p.377-379。
- 小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流。文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者 荒牧重雄）、p.137-163。
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義。科学、46、p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究、17、p.143-163。
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良 Tn 火山灰（AT）の¹⁴C年代。第四紀研究、26、p.79-83。
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討—タンデトロム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代。地質雑、99、p.787-798。
- 奥野 充（1996）南九州の第四紀末テフラの加速器¹⁴C年代（予報）。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、VII、p.89-109。

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
B区東壁土層断面	1	1	0	0	3	79	16	151	250
	5	37	2	0	1	4	10	196	250
	10	139	3	1	5	2	19	81	250
	12	78	2	0	9	11	14	136	250

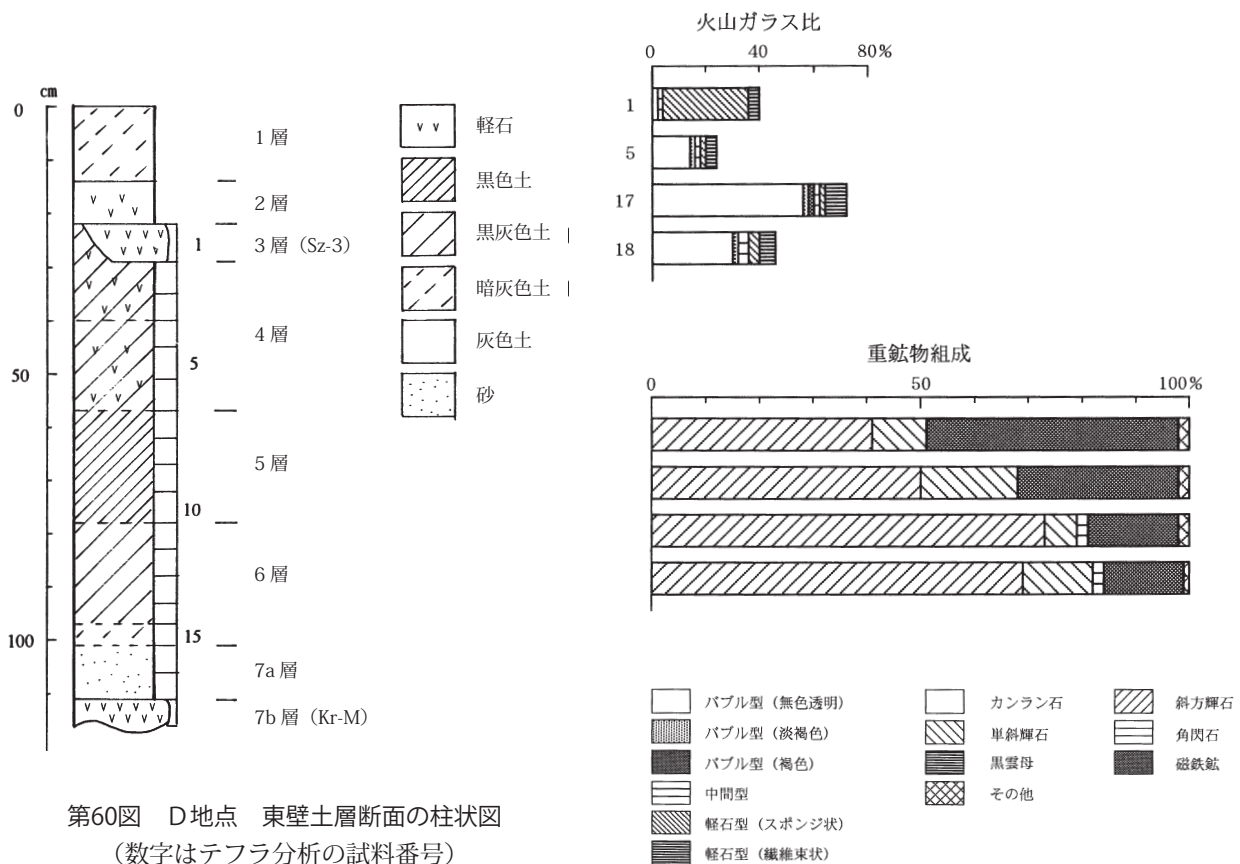
数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

第13表 火山ガラス比分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
B区東壁土層断面	1	0	102	26	0	0	119	3	250
	2	0	127	44	0	0	75	4	250
	10	0	184	14	4	0	43	5	250
	12	0	172	32	5	0	38	3	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱.

第14表 重鉱物組成分析結果



第60図 D地点 東壁土層断面の柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)

第61図 D地点 東壁土層断面のテフラ組成ダイヤグラム

第2節 平田遺跡D地点における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2. 試料

分析試料は、D地点の東側壁土層断面（J-30グリッド）から採取された11点、西側壁土層断面（G-25グリッド）から採取された3点、および桜島文明軽石（Sz-3, 1471年）直下の4層水田検出面から採取された5点の計19点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型（チマキザサ節・チシマザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第15表および第62図～第64図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（苗：生育初期）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 東側壁土層断面（第62図）

2層（試料2）から7層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、2層（試料2）から5層（試料8）までの各層準からイネが検出された。このうち、2層（試料2）では密度が13,600個/g、4層（試料4～7）では6,600～9,700個/gと高い値であり、5層（試料8）でも4,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 4層水田検出面（第63図）

Sz-3直下のIV層水田検出面から採取されたNo.1～No.5について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は7,000～14,600個/g（平均10,800個/g）と高い値である。したがって、同検出面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3) 西側壁土層断面（第64図）

溝状の落ち込みの埋土（試料1～3）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) イネ苗の植物珪酸体について

Sz-3 直下の 4 層検出面で検出されたイネの中には、縦長が 30 μ m 前後と明らかに小型であり、形状が未熟なものや縦長に対する側長の比率が大きいものも認められた (図版 1 参照)。これは生育段階初期 (苗の段階) のイネに特有のものである (能登ほか, 1989, 杉山, 1998, 2001)。通常の水田土壌では、検出されるイネの植物珪酸体のほとんどが生育段階中後期 (分けつ開始期以降) のものであり、イネ苗に由来するものの検出率は数%未滿とわずかである。Sz-3 直下の 4 層検出面では、イネ全体に占めるイネ苗由来の植物珪酸体の割合は 10 ~ 31% (平均 17%) と比較的高い値である。

以上のことから、Sz-3 直下の 4 層検出面ではイネ苗が生育していたと考えられ、水田が Sz-3 によって埋没された季節は田植え直後の初夏と推定される。同様の結果は、鶴喰遺跡など都市周辺の Sz-3 直下水田跡でも確認されている (古環境研究所, 1998)。

(3) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類とジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) ムギ類

ムギ類 (穎の表皮細胞) は、東側壁土層断面の 4 層 (試料 5) から検出された。密度は 700 個 /g と低い値であるが、穎 (籾殻) は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

2) ジュズダマ属

ジュズダマ属は、西側壁土層断面の溝状の落ち込みの埋土 (試料 2) から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も 700 個 /g と低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(4) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

1) 東側壁土層断面 (第 62 図)

7層では、ヨシ属、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などのイネ科、およびブナ科 (シイ属)、ブナ科 (アカガシ亜属)、クスノキ科などの樹木 (照葉樹) が検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある (杉山, 1999)。6層から5層にかけては、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型が大幅に増加しており、樹木は見られなくなっている。また、前述のように5層ではイネが出現している。4層ではイネが増加しており、ヨシ属は次第に減少している。

以上の結果から、霧島御池軽石 (Kr-M, 約 4,600 年前: 較正年代) 直上の7層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、カシ類 (アカガシ亜属)、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。6層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属やメダケ属 (メダケ節やネザサ節) などが生育する比較的乾燥した草原的なところも分布していたと推定される。その後、5層の時期にはヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたと考えられ、遺跡周辺では照葉樹林はあまり見られなくなったと推定される。

2) 西側壁土層断面 (第 64 図)

溝状の落ち込みの埋土では、ヨシ属が多量に検出され、ススキ属型も比較的多く検出された。また、ウシクサ族 A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木 (その他) なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢であり、埋土上部ではススキ属型も多くなっている。

以上の結果から、溝状の落ち込みの埋土の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属などが生育する比較的乾燥した草原的なところも分布していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられる。

6. まとめ

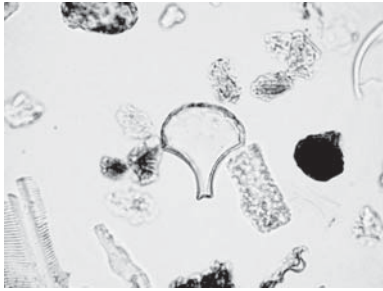
植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析の結果、水田遺構が検出された桜島文明軽石 (Sz-3, 1471 年) 直下の4層からは、イネが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、Sz-3 の下層では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、5層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

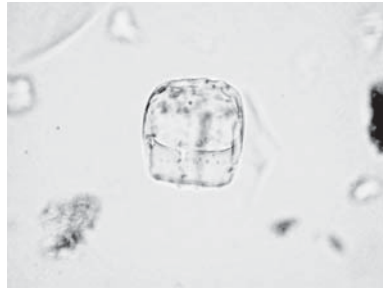
文献

- 古環境研究所 (1998) 鶴喰遺跡. 県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 都城市教育委員会. 都城市文化財調査報告書, 第 44 集, p.80-94.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第 31 号, p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 杉山真二 (1998) イネ苗の植物珪酸体とその応用—水田埋没の季節推定—. 日本文化財科学会第 15 回大会研究発表要旨集, 92-93.

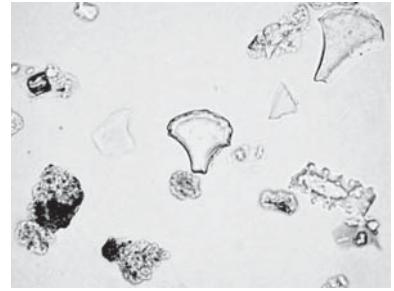
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究. 38(2), p.109-123.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 杉山真二 (2001) テフラと植物珪酸体分析. 月刊地球, 23 : 645-650.
- 能登健・内田憲治・石井克己・杉山真二 (1989) 古墳時代の陸苗代—群馬県子持村黒井峯・西組遺跡の発掘調査から—. 農耕文化研究振興会. 農耕の技術, 第 12 号, p.21-47.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.



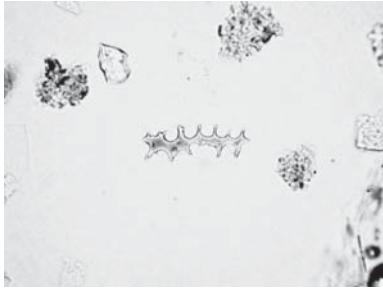
イネ
B区IV層水田検出面 2



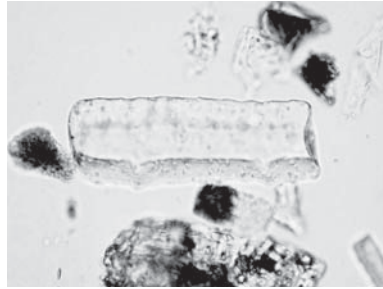
イネ(側面)
B区東側壁 2



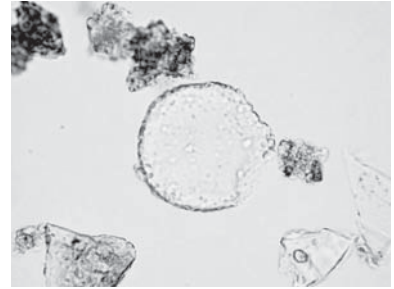
イネ苗(生育初期のイネ)
B区IV層水田検出面 3



ムギ類(穎の表皮細胞)
B区東側壁 5



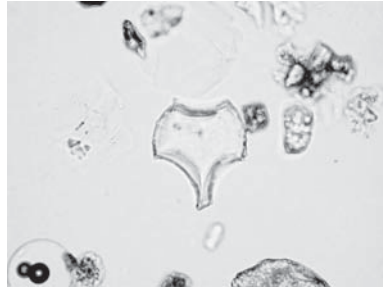
キビ族型
B区東側壁 5



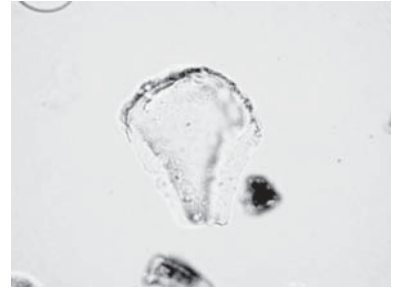
ヨシ属
B区東側壁 9



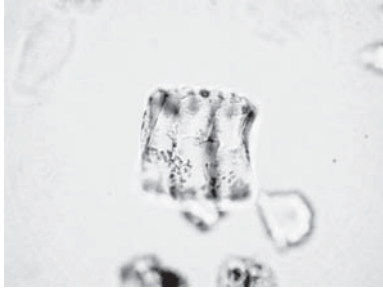
ススキ属型
B区東側壁 8



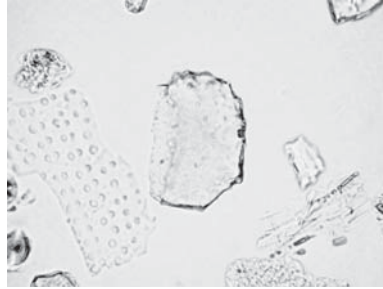
シバ属
B区東側壁 2



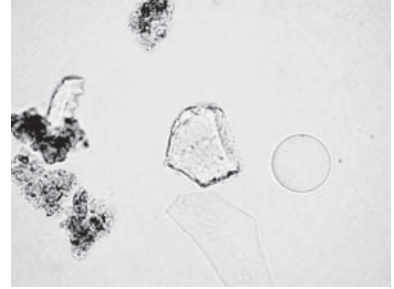
メダケ節型
B区東側壁 4



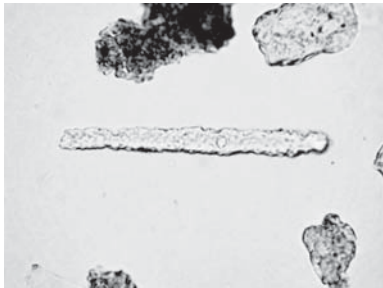
ネザサ節型
B区東側壁 8



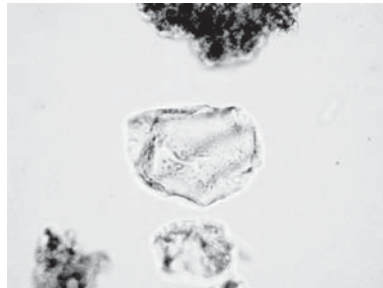
チマキザサ節型
B区東側壁 5



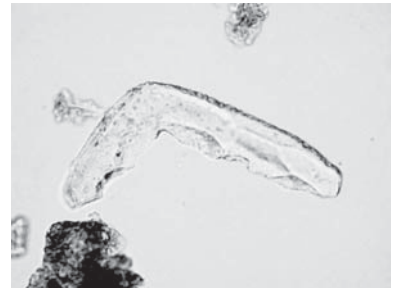
ミヤコザサ節型
B区東側壁 9



棒状珪酸体
B区東側壁 9



ブナ科(シイ属)
B区東側壁 9



クスノキ科
B区東側壁 9

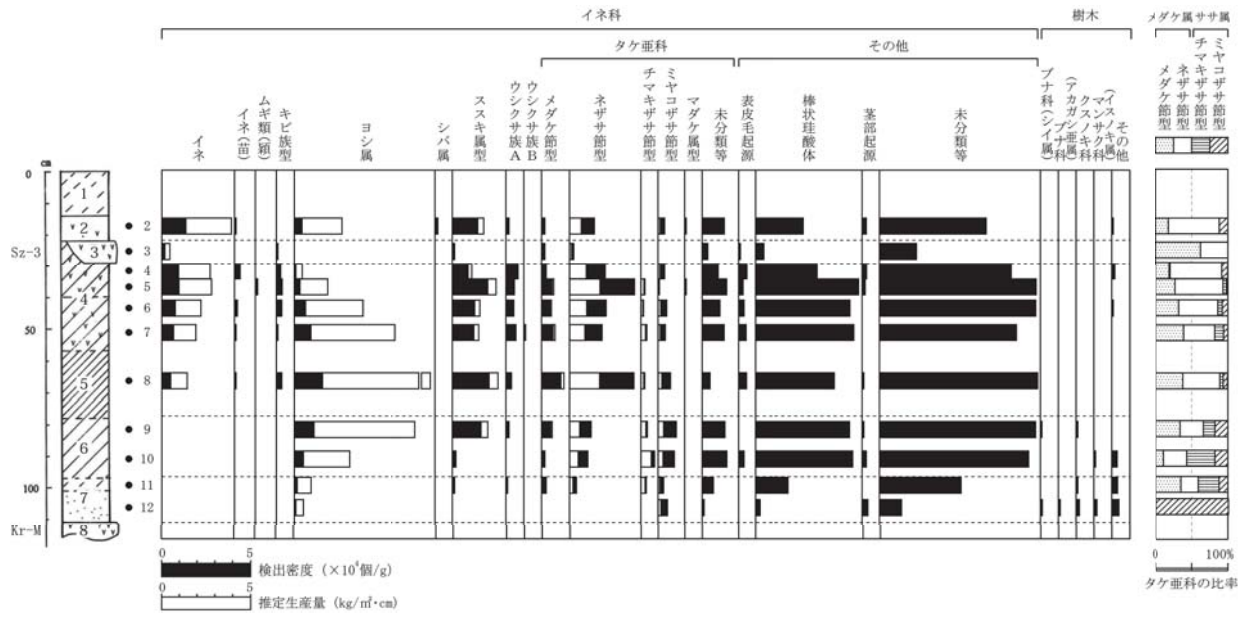
50 μm

平田遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)

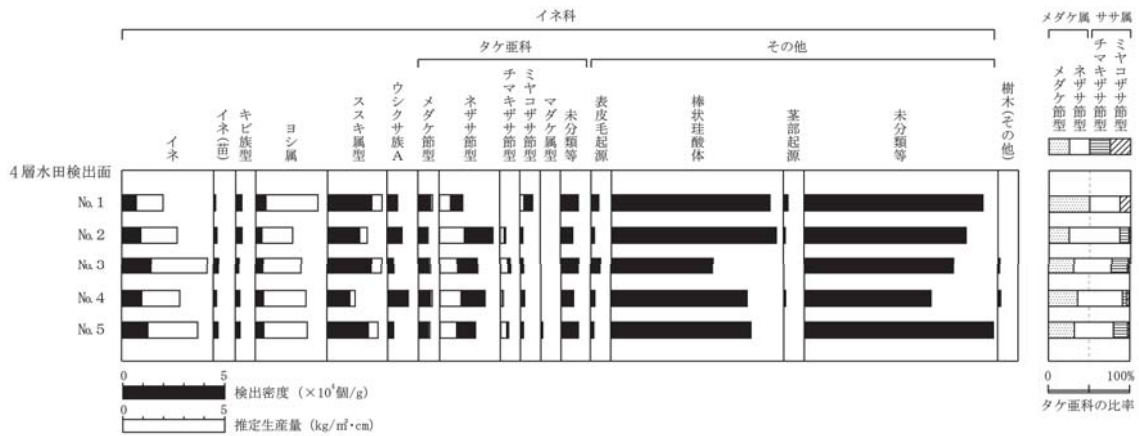
検出密度 (単位: ×100 個/g)

分類群	地点・試料																							
	4層水田検出面				東側壁上層断面 (J-30)				西側壁 (G-25)															
	1	2	3	4	5	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3					
イネ科	Gramineae (Grasses)																							
イネ	70	94	146	99	130	136	15	94	97	76	66	49												
イネ苗	7	14	22	13	21	7	7	29	7	14	7	7												
ムギ類 (穎の表皮細胞)	Hordeum-Triticum (husk Phytolith)																							
キヒ旋型	28	29	15	20	21	43	7	22	30	28	7	28	7	77	112	65								
ヨシ属	Phragmites (reed)																							
ヨシ属	49	29	36	40	41	14	14	7	7	30	62	93	160	111	50	8	77	112	65					
ススキ属型	Miscanthus type																							
ウシクサ族 A	219	158	219	112	206	143	7	87	201	125	120	209	162	14	7	112	97	22						
ウシクサ族 B	49	72	29	99	27	14	14	65	45	42	53	28	15	7	7	21	52	14						
ジュズダマ属	Andropogoneae B type																							
ジュズダマ属	Cort.																							
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																							
メダケ節型	63	43	51	59	48	14	15	22	60	48	66	111	52	14	22	56	67							
ネサヤ節型	113	259	182	218	172	136	22	196	358	201	179	355	118	100	37	21	37	14						
チマキヤヤ節型	29	51	13	41	41	22	14	33	21	37	78	30	30	49	37	50								
ミヤコヤヤ節型	63	14	15	20	14	36	7	36	7	48	40	70	103	92	30	53	112	67	22					
メダケ属型	Phyllostachys																							
未分類等	85	58	88	59	89	122	29	87	134	97	120	42	125	135	60	8	84	127	101					
その他のイネ科	Others																							
表皮毛起源	35	14	44	20	14	7	44	22	28	40	42	28	28	21	22	29								
棒状珪酸体	782	813	496	667	686	272	44	349	724	533	691	445	531	682	186	23	734	938	281					
葉部起源	21	7	7	7	7	21	21	22	15	15	7	7	7	21	30	21	7	7	7					
未分類等	874	792	730	621	927	594	205	734	1014	872	764	883	871	832	454	120	734	938	548					
樹木起源	Arboreal																							
ブナ科 (シイ属)	Castanopsis																							
ブナ科 (アカガシ亜属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis																							
クスノキ科	Lauraceae																							
マンサク科 (イスノキ属)	Distylium																							
その他	Others																							
植物珪酸体総数	2460	2426	2131	2082	2443	1568	351	1810	2775	2194	2286	2454	2148	2082	886	323	2077	2553	1153					
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m ² · cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出																								
イネ	2.07	2.75	4.29	2.91	3.83	4.00	0.43	2.78	2.85	2.24	1.95	1.43												
ヨシ属	3.11	1.82	2.30	2.50	2.60	2.71	0.46	1.88	3.93	5.87	10.09	6.99	3.14	0.94	0.47	4.85	7.05	4.09						
ススキ属型	2.71	1.96	2.71	1.39	2.55	1.78	0.09	1.08	2.50	1.55	1.48	2.59	2.01	0.18	0.09	1.39	1.20	0.27						
メダケ節型	0.74	0.50	0.59	0.69	0.56	0.17	0.17	0.25	0.69	0.56	0.77	1.29	0.60	0.16	0.26	0.65	0.78							
ネサヤ節型	0.54	1.24	0.88	1.05	0.82	0.65	0.11	0.94	1.72	0.96	0.86	1.70	0.57	0.48	0.18	0.10	0.18	0.07						
チマキヤヤ節型	0.22	0.38	0.10	0.31	0.31	0.17	0.10	0.25	0.16	0.28	0.59	0.22	0.28	0.59	0.22	0.37	0.28	0.38						
ミヤコヤヤ節型	0.19	0.04	0.04	0.06	0.04	0.11	0.02	0.15	0.12	0.21	0.21	0.31	0.28	0.28	0.09	0.16	0.34	0.20	0.06					
タケ亜科の比率 (%)																								
メダケ節型	50	25	31	36	32	18	62	19	27	32	39	38	34	11	35	45	54							
ネサヤ節型	37	62	46	55	48	70	38	72	66	54	43	51	32	32	24	7	12	14						
チマキヤヤ節型	11	20	5	18	18	6	6	6	6	6	12	5	16	39	30	25	19	74						
ミヤコヤヤ節型	13	2	2	3	2	12	2	8	1	8	6	6	18	18	12	100	23	14	13					

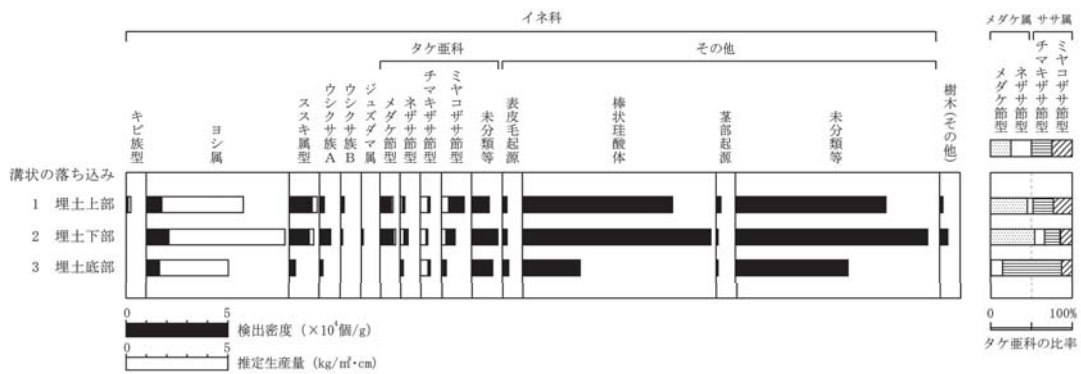
第15表 平田遺跡 D地点における植物珪酸体分析結果



第62図 D地点 東壁土層断面における植物珪酸体分析結果



第63図 D地点 4層水田検出面における植物珪酸体分析結果



第64図 D地点 西壁土層断面における植物珪酸体分析結果

第3節 平田遺跡 E 地点における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 28	E 地点, SA1 住居跡	炭化種実 (イネ)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 30	E 地点, SA1 住居跡	炭化種実 (イチイガシ)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 46	E 地点, 炭化種子集中 2 (集中 2a)	炭化種実 (イチイガシ)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 58	E 地点, 炭化種子集中 1 (集中 3)	炭化種実 (イチイガシ)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 σ : 68% 確率, 2 σ : 95% 確率)
No. 28	211776	2170 \pm 40	- 23.5	2190 \pm 40	交点 : cal BC 340, 320, 210 1 σ : cal BC 360 ~ 280, 240 ~ 190 2 σ : cal BC 380 ~ 160
No. 30	211777	2010 \pm 40	- 27.2	1970 \pm 40	交点 : cal AD 40 1 σ : cal BC 10 ~ AD 70 2 σ : cal BC 50 ~ AD 110
No. 46	211778	1920 \pm 40	- 24.4	1930 \pm 40	交点 : cal AD 70 1 σ : cal AD 40 ~ 110 2 σ : cal BC 10 ~ AD 140
No. 58	211779	1910 \pm 40	- 24.0	1930 \pm 40	交点 : cal AD 70 1 σ : cal AD 40 ~ 110 2 σ : cal BC 10 ~ AD 140

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25(\text{‰})$ に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサングの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (シグマ)(68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 $\sigma \cdot 2 \sigma$ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No. 28 の炭化種実では 2190 ± 40 年 BP (1 σ の暦年代で BC360 ~ 280, 240 ~ 190 年)、No. 30 の炭化種実では 1970 ± 40 年 BP (同 BC10 ~ AD70 年)、No. 46 の炭化種実では 1930 ± 40 年 BP (同 AD40 ~ 110 年)、No. 58 の炭化種実では 1930 ± 40 年 BP (同 AD40 ~ 110 年) の年代値が得られた。このうち、No. 28 では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

第4節 平田遺跡D地点・E地点における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、D地点のS A 2住居跡、水田2、E地点のS A 1住居跡、炭化物集中2、炭化物集中3などから出土した選別済みの種実（番号1～68）である。試料の詳細を表1に示す。また、E地点S A 2住居跡から採取された土壌試料2点についても分析を行った。

3. 方法

土壌試料については、以下の手順で種実の抽出を行った。

- 1) 試料 400ccに水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

分析の結果、選別済み試料では樹木3、草本3の計6分類群が同定された。学名、和名および粒数を第17表に示し、主要な分類群を図版2に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。なお、E地点S A 2住居跡から採取された土壌試料2点については種実は認められなかった。

[樹木]

- ・イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉・堅果 ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。堅果は黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。大きさ 15.0 × 9.7mm、12.2 × 9.0mm、12.2 × 11.4mm。

- ・コナラ属 *Quercus* 子葉・ヘソ ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

- ・サクラ属 *Hordeum* 核片 バラ科

炭化しているため黒褐色で、表面はやや粗い。表面にはモモ・ウメ特有の隆起があるが、破片のため属レベルの同定にとどめた。

[草本]

・イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。大きさは $5.2 \times 2.3\text{mm}$ 、 $4.5 \times 2.4\text{mm}$ 、 $4.5 \times 2.2\text{mm}$ 。

・オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。大きさ $5.7 \times 2.8\text{mm}$ 、 $5.3 \times 2.8\text{mm}$ 。

・ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standf. 種子・果皮 ウリ科

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。大きさ $8.9 \times 4.3\text{mm}$ 。藤下がヒョウタン仲間とするもので、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

5. 考察

平田遺跡の各遺構から出土した種実遺体は、ほとんどがイチイガシの炭化した子葉と同定された。イチイガシは照葉樹林の主要構成要素であり、その堅果（子葉）はアクがなく優良な食物となることから、当時の重要な食糧であったと推定される。イチイガシはほとんどが子葉であるが、堅果（E地点SA1-1）も認められることから、果皮の付いた堅果の状態であったものが炭化の過程で果皮と種皮が欠落し子葉のみになった可能性が考えられる。また、イチイガシの炭化子葉は火を受けた際に生じる発泡が認められないことから、埋没後に自然炭化した可能性が考えられる。

栽培植物では、イネ果実（炭化米）、オオムギ果実、ヒョウタン類種子が認められた。このうちイネが最も多いことから、当時の主要作物であったと考えられる。オオムギは水田から出土していることから、水田に近接して畑が存在したことや、水田が畑として使用されたこと等が想定される。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131-139.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通I，雄山閣出版株式会社，p.165-174.

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.18-22.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p. 2-14.

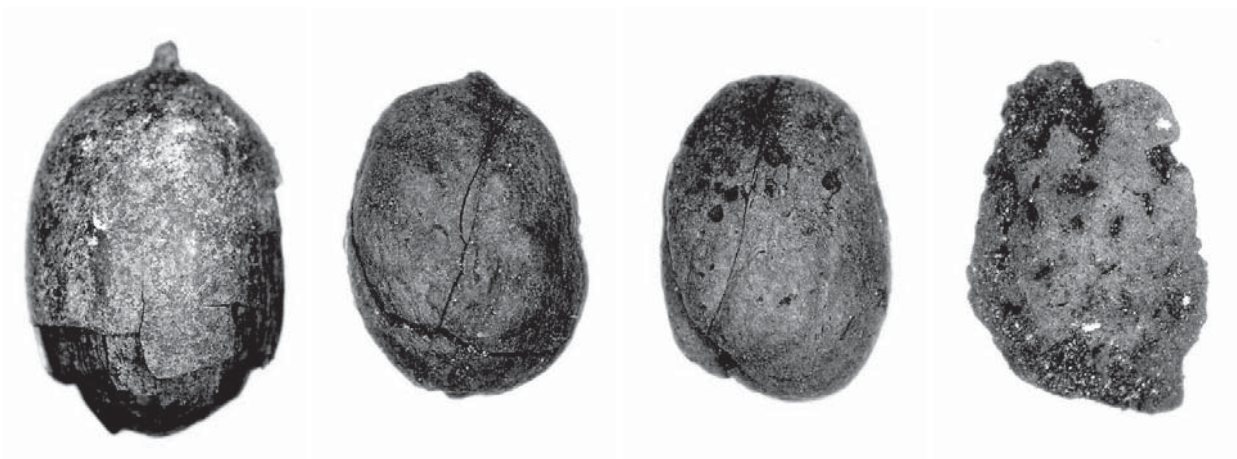
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

番号	調査区	採取地点	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1	D地点	S A 2	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
2	D地点	水田 4	<i>Oryza sativa</i> L. <i>Hordeum vulgare</i> L.	イネ オオムギ	果実	4	炭化物 1
3	D地点	水田 5	<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実	1	
4	E地点	S A 1-1	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	2	
5	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	1	
6	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	堅果(完形) 子葉(完形)	1 1	
7	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	堅果(完形) 子葉(完形)	2 2	
8	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	48 13 1	
9	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	86 31 28	
10	E地点	S A 1-1	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	14 2	
13	E地点	S A 1-1	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	6	炭化物 3
14	E地点	S A 1-1・②	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (破片)	18 2	
15	E地点	S A 1-1・②	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	15 2 4	
16	E地点	S A 1-1・②	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	7	
17	E地点	S A 1-2	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	2	炭化材片 2
18	E地点	S A 1-2	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	堅果(完形)	1	
19	E地点	S A 1-2	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	41 5 2	
20	E地点	S A 1-2	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	21 4	
21	E地点	S A 1-2	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	11 7 1	
22	E地点	S A 1-4	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	1 2	
23	E地点	S A 1-7	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	2 2	
24	E地点	S A 1-11	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	8	
25	E地点	S A 1-17	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	2	
26	E地点	S A 1-18	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	4	炭化材片 9
27	E地点	S A 1-19	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	6	炭化材片 1
28	E地点	S A 1-19	<i>Quercus</i> <i>Oryza sativa</i> L.	コナラ属 イネ	ヘソ片 果実片	1 2	炭化材片 31
29	E地点	S A 1-19	Unknown	不明種実		2	
30	E地点	S A 1-29	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	6	炭化材片 38
31	E地点	S A 1-29	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	7	炭化材片 33
32	E地点	S A 1-30	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	1	
33	E地点	S A 1-30	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	30 7	
34	E地点	S A 1-30	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	6 2	
35	E地点	S A 1-34	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	炭化材片 1
36	E地点	S A 1-34	<i>Quercus</i> <i>Prunus</i>	コナラ属 サクラ属	子葉(破片) ヘソ片 核片	6 2 1	炭化材片 17
37	E地点	S A 1-T r	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	14 2	
38	E地点	S A 1-T r	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	12 1 3	
39	E地点	S A 1 B IV b 層	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	2	

第16表 平田遺跡 D地点・E地点における炭化種実同定結果 1

番号	調査区	採取地点	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
40	E地点	S A 2-4					
41	E地点	S A 2	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
42	E地点	S A 2-T r					
43	E地点	S A 2-②					炭化材片 2
44	E地点	S A 2-②	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl. Unknown	ヒョウタン類 不明種実	種子	1 3	
45	E地点	S A 2-④					炭化材片 1
46	E地点	炭化種子集中2 (集中2 a)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	18 4	
47	E地点	炭化種子集中2 (集中2 a)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	17 2	
48	E地点	炭化種子集中2 (集中2 a)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	2 4 3	
49	E地点	炭化種子集中2 (集中2 b)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	1	
50	E地点	炭化種子集中2 (集中2-S H)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	1	
51	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-54)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	16	
52	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-54)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形)	15 7	
53	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-54)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	2 3 15	
54	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-54)	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(完形)	1	
55	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-55)	<i>Quercus gilva</i> Blume <i>Quercus</i>	イチイガシ コナラ属	子葉(完形) 子葉(完形)	3 1	
56	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-55)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	2 1 2	
57	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-55)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	1	
58	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-63)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	56 9 16	
59	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-63)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	48 6 18	
60	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-63)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	37 12 12	
61	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-63)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	10 3 6	
62	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-64)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	21	
63	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-64)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	3 4 5	
64	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-65)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (半形) (破片)	18 4 2	
65	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-66)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (破片)	1 2	
66	E地点	炭化種子集中1 集中3 X 21-85	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形)	4	
67	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-93)					炭化材片 1
68	E地点	炭化種子集中1 (集中3 X 21-105)	<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉(完形) (破片)	2 6	

第17表 平田遺跡 D地点・E地点における炭化種実同定結果 2



1 イチイガシ堅果

2 イチイガシ子葉

3 イチイガシ子葉

4 サクラ属核片

— 1.0mm

— 1.0mm



5 イネ果実

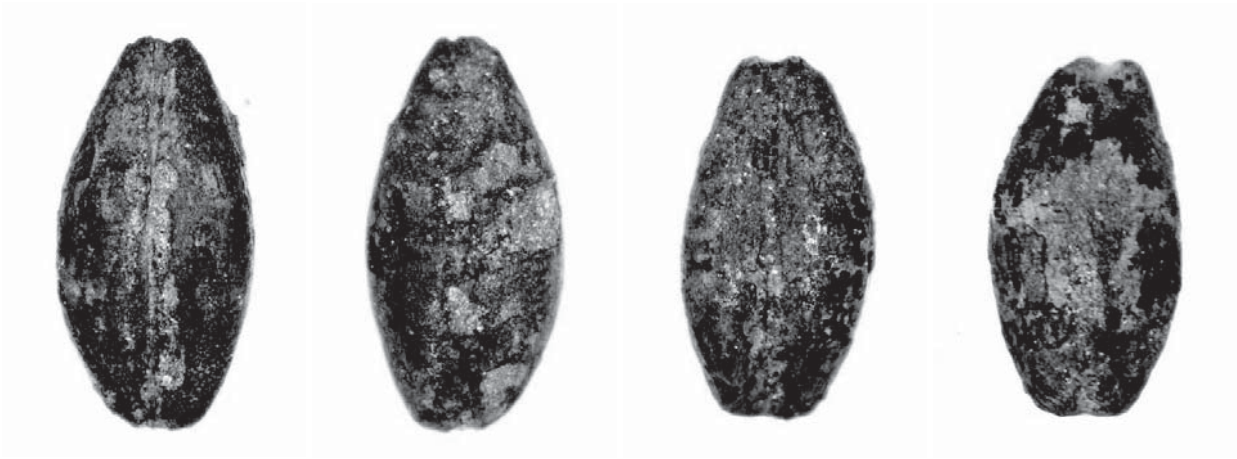
6 イネ果実

7 イネ果実

8 ヒョウタン類種子

— 1.0mm

— 1.0mm



9 オオムギ果実

10 同左

11 オオムギ果実

12 同左

— 1.0mm

平田遺跡の炭化種実

第5節 平田遺跡D地点・E地点における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、D地点のS A 2（住居跡）およびE地点のS A 1とS A 2から採取された炭化材5点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は第18表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

・イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 図版3-1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

・クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Carpinus* カバノキ科 図版3-2

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。接線断面：放射組織は同性で1～3細胞幅のものと集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

・クスノキ科 *Lauraceae*

横断面：中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭なため、クスノキ科の同定にとどめた。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

・モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版3-3

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞のみからなる単列のものと2～6細胞幅で上下の縁辺部の1～3細胞高が単列の多列のものからなる。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属は常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。モチノキは常緑高木で高さ15m、径50cmに達する。やや堅硬な材で、旋作、器具、彫刻などに用いられる。

5. 所見

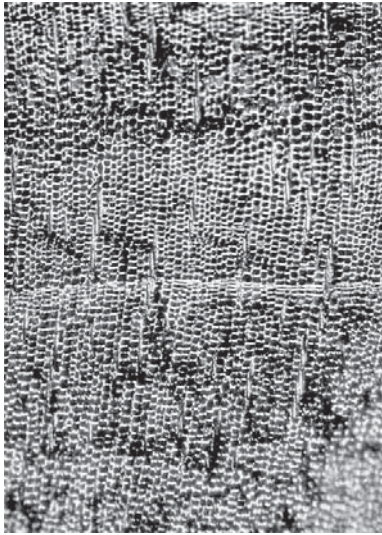
分析の結果、各住居跡から採取された炭化材は、クマシデ属イヌシデ節2点、イヌガヤ1点、クスノキ科1点、モチノキ属1点と同定された。これらの樹種は、いずれも暖温帯ないし温帯に分布する照葉樹林の構成要素または照葉樹林内にも生育する高木で、比較的大きな木材も採取可能であり、多様に用いられている。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

試料	結果 (学名/和名)
D地点 SA2-3	<i>Ilex</i> モチノキ属
E地点 SA1-24	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch イヌガヤ
E地点 SA1-27	<i>Lauraceae</i> クスノキ科
E地点 SA2-14	<i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i> クマシデ属イヌシデ節
E地点 SA2-27	<i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i> クマシデ属イヌシデ節

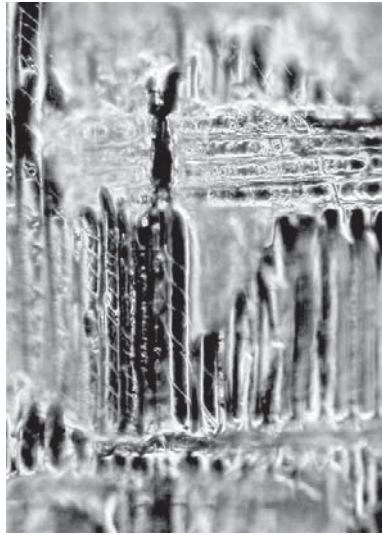
第17表 平田遺跡D地点・E地点における樹種同定結果

文献

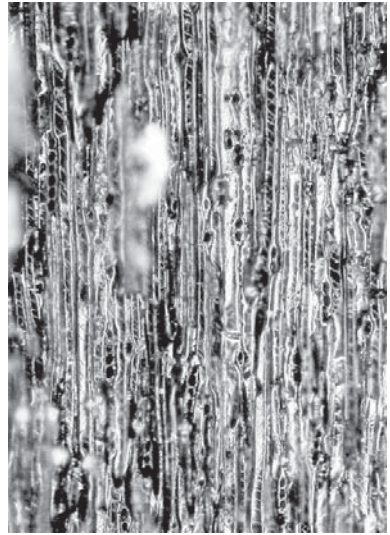
- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242



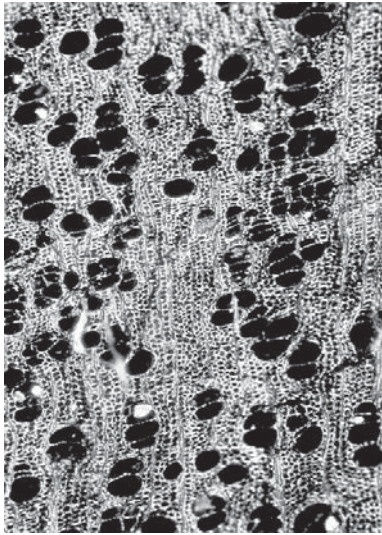
横断面 ————— : 0.4mm
1. E地点 SA1-24 イヌガヤ



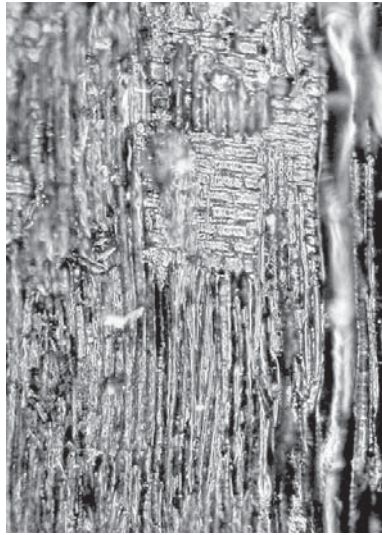
放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm



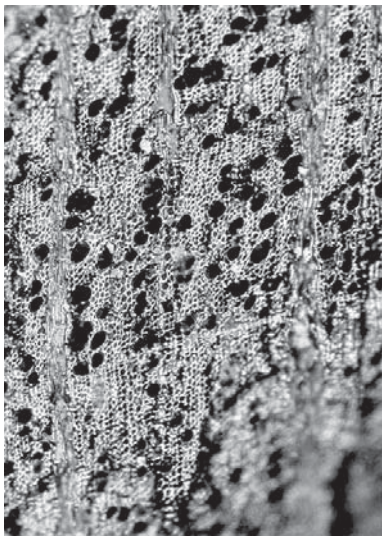
横断面 ————— : 0.4mm
2. E地点 SA2-27 クマシデ属イヌシデ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
3. D地点 SA2-3 モチノキ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

平田遺跡の炭化材

第Ⅳ章 まとめ

平田遺跡D地点・E地点は、横市川右岸に発達した標高141 m～148 mの横市段丘上に点在した遺跡群の一つであったことが明らかになった。縄文時代から断続的ながらも連続と営まれており、一帯が各時代を通じて人々の生活にとって適地であったことを窺わせる。

そのうちD地点では弥生時代の竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、土坑、周溝状遺構等といった集落跡が検出された他、中世の水田跡や近世の小溝状遺構群等の生産遺構が確認されている。また遺物では縄文土器（後期から晩期）、弥生土器（弥生時代中期後半～終末期）、土師器、陶磁器、鉄矛、石器等が出土している。特に弥生時代の集落は、当地域の弥生時代の集落や生活の様子を知る上で貴重な資料であると考えられる。

またE地点では弥生時代の竪穴住居跡や土坑からなる集落跡をはじめ、古代～近世の溝状遺構や道路状遺構、中世の小溝状遺構を確認し、遺物では縄文土器（晩期）、弥生土器（弥生時代中期後半～後期）、土師器（古代～中世）、陶磁器（古代～近世）、石器等が出土している。

ここでは、これらの遺構・遺物に関して、主な時代について若干の私見を交えながら解釈を加え、まとめにかきたい。

第1節 D地点の弥生時代について

弥生時代の遺構としては、D地点で竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、周溝状遺構5基、不明遺構1基等を確認することができた。

竪穴住居跡については、形態的な特徴としてプランを2つに類別すると、S A 1は円形プランで間仕切りを持つものである。長短軸とも約6 mあり、5軒の中では最大の住居跡である。その他は方形プランである。その中で間仕切りを持つものがS A 3である。このS A 3からは大型の甕や壺などの土器が多量に出土し、また、台石や磨石などの石器も出土した。S A 2は検出面から炭化物が多量に出土したため、十分留意しながら掘り下げを行った。その結果、床面には多量の炭化材が出土した。焼失住居の可能性も考えられるが、焼失の要因については断定することは難しい。S A 4の遺構検出は住居全体が削平され、焼失していたため、南側の3分の1だけであり、北側は床面のみを検出であった。床面はかなり硬化していた。S A 5はベッド状遺構を3ヶ所程度有する。また、住居内から約31.7 cmの長鋒型の鉄矛が出土した。鉄矛は弥生時代中期に出現した鉄製武器の一つであるが、全国でも出土例は少なく、福岡県・佐賀県・長崎県などの北部九州地域および山口県で主に確認されている。鉄矛は甕棺・石棺・土壙墓などのほとんど墓の副葬品として出土しており、竪穴住居跡から出土しているのは全国でも山口県の下七見遺跡のみである。その点では、このS A 5で出土した鉄矛は大変貴重な資料であると思われる。宮崎県では新富町の川床遺跡で弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての鉄矛と思われるものが出土しているが、鉄剣・槍・刀子の可能性も考えられるため断定されていない。

掘立柱建物跡については、小型の棟持柱を持つ建物跡である。九州でもその検出例は多くない。南九州では鹿児島県の王子遺跡・上野原遺跡等で検出されており、県内では宮崎市の椎屋形第1遺跡で4棟、都城市の下大五郎遺跡で1棟、中大五郎遺跡で1棟、また、本遺跡の南側に隣接する平田遺跡（都城市教育委員会）で5棟程度検出されている。

土坑については、遺物の出土がなく、用途も不明であるが、この土坑の近くで検出された竪穴住居跡や周溝状遺構などの遺構と埋土状況が類似しており、弥生時代に帰属するものと考えられる。

周溝状遺構については、5基検出することができた。S L 1・S L 3・S L 5は、遺構部分が削平されていたり調査区外にかかっていたりして全貌は明確でないが、S L 2・S L 4は残存状況も良好であり、長短軸とも約 5.6m～約 6.4 m程度の大型の周溝状遺構である。県内では日向市百町原地区遺跡、都農町下別府下原遺跡や新富町鬼付女遺跡をはじめ宮崎市熊野原 A 地区、C 地区及び都城市年見川遺跡や向原遺跡、また、本遺跡南側の平田遺跡（都城市教育委員会）等から弥生時代後期から古墳時代にかけての周溝状遺構が確認されている。しかし、竪穴住居跡に近接する周溝状遺構の類例は年々検出されているものの、祭祀や墓または住居などとして利用されたのかどうかについては依然として断定することは難しい。本遺跡で確認できた周溝状遺構についても同様である。S L 1は、コーナー部分の1か所に高坏や甕が集中して出土しているものの、器台、その他特殊な用途を伺わせる遺物が出土せず、また、火を用いた痕跡も見当たらないため、祭祀と断言できる証拠に乏しい。S L 4は、周溝内に柱穴を1基確認することができたが、周溝状遺構に伴うものかどうかは不明であり、わずか1基のみであることから住居としての可能性は低いと思われる。S L 2・S L 3・S L 5については、S L 2で磨製石鏃が出土しているものの、周溝状遺構の性格を検証できるものが検出されていないため、性格については特定することは困難である。平田遺跡（都城市教育委員会）で検出された周溝状遺構から多量の炭化米が出土したが、残念ながら本遺跡の周溝状遺構から炭化米を検出することはできなかった。

不明遺構については、長軸約 2.1m、短軸約 1.25 mの不定形のプランである。住居としてはかなり小型であり、土坑としての機能も考えられないため、不明遺構とした。他の遺構と埋土状況が類似し、数点の弥生土器も出土しているため、弥生時代に帰属するものとして捉えた。

以上のように、本遺跡では、倉として利用されただけでなく、集会所的な機能をもつ棟持柱掘立柱建物跡と住居以外の機能も窺わせる大型の間仕切りを持つ竪穴住居跡、それに集落の構成員の小型の竪穴住居跡、また、用途については現段階では断定することが難しい周溝状遺構から構成されていることが明らかになった。このように構造や規模の異なる各種の建物が存在し、集落を形成していたと思われる。本遺跡に隣接する平田遺跡（都城市教育委員会）や周辺の向原第1遺跡、下大五郎遺跡、中大五郎第1遺跡、中大五郎遺跡などでも同様に掘立柱建物跡や竪穴住居跡など異なる各種の建物が確認されており、都城盆地における弥生時代の集落の様相の特徴が窺える。

弥生土器については甕・壺・高坏などが遺構及び包含層から多量に出土しているが、甕が主流を成す。甕は口縁部が「く」の字に外反し、口縁部下位に貼付突帯を持ち、口唇部は凹線状にくぼむ甕が各遺構から数多く出土した。これはいわゆる中溝式系の土器と呼ばれるものに酷似するが、本遺跡から出土する甕には、突帯に刻目を施さないものが多いというのが特徴である。時期的には中期後半から後期前葉に比定する。周辺の遺跡では、弥生時代中期後半の池ノ友遺跡やほぼ同時期中大五郎第1遺跡・向原第1遺跡などでも中溝式系の土器が出土しており、当該期の都城盆地における中溝式系甕の普及・展開が推察される。また、口縁部が短く、「く」の字状に外反し、胴部上半に1～3条の突帯を巡らしたり口縁部がほぼ水平に長くのび、逆「L」字状に外反したりする甕も包含層から出土している。これらは、山ノ口式土器と見られる。壺については、特徴として、複合口縁を呈しており、口縁の内傾した拡張部に櫛描波状文が描かれている大型の壺が数点出土している。これらは後期の土器であり、山ノ口式土器の壺の系統をひくもので

あると思われる。また、比較的小形の無頸壺で頸部に2個対になる穿孔をもつものも出土している。新富町の新田原遺跡や高千穂町の古城遺跡などによく似たものが出土しており、同様の壺は瀬戸内地域で広く確認されている。高坏は数量的にはわずかの出土であるが後期後半から終末期にかけてのものと思われる。その他、時期的に後期後半と思われる手捏ね土器なども出土している。また、竪穴住居跡内から台石や磨石、包含層から石庖丁などの石器も出土している。

第2節 D地点の中世～近世の生産遺構について

D地点では、生産遺構として中世の水田跡10区画、近世の小溝状遺構群2箇所、近世以降の小溝状遺構群1箇所が確認されている。そのうち水田跡については各区画で桜島文明軽石降下後に復旧された際の凸凹痕や部分的に小ピット（円形もしくは楕円形の凹み）が認められる。そのうち凸凹痕については方形もしくは半月形等を呈し、部分的ながら直線、もしくは扇状に連続的に掘り込まれている。こうした状況は周辺の母智丘谷遺跡や畑田遺跡、嫁坂遺跡等多くの遺跡で認められ、一部では畦畔に沿うように凸凹痕が溝状を呈している状況から桜島文明軽石降下の際には畦畔が完全埋没せず、これらの畦畔をそのまま利用して、区画内を復旧したものと考えられる。ただし部分的に凸凹痕の規則性が認められるものの、多くが重複することから、複数回にわたり作業が行われた可能性が高い。その場合、同軽石と下位層の攪拌度が高くなるものと考えられるが、当地点では部分的に下位層がブロック状に入る程度で軽石層自体もプライマリな状態に近いことから、作業回数がそれほど多くなかったものと考えられる。

また古環境研究所の植物珪酸体分析の結果では4層で生育段階初期のイネに特有である未成熟なイネの植物珪酸体が高密度で確認されており、苗が生育していたものと考えられる。周辺の鶴喰遺跡や坂元A遺跡等の水田跡例と同様の結果であり、区画内に残された小ピットについては稲株痕（矢田1995）の可能性が考えられる。

なお水田区画に伴う水口や溝状遺構等の施設は確認されていない。削平の為に消失した可能性も考えられるが、当地点及びその周辺では春から秋にかけて、湧水のため湿地になる。特に梅雨時期には水位が高くなり、一面が水没することから、あえて水口等の施設を設けずに、自然条件を生かして稲作を行っていた可能性も考えられる。

都城市教育委員会が調査を行ったC地点ではIV層（D地点では4層）中でも水田跡2区画が確認され、当地点でも水田4下の同層にてイネの炭化種子が確認されており、複数時期わたり水田が営まれていたことを指摘できる。

さらに同研究所の植物珪酸体分析では水田5下の4層中では700個/gと低密度であるもののムギ類（穎の表皮細胞）の植物珪酸体が検出されており、それらを裏付けるように水田4・水田5下のIV層中からオオムギの炭化種子が出土していることから、調査地点でのムギ類栽培が行われていた可能性が高い。これらのことからイネ栽培の裏作としてムギ栽培が行われる二毛作が当地点でも行われていたものと考えられる。同様の事例では鶴喰遺跡や坂元A遺跡等の周辺遺跡でも確認されている。

水田の形成時期については、4層中に白色軽石が含まれており、調査区全体で認められる。古環境研究所のテフラ分析によれば、白色軽石についても、1471年（文明3年）に降下した桜島文明軽石に由来する可能性が指摘されている。桜島文明軽石については文献等で1471年を中心としてその前後にも複数回にわたって噴火した記述があり、4層に含まれる軽石が1471年以前のものと推定するならば、降下後ま

もない時期に全体的に攪拌（耕作）し、区画造営・栽培が行われるようになった後に、再び1471年に軽石が降灰したため、さらに復旧された可能性が考えられる。また4層に含まれる軽石が1471年に降下したものと考えられるならば、前者と同様作業工程を行った後、一段高いA地点～C地点が所在する低位段丘面等から同軽石が二次的に流入した可能性等も指摘できる。これらは屈折率測定等の詳細な分析や周辺遺跡の堆積状況等をさらに検討する必要がある。なお同層中では12世紀前半の東播系の捏ね鉢をはじめ、13世紀中頃から14世紀初頭の白磁碗や皿、13世紀後半から15世紀前半の龍泉窯系の青磁碗（森田分類のB類・C類）等、時期幅が認められる。

また近世の小溝状遺構群が2箇所を確認されている。長軸が2m未満の土坑状の落ち込みが幾列をなす例は时期的な相違があるものの、鶴喰遺跡や中尾遺跡等では中世の遺構が確認されている。そのうち鶴喰遺跡の事例では天地返しの耕地復旧作業例として報告され、また中尾遺跡の場合は天地返しの耕地復旧痕もしくは栽培に伴う畝間の可能性を指摘している。当地点の遺構群の埋土は桜島文明軽石を多量に含む黒褐色土（2b層）が入ることから災害等に伴う復旧的な意味合いが弱く、また2b層の植物珪酸体分析結果では4層よりもさらに高密度のイネの植物珪酸体が確認されているものの、他の栽培植物の植物珪酸体が確認されていない。このことから根菜類等植物珪酸体を持たない作物を栽培していた可能性も考えられるが、遺構間の間隔が約0.06m～0.2mと狭いことや、2a層と2b層の層境は一部で凸状の盛り上がり認められるものの比較的フラットであり、盛り上がりについては後世の改変等による可能性も否定できない。

ここでは密に遺構が掘り込まれていることから、何らかの理由で天地返しが行われたものと考えたい。

第3節 E地点出土の弥生時代の炭化種子について

E地点の調査に於いて特筆すべき点として、イチイガシやコナラ属の子葉が大量に確認されたことが挙げられる。弥生時代後期の竪穴住居跡（SA1）では、多量の炭化材や炭化物とともにイチイガシやコナラ属の子葉をはじめ、イネやサクラ属の核片等が出土している。そのうちイチイガシは住居の南西側突出部から中心にかけて約7,700点（破片も含む）が検出面から床面付近（深さ約20cm）まで、やや上部で集中するものの、傾向としては満遍なく認められ、一部で有殻のものや、殻のみの出土も認められることから多くは有殻の状態であった可能性が高い。また炭化材は検出面付近から深さ約10cmの幅で集中し、イネやサクラ属の核片はその下位で確認されている。

またこれとは別にイチイガシの集中部が2箇所（炭化種子集中部1・2）で確認されている。炭化種子集中部1では約8.4m×約6.7m（そのなかでも約3.2m×約1.7mの範囲が特に集中する）の範囲で約3,400点、炭化種子集中部2は直径約3.2mの範囲で約780点（いずれも破片も含む）が出土している。ただし、これらに伴う遺構については確認できていない。

それぞれの14C年代はSA1が2010±40年BP（暦年代cal BC 10～AD 70）、炭化種子集中部1は1910±40年BP（暦年代cal AD 40～110）、炭化種子集中部2は1920±40年BP（暦年代cal AD 40～110）が得られている。また古環境研究所の分析所見ではこれらの種子には火を受けた際に生じる発泡が認められないことから埋没後に自然炭化した可能性が指摘されている。

そのうち集中部の2箇所については、周辺に樹痕（径約10cm～20cm）がいくつか認められていることからイチイガシやコナラ属の樹木が生育し、落果したものがそのまま自然炭化したものと考えられるが、

それならば樹痕を中心に、環状に分布する可能性が高いと思われる。ここでは採集もしくは廃棄等含め、何らかの理由で集められたものと考えたい。

またS A 1については、ドングリ等の堅果類を十分乾燥させてから住居の屋根裏に長期保存として備蓄するという事例（橋口 1996、名久井 2004 ほか）から、住居が廃絶される際に、そのまま残された可能性が考えられる。しかし遺物の垂直移動があるにせよ床面より浮いた状態であるため、埋没途中に何らかの理由で廃棄されたことも十分考えられる。

こうした事例は当該期に於いても、穀物栽培の他に堅果類等の採集活動に対する依存度が高かったことを示しており、宮崎県内に目を転ずれば、椎屋形第 1 遺跡（宮崎市）では住居跡内にツブラジイが、本野遺跡（現宮崎市、旧田野町）の住居跡内ではイチイガシが、それぞれまとまって確認されている事例がある他、近年のフローテーション法の導入により、向原第 1 遺跡（新富町）や湯牟田遺跡（川南町）の住居跡内からもドングリ類の種皮や殻斗等が確認される等、徐々に蓄積されつつある（藤木 2006）。

今後、さらなる調査事例の蓄積と検討を行う必要があるものの、当該期の堅果類利用等の生業の一端が垣間見ることができたという点では、貴重な資料であると考えられる。

【参考・引用文献】

- 鹿児島県教育委員会 1985 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 川越哲志 1993 『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 矢田勝 1995 「中世後期の田植え跡について」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 10周年記念論文集』（材）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 橋口尚武 1996 「食料保存技術」『考古学による日本歴史2 産業1 狩猟・漁業・農業』雄山閣
- 都城市教育委員会 1996 『丸谷地区遺跡群 中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・前畑遺跡』都城市文化財調査報告書第34集
- 宮崎県 1998 『宮崎県史』通史編1 原始・古代1
- 都城市教育委員会 1998 『鶴喰遺跡』都城市文化財調査報告書第44集
- 太宰府市教育委員会 1998 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
- 都城市教育委員会 1999 『肱穴遺跡』都城市文化財調査報告書第47集
- 桑畑光博 『中溝式系土器の検討』古文化談叢第45集 九州古文化研究会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・葦原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『鶴尾遺跡・坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集
- 名久井文明 2004 「乾燥堅果類備蓄の歴史的展開」『日本考古学第17号』有限責任中間法人日本考古学協会
- 都城市教育委員会 2004 『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
- 都城市教育委員会 2005 『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第68集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『下大五郎遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡・下川原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集
- 都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集
- 藤木聡 2006 「宮崎県内遺跡出土の種実・樹種同定試料の集成と課題」『宮崎考古第20号』宮崎考古学会

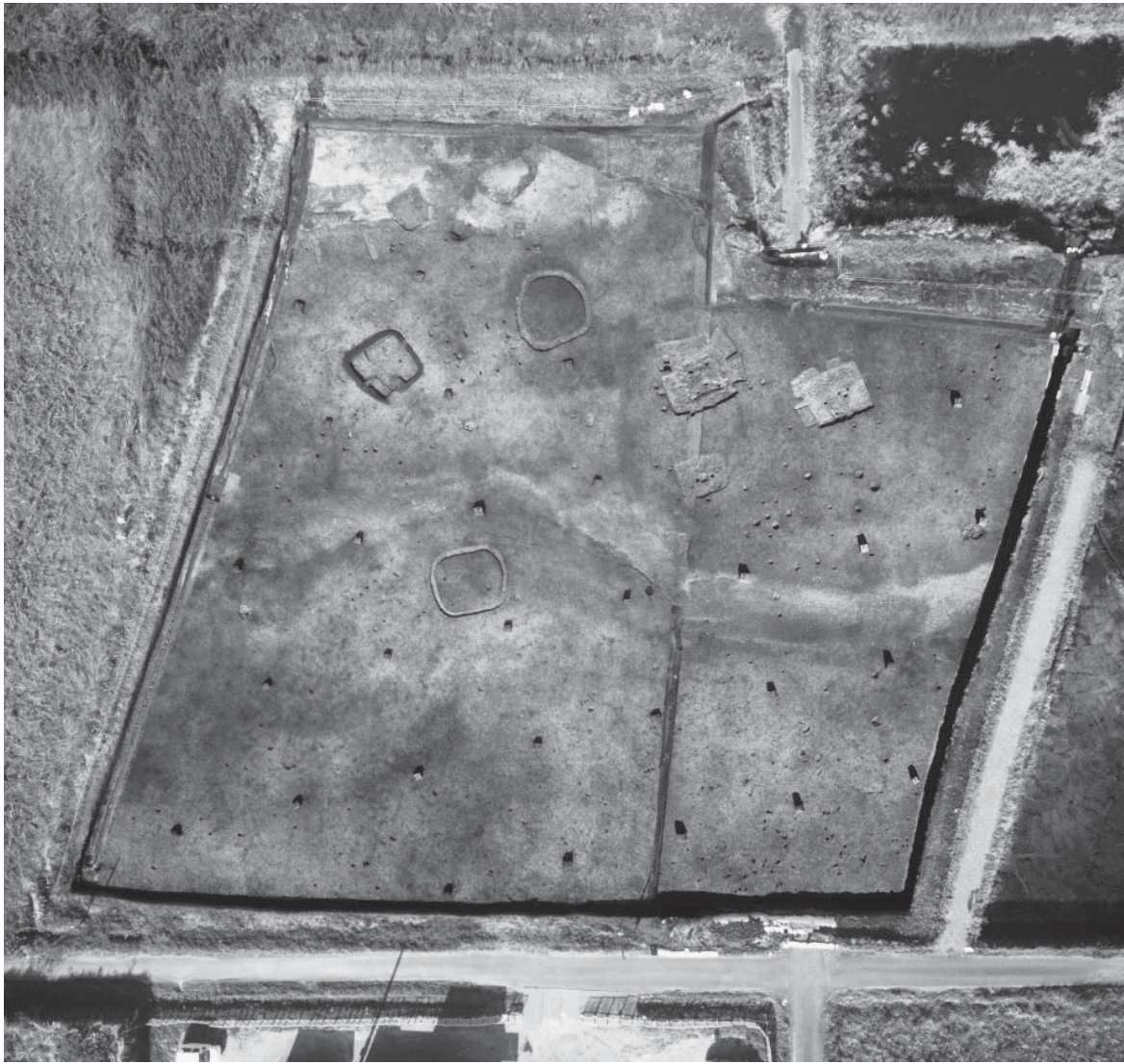
圖 版



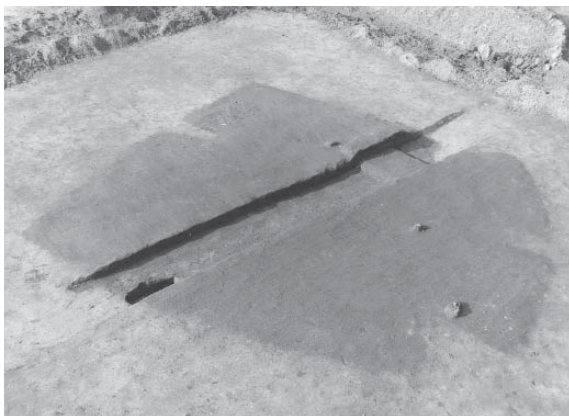
平田遺跡遠景 1（東より、中央手前の調査区がE地点）



平田遺跡遠景 2（北より、中央の調査区がE地点）



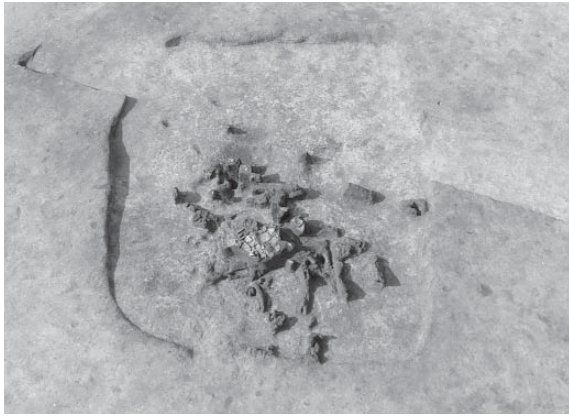
D地点 調査区全景1 (弥生時代調査面)



D地点 SA1検出状況 (南より)



D地点 SA1完掘状況 (東より)



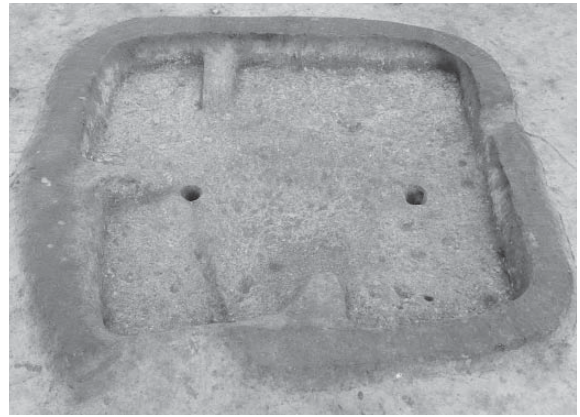
D地点 SA 2 遺物出土状況 (東より)



D地点 SA 2 完掘状況 (東より)



D地点 SA 3 遺物出土状況 (南東より)



D地点 SA 3 完掘状況 (南東より)



D地点 SA 5 鉄矛出土状況 (南より)



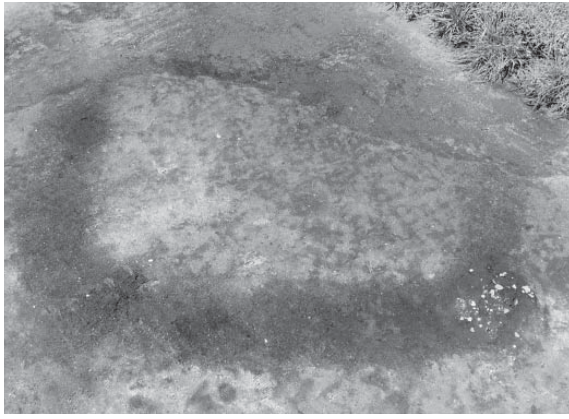
D地点 SA 5 完掘状況 (東より)



D地点 SB 1 完掘状況 (東より)



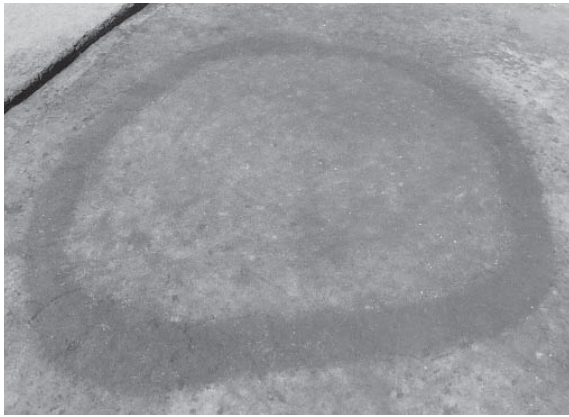
D地点 SB 1 柱穴内遺物出土状況 (東より)



D地点 SL 1 検出状況 (南東より)



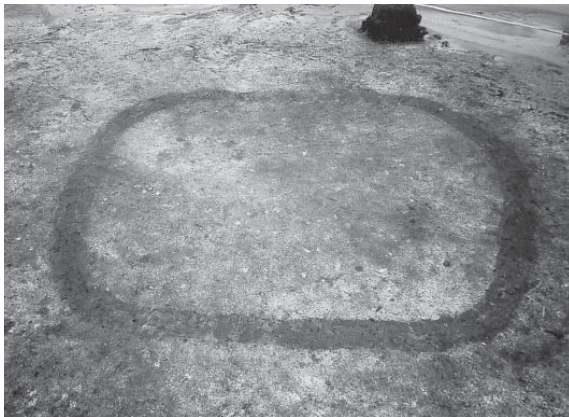
D地点 SL 1 遺物出土状況 (南東より)



D地点 SL 2 検出状況 (南より)



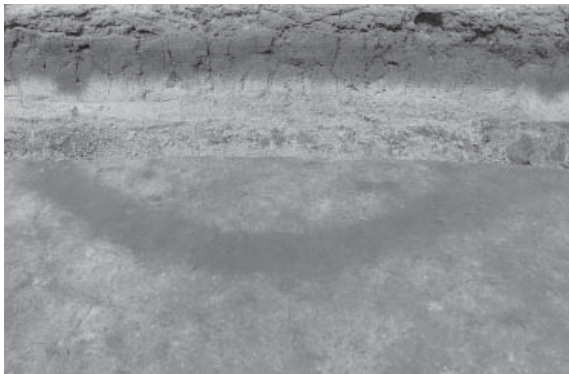
D地点 SL 2 遺物出土状況 (南より)



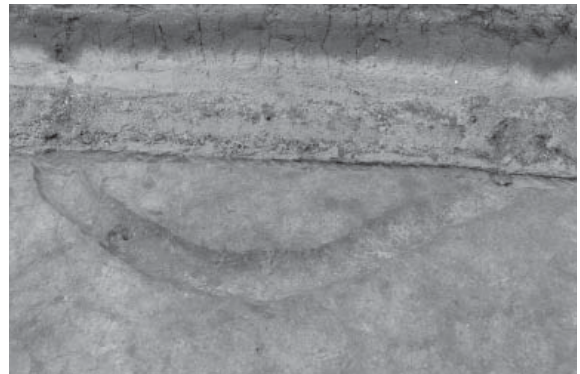
D地点 SL 4 検出状況 (南より)



D地点 SL 4 完掘状況 (西より)



D地点 SA 5 検出状況 (東より)



D地点 SA 5 完掘状況 (東より)



D地点 調査区全景（中世水田跡）



D地点 水田跡検出状況1（北西より）



D地点 水田跡検出状況2（南東より）



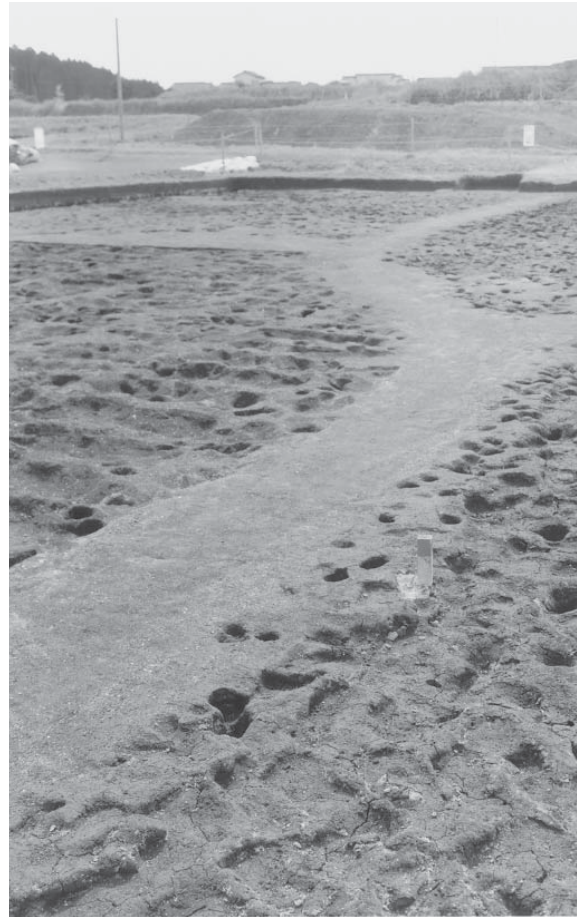
D地点 水田跡完掘状況1（東より）



D地点 水田跡完掘状況2（南東より）



D地点 水田跡完掘状況3 (北西より)



D地点 畦畔2 (南より)



D地点 畦畔1 (北西より)



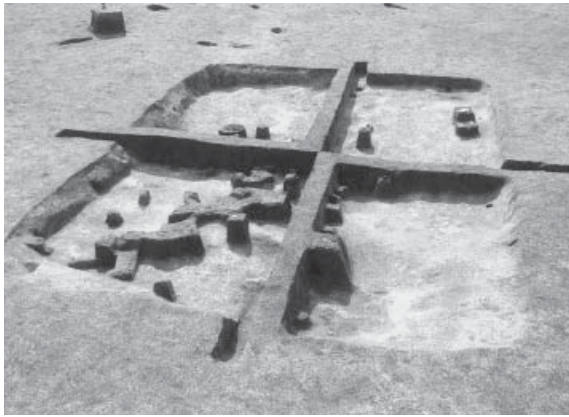
E地点 調査区全景



E地点 SA1遺物出土状況(西より)



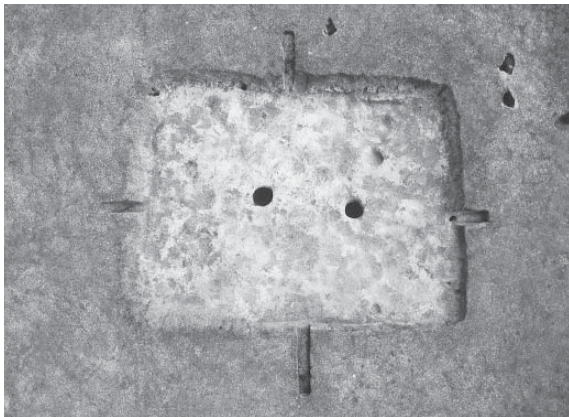
E地点 SA1完掘状況



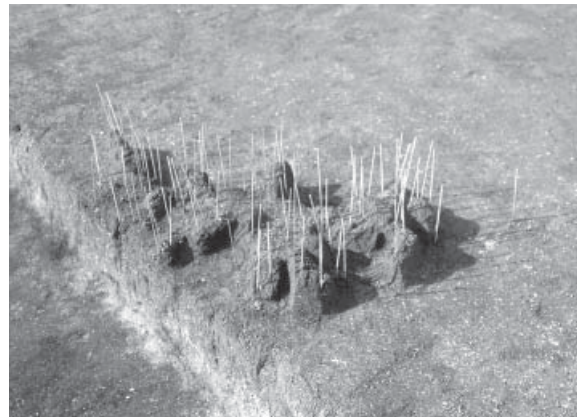
E地点 SA2遺物出土状況1(東より)



E地点 SA2遺物出土状況2(南より)



E地点 SA2完掘状況



E地点 炭化種子集中2出土状況(南より)



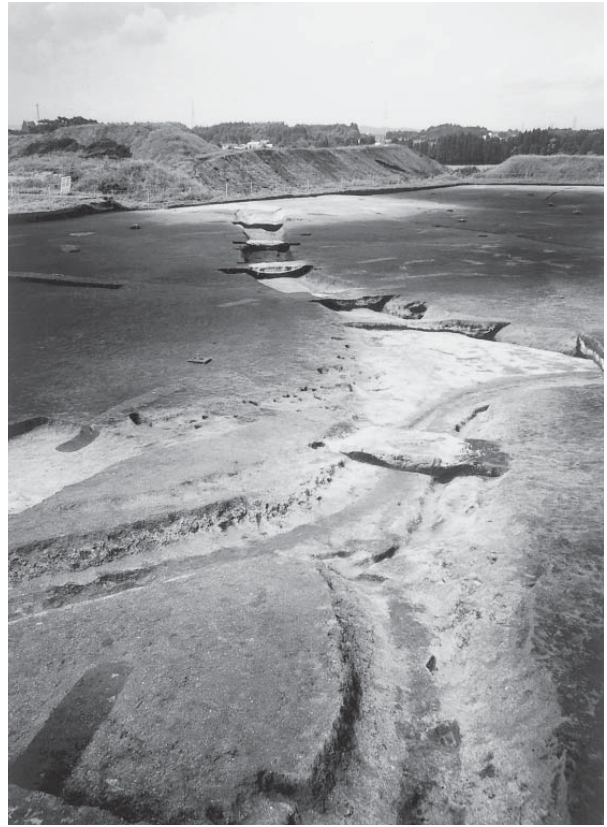
E地点 炭化種子集中出土イチイガシ



E地点 小溝状遺構群 完掘状況(南より)



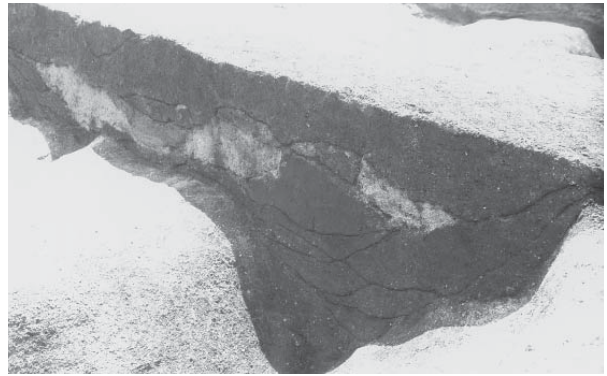
E地点 SG群1検出状況（南より）



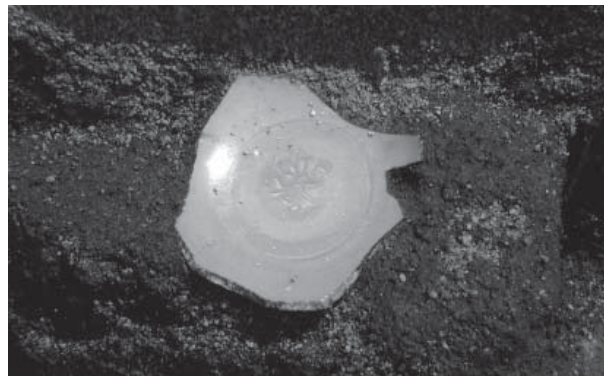
E地点 SG群1完掘状況1（南より）



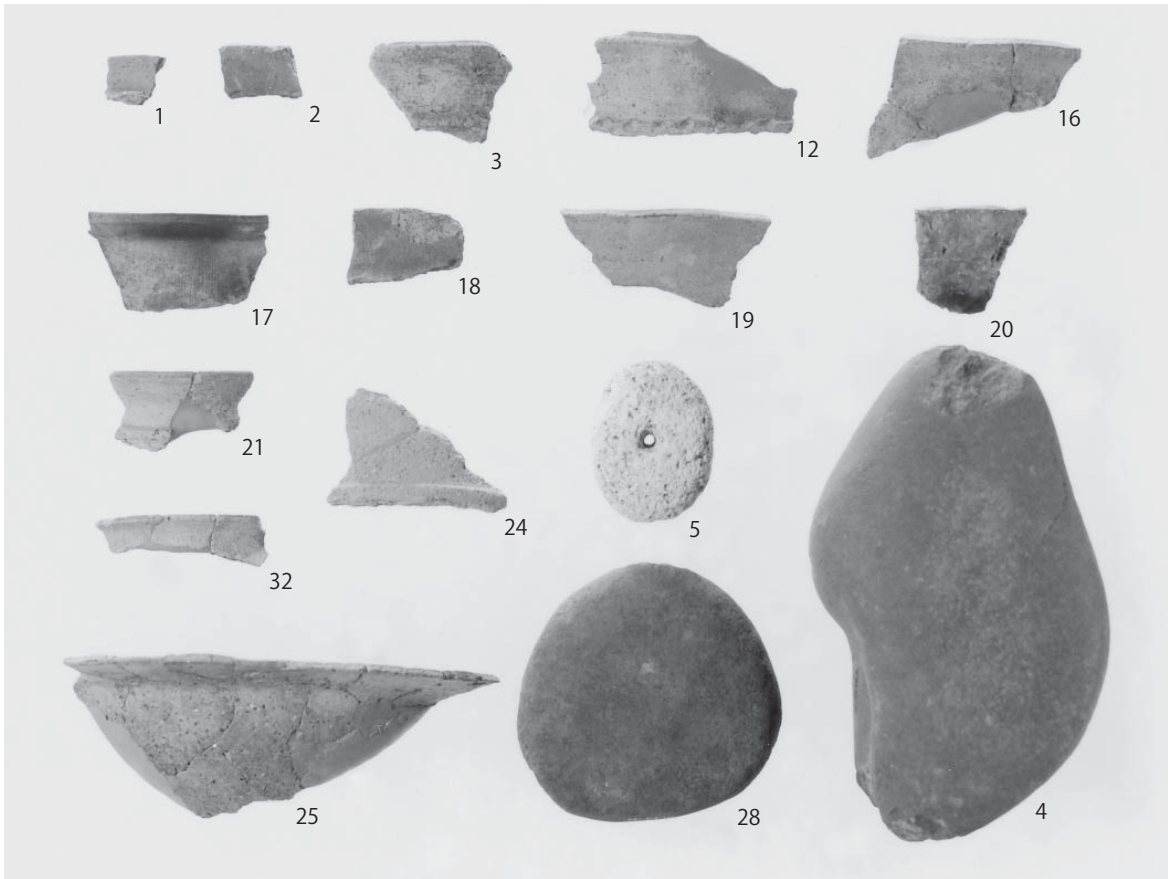
E地点 SG群1完掘状況2（南西より）



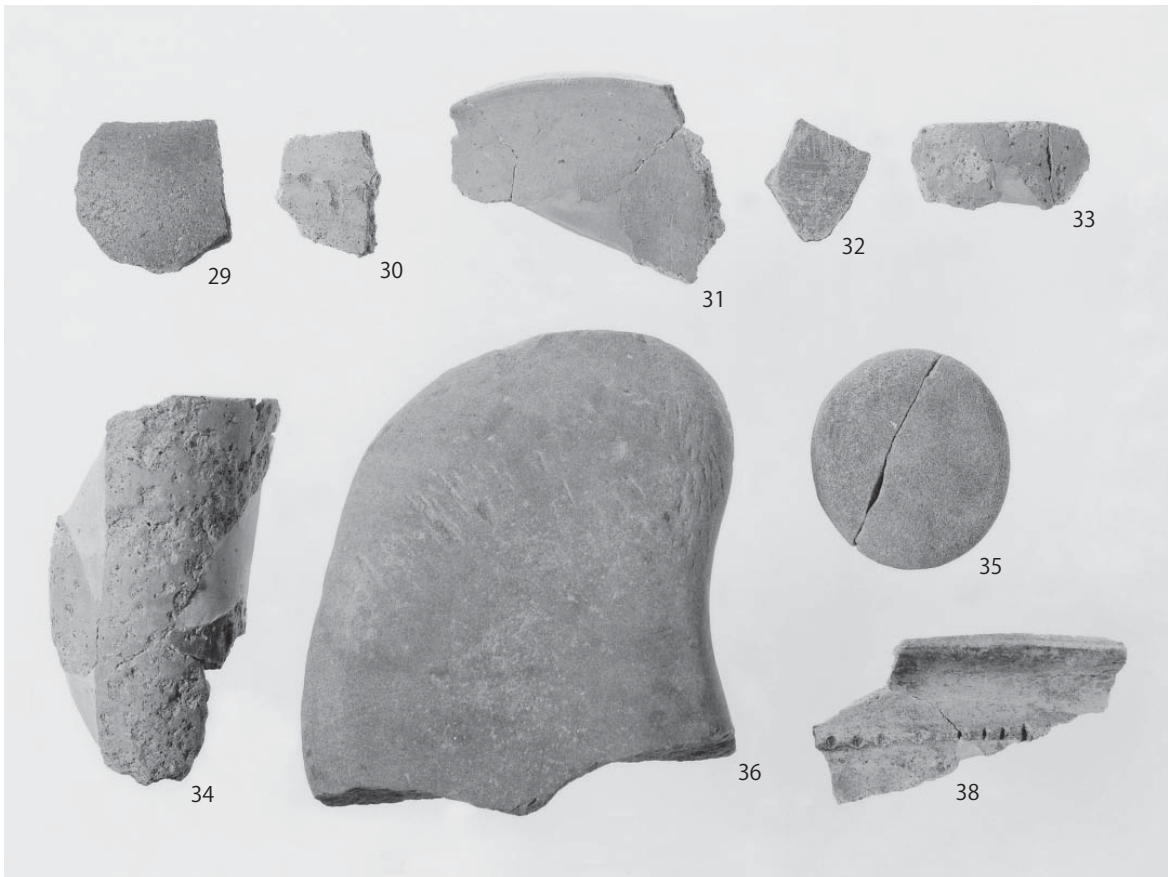
E地点 SG群1埋土状況（東より）



E地点 SG群1内青磁出土状況（南より）



D地点 SA 1・SA 3 出土遺物



D地点 SA 4・SA 5・SB 1 出土遺物



D地点 SA 2 出土遺物



D地点 SA 3 出土遺物 1



D地点 SA 3 出土遺物 2



D地点 SA 3 出土遺物 3



D地点 SA 3 出土遺物 4



D地点 SA 3 出土遺物 5



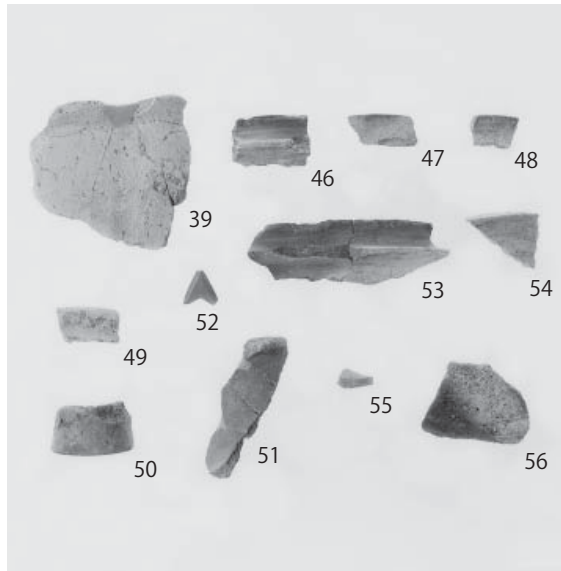
D地点 SA 3 出土遺物 6



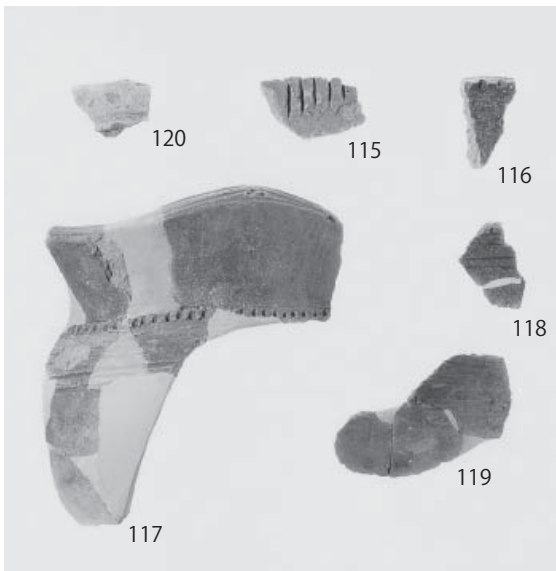
D地点 SB 1 出土遺物



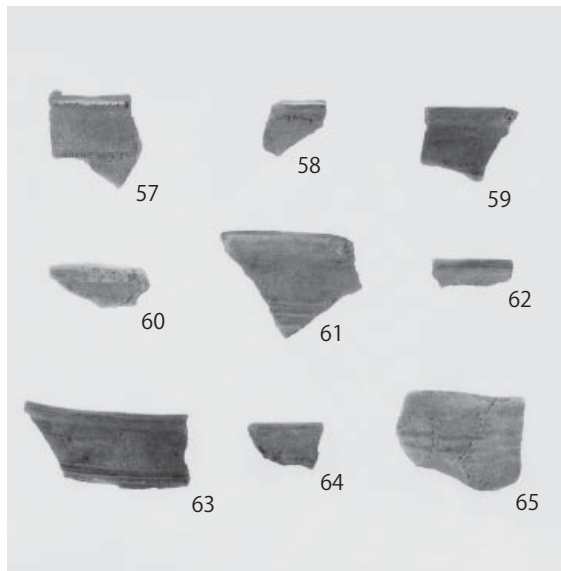
D地点 SA 5 出土遺物



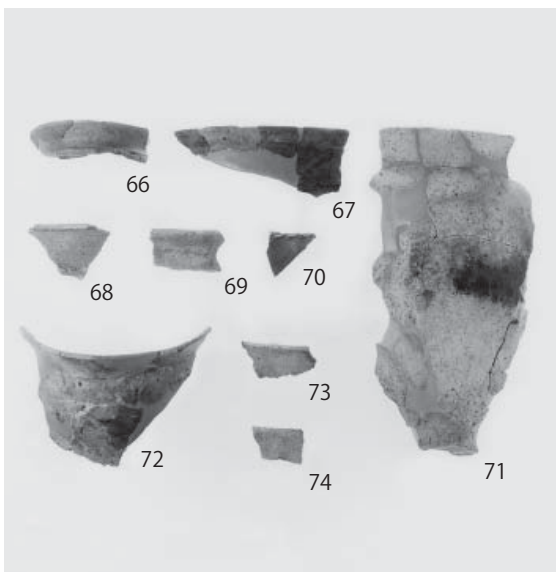
D地点 SL 1~SL 3・SZ 1 出土遺物



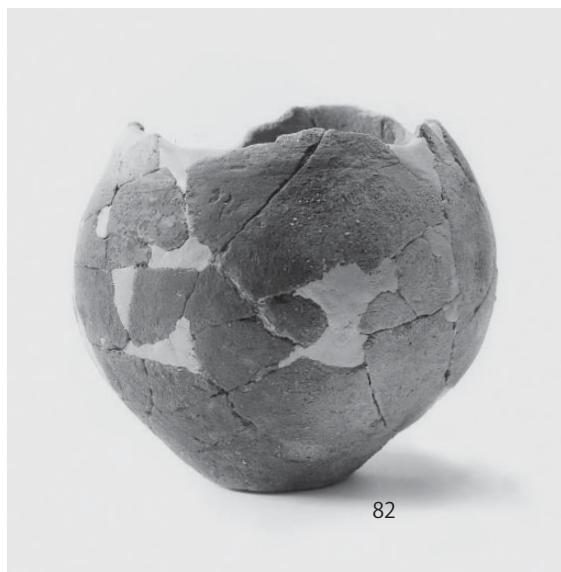
D地点 縄文土器



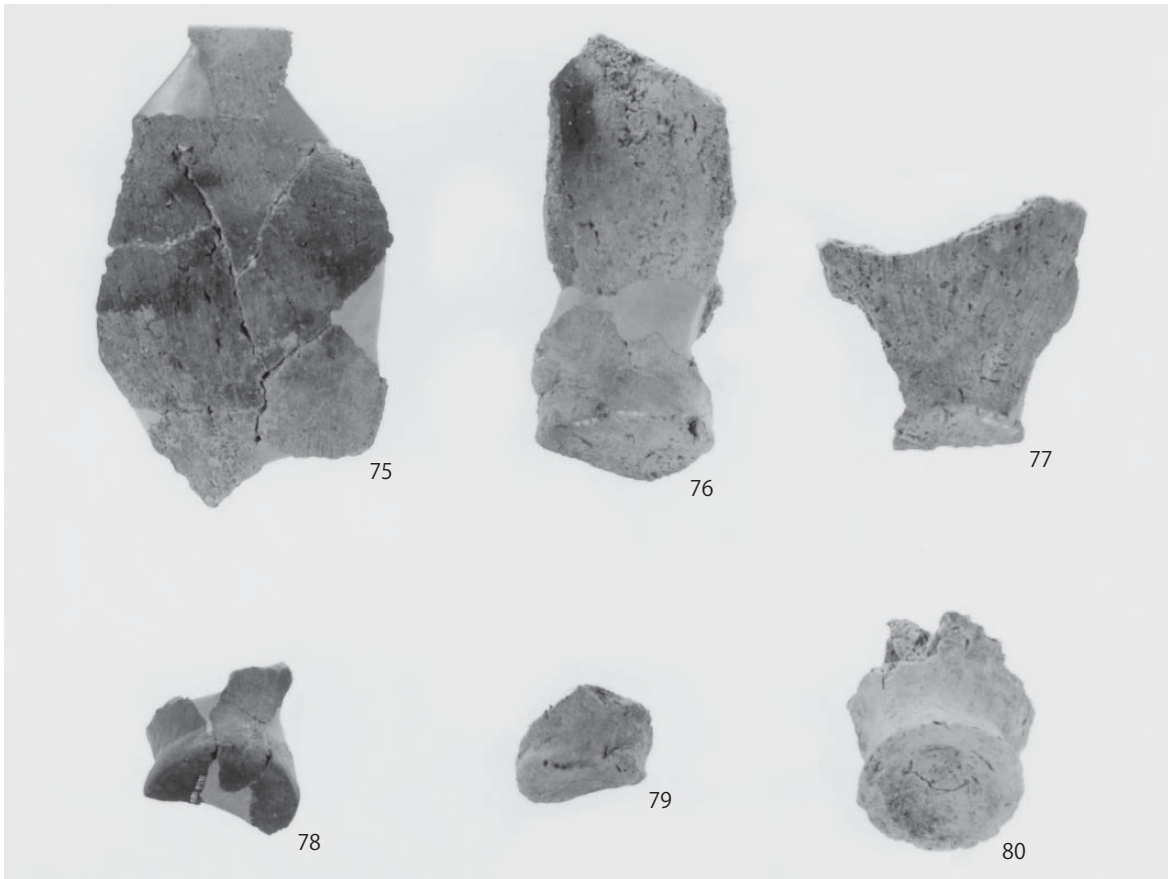
D地点 弥生土器 1



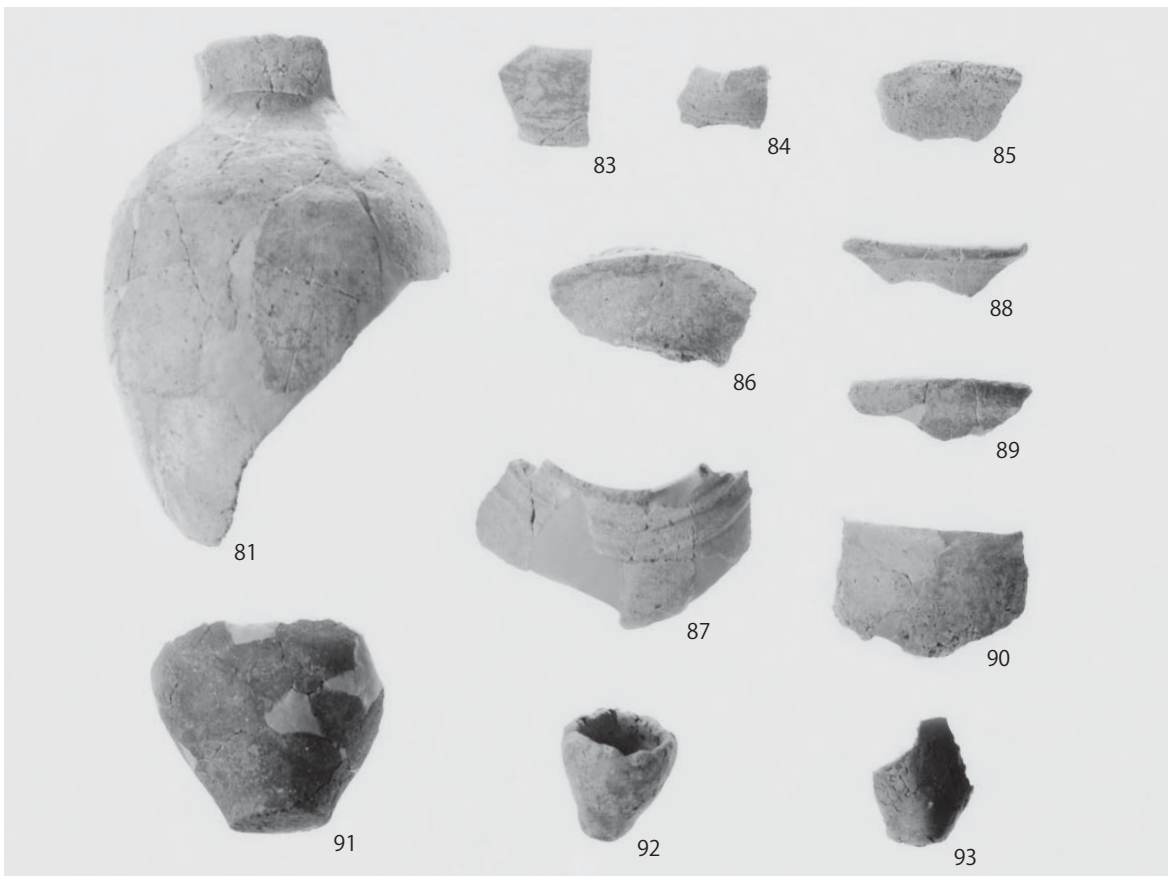
D地点 弥生土器 2



D地点 弥生土器 3



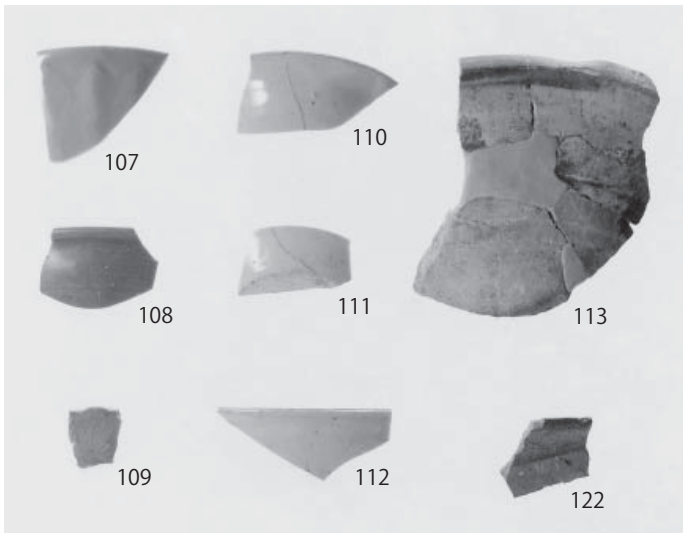
D地点 弥生土器 4



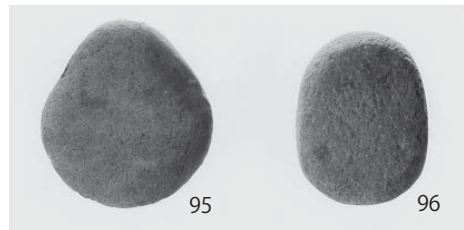
D地点 弥生土器 5



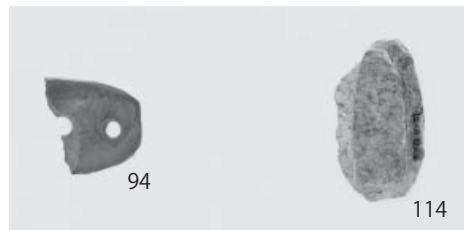
D地点 中世の遺物 (坏・皿)



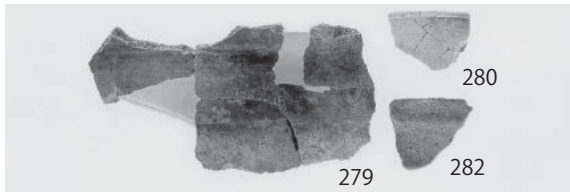
D地点 中世～近世の遺物 (陶磁器)



D地点 石器 1



D地点 石器 2



E地点 繩文土器



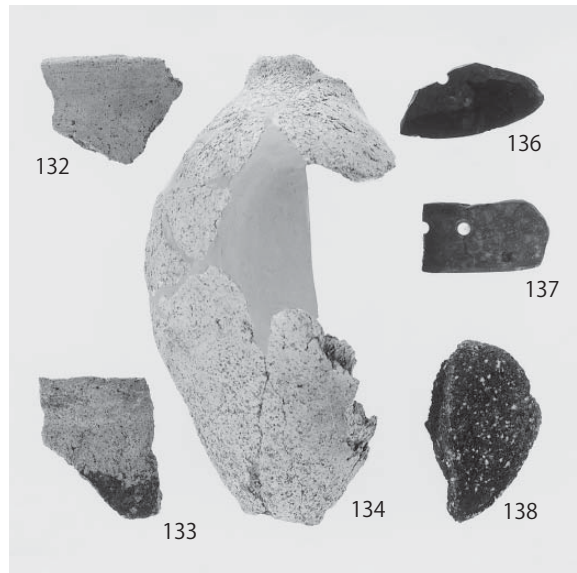
E地点 SA1出土遺物



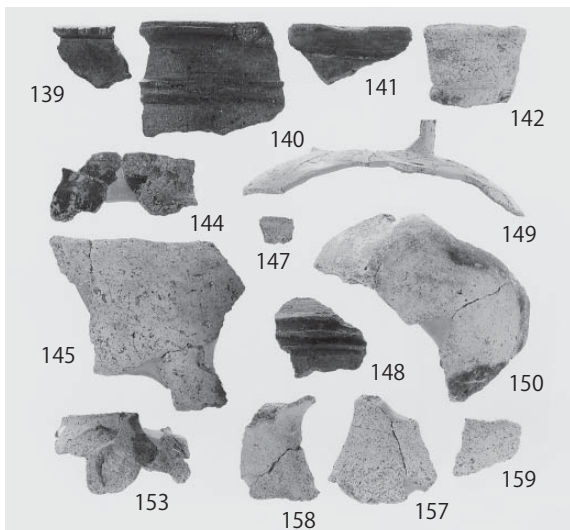
E地点 SA2出土遺物



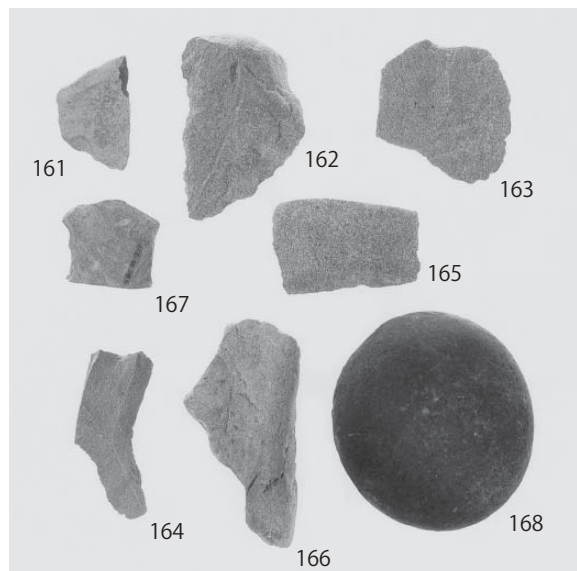
E地点 遺物集中出土遺物 1



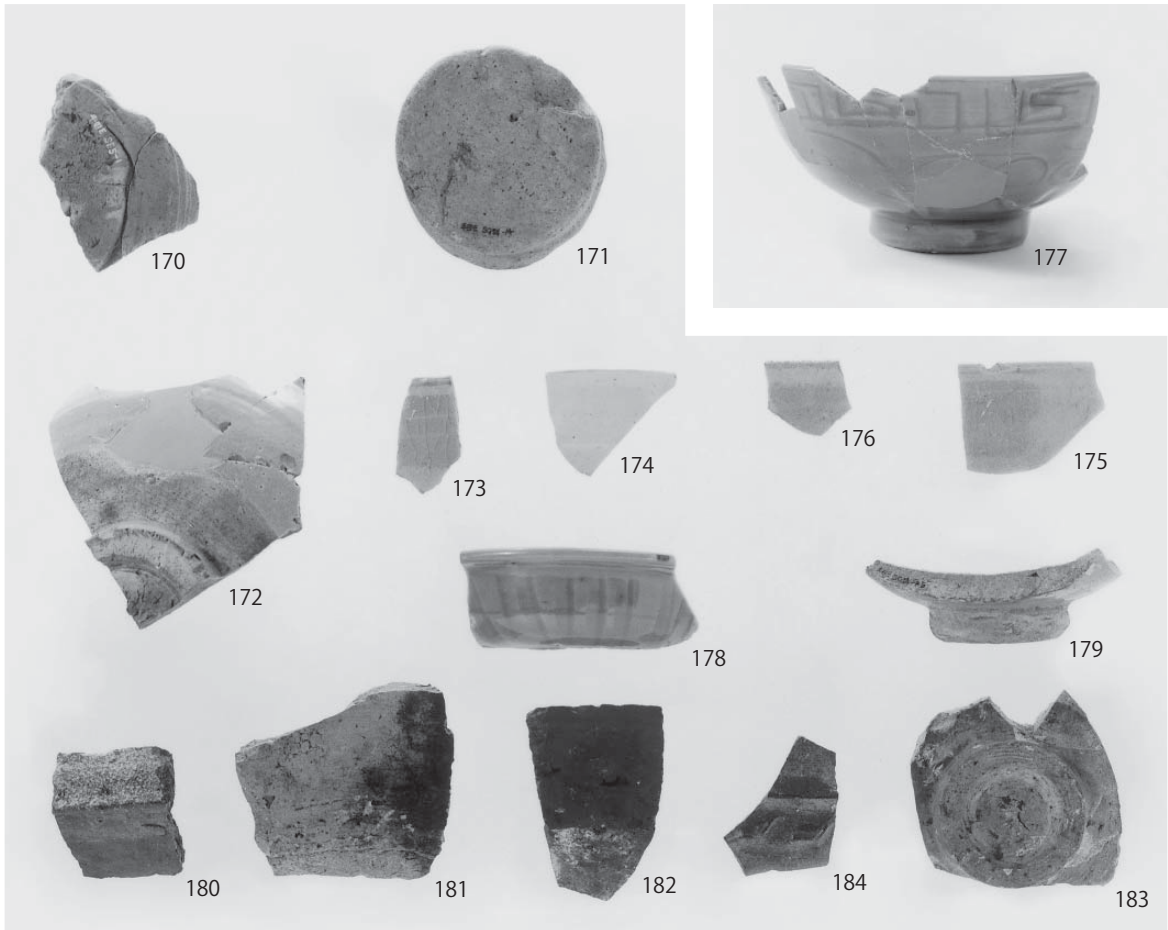
E地点 遺物集中出土遺物 2



E地点 弥生土器



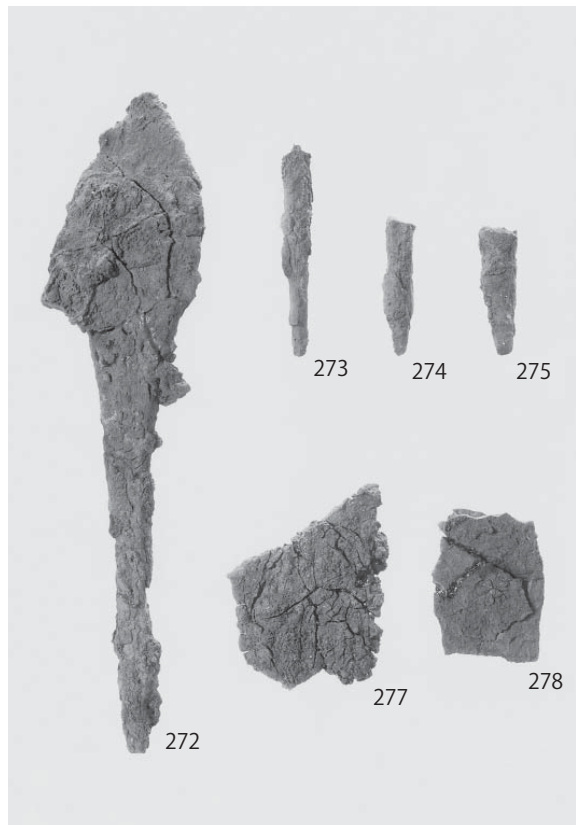
E地点 弥生石器



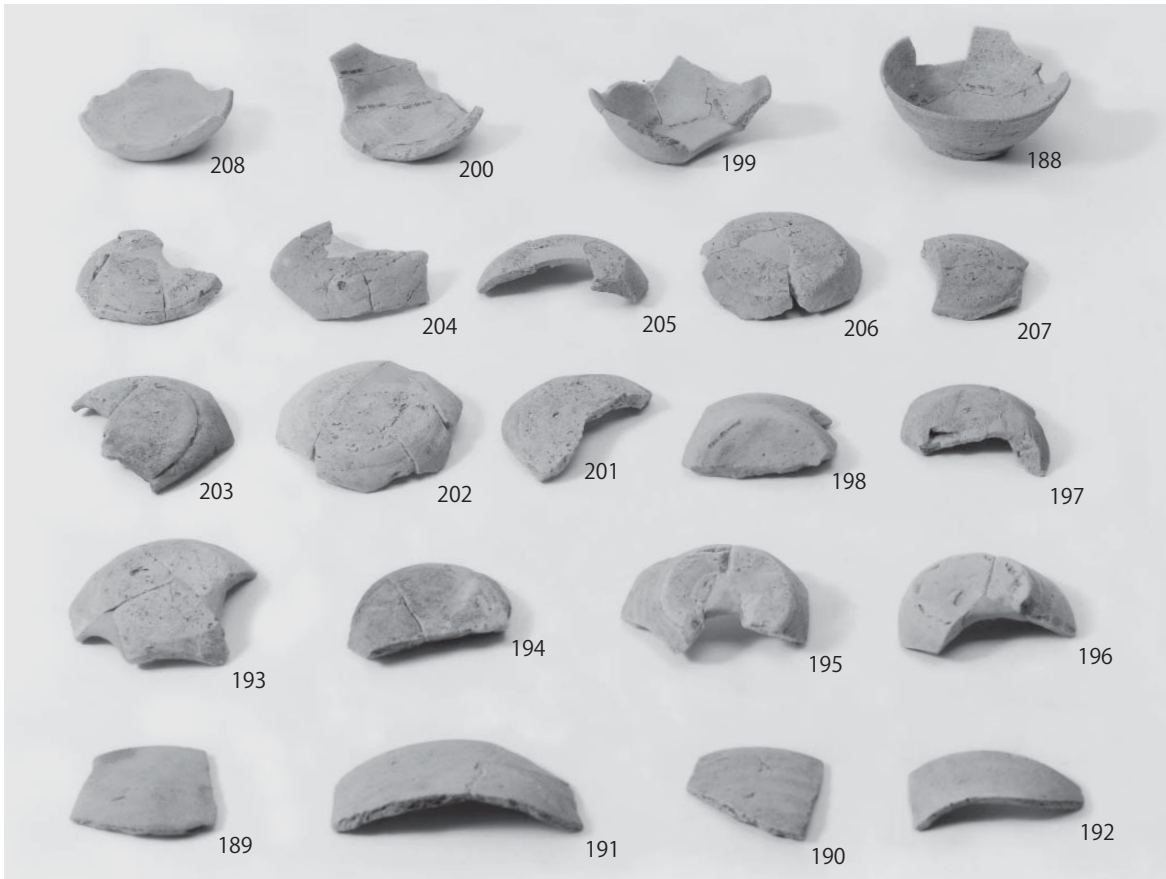
E地点 SG群出土遺物 1



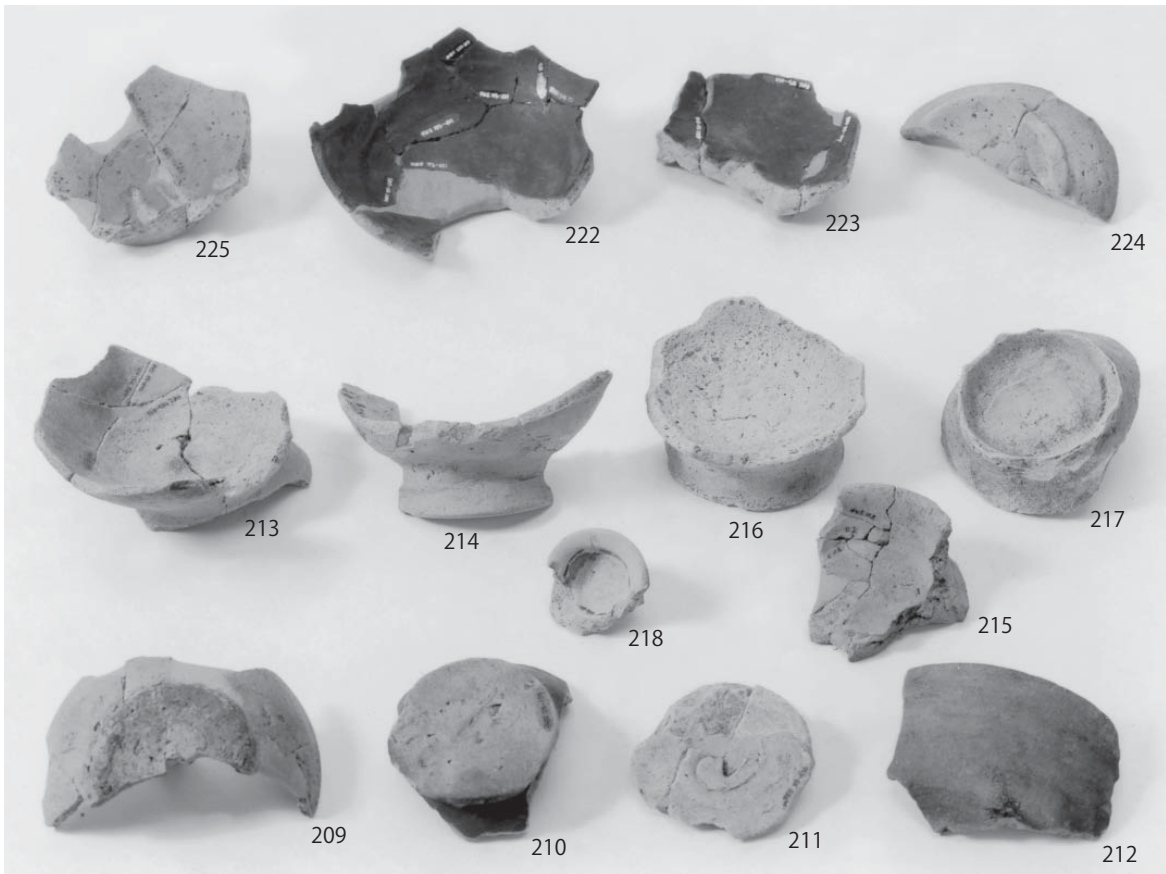
E地点 SG群出土遺物 2



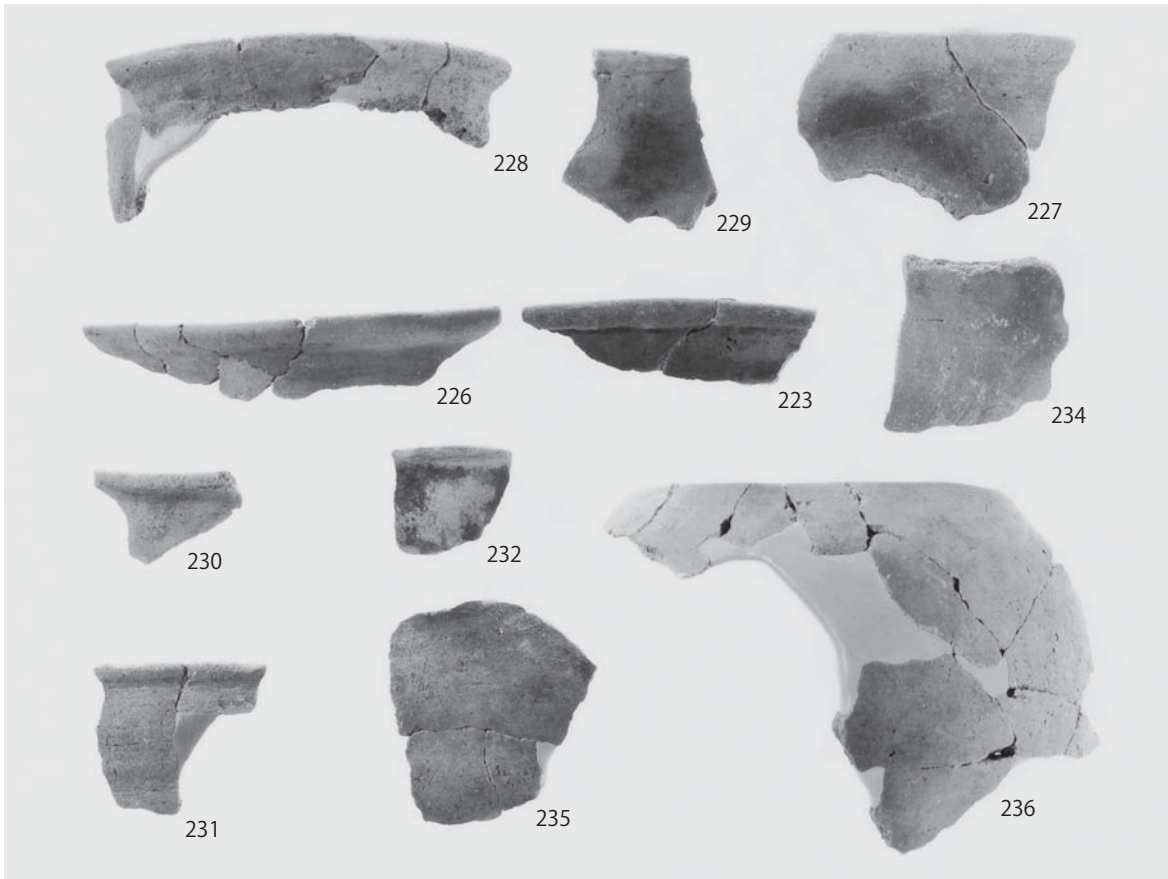
E地点 鐵製品



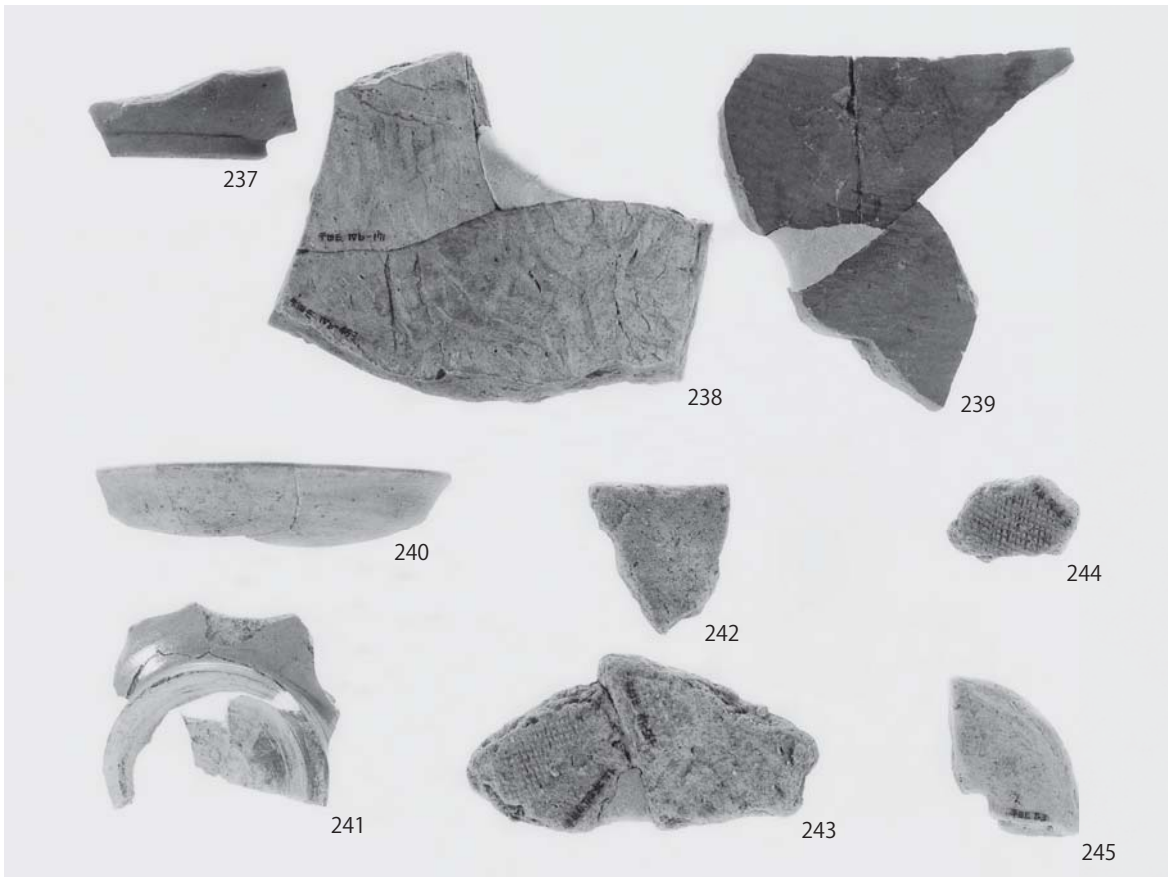
E地点 古代の遺物1 (坏)



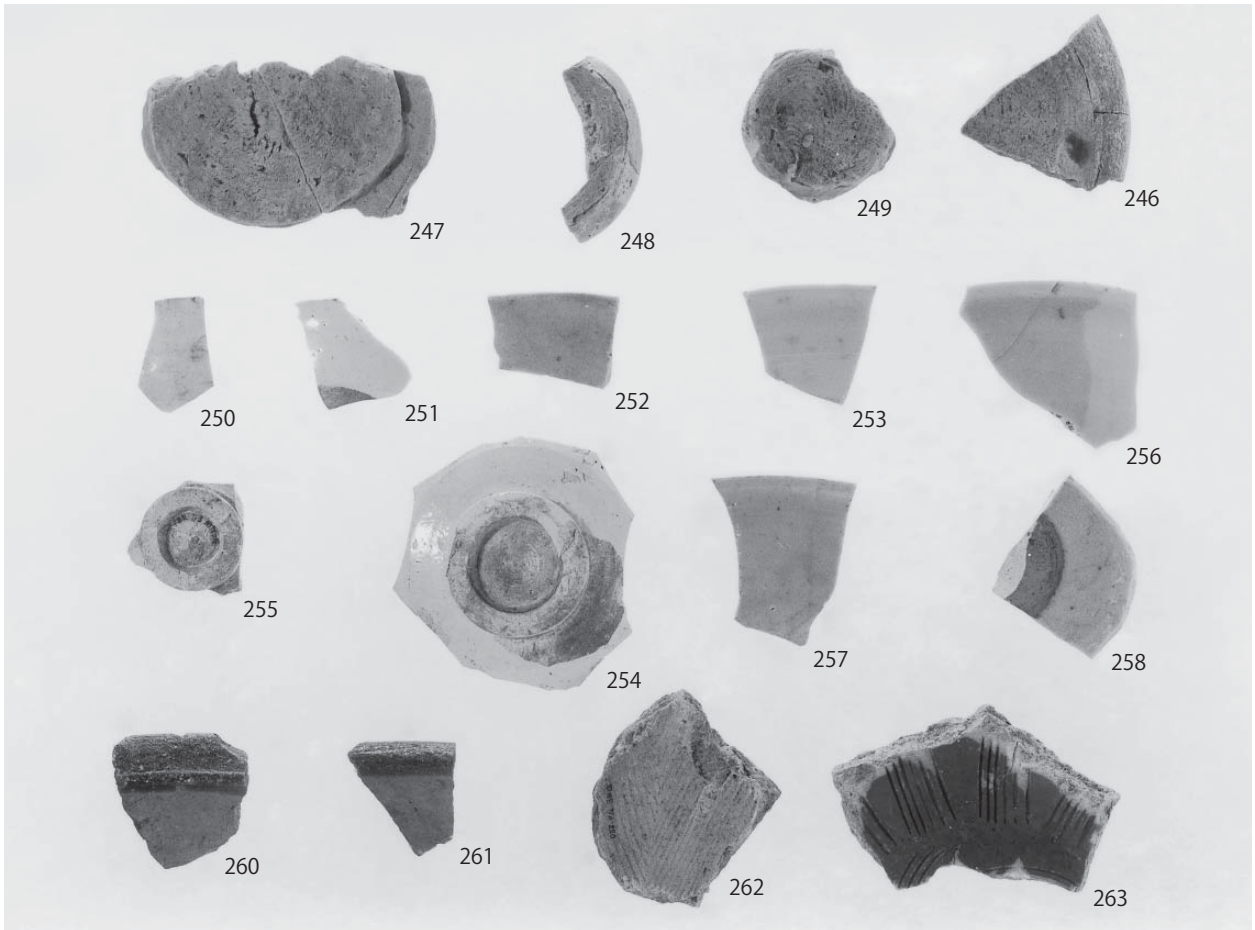
E地点 古代の遺物2 (黒色土器・高台付碗)



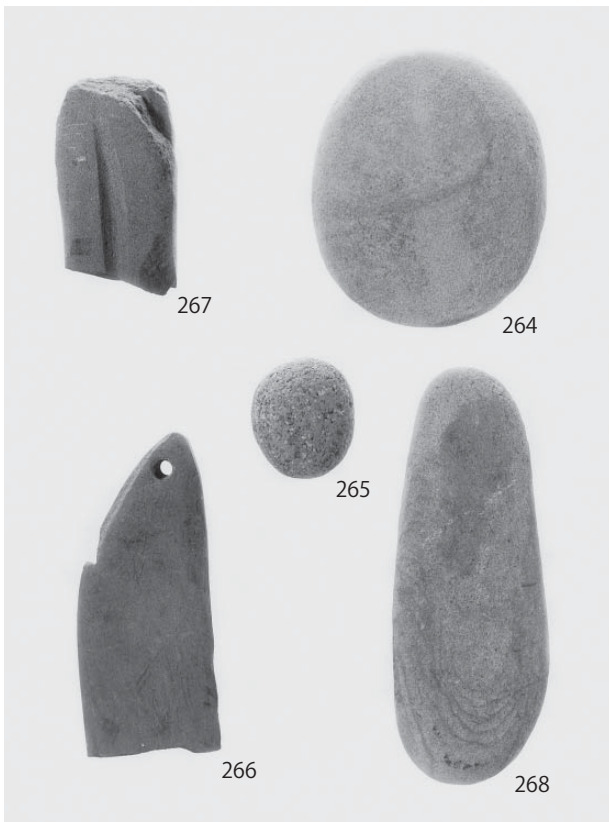
E地点 古代の遺物3 (甕・鉢)



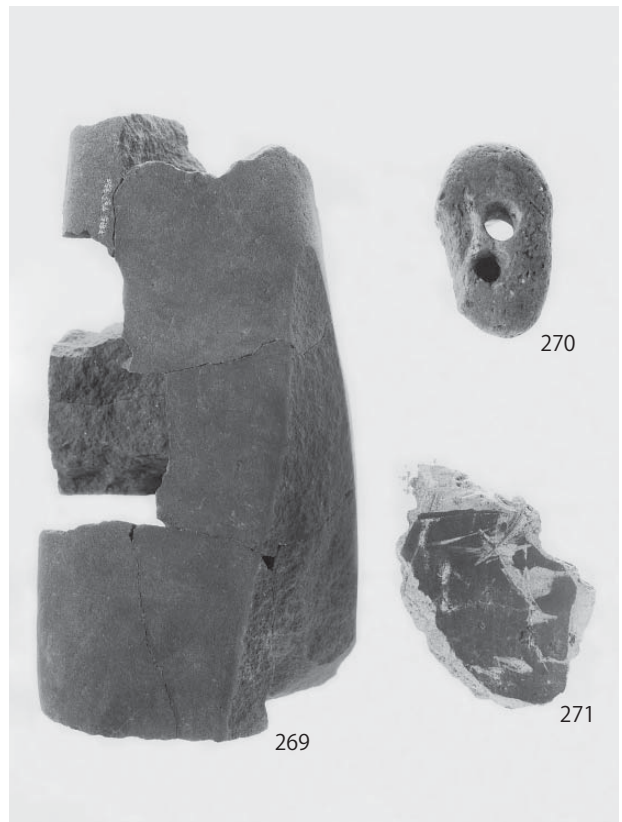
E地点 古代の遺物4 (須恵器・緑釉陶器・布痕土器・紡錘車)



E地点 中世～近世の遺物



E地点 古代～中世の石製品1



E地点 古代～中世の石製品2

報告書抄録

ふりがな	ひらたいせき							
書名	平田遺跡D地点・E地点							
副書名	一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
執筆・編集担当者	久保春夫・飯田博之・日高広人							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2007年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらたいせき 平田遺跡D地点	都城市南横 市町字和田	45202	6003	31°44'51"	131°02'35"	2003.5.22 ～ 2004.3.26	3,900㎡	一般国道10 号都城道路 建設事業
ひらたいせき 平田遺跡E地点				31°44'46"	131°02'32"	2004.5.26 ～ 2005.1.24		
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ひらたいせき 平田遺跡D地点	集落跡 生産遺跡	弥生時代 中世 近世	竪穴住居跡・周溝状遺構・ 掘立柱建物跡・土坑 水田跡 小溝状遺構群		弥生土器・石庖丁・鉄矛 土師器・青磁・白磁		竪穴住居内 から鉄矛が 出土	
ひらたいせき 平田遺跡E地点	集落跡 生産遺跡	弥生時代 古代 中世 中世～近世 近世	竪穴住居跡・土坑 溝状遺構・道路状遺構 溝状遺構・道路状遺構・小溝状遺構 群・土坑 道路状遺構 溝状遺構		弥生土器・石庖丁・磨石 土師器・緑釉陶器・東播系須恵器 土師器・白磁・青磁			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第160集

平田遺跡 D地点・E地点

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

2007年3月23日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社 文昌堂
〒885-0052 都城市東町18街区1号
TEL 0986(22)1121 FAX 0986(25)6408
